
龍の花嫁

西園寺ルイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍の花嫁

【Nコード】

N6336G

【作者名】

西園寺ルイ

【あらすじ】

突然異世界にトリップしてしまった鈴音。そこでは鈴音は巫女とされ、神と崇められる龍神『曉』に嫁ぐこととなる。戸惑いながらも『曉』の妻となった鈴音は、彼の心の傷を知り

？

第一話 夢

小さい頃から何度も見る…同じ夢…。私はいつもそこにいる。そこ…といつても広大な平原に私がひとり。ぽつんというだけ。

寂しくて、誰かにいてほしくて、

「誰かいないの!!!」て叫ぶ夢。もちろんそれに応える人はいなくて…ひとりうずくまって泣き始める。すると景色が一瞬にしてガラッと変わって、日本のちょうど平安時代の宮廷を思わせるような建物が立ち並ぶ景色にかわる。その瞬間私は泣くのをやめてその景色に目を奪われる。美しい赤を基調とした柱は一本一本細やかな装飾をほどこされ、龍や麒麟といった幻獣を金で描いてある。その美しい様子に私は動けないでいると中から人が出てくる。ゆっくりと私のそばに歩みより、私に声をかけてくる。だけど顔は見えない。顔の部分だけ暗くて、相手の肩から下しか見えないのだ。

『……………つた…』

「……………え？」

『……………逢いたかった』

ドキリ…

男の人の穏やかでよく耳にとおる低い声がそう告げる。私もそれにこたえようとすると、彼もそこにあつた立派な宮廷もたちまち消えてしまい…

(えっ、ちょっと待って……………!!私あなたのこと何も知らないのに

！！！！
)

私は彼に向かって叫ぶがその思いはいつも届かず… 儘く終わる…

ジリリリリリ…！！！！

「はっ…！！」

うるさい目覚ましの音でガバツと勢い良く起きる。隣で鳴り響く目覚ましを乱暴に叩いて止めるとふう…と溜め息。

(またあの夢か…変な夢…。ていうかいつもあそこで終わりなんですけど。せめてあの人の顔くらい見たいっての)

そんなこと考えながら着なれた制服に袖を通す。今日は高校最後の

日。そう、今日は卒業式なのだ。

（この制服着るのも最後かあ。もう私がこの制服を着たらただのコスプレをしてる人になるのかなあ。ははは）

別に制服に対して特に思い入れなどないのだから名残惜しむ必要など無いのだが…ただ3年も着てればそれなりに愛着はわくものである。

「じゃあ行つてきます！お母さん、後でね」

「わかったわ。卒業式の会場だね。お母さん久々に鈴の晴れ姿をビデオに撮ろうかしら」

「ええ〜！！恥ずかしいからやめてよ／＼／＼写真撮るだけにしてよ。幼稚園の運動会じゃあるまいし」

「だってそんなこと言ったらいつビデオカメラを使うのよ」

「竜也の時に使えばいいじゃない」

「はいはい。わかりました。照れ屋さんなんだから。ほら、早く行きなさい。卒業生は準備あるんでしょ？」

「あーうん。じゃあ先に行ってるね」

そう言つて元気良く家を出る。空は快晴。自然と心も晴れ晴れしてくる。卒業という今まで仲良くしてきた友人と離れてしまう寂しさはあったが、良い卒業式になりそう。という気持ちのほうが強かつたし、無事卒業式を迎えられると思つていた。

第二話 異端者

通いなれた道を一人歩く。

もうすぐ家から学校までのちょうど中間地点に差し掛かるころだ。

その交差点で親友の佐原 真菜が待っている。

中間地点の交差点で待ち合わせして学校まで通っているのだ。

それも今日で最後だけだ。

だからこそ真菜に早く会いたくて鈴音は少し足早に歩いた。

待ち合わせしてる交差点の少し手前には大きな川が流れてる。

名前は龍泉^{りゆうせん}。

川なのに全く川らしくない名前の川。

由来はその昔、龍神様がある一人の巫女を見初めて妻に迎えいれようとしたが、巫女を愛する人間の男が龍神に渡すくらいならこの手で、と巫女を殺してしまった。龍神は怒りくるい男を殺したが、その後我に返った龍神は巫女の死に涙した。その涙はやがて泉となつたが、今も巫女を想う龍神の涙はとまらず川のように溢れて流れているという。だからこの川は龍神の涙。らしい…。

(この話しだと巫女はあわれだなあ。龍神に見初められて…あげくの果て殺されるなんて理不尽な。それに人外の者と結婚なんて無理私だったらパス)

とブツブツ歩いているとちょうどその龍泉の橋の上。

目の前に誰かが立っている。

背丈からして多分男の人だろうか。

でも普通の人間と雰囲気違った。

というか見た目が変わった。

髪は白に近い銀髪、真ん中わけにして髪のはきは腰よりも長い。

服は中華風で服もやっぱり白っぽい。朝っぱらからコスプレしてる

人初めてみた…と思いつつ、チラッと遠目で見ると鼻筋のとおった綺麗な顔をしていた。一瞬女の人に見えるくらい綺麗だった。と、一瞬盗み見るだけのはずが少しの間みいつてしまった。いけない！失礼すぎると反省し、でも関わりたくないの少し距離をとって通り過ぎようとしたら…

「その女性」

「!?!」

(不味い声かけられた…最悪)

「はっ…はい…なんでしよう??」

おそるおそる尋ねる。

「私ときていただきたい」

「へ!?!」(ど…どこ…!?!?)

もう私の頭の中は混乱しまくっていた。頭の中は拉致、犯罪、身代金、中華風の服「北朝鮮!?!」という公式ができてしまい上手く働かない。(よく考えると朝鮮半島は韓服、チマチヨゴリなのだがその時の私は中華服「アジアすべてをさしているように見えてしまったのである」)

どうしよう逃げなきゃ!?!すぐさま友人が待っているだろう交差点までかけます。

かけだしたつもりだった。だが体が動かない。体を抑えつけられるわけでもなく、どこも体に違和感は無いののに動いてないのだ。

「なっなんで…!？」

気が付くと周りの景色がおかしいことに気づく。

時が止まったように空を舞う鳥も、道路を行き来する車も人も何もかもが止まってるのだ。自分だけじゃない。なにがおこったの!？

「私が止めたのだ。」

先程の銀髪の男が話しながら鈴音の前に近づいてくる。

(なんでこの人だけ歩けるの…!？)

「それは私が時を止めた者だから。私は龍の使い。だから神力を扱える。」

(?!？私今声に出してしゃべってなかったのに…心を読まれた!？)

「龍の使い？神力!？なによそれ!!ふざけないで!あなたが何者か知らないけど、私は今日大事な用があるの!早く行かなきゃいけないの!!あなたがこんなことしたなら早く解くこともできるでしょ!早く解いてよ!!!」

「確にあなたには急ぎ来ていただきたい。では参りましょう。」

「は！？ちよつと聞いているの！？私は解いてって言って…」

銀髪の男は鈴音に歩み寄ると軽々とを抱き上げ、橋の手摺の上に立たせた。

「！？ちよつ…川に落とす気！？やめて…やめてよ…！」

鈴音は恐怖で身をこわばらせて抵抗しようとするが、時が止まって動かない体では抵抗できない。絶対絶命。

すると銀髪の男はそんな鈴音を無視して躊躇いなくその体を押した。

ドーン…！

「！？」

「ぎゃああああー！！！！！！」

鈴音はまっさかさまに龍泉へと落下していった。鈴音は恐怖でぎゅつと強く目をつむり覚悟を決めた。

第三話 異世界

(私…死んじゃうんだ…)

「……………」

「……………」

「……………」

「……………?」

ところが覚悟を決めたのに水の中に沈んでいく感覚が今だにこない。
落下してる感覚もない。おかしい。

「あ…れ…?」

「!?!」

目を開けるとそこには広大な草原。見渡す限りの草原。でも初めてきたはずのこの場所は、初めてきた感じがしない。寧ろよく知っているような…

「ここ…私が夢に見た場所と同じ…。ていうかなんで!? 私あの変な男に橋の上から突き落とされてそれからそれから…なんなのここ…。意味わかんない。私はただ母校を卒業するためにあの橋を渡るうとしただけで…!! ああ!! もっつ!」

「……………」

「やっぱりこれは夢なのよ! そうよ夢の続きなんだわ! だからこんなところに…」

ギユウウ…!!

ほっぺたをおもいつきりつねる。

「いだあつ…!!…!」

ああ…もう少し

「いたつ」とかかわいい悲鳴があげられないものかと自分で自分に問いかけて夢じゃないんだと知る。

「夢じゃない…んだ……………ははっ……………。そうださっきのあの変な人! ここどこよ! 説明してっ…!!…!!……………っっていない…。」

もしかして私ひとりにされた…？夢と同じじゃない。こんな広い草原にひとりぼっち置き去りにされて…。誰がいる？って叫んでも返事が無くて、そのうち恐くなって…涙が…。

ポタツ…

「！」

「あ…あれ…？やだ…私本当に泣いて…うっ…うっ…誰か…お母さん、お父さん…竜也あ……………」

広い広い草原で私はひとりぼっち。誰もいないここでひとり。私は思いきり泣いた。

「おい…あの女変わった服着てるぞ。あの女が婆様が言ってた玉依たまより姫か」

「おそろくな…。見た目は変わってはいるが神霊を宿してるのが分かる。間違いない。お探しの巫女様だよ」

「ならどうする？捕まえるか？」

「捕まえるなんて物騒な。お連れするんだ。婆様の元へ」

「はいはい。じゃあさっそく。……………おい！その女！」

「!?!」

突然のことにビクリとした。だってこんな草原に人がいるなんて。ていうか私もそうだけど…いきなり人が現れるから。

「お前あれだろ？巫女なんだろ？これから婆様のとこ行くからついてこい。」

綺麗な顔…。肌は健康的な感じに日焼けしてて…すつと通った鼻筋きりつとした目。…じゃなくて!!…ついてこいって…そんな見ず知らずの人についてくなんて…出来るわけない!!…と、言葉にはせず心の中で叫ぶ。

「おら、早くしろ!」

なにこの人怖い…。言葉が出ない。

「ほらほら…そんな言葉使ったって怖がらせるだけだろ。21にもなつて。全くお前は…いつまでも子供だな。」

「うるせー!」

「……………あ…の…」

「はい?」

「……どこですか？」

「この世界は中都国なかつくにだ。性格には俺たち人間が住む国が中都国。」

「あの……ということは人間じゃない人も住んでるってことですか？」

「そう。ここは神と人間が共存している世界。でもお互い干渉しません。人間からすれば神なんて恐ろしいだけですから。」

「そうなんですか……」

「で？早く婆様のところコイツ連れて行きたいんだけど。」

ムッ 態度悪い人だなあ……さつきから

「失礼ですけど……あなたたちなんなんですか。名前くらい名のって下さいよ。」

「はあ？さつきまでメソメソ泣いてたやつが偉そうに。人に名前を尋ねる時は自分から名乗る。常識だろ。」

う……確かに。それにあれだけ泣いてたのに、この二人に会ってからいつのまに泣きやんでいた。

「わ……私は習志野 鈴音です。気がついたらここにいました。」

「鈴音が。わかった。俺は中都国を治める第一皇子、脩斗むらとだ。」

「私は皇子の側近の榊なかつかです。どうぞよろしく。玉依姫」

「あの…！お二人はお偉い方だったんですねっ…！すみません。失礼しました」

「何を言います。あなたはあのたぐい稀な存在、玉依姫なのですよ。」

「あの…さっきからおっしやってる玉依姫って……？」

「後でお話をいたします。とりあえず場所をうつしましょう。ここは危険ですから」

「は…はい…」

とりあえず何もわからない私は、脩斗と榊という二人に付いていくことにした。私の勘がこの二人は大丈夫と言っているから。

く神の国く

龍宮
りゅうぐう

『白銀、例の娘はどうした…？』

「あの者は中都国の中心、沙良草原におちました。」

『そっか…』

「今は中都国の皇子に保護されたようにございます」

『…。とりあえず無事というわけか。……あの娘は我が妻となる者。必ず我が手中に』

「仰せのままに」

その頃、鈴音は中都国の宮殿に案内された。

広い廊下がどこまでも続き、その両わきに部屋があるが、一体何部屋あるのだろうか。その部屋の襖のひとつひとつに極彩色で模様が描かれている。天井は高く、そこにまで綺麗な絵が描かれていた。花だったり見たときもないような鳥の絵だったり、変な模様だったり。まじらないかなにかかなと思っていると、前を歩いていた脩斗と榊がピタリと立ち止まった。

どうやら最奥の部屋に行き着いたようだ。

「鈴音。ここは謁見の間だ。」

「ここに王様がいるの？」

「まあそうなる。でもお前が会わなきゃならないのは父上じゃなく婆様だ」

「ねえ、婆様って誰なの？」

「会えばわかりますよ。さ、入りましょう」

ガラ：

扉が開かれた。

一瞬目を疑った。

その部屋は学校の体育館ひとつぶんくらいあるんじゃないかと思われる程広く、壁は金箔をはってあるのか光輝ききらびやかだった。さらに真ん中の通路の両脇にはざつとかぞえて百人くらいの人が通路に向かい合って座っていた。その奥には玉座があり、あれがおそらく脩斗のお父さんであり、この国の王なのだと思った。

「行くぞ」

脩斗にうながされて玉座の前まで歩きだす。あたりは静まり、脩斗と私と榊の三人の足音がするだけ。私は緊張しすぎて手に汗をかいた。だんだんと玉座に近づいていく。脩斗は玉座の手前までくると片足を床につき、騎士がお姫様に忠誠を誓う時に使うような体勢をとった。

「王…玉依姫をお連れいたしました」

「うむ」

今までの汚い言葉しか発しなかった脩斗の口からそれはそれは綺麗な言葉が次々に出てくる。

なんだ、敬語しゃべれるんじゃない、とか心の中で棘を刺す。

私も簡単にお辞儀をして挨拶すると、脩斗に腕を捕まれながらさらに奥の部屋へと連れてかれた。奥の部屋も和室になっていて、ただ違うのは他の部屋よりこじんまりしていたことだった。そしてそこにいたのは一人のお婆さん。髪は真っ白な白髪で一つにまとめ、そんなに派手じゃないが、それなりに良いものなのだろう桜の柄が綺麗に入った着物を上品に着こなしていた。

「あなたが玉依姫、巫女ね」

「あの、私っ玉依姫とか巫女とかじゃなくてただの高校生の習志野鈴音です。」

そう言って軽く会釈する。すると目の前のお婆さんは優しく微笑んで鈴音を見つめた。

「あなたのことはよく知っていますよ。今日も本当は学校という所へ行くはずだったのでしょうか？」

「えー!?はっはい。そうです。なんでわかるんですか？」

「婆様は夢占の力を持つ。だからお前のこと知ってて当然なんだよ。」

脩斗が口を挟む。その口の悪さに少しムツとするがここでさらに言い返すと話が進まなそうなので我慢する。

「脩斗、おやめなさい。失礼よ。ごめんなさいね鈴音さん。あ、自己紹介が遅れてしまったわね。私はここで夢占をしている霞乃と言います。あなたを、玉依姫を探していたのよ。」

「あの…玉依姫って巫女ってなんなんですか？どうして私をそう呼ぶのですか？」

「玉依姫とは、神霊の魂をもつ巫女のことを指すの。玉依姫はその清らかなる稀な魂を神に好まれ、代々玉依姫として生まれた娘には神に輿入れすることになっています。あなたは先代の玉依姫の生まれかわりなのですよ。」

「へえ……玉依姫ってそういう意味………って何で私！？神様に輿入れて!？」

頭がパニックになる。

すると霞乃はそんな鈴音を落ち着かせるようにゆっくりと話し始めた。

「もう一度言うけど、あなたは千年前の巫女の生まれかわり。人格はあなたと全く違うけど、魂はあなたと同じ。命のおおもとが一緒なの。あなたに自覚はないと思うけど、それが真実。今あなたがこの世界にいるのは紛れもない証拠よ。」

「…でも…私は自分の意志でここにきたんじゃないやありません。変な…銀髪の人に川に落とされたかと思ったらここにいたんです。」

「！銀髪……？」

「はい。あの…お知り合いなんですか？」

「いいえ。違うわ。」

「……？」

「…話を戻すわ…あなたは先代の巫女の生まれかわり。清らかなる魂を持った稀な存在です。」

「それで…つまり、私が生まれかわりだから、神様のところにお嫁にいけっことですか…」

「ええ。早い話がそうなるわ。」

「神様のところにお嫁に行くと、なにか利益があるんですか…？」

「……。ここ、中都国にとっては、神に玉依姫となつた娘を捧げるとそのかわり、神の加護をうけることができます。」

「………。私いやです！なんで私がそんな犠牲にならなくちゃいけないんですか！！私、元の世界に帰ります！！」

「！これがこの国の、この世界のしきたりなのです。だから鈴音さん、この国のために…どうか神に輿入れして欲しいのです！勝手なことを言っているのは分かっています。でも神は…今ものすごくお怒りなの。先代の巫女は、神に輿入れできずに殺されてしまったか
ら。」

「!?!?殺された……?どうして…?」

「…千年前の巫女は、神の妻となるべきはずの娘は、あるうことが人間の男と恋仲になってしまったのです。」

鈴音はどこかで聞いたような話に似ていると思う。

「その巫女は…もしかしてその人間の男の人に殺されたんじゃない?」

「!ええ。そうです。鈴音さん…何故それを?」

「私の住んでる所でちよつとした昔話があるんです。昔龍神様がいて、一人の巫女をみそめました。龍神様はすぐに巫女に妻になるよと言いました。相手は神様のいうことです。逆らえるはずもなく、巫女は神様の妻になることを決意しました。けれど、その時巫女には一人の愛した男性がいました。名を弥太と言いました。弥太は巫女を愛し、巫女も弥太を愛しており、結婚する約束もしていたのです。弥太はそんな愛する巫女が神に嫁入りするのを猛烈に反対しました。どうにか巫女だけはやめてくれと頼みましたが、その思いも虚しく、とうとう巫女が嫁入りする日がやってきてしまったのです。弥太は愛する女性を奪われるくらいならと、最後に一目会いたいと行って巫女を呼び寄せ、巫女の胸を鋭い刃で一気に貫いて殺してしまったのです。それを知った龍神は怒り狂い弥太を殺し、周りにいた人間たちも殺してしまいました。たくさん命が消えてしまった瞬間でした。龍神は怒りがおさまると今度は巫女の死を悲しみ、涙をこぼしました。やがてそのおさまることのない涙は泉となり、川となって今も流れつづいているのです。…ってお話です。」

「!何故それを」

「弥太は千年前の巫女の恋人の名そのまんまです。鈴音さん、その話は一体誰から聞いたのですか。」

霞乃さんも脩斗も柁もひどく驚いている様子だ。私がこの話を知っているのは良くないことだったのだろうか？私の住んでる地域なら子供の頃からよく聞かされる話だったから話したのだが。

「あ…の…？」

「…どうやって伝わったのかは知りません。…ですが鈴音さんのその話はほぼ真実です。さつき神はお怒りだと言いました。あれは千年前、輿入れするはずだった巫女が弥太に殺されたからなんです。それから千年、神は私たち人間をお怒りになられています。だから私たちはもし先代の巫女が生まれかわったら、今度こそは神に巫女を捧げようと決めたのです。それが先程話したときたりができた理由です。……………鈴音さん、もう一度お願いします。私たちは今まですつと神に供物をささげてきましたり、祈りを捧げたりとあれこれ手をつくしましたが神はなかなかお許しになりません。どうか、私たちを…この国を助けて下さい！」

霞乃が頭を深々と下げてくる。

するとそれを見た脩斗と柁も鈴音に頭を下げてきた。

鈴音はとまどった。

知らない世界に落ち、自分がこの世界について全くの無知でも、相手はこの国のトップだということは分かりきっている。

この宮殿につれてこられた時や、謁見の間に入った時にかなり高い身分なのだということは身をもって思い知ったから。

鈴音は迷った。

相手はかなり困っている様子だし、助けたいという情が少しもわいてこないわけじゃない。

だが、自分が子供のころに聞かされた昔話の悲劇のヒロインが実在し、自分がまさにそれなのだと言われると複雑な気分になる。元の世界に帰りたいという気持ちも交差して、気持ちに整理がつかさうにない。どうしようかと考えていたが帰る術もないし、今回の自分の運命はこうなのだと諦めて来世に期待することにした。

「……分かりました……。私……その神様にお嫁にいきます。本当はただ……。」

「本当ですか鈴音さん。ありがとうございます！」

霞乃がまた深く頭を下げた。鈴音はそれを慌てて制すると、これから待ち受けている自分の運命に思いをはせた。

第四話 輿入れ

鈴音が神に輿入れをすると決意してから、はや一週間が経つ。

鈴音は退屈な日々を過ごしていた。

先代の巫女の生まれかわりというだけで大切にされ、宮殿の豪華な一室でなに不自由なく生活している。

なに不自由なくというのは少し嘘かもしれない。

大切にされすぎて部屋からはではいけないことになっているのだ。たまに侍女が身の周りの世話をするために部屋に入ってくるが、話し相手にはなってくれなかった。

玉依姫様にお声をかけていただくのはもったいないと言って世間ばなしのひとつもしてくれないのだ。

はあと自然と溜め息が出る。

霞乃は輿入れのための準備で忙しらしく、なかなか会えない。

脩斗はというと、たまに部屋にきては憎まれ口ばかりたたいて帰っていく。

袖によると、脩斗は女性慣れしてないから照れ隠しにそういう口のききかたをするのだというが、信じられない。でも脩斗がくる時はためぐちで構わないというから、気が楽にはなった。そんなことを考えていると部屋の外から声がして、いつものようにどうぞ、と返事する。襖が開いて入ってきたのは脩斗だった。最近なんでかよくくる。

「お前、またぐーたらしてただろ。ダメ人間になるぞ。あ、もう手遅れか」

入ってきて言うことがそれかとムツとする。負けずに言い返す。

「心配ありがとございます。でもそれはそれはお忙しい脩斗

様にはこんなところくる時間なんてないんじゃないやありませんか？私はどくせ暇なので構いませんけど。」

「…お前可愛くないな。本当にあの清らかな魂の持ち主の玉依姫なのかよお前？お前みたいなのを妻にする神があわれだな。」

「……………」

「……………」

「…………別に好きで嫁ぐわけじゃないし…」

「…悪かった。」

脩斗は少しばつが悪そうに頭をポリポリとかいた。皇子っていつても脩斗は全くそんな感じがしないと思う。堅苦しくないし、身分が高いことを威張ることもしない。わりと庶民的で気さくな彼のそんなところは気に入っていた。

「お前の輿入れの日が正式に決まった。今日からちょうど一ヶ月後の正午だ。いいな？」

「…………うん。わかった。」

会話がとぎれる。しばらく沈黙が続いて黙らないでよと思うが、視線を外に移して景色を見ると気が紛れた。

「この世界には慣れたか？」

「…うん。だいぶね。」

外の景色から目をはなさずに答える。

「はぁ…結婚かぁ…見たこともない人に嫁ぐなんて。昔の政略結婚ってこんな感じだったのかな。私…結局恋愛しないで学生生活終わっちゃった。」

「お前恋した時ないのかその歳で。」

「……じゃあ脩斗はどうなのよ。私より年上だし皇子様なんだから経験豊富なんでしょうよ?」

本当は女性慣れしてないということは、あえてふせておいた。

「なっ………!あ………当たり前だっ!!!」

そんなにうるたえなくていいのに、と心の中でクスリと笑った。脩斗のほうに向き直ると、脩斗の顔は耳まで真っ赤になっていた。私よりこういふ色恋沙汰には免疫ないんだなあと思った。そんな彼が可愛く思えて、こらえていた笑いが一気に吹き出てしまった。

「おま…お前ッ!!!なに笑ってるんだ!!!」

声に努気が含まれてきた気がする。

「ゴメンゴメン。あんまり真っ赤になっちゃってたから、おかしくてっ!つい…クスクス」

「失礼な奴だ。」

さつきよりは怒ってない気がする。脩斗と出会ってから一週間、かなり打ち解けあえたと思う。始めは元の世界に帰りたい気持ちで頭がいっぱいだったから、笑うということが出来なくなっていた。でも今はお腹をかかえて笑えるくらいにまでなった。多分脩斗のおかげだろう。

「ね、なんで最近よく来るの？」

「ここに来るのに理由があるのか？お前が暇そうにしてるからだ。」

「皇子直々？」

「悪いか。」

「別に。」

「お前が巫女の生まれかわりで貴重だからだよ。それに、さつきから何度も言ってるが暇そうだからって言ってるだろ。」

「うん…。確かに暇。ありがと…話し相手になってくれて。おかげで少しはこの国のこと分かるようになってきたから。でもそんなに長くもここにはいられないけどね。私神様に嫁ぐんだし。ね、神様ってどんな人？」

「どんなくて…。神もいろいろだが、お前が嫁ぐ神はこの世界の最高神、暁だ。」

「暁？」

「真紅の鱗をもつ龍神で、ものすごく荒々しい神と言われる。」

「………………。それ…早く言つてよ。私そんな神様のとこになんか嫁ぎたくない。」

「は！？無理だ。すでに輿入れの準備は始まつてるんだぞ。またここで輿入れを取り消したら、暁は何をするか分からない。」

「…………でも…荒々しいつて…短気つてことなんじゃ？それに龍の姿つて……なんか怖い。食べられるんじゃない？私…」

「荒々しいつてのは千年前の記録にそう書いてあつただけだ。本当にそうなのかは知らない。ただ昔怒りにまかせて弥太と周囲の人間も殺したらしいからその可能性は高いのかもな。」

「かもな…つて……。すごい不安になつてきた。」

「まあ、その暁は巫女を好いてたんだから、とつて食われることはないだろうよ。」

ひとごとだと思つて。と鈴音は思う。だが自分で神様に嫁ぐと答えてしまったのだから仕方ない。

それに元の世界に帰れるような情報も入つてこないから、諦めるしかなかつた。

「じゃあ、なんかあつたら言えよ？お前を暁に嫁がせるまでは俺たちがお前の面倒みなきゃならないんだからな。」

そう言つて脩斗は部屋を出ていった。

鈴音はため息をはく。

どうしてこうなつてしまつたのだろう。この世界にくるきっかけに

なったのは、そう、あの銀髪の男の人。あの人に会わなければ、と何度も後悔の念がわきあがってくる。だが悔いたところでこの先の自分の未来に変わりはないのだ。そう思うと何も考えたくなくなつて、鈴音はいつの間にか用意された布団に潜ると眠りはじめた。

昏下がりの午後。

外は生憎の天気で大雨。

鈴音は憂鬱な気分で、用意されたお茶と菓子をつまんでいた。部屋にはひとり。

軟禁に近い状態で部屋から一步もだされず、そんな生活を送つても三週間くらいたつだろう。

最高神『暁』に嫁ぐまでもう二週間あるかないかくらいになつてしまった。

退屈すぎてどうしようもなく、ただ軟禁されつづける。

侍女たちはそれだけ巫女様を大切にされているからだというが、軟禁のどこが大切なのだと内心腹を立てていた。

今まで我慢してきたがそろそろ限界だった。

鈴音は戻つてれば少しくらいならいいだろうと、部屋から出ようと襦に手かけた。するとタイミング良く襦が開き、脩斗と榊、霞乃の三人が入ってきた。鈴音はぎよつとしたがいつもと様子が違う三人に違和感を感じた。三人とも真剣な眼差しで鈴音を見てくる。ピリピリとした緊張感がただよい、嫌な予感がした。

「鈴音さん、輿入れの準備ができたの。本当は10日後が輿入れの日だったのだけれど、明日になりました。」

「!?!?えっ……」

「ごめんなさいね。本当はこれからあなたの身を清める儀式をしてから輿入れするはずだったのだけれど…事情により変わったのです。」

霞乃が静かに話す。鈴音は始めは驚きをみせたものの、遅かれ早かれこうなるのは自分で決めたことだと思い、落ち着いてそれを受け入れた。

「分かりました。明日ですね。」

「ええ。その前にあなたの身を清めなくてはならないの。私に着いてきて下さい。」

「はい…」

素直に霞乃の後を追う。

体を清めて明日いよいよ神様に嫁ぐ。

胸騒ぎがした。

嫌な感じではなく、緊張で心臓の鼓動が早くなる感じが近い。

鈴音は正直急な話したと思っていた。

さっきまで生憎の天気で気分がすぐれず、輿入れまでまだ時間があり、退屈な時間がもうしばらく続くと思っていたから。

そんなことを考えながら霞乃についていくと、宮殿の裏庭にたどりついた。

裏庭は枯山水のようになっていて、松の木が綺麗に立ち並んでいた。裏庭といえど、皇居なだけあっておそらく庭師が毎日手入れしているのだろう、今までみてきたどの庭よりも美しかった。

霞乃はさらに奥にくるよう鈴音を促し、鈴音は庭の美しさにとれながらもさらに庭の奥へと進んでいった。

すると木々に隠れた場所に小さな洞窟が現れた。

まさかここに入るのだろうか。

霞乃をちらりと見ると、霞乃は何も言わずに静かに頷くだけだった。少しの期待と不安を抱きながら、鈴音はその中へ入っていく。中は薄暗く、しかし人工的に作られたものみたくて足場は舗装されていて歩きやすかった。

何か恐ろしいものが出てくるのではないかと恐怖心かられながら歩を進めていくと、やや広い広間のような空間が広がっていた。真ん中には露天風呂のような石作の水たまりがあつて、天井からは太陽の光がわずかに降り注ぎ、神秘的な雰囲気をかもしだしていた。太陽の光に照らされたその池とも風呂とも呼べない円形の水たまりはキラキラと輝いて、大きな鏡のようだ。

「鈴音さん、ここは八咫の間と言って、聖水が湧き出る神聖な場所です。巫女はここで体を清め、神事を行っています。鈴音さんはこれから神の領域に入ります。無礼にならないようこの水で身を洗い清めて欲しいのです。」

「はい。」

霞乃は外で待っていると言つて出ていってしまった。八咫の間にひとり…鈴音は着ていた服を脱ぐと、光輝く清水足をつける。深さはそんなにないみたいで、膝がつかるくらいだった。触れた水は冷たく、気持ち良かった。この清水で巫女たちが身を清めていたのだと思うと気持ちが引き締まった。

鈴音は身を清め終えて外に出ると、霞乃と霞乃が呼び寄せたのだから、侍女たちが何人か待機していた。

侍女たちは鈴音がでてきたのを確認すると忙しくささ、こちらへとまくしたてて宮殿の中へと連れていく。

鈴音はされるがままでただ呆然としていた。

侍女たちは白い着物をもつてくると、それを鈴音に着せはじめた。おそらく白無垢のようなものなのだろうと思っただが、着せてもらってわかったのだが、これは神社でみかける巫女さんの着物によく似ているようだった。着物を着せてもらうと、さらに淡く化粧をされ、頭には金の冠をかぶせられた。動くとき冠の飾りがシャラシャラと揺れる綺麗なものだった。

「とてもお綺麗ですわ。」

「ええ。本当に。」

一仕事終えた侍女たちは口々に感想を述べている。

「あの、輿入れは明日なんじゃないんですか？」

「ええ。そうですね。」

「じゃあ…この格好になるのは早すぎるんじゃない？まだ今日の夕方なんですけど。」

「まあ！そんなことありませんわ。今から神の国へ参りますもの。今夜が発発なのですよ？霞乃様からお聞きになってらっしゃらないのですか？」

「え…そんなの聞いてない」

「とりあえずこちらへおいで下さいませ。玉依姫様。牛車を用意させておりますゆえ」

「えっ！？もう出発！？」

「はい。参りましょう」

「待つてっ…！私まだ脩斗…。皇子と榊、霞乃さんに挨拶してないッ」

「玉依姫様、霞乃様は牛車のほうでお待ちです。皇子と榊様にはご面会できません。このお姿は夫となる方以外の殿方にはお見せできないのです。」

「…！…そんな。」

侍女に手をひかれながら思う。

脩斗と榊はこの世界にきて初めてできた友人とも言うべき人達だ。三週間という非常に短い時間ではあったが、知り合いがない自分に良くしてくれた。特に脩斗は自分が玉依姫の生まれ変わりというだけで皆態度をかえるのに、ひとりだけ自分と普通に接してくれた。それが嬉しかったし、神の国に嫁いだらもうこの国には戻れないと思っていたから、一言お礼を言いたかったのに。

手をひかれていくと、侍女が言ったとおり霞乃が牛車の前で待つていた。

「鈴音さん、とても花嫁らしくなりましたね。これから一晩かけて神の国に参ります。長い旅になりますけど、私も共にいきますから大丈夫ですよ。」

そう言ってまるで自分の娘の結婚を祝う母のように穏やかに微笑んできた。

「あの、皇子と榊に会わせてもらえませんか？お世話になったので一言お礼が言いたいです。」

「それはできません。この姿を初めてお披露目するのは夫となる方だけ。それ以外の殿方には見せてはならないのです。伝えたいことがあるなら私から伝えます。」

「それもしきたり…ですか。」

「ええ。あと急な変更になりこうなってしまったのは謝ります。でも、怒らないで下さい。神、暁が望まれたことですから。どうしようもないのです。」

霞乃がすまなそうな表情をする。

その顔を見ると鈴音はこれ以上何も言えなかった。ただ、暁という神に対して怒りがわいてきた。こっちはこっちの事情があるのに勝手に輿入れの日を決めてしまうなんて。自分勝手だと思った。神様なのに皆のことを考えない。でも相手は神様、反抗したらなにをされるかわからないという恐怖に襲われるのだ。鈴音は見た時もない神に対して腹わたがにえくりかえる思いだった。

「皇子、鈴音さん行ってしまつぞ。最後に挨拶も出来なかったがいいのか？」

「別に必要ない……。」

「……ふーん……？」

「………なんだよ……ふーん？て。」

「いや？皇子は鈴音さんと話してる時は楽しそうだったなと思ってからかったりしてたものな。女性とあんなふうに話したのは初めてだろ？」

「！お前人の話し聞いてたのかッ……」

「まあ怒るな怒るな。皇子が女性に対してどう対応するのか気になっただけだから。いつもだと女性には、返事はするものの会話がはずむことはなかったものな。だから珍しかったんだよ。」

「……別にそんなんじゃない……」

「ん？？そんなんじゃないってどんなんだ？好きってことかなあ？？？」

「！？？ばっ……！！ちげーよ……！！！！」

「焦りすぎ。凶星？」

「だからちがつ……！！ちょっと違う世界からきたから物珍しかっただけだ！」

「へえ〜」

「………っ……もういいだろ……！ぶざけるのもいい加減にしろ……！！」

「心外ですねえ。俺はいつも本気です」

「嘘つけ!!!」

「まあ……とにかく話を戻すと、鈴音さんは今夜……そろそろ出発するだろうな。」

「……ああ」

「……。会えなくて別れの挨拶ができないなら手紙でも送れば?」

「……誰が書くか」

「じゃあ俺は書きますから。鈴音さんひとりで違う国に嫁ぐからさぞかし心細いと思いますしね……。せめて俺だけでも元気づける言葉を送りたいんで……。ま、皇子には関係ないことだからいいですけどね。」

「!? 待て! お前が書くなら俺も書く! 部下がしといて主がしないのは変だからな。」

「そうですね。では時間がないので急ぎますよ」

「分かってる」

やれやれ手のかかる皇子だ。と心の中でクスリと笑った。

一方、鈴音は出発するため牛車の中にいた。

霞乃はまだ外でなにかと準備に手をやいており、侍女たちもそれを手伝っていた。

短い時間だったが世話になったこの国を離れるのは寂しかったが、霞乃が神の国までついてきてくれるのでまだ安心した。

しかし、また知らない土地にひとりにされると思うと心が沈んだ。

こんな時思い出すのは自分の故郷。

まだこの世界にくるまえの自分。

あの時はこんなことになるなんて思ってもみなかった。

あのままあの世界で生きて、いつか誰かと恋におち、やがて新しい家庭を築いてごく普通の幸せを噛み締めて生きてくものだと思っていたから。そう考えていたから、大分予定がずれてしまったなあと思った。それに嫁ぎ先の神「暁」とはどんな神なのか……。荒々しい神とは脩斗からきいていたが、果たして……。それに龍の姿だと聞いたからどんな家に住んでいるのかとか、なにを食べてるのかとかいろいろ興味があった。

簾が持ち上げられ、霞乃が牛車に乗ってきた。

手には二枚の紙をもち、車を出しなさいと外へ声をかけるとガタリと大きな揺れと共に牛車が動きだした。ゆったりとした動きを感じ、ゆっくりだが確実にこの国から離れるのだという実感がわき、胸の奥がきゅっと締め付けられる。本当に最後までお別れが出来なかったことを後悔していると、霞乃が先程手にしていた紙を差し出してきた。

「脩斗と、神からの手紙です。私が預かってきたの。読んであげて？」

鈴音は予想外の出来事に驚きつつ、嬉しさがこみあげてきてすぐにそれを受け取ると読み始めた。

「……………」

「あの……………読めません…。字が、私の世界のと違いすぎて」

「！あら……………ごめんなさい。私が代わりに読むわ。」

「ありがとうございます。」と言って手紙を手渡す。霞乃はそれを受け取って読む。

(鈴音へ

お前、俺に挨拶もなしに行くつもりか。

失礼なやつだな。

暇そうにしてたから話し相手してやったってのに。

全く。俺に対する感謝の言葉はないのか。……………まあそれは俺が勝手にやったことだから恩着せがましいかな。それに退屈で仕方なかったのは俺も同じだった。神にいつも二言めにはああしろ、こうしろ、皇子らしくしろ、ちゃんと年相応にふるまって嫁でももらえてな。姑みたいだろ？それに皇子って結構大変なんだ。国背負ってるからさ。ってこんな話しどうでもいいか。

それより、玉依姫として神『暁』に嫁いでくれると決意してくれたこと感謝している。

突然のことがたくさんありすぎて大変だったろ？悪かったな。

でもお前のおかげで神の国と中都国は何事もなくやっていけるだろう。

というのはな、婆様から聞いたかも知れないがこの世界は神達が創造したってことになってるんだ。

それも大昔な。

だから俺たちを生み出したのは神の国の住人たちってことに書物上ではそうなってる。

だから俺たちは神には決して逆らえない。

確かに神の国の住人は不思議な力を持つてるし、外見が異形の姿をしているものたちが多いみたいなんだ。

慣れるのに時間かかるかもな。

あと神ってのはこの世界を創造した者たちだから、慈悲深く慈愛に満ちているって書物で昔読んだことがあってさ。

でも千年前の悲劇を思いだすといくら気に入ってた女が手に入らなかつたからと言って他の人間たちまで殺すってのは、慈愛に満ちた神のすることじゃないよな？俺はそう思うんだが。なんで今この話したかというと、ようするに誰も踏み込んだことのない領域だから気をつけるってことだ。なにもないことを祈るが。長々と悪かったな。体に気をつけるよ？じゃあまた。

脩斗)

「脩斗：そんなことを考えていたのね。」

霞乃が驚いたような呆れたような表情をした。

鈴音はそれはどっちを意味するのかは分からなかったが、脩斗が自分の身を案じてわざわざ手紙をよこしてくれたのは嬉しかった。なにより、もう脩斗たちには会えなくなるだろうと諦めていた鈴音にとって最後にじゃあまた、と付け足してくれた脩斗の心遣いは本当に嬉しかった。それから霞乃は続けて榊からの手紙を読み始めた。内容は榊も自分の身を案じ、心配してくれている様子で鈴音は二人に感謝した。読んでもらった手紙を霞乃から受取り、大事にしまった。字は読めないが内容は読んでもらったから頭に入ってる。それにこれをもつてると二人が一緒についてきてくれてるみたいで心強かった。

日はとつぷりと暮れ、もう真つ暗だ。

鈴音は牛車の中で揺られながら徐徐に襲ってくる睡魔とたたかっていた。

霞乃は明け方起こすから眠りなさいというが、自分ひとりだけ眠ってしまうのは忍びない気がして出来なかった。

とはいえ健康的な朝方生活を送ってきた鈴音にとっては辛かった。なんとか睡魔に耐えようとしたがやはり無理で、気がつく朝になつていた。

目覚めるとそばにいた霞乃はおはようにつこり微笑み、鈴音もおはようございますと挨拶しかえした。

その間も牛車は移動を続けているようで、もうかなりの距離を移動したのだらうなと思った。

それから一時間ほど移動を続けて牛車が止まった。どうやら着いたらしい。鈴音は緊張し始めた。ついにこの日がきたのだ。鈴音は霞乃と共に牛車を降りる。そこには大きな山々が堂々とそびえたつていて、霧が麓に深くかかっており、まるで雲に浮く島のように思つた。その霧の中にちらちらと文字が見えた。読めないので代わりに霞乃が読んでくれる。

「天龍国」と書いてあるらしい。それはそれは大きく堅固な門で、そこに人が一人たつているのが見える。よく目をこらして見ると思いもよらない人物だった。そう、銀髪の長い髪に色素の薄い肌、中華風の服をきた男、紛れもなく自分をこの世界に突き落とした張本人である。驚きと共に激しい怒りがこみあげてくる。

「お待ちしておりました。巫女様。」

あの時とかわらず落ち着いた声で話しかけてくる。それがまた癪にさわる。こっちは物凄く困惑して大変だったのに！鈴音はもう夫以外にこの姿を見せてはならないというしきたりなど忘れて叫んだ。「ちよつとあなたっ…！！！！！！」

「この度は中都国より玉依姫様をお連れいたしました。神『曉様』によるしゅうお願い致します。」

霞乃がわって入って挨拶の言葉を交す。

「確かに巫女様をお預かりいたします。ここまでご苦労。」

「いいえ。では玉依姫様、どうかお達者で。」

霞乃のその言葉に怒りがおさまる。ああ…。霞乃ともとうとう別れの時がきてしまったのだ。鈴音は霞乃の手をとると、ありがとうございましてと感謝の気持ちと、息災を祈って別れを告げた。霞乃が牛車に乗り、もときた道を帰っていくのをただただ見つめていた。ふと後ろから声がかかる。

「巫女様、曉様がお待ちです。参りましょう。」

鈴音はその声の主のほうに向き直るとさっきいいかけたことを叫んだ。

「あなたね！！私がどれだけこの世界にきて困ったと思ってるの！？自分でこの世界に連れてきたたくせに急にいなくなったりして…！全く！それに加えて嫁になれだなんて冗談じゃない！！！！」

「申し訳ありません。移動する間、巫女様が誤って中都国におちてしまいましたので。様子を見させて頂きました。」

「~~~~!!!!」

本当はたくさん文句を言いたかったが、この人に何を言ってもこの調子で返ってきそうなので時間と体力の無駄だと思い途中でやめた。

「……ねえ…私あなたの名前知らないんだけど…。」

「失礼いたしました。私は白銀、白銀と申します。」

「白銀さん…。」

「白銀で構いません。」

「じゃあ…白銀。」

「はい。では我が主、暁様のもとへ参りましょう。」

白銀と名乗った男性はそう言うと同時にいきなり足元に現れた円陣の中に立つと、鈴音も入るように言う。おそろおそろその中に立つと一瞬それが光り、そのあまりの眩しさに目をつむってしまった。

「巫女様、ご到着いたしました。我が主のお屋敷、龍宮にございます。」

そう言われてそつと目を開けると、そこにはそれはそれは立派な屋敷があった。極彩色にいろどられ、柱には龍やら麒麟と思われる神兽の彫刻が施され、これまた豪華に金が埋め込まれていた。中都国の宮殿もすごかったが、こちらにも負けずに立派なお屋敷だった。

はあ…と感嘆の溜め息をついていると、屋敷の中から人の声がした。

『白銀…！お前の隣にいるのが我が妻だな！？』

若々しい、そして穏やかな低音の聲がして、反射的にそちらに振り向こうとしたと同時にいきなり抱きすくめられた。

「！？」

鈴音はなにが起こったのかわからずただただ体を硬直させるだけであつた。

『そなたが我がずっと待ち続けた巫女。逢いたかつた……。』

そういつてさらにぎゅうつと力強く抱きしめてくる。鈴音はその言葉にドキリとする。『逢いたかつた…』この人があの、夢に何度もみた声の主ではないか。まさかあの夢が本当のものになるとは思つてもいながつた。

「はい。曉様。こちらが曉様の奥方様にあられます。」

『我が妻、そなたの顔をよく見せてくれ。』

そう言われてグイッと顎を持ち上げられる。

そこには見たこともないほど美しい顔があつた。肩にかからなくらいの銀髪に紅い瞳、鼻筋の通つた非のうちどころのない端正な顔立ち。女子なら誰でも惚れてしまつたと思う。そして自分の顔と青年の顔がかなりの至近距離にあるのに気付くと一気に血が上昇しはじめた。その様子に青年はクスリと笑う。

『我が妻はなんて可愛らしいのだ。期待してた以上であった。』

そう言っただけでまた抱き締められる。鈴音は恥ずかしすぎてうつむきながら、何か話さなくてはと思った。

「……………あの…あなたが龍神様ですか…？」

『人間からはそう呼ばれることが多い。が、正しくはない。それと私の名は曉だ。我が妻、そなた名はなんという？』

「えっと…習志野鈴音です。」

『鈴音。良い名だ。鈴音、私はずっとそなたが欲しかった。やっと手に入った。そうだ。長旅で疲れているだろう？我が屋敷で休むが良い。』

「あ…ありがとうございます。」

龍神『曉』だと言う青年は、鈴音が想像していたものとだいぶ違っていた。荒々しく龍の姿をしていると聞いていたから、もっと恐ろしいものを想像していた。だが実際は全く違っていて温厚そんな雰囲気少し安堵した。

第五話 不完全な龍

龍神『曉』に手をひかれて歩く。鈴音はとりあえずついてくただけだ。本当にこの青年が中都国の人々が恐れている龍神なのだろうか？どう見ても少し派手な青年にしか見えない。いや、銀髪に赤目じゃかなり派手だと思う。それに服も紅蓮の垂干だ。よっぽど赤が好きなのだろうかとじっと見てると、視線に気づいたのか、曉が振り向く。

『鈴音は私が本当に龍か疑っているのだろうか？』

ピタリと当てられて何も言えなくなってしまふ。心を読まれたのだろうか、それともそんなに疑いの眼差しで見えていたのだろうか。鈴音が言葉につまっていると曉は微笑んで言う。

『沈黙はなによりも肯定をあらわす。そなたは嘘をつけないタイプだろうか』

そう言ってまた歩き出す。

曉は鈴音を部屋へ招きいれると、休むように言う。長旅で疲れたるう、と。確かに疲れてはいたが一応夜中眠ったし、時間的にまだ昼前くらいなので横になる気もない。とりあえず輿入れのために着た慣れない衣裳を早く着替えたかった。それに単純に目の前の青年に対する興味があつたし、まったくわからないことだらけなのでいろいろ質問したかった。

「あの…差し支えがなければ質問していいですか？」

『なんでも構わない。』

「じゃあ…どうして人間の巫女をお嫁さんにするんですか？中都国の人たちには龍神様は清らかな巫女の魂を好むからと聞いてきました。それに千年前の話じゃ巫女を見初めたからだとも…。でも本当のことは本人に聞かないとわからないからと思って。」

『なるほど。輿入れ自体何故行うのかということだな。話すとき長くなるが…わかった。話そう。答えは簡単だ。陰陽の均衡をとるためだ。』

「陰陽の均衡…？」

『今は忘れられそうになりかけているが、昔は誰もがよく知っていることだった。この世界には陰と陽が存在する。陰と陽は互いに力関係が対等であることでやっと力を発揮できるものだ。どちらが欠けていては意味をなさない。分かりやすくいうと男女がそうだろう。男は陽、女は陰だ。このどちらかが欠けていては人間界は成り立たない。子を成せなくなるからな。これは世界の全てに当てはまることだ。つまり陰陽は世界の理と言っている。そして話しを戻すと、輿入れはその均衡をとるためのひとつ。そうだな…まずは龍について話しておくか。この国、天龍国は龍が主に生きている。他にもいるんだが、だいたいは龍だ。龍は力が強く、この世界の理から外れている。つまり最初から陰陽どちらもその身に持ち合わせているんだ。完璧に近いと言っている。』

「？じゃあ…輿入れは陰陽の均衡を保つためと言いましたけど、あなた達龍には必要ないことなんじゃ…？」

『そう思うだろう。だが、たまに陽の気しかもたずに生まれる龍がいるんだ。陽の気しか持たない龍は情緒不安定で、そのわりに完璧といわれる龍達よりも何故か強力な力を持ってしまふ。…それが私

なんだ。力は強いが陰の気が欠落したただの出来損ないだ。しかしそんな龍をひとりにさせておくのは危険とみなし、ある儀式が出来た。それが輿入れ。人間界の巫女と呼ばれる少女は陰の気が強い。それ故に出来損ないの龍に巫女を妻として迎え入れることで陰陽の均衡をとろうという考えができたのだ。この国の勝手な理由からな…。巫女にはすまないと思っっている。結局出来損ないのお守りをさせてしまうことになるから…。」

「…そんなことは…。」

『だからそなたには一刻も早く私の元へきて欲しかった。情緒不安定なままこの過ごすのは辛かったんだ。またあのようなことが起らないように。』

「あのようなこと…？それって…。」

『…千年前の悲劇だ。』

「千年前の…。龍神様が見初めた巫女が殺されちゃう話…。」

『ああ…。あの時は予想外の出来事だった。私もやっと完璧とは言えないがそれなりに立派な龍になれると思っていた。それに一目で心奪われた相手が自分の妻になると思うと心が踊ったものだ。だが…弥太は輿入れの儀式の日にそなたを殺した。恋仲であった二人を引き離そうとした私が悪いのだが、その時は許せなかった。私は激しい怒りと悲しみにさいなまれた。そして恐れていたことが起きた。私の内の陽の気が怒りによって増大し暴走した。誰にも止められなかった…。私はひとりで暴れ、怒り狂い多くの命を消し去った。この手で。私は自分が恐ろしい…。出来損ないとして生まれたことを悔やんだ。』

そう話す暁が苦しそうな表情をする。私は暁が話す度に心が痛んだ。この人はずっと苦しんできたのだ。生まれた時から中途半端な自分を嫌っていたのではないだろうか。そしてやっと自分をその苦しみから解放してくれると信じた人を失ったとしたら…？

初めは突然こんな世界に連れてこられて、結婚を強いられて理不尽だと思った。まるで悲劇のヒロインのようで可哀想だ、と心のどこかでそう思う自分がいた。でも目の前の哀れな龍は千年もの間、いやもしかしたらそれ以上の年月を、いつ自分が制御できなくなるのか分からない恐怖に耐えてきたのだ。他人には頼れない、孤独な自分との戦い。その心の傷を受け止めてあげられるのが自分だけなら、それなら力になってあげたい。たとえ自分の存在理由がこの龍の陽の気を抑えるためだけなのとしても。自分がいるだけで誰かの役にたつならそれでいい。誰かが救われるならそれで。鈴音は使命感にもえた。ただの同情なのかもしれない。自分より不幸だと思った者に対しての同情。でも、何故だか自分が助けてあげたいと思えた。これも暁が言った陰陽の理が関係しているのだろうか。

自分は陰の気、暁は陽の気をもつ。だからそれが自然に均衡を保とうとしているのかも知れない。お互いにお互いには無い部分を求めているからかも知れない。本当のこととは分からない。ただ分かるのは、鈴音は暁を助けてあげたいというところ。それだけははっきりしている。それに鈴音がここにきた理由は最初からそのためだ。なにを今更考える必要がある？

「あの…私がいいます。だから安心して下さい。」

『！…鈴音…。』

「だって私はあなたのためにいるんですから。悔やむ必要は無いです。」

『鈴音、すまない。気を使わせる気はなかったんだが……。でも私は嬉しいよ。そなたの言葉は私の心に光を与えてくれる。温かい気持ちになる。私がずっと待ち望んでいたものをくれる。』

暁は満面の笑みをむけてくる。本当に嬉しそうだ。その端正な顔が笑顔になると鈴音も温かい気持ちになった。自分のほんの些細な言葉が、目の前の青年にとっては何倍にもして喜びとなっているのだ。そう思うと鈴音も嬉しかった。

『そうだ。鈴音、私たちは夫婦だ。敬語はいらない。名前を呼ぶ時も暁と呼んでくれ。』

おそらく自分よりかなり歳上の、それも神と呼ばれる人呼び捨てするのに多少抵抗はあったが夫がそう呼んでくれと頼んでくるなら、断る理由がどこにあるうか。

「うん。わかった。暁、これからよろしく。」

そう言って微笑み返した。

龍と巫女。この二人の間に微かに絆とも呼べるものが生まれた瞬間だった。

第六話 傷ついた心

「あれが曉に嫁いできた巫女なのか？」

「そうらしいわ。」

「巫女らしい気は感じる。でも昔の巫女みたいに力はなさそうだよ？」

「おいおい大丈夫だよ。」

「さあ？美月そこまでは分かんない。」

「曉様の正式な妻となる儀……。成功するかしら。失敗したら大変なことになるわよ？一発できめないといけないのに。」

「そうだけどさ……。曉はともかく嫁さんのほうをどうにかしなきゃならないだろ。ちゃんと巫女として目覚めてなさそうだし。」

「そうね。私たちがやるしかないんじゃない？」

「ん。そうだな。とりあえず接触してみるか。」

太陽が沈みはじめ、茜色にそまつた空を見上げながら、鈴音は庭を散歩していた。和風な落ち着いた雰囲気、庭を歩くと、足元にしかれた白い砂利が音をたてる。

ザクツ…ザクツ…と庭に静かに響く足音が、夕暮れのせいもあってか哀愁をただよわせる。歩を休めて見渡すと松や椿などの日本でもお馴染みの園芸植物が植えられている。その風流な景色を眺めつつ、花の香を楽しんでいると後ろから自分の名を呼ぶ声がした。振り向くと声の主が立っていた。

『鈴音、部屋に戻ろう。そろそろ暗くなってきたから。』

「うん。ねえ、私今日はお屋敷の中見て回ったの！だってここすごく広いんだもの。道を覚えるのに時間かかりそうだけど、探険してるみたいで楽しかった！」

子供のような無邪気な笑顔でそう語る鈴音をかわいいと思った。それに単純にここに興味をもってくれてることが何よりも嬉しい。曉も思わず顔がほころぶ。ニコニコと微笑みあつてるとそこに三人の男女が現れた。

「あのさ、お取り込み中悪いけどちょっといいか？」

「こんばんは曉様。突然きてしまってすみません。」

「こんばんはあ。久しぶりにきたよ。」

どこから現れたのだろう、男性一人に女性と少女の三人組がそこにいた。男性は外見年齢は曉と同じくらいで藍色の髪に金の瞳。女性

は男性よりも少し年上くらいで長い黒髪を後ろに高い位置で一つにしばっている。少女は七歳くらいに見えて、話し方が幼く可愛らしかった。いずれも皆綺麗な顔立ちで、鈴音はこの国に住む人達（神）はみんな美形しかいなのかと思った。

『疾風に八重に美月か。久しぶりだな。鈴音、紹介する。この三人は私の知り合いの疾風、八重、美月だ。みな龍で、半端な私とよくしてくれる。』

鈴音はペコリと三人に向かってお辞儀した。

「あの、初めまして。習志野 鈴音です。巫女としてこちらに嫁いできました。分からないことばかりですがよろしくお願いします。」

「ああ。よろしく。実は今日は曉じゃなくてアンタに用があつてきたんだ。」

「私…ですか？」

「あなたは巫女として曉様のところに来た。けれどここに来ただけじゃ、まだ正式に輿入れしたことはないわ。ここに来た後儀式を行わなければならないのだけれど、それが一番重要なよ。」

「でも鈴音は巫女としてちゃんと目覚めてない。だからその儀式ができないの。」

「儀式…？私聞いてないですけど。」

曉のほうを見る。

『…………』

「曉まだ言っでなかったのか。大事な話だろ。」

「曉様は、鈴音がちゃんと巫女として目覚めてないのわかったから言わなかったんだよ。そんなの美月でも分かるよ？全く疾風は鈍いなあ。」

「…餓鬼に言われたくない。」

「美月は餓鬼じゃないよ！美月は美月！！」

「剥きになるところが餓鬼。それに美月は美月って理由になってねえし。」

「ムー！！疾風の馬鹿あ！大人気ない！！」美月が疾風をバシバシ殴る。疾風は腕でガードしながら美月の攻撃を受けてる。八重はまた始まったとばかりに溜め息をついて止める気もないようだ。

鈴音は突然現れて突然喧嘩をはじめ二人にただ呆然としていた。兄妹喧嘩にも見えて、少し微笑ましく思った。

自分も弟竜也とよくこうして喧嘩したものだなど。その様子を温かい目で見守ろうと思ったが、喧嘩は予想以上にヒートアップ。

初めは美月が疾風に殴りかかっていただけだったが、いつの間にか二人ともあやしげな術を使いだした。美月が手をかけ、その手を疾風に向けると美月の背後に鋭い金剛石が無数に現れ、疾風めがけて襲いかかった。その魔法（？）のような技が次々と繰り出さ

れていき、鈴音は温かい目で見守るところか、その様子にどんどん青ざめていく。八重は相変わらず傍観してるだけ。

疾風は美月の攻撃から守るため、自分を囲むように小さな竜巻を作ると、風の勢いで弾きとばした。これが龍の戦い方か、と鈴音は目の前で起きてる現象が手品でもCGでもなく、現実のものだというのが信じがたかった。二人は喧嘩をやめる気配はなく、鈴音は一人でとめるべきか否かでオロオロしていた。

そんな空気を破ったのは曉だった。

『お前たち！！いい加減にしろッ！！！』

その怒鳴り声に二人はピタリと動きを止めて曉のほうへ振り向く。

八重も鈴音も反射的にそちらを向いて、ぎよっとした。

曉の瞳が、表情がいつも違っていた。白眼だった部分が充血したように赤にかわり、瞳孔は縦に細長く蛇のような鋭い瞳に変わっていた。頬に赤い鱗のようなものが現れ、それが顔全体に広がっていく。鈴音は曉の体の変化に背筋がぞっとした。

まだ人の形をしているが、明らかに異形の者へと変化していく曉に、鈴音は動けなかった。さっきまで穏やかに笑ってた曉で全く違う。これじゃあまるで……

……怖い……！！！！

恐怖から体がかすかに震えて、蛇に睨まれた蛙のように固まってしまった鈴音に気づいた疾風は、慌てて曉をなだめた。

『曉！瞳変わってるぞ！！鱗もでてきて……！！しっかり気をもて……！！嫁さん怖がってるぞ……！！俺たちが悪かったからさッ』

曉はその言葉にはっと我にかえる。

すると何事も無かったかのようにスツといつもの曉に戻っていく。だが、次の瞬間曉はハアハアと荒い呼吸をしはじめた。苦しそうに自分の胸をおさえて激しく呼吸している。額には汗をかきはじめ、顔は青ざめている。なにが起こったのだろうか。息苦しくなるほど頭に血がのぼってしまったのだろうか。鈴音はうるたえた。

「ああ、きにすんな。曉から聞いてると思うけどコイツ不完全な龍なんだ。少しでも心が乱れるとコイツの中の陽の気が過剰反応しまうんだ。だからちょっとしかキレてなくても体が変化してこんな姿になっちゃう。初めて見たから怖いって思うのは仕方ねえと思うけど、昔はしょっちゅうこういうことあってさ。まあ一種の発作みたいな感じだな…。ほら、曉あるけ。」

疾風はそう説明しながら曉を支えて部屋へ連れていく。鈴音は何もできずただその様子を見ているだけだった。今のであんな風に変わってしまったのなら、千年前の暴れようは相当酷いものだったに違いない。

「……曉様はずっとこのことで悩んでらっしゃるの。今の…二人の喧嘩をとめようとちょっと怒鳴っただけでも陽の気が反応してしまう。特に龍の中でも飛び抜けて強い力を持っているから、余計酷く反応してしまうの。そして陰の気をもたない曉様は陽の気が自然におさまるのを待つしかない。苦しそうに呼吸してるのはそのせい。まだ今日はいい方よ。」

「だから巫女の陰の気が必要な。均衡のとれない状態の龍は同じ龍からも恐れられる。避けられちゃうの。…可哀想だよ。」

「曉様は最高神：なんて呼ばれてるけど実際はそんなの名前だけ。力が飛び抜けて強いのを良いことに曉様を自分たちから避けるのよ。最高神の曉様にお近づきになるなんて勿体無い。私たちは遠くから見ていられるだけで充分ですってね。酷い話でしょう？だから曉様はこの屋敷にずっと一人で住んでるの。でもね、一人で住むにはこの屋敷、広すぎると思わなかった？元々はここ、先代の最高神の親族が住んでいたところなの。でも曉様が生まれてからここを出て行って曉様に譲ったの。龍は人間のように身分とかはなくて、ただ力が強いが強くないかで決めるの。その中で今一番力が強い者を最高神と定めて都から離れたこの屋敷に住ませる。初めは力が強い龍に国を守ってもらおうとして、都全体を見渡せるこの山の頂上に屋敷をたてただけど…、いつの頃からか不完全な龍が生まれるようになって、この場所はその龍を隔離するために使われるようになったの。曉様は最高神になった時も嫌と言わずに笑ってここに移ったわ。最高神になれたのは誇りだ。それに高いところから美しい都を見渡せるのはここに住む者の特権だなんて…。

私はそんな曉様を見てるのが辛いわ。だって曉様は何も悪くないのよ？なのにこんな風な生活を強いられるなんて……。……………だから………だからあなたの力が必要なの。あなたしか曉様を助けてあげられないの。」

「美月も曉様を助けてあげたい。美月一人やだもん。千年前の悲劇のときはまだ美月は生まれて無かったけど、すごく大変だったって聞いたの。千年前の輿入れの時は人もたくさん死んじゃったけど、たくさん龍も死んじゃったの。曉様をとめようとした龍たちは頑張った。でも暴走した曉様にはかなわなかった。」

「…曉様も人間と龍を相手にして精神的にも身体的にも深い傷を負ったわ…。その反動か分からないけど、曉様は千年とは言わないけどそのくらいの長い年月眠り続けた。ほぼ仮死状態みたいな感じね。」

その間、人間たちは何度もこの国に供物を捧げてきたわ。輿入れ失敗の償いと、当時の暁様の怒りを鎮めるために。でも暁様は眠りについていたから、暁様からなんの音沙汰もないと、人間たちは千年たった今でも暁様はお怒りになっっていると考えたみたい。あっちからほぼ干渉しなくなっただわ。だからこちらからも干渉しない。そのせいかしら。この世界には中都国と天龍国しか存在しないのにお互いによそよそしくなったのは。」

鈴音はだから脩斗と神に初めて会った時に、神は神なんて恐ろしくて干渉したくないと言っただと思っただ。

自分が、正しくは前世の自分が死んだことよって千年という長い年月も、ずっと中都国の人々、天龍国の龍たち、そして暁にどれだけ多大な迷惑をかけてきたことか。また、この二つの国の関係をよそよそしいものにしてしまったのも紛れもない、この自分なのだと思うと、この世界ではいかに巫女が存在が重要なのかということが分かり、元の世界に帰りたいと泣くことしか出来なかった無知な自分が恥ずかしかった。穴があつたら入りたい思いだ。

「でもな……。たった今アイツの軽い発作を見たと思うけど、

今のアンタじゃアイツに何もしてやれないぜ？」

暁を休ませてきたのだろう、疾風が戻ってきて話を続ける。

そうだ。さっきこの三人は自分は巫女の力が目覚めていないと言っていた。巫女の力がないと儀式が出来ない。その儀式が一番重要なのだと。

「儀式の内容が知りたいです。教えて下さい。どうやったら暁を助けられますか。」

「興入れの正式な儀式は対象となる龍と巫女、そして金、木、水、火、土の属性をもつ龍、全部で七人で行う。まず属性をもつ龍が五角形になるようにそれぞれの位置につき、その中央に龍と巫女がいる。」

始めに龍と巫女を取り囲む龍たちがそれぞれの属性の力を高める。これは結界みたいなもので、万が一のことがあった時の保障つつうかそんなん。それで巫女は自分の陰の気を相手の龍に見合った分凝縮させて龍に与える。だから、この儀式が成功するか失敗するかはほぼ巫女にかかってくると考えていい。」

全ては巫女次第。緊張から鈴音は唾をゴクリと飲んだ。

「でも、さっきも言った通り今のアンタじゃ巫女としての力を発揮できない。力の使い方を思い出すまではこの儀式はできない。」

「だから曉様のためにも一刻も早く巫女として目覚めて欲しいの。」

「目覚める方法…ってどうしたらいいんですか。私…何もわからない。」

「分からないことはない。アンタは千年前の巫女と同じだ。昔の自分を思い出せ。」

「思い出せって…そんな…。」

「大丈夫だよ。鈴音からはちゃんと巫女としての力を感じるから。」

なにかをきっかけにその使い方を思い出せばきつと上手くいくよ。」

こんな小さな少女に元気づけられてしまうなんて…自分が情けなかった。

やってもいないのに無理だと言わんばかりの言葉しか出てこなかった。

暁を助けたいと、自分を必要としてくれてるこの人の力になりたいと思っただけであり、たのみに。

あの決意はどこへ行ってしまったのだろうか。

先程、暁の異形の姿を見て怖いと思ってしまった。

その時にグラリとその決意が揺らいでしまった。

これでは暁をこの場所に離れた他の龍たちと同類ではないか。

なんのための自分なのだ。

なんのために自分はここにいて？暁を怖いと、そんなふうに思うため？違う。

違う、自分は暁の苦しみを、傷を癒してあげたい。

自分にその力があるなら、自分にできる限りのことをしてあげたい。暁の苦しそうな顔を思い出す。

呼吸が乱れ、青ざめた表情。暁の内なる陽の気が暴れると体に相当負担がかかるのだ。もうあんな彼をみたいと思わない。怖いからじゃない。苦しむ彼が見たくない。だったら自分が今できること、まずは巫女としての力の使い方を思い出さなくては。もう迷わない。

鈴音は改めて巫女としての役割を果たそうと固く決意した。

「私、なんとかして思い出してみます。私が前世に巫女として力を使っていたなら自分にもできるはず。必ず思い出して、儀式を成功させてみせます。」

「美月も手伝う」

「私もよ。」

「アンタがやる気になったなら、俺だってできる限り手助けするぜ？」

「疾風さん、八重さん、美月ちゃん、ありがとうございます。」

「ああ。とりあえず今日はもう遅い。俺たちはまた来るから、アンタは曉の側にいてやってくれ。妻としてな。」

「はい。」

そう言つて疾風、八重、美月の三人は帰つて行つた。時刻はもう遅い。夕方だと思つていたがいろんなことが起き、いつの間にかすっかり真つ暗になつてしまつた。風が少し吹き始め、外の空気が少し寒く感じる。鈴音は屋敷内に入ると曉の様子を見に行つた。寢所で横になつてる曉は、先程の疲れか、少しぐったりしてるように見える。

今は静かに寢息をたてていて、鈴音は安堵した。額にうかんだ汗を拭つてやり、寝顔をじつと見つめた。この穏やかな顔が、蛇にも似たような形相に変わったのは驚いた。まだここにきて間もないが、自分は曉のことをほとんど知らない。昔の巫女だった時の記憶も思い出せない。曉は自分と会つのは前世の自分と合わせて二度目、それ以上かもしれないけど、自分は曉のことを何一つ覚えていない。知らない。

そつと、安らかに眠る曉の頬に触れる。滑らかな素肌に温かい体温を感じる。相変わらず端正な曉の顔にまじまじと見とれてしまう。人形みたいだと思ひながら眠りの妨げにならないよう、そつと立ち

上がろうとした時腕を掴まれた。

『行くな……。』

弱々しい、けれど耳に心地よい低い声がひびく。

鈴音は座りなおして暁に顔を近づけた。

「ごめんなさい。起こしちゃったね……。」

『謝るな……。謝らなくてはならないのは俺だ。』

暁が自分を『俺』と呼んでる。いつも上品に『私』と呼んでるのに、変な感じだ。

「どうして……？あなたは何も悪くない。」

『鈴音……。俺のあの姿みただろう……？恐ろしかったはずだ。すまない。』

「！そんなこと……。私巫女なのに何も出来なくて……ごめんなさい。疾風さんたちから全部聞いたの。私はまだ巫女として目覚めてないって。私、あなたのそばにいるだけでいいのかと思ってて……。」

『鈴音に何も話してなかった俺が悪いんだ。気にするな……。それに今は鈴音がそばにいてくれるだけでいい。』

鈴音の腕を掴む暁の手に少し力が入る。暁の瞳が寂しそうでなんだか怯えているように見える。先程の姿を恐れて、鈴音が自分のところからいなくなってしまうのを恐れているのだろうか。

「一人は嫌だ。心が真つ暗になる。」

鈴音はいつもと違い弱々しく話してくる。曉を安心させるように、手を握る。

「私はいなくなったりしない。大丈夫だよ。曉。私、今度は絶対いなくなったりしないんだから。」

その言葉に安堵してか、曉は微笑むと再び目を閉じて寝息をたて始めた。鈴音は曉に掴まれたままの腕をどうしようかと思っただが、無理矢理はずすのも可哀想な気がして、男性と共に寝るとするのは気はしかなかったが今夜は隣で眠らせてもらうことにした。そんな二人に月光が優しく降り注いでいた。

第七話 龍神の愛（前書き）

ジャンルを恋愛にしちゃったんですけど、全然発展しませんねえ…。
難しい。

第七話 龍神の愛

チユン……………チユン……………

穏やかな朝、小鳥のさえずりが聞こえ、ゆっくりと目を覚ます。隣には美しい顔立ちの青年が横たわっている。手を伸ばして彼の頬に触れると彼の体温が伝わってきて安心する。サラサラとその手を髪に移動させ、見たこともないものに触れるように悪戯していると彼がそつと目を開けた。

「おはよう?」

「おはよう。」

静かに挨拶を交わす。彼の髪をいじってた手をそつと離すと、その手を彼が握ってきた。

「俺の髪珍しい?」

「うん。髪の毛染めてないのに自毛で銀髪は見たことないよ。普通そんなに色抜いたら傷んでこんなにサラサラしないし。それにね、あなたの赤眼も不思議。宝石みたい。」

そう言つて好奇心旺盛な子供のように目をキラキラさせながら覗きこんでくる。そんな鈴音の顔を優しく両手で包み込むと、彼女のほんのり紅く色づいた小さな唇にそつと口づけた。軽く触れるだけの幼いキス。けれどそんなことされたのが初めてな鈴音は、彼が顔を離すと顔を真っ赤にしていた。「!?あ……………あ……………?」

突然キスされたことに恥ずかしがりながら暁を見つめる。頬を赤らめながらうるうるした瞳で見つめられ、彼は理性がとびそつになつた。

期待した以上に可愛い表情で見つめてくる鈴音を襲いたくなるが、彼女とはまだ出会つたばかり。

いくら自分が千年前に見初めた相手でも、当時の彼女と今の彼女は

全くの別人。

それに心が手に入らなければ意味がないのだ。

千年前は弥太に彼女の心を奪われ、今は巫女の生まれかわりだという理由で自分のところに嫁いできたにすぎないだろう。

どうやって自分を好いてもらうか、暁は悩んでいた。

欠けた陰の気を求めてか、巫女である彼女を昔から愛していた。

今だって性格や外見も違うが、鈴音を愛してやまない。

嫁いで間もない彼女には暁がそんなふうに関心を見ているなんて予想だにしないだろう。

だが、今朝自分に興味をもってか髪をいじってくる鈴音に少しでも好意を抱いてくれるのかと期待で胸が弾んだ。

自分に触ってくるくらいなのだから嫌い、ということはないだろう。そう思った矢先、可愛らしい表情で見つめられたのだからたまらない。しかしいきなり変なことをすれば嫌われてしまうに違いない。

今の自分の心の支えは彼女だけなのに。だからキスだけでやめとこうと思った。愛はじっくり育んでいくものである。

『全く鈴音は…可愛い顔をする。』

ナデナデと彼女の長い黒髪を撫でた。

「いきなりでびっくりした。」

そう言った鈴音の頬はまだほんのりと色づいている。

びっくりしたとは言ったがキスされたこと自体は嫌じゃなさそうだ。良かったと暁は安堵する。

これからゆっくりお互いのことを知って本当の夫婦として愛を育んでいければいい。半端な龍のために嫁いできた巫女、なんて関係は寂しすぎる。せっかく夫婦として沿い遂げるのだ。愛しあわなくては意味がない。それに暁はとにかくに彼女が好きなのである。巫女であるとかそうでないとか関係なしに好きなのだ。おかしな話だが会った時から、いや会う前から愛してるのだ。

『鈴音、今日は何がしたい？鈴音が見たいもの知りたいことがあったら何でも言ってくれ。』

「んー……じゃあ……私、今日は巫女の力の使い方を探しに行きたい。早く巫女として目覚めて、あなたを助けてたい。」

「曉はそう答えた彼女を愛しく思った。この少女は自分のために重い運命を受け入れて使命を果たそうとしてくれてるのだ。それだけで嬉しい。」

『わかった。どこかで調べるか。』

「私ね、中都国に行きたい。あそこは巫女発祥の地でしょう？何か巫女に関する書物が残ってると思うの。」

前に修斗が書物を呼んで知識を得ていたことを思い出した。輿入れの日にもらった手紙にもそう書いてあったのだ。曉は一瞬固まった。ずっと待ち望んだ彼女がまたあの国に戻りたいと言っている。自分のそばから離れていってしまう。

『……………』

「曉……？」

その時、外から声がした。

「おい、お前たち。いつまでイチャコラ寝てんだ。早く起きろよ。」

疾風の声だった。襖の向こうにいるのであろう疾風にそう言われてまだ曉と一緒に横になってたことを思い出す。急に恥ずかしくなつてガバツとはねおきた。「いつ今準備しますッ！！」慌てて着替えと寝起きで癖のついた髪を整える。曉はさつきから黙つたまま起き上がつて布団を片づけてる。身支度を整えると襖を開けて疾風に挨拶した。「お前たち寝過ぎ。昨日また来るつて言つただろ？」

「でもいきなり翌日にくるとは思つてませんでした。」

「巫女として早く目覚める必要があるんだよ。昨日ので充分分かつただろうが。」

「すみません。一応今日は中都国に巫女のこと調べに行きたいと思つてはいたんですけど……。」

「ああ……。なるほどな。中都国ね……確かに何かいい情報が手に入るかもな……………つてさつきから曉なに黙つてんだ……？」

暁が無表情のまま黙りこんでいる。なんとなく機嫌が悪いのは分かる。だがそれがなぜかは分からない。それに機嫌が悪いといつ暁の中の気が乱れて暴走するか分からないからそっちも心配だ。疾風はしばらく様子を伺いながら鈴音と話した。

「…鈴音…なんでアイツだんまりなんだ…？」

「私が中都国に行きたいって言ったら黙っちゃいました。」

疾風はすぐに納得した。だから機嫌が悪いのか、と。要するに自分から離れて欲しくないわけだ。ついていけばいいだけなのだが、暁はまだ不完全な龍である。危険と見なされるため、千年前のあの件以来外に出てはいけないのだ。だから鈴音と一緒に行けない。

「暁……、お前分かってると思うけど鈴音はお前のために行きたいって言ってるんだぞ？なに子供みたいに黙りこくってんだよ。お前がちよっと我慢して留守番して、鈴音と俺で中都国にちよっくら行って情報集めてくるからそれまで待つてろ。お前が儀式を受けて陰陽のバランスがとれる体になったらいくらだって鈴音を独占できるんだからよ。」

「……………」

ダメだったか…？疾風は疾風なりに暁の心が乱れぬよう説得したつもりだったのだが。

「……………」

鈴音は黙ったままの暁を見かねて暁に歩み寄るとギョツと抱き締めた。

「暁、ちゃんと戻ってくるから大丈夫。私はあなたを絶対ひとりにしないって決めたんだもの。」

「……………分かった。」

少し離れた疾風には聞こえるか聞こえないかの小さな声で答えた。まだ面白くなさそうな顔をしてるがさつきよりは納得してくれたみたいだ。疾風はため息をつきながら自分がハラハラしながら曉に話しかけたことを後悔した。というか今の一瞬でどつと疲れてしまった。お偉いさんのご機嫌とりみたいでちよつと疲れるが、曉のためだと自分にいい聞かせる。それより鈴音の行動の効果に驚いた。曉に抱きついただけでさつきより機嫌は悪くなっている。

巫女としての力のひとつなのか、ただ単に曉が鈴音を好いているからなのか、どちらも正しいのかもしれないが後者のほうが割合的には大きいと思う、と疾風は思った。

「そんじゃ鈴音は出かける準備してこい。俺は門のところで待ってるから。あ、曉はひとりじゃ退屈だろうから美月を呼んでおいた。もう少ししたらくるだろ。俺たちは情報収集行ってさつきと儀式済ませられるようにするから。じゃあ行ってくる。」

「……ああ。」

鈴音は簡単に身支度を整え、疾風がまつ屋敷の門へと向かった。廊下を早歩きで移動し、高床式に作られている屋敷からのびる階段を数段降りて真っ直ぐ歩いていくと疾風が待っていた。

疾風はいつか白銀が使った魔法陣のような円陣をつくりだすと、鈴音も何をすればいいのかわかっているのでそこに入った。

カッと眩く光ったと思うと次の瞬間には目の前によく知っている建物がたっていた。

こちらの世界でお世話になった修斗や神、霞乃がいる中都国の宮殿だ。ほとんど宮殿の部屋にいたので外観はよく見た時がなかった。見たとしても一度だけ。初めてここに連れてこられたあの日だけだ。でもあの時は状況が呑み込めなくてあたふたしてたし、初めて見るものばかりで他のものに気をとられていたの
でよくは見てなかった。

だから改めて見ると立派なものだと思った。するといつのまにか自

分たちの周りに人だかりができていて驚いた。ザワザワと中都国の人々が集まっては口々に話している。もしかしてここにいちや行けなかったのかな？よく状況が把握しきれっていない鈴音はそんなことしか考えられなかった。

「神だ……。」

「神が何故ここに…？」

「金の目だ」

「我々とは全然違うぞ…。」

「俺初めて見たぞ。」

この人だかりは隣にいる疾風が目的で集まったようだ。物珍しそうに、けれど己とは違うその姿を恐れてか、一定の距離を保ったままそれ以上は近付いて来ない。疾風は人間たちのその態度に呆れ顔である。

『ここでつつたつても仕方ない。とりあえず目の前にお偉いさんがいるんだ。行くぞ。』

「はい。」

疾風が数歩先を歩きはじめた。

鈴音もその後を追う。

中都国の人々の視線がこちら一点に集中していて痛い。

自分というよりかは疾風を見ているのだろうけれど。二人を取り囲む人々は疾風が歩きだすと道をザツと開けてくれた。開けてくれたという親切心ではなく、避けたに近いかもしれない。なんだか差別されたみたいで心が痛んだ。疾風は特に何も感じていないようである。人々が開けてできた道を寧ろ好都合というように堂々と歩いている。

そんな疾風が頼もしく見えた。周囲の人混みはいつこうに無くならず、野次馬が野次馬を呼んでどんどん増えてきているように見える。

宮殿の前に異常に集まった国民たちの様子に、とうとう宮殿の門番たちが中から出てきた。

「お前たち、ここで何を騒いでいる！用が無いものは去れ。」

怒鳴り声にも似た声が響く。そう一喝されて人混みの規模は少しづつ小さくなっていった。それでも無くならない人混みにとうとう彼が現れた。中都国皇子、修斗とその側近神である。

「何事だ。」

「はっ！それが何やら民たちが門前に集まっておりまして。」

「そんなことは分かっている。原因はなんだ。」

修斗が門番に問いただしている。しかし門番は二人には注意がいかなかったらしく国民が何故集まっていたのか分からない様子だ。

「疾風さん、あの人たちこの国の皇子修斗と側近の神さんです。」

『なに？そうなのか。ならアイツらに話しを聞くのが早いな。』

そう言っつつかつかと修斗たちのいる方に歩み寄る。それに気づいた門番、修斗、神たちは驚きで一瞬目を見開いた。藍色の髪に金の目、人間にはない異形の姿をもつ青年に目を奪われているようだ。

「おい…何故神がこの国に…？」

「分かりません…。」

ヒソヒソと修斗と神は話しあっている。

「おい、人間の皇子とお見受けする。今日は頼みがあってきた。巫女のことについて調べたいことがある。この国にある書物全て見せて欲しい。」

疾風の、彼にしてはいつもより丁寧なような(?)でも、誰に対してもどこか上から目線で話す話し方はやっぱり変わらない。鈴音は疾風に気をとられて自分に気づいていない二人の目の前にヒョッコと出た。

「鈴音ッ!？」

「鈴音さん!？」

修斗と神の声がほぼ同時に発せられた。

「えっと…五日ぶり?元気そうだね。あはは。」

何を言っついていいか分からずそんなことしか話せない。

「お前…なんでここに…もしかしてこっちは龍神曉様か!？」

修斗は慌て疾風を振り返る。

「違う。俺じゃない。俺はアイツの…そうだな。友人だ。」

「疾風さんっていうの。疾風さんがさっき言った通り、ちよっと調べたいことがあって来たんだけど、ダメ？」

「お前神をさん付けか。」

「だってそれで呼んでも怒らないもん。曉だって呼び捨てで呼んでくれって言ったから曉って呼んでるし。」

修斗と榊は目を丸くした。いくら嫁いだとはいえ最高神を呼び捨てにするとは。中都国ではいくら妻でも夫を呼び捨てにするなど有り得なかった。身分が高ければ高いほどそんな呼び方は出来なくなる。ただ鈴音は異世界からきた人間だから修斗は許していたし、鈴音が少し気になっていたのでそれで良かった。

「この五日間でどれだけ馴染んでんだお前は。」

「だって良い人ばかりだよ？曉は私にすごく優しいし、疾風さんもこうして私と一緒にきてくれるし、あと美月ちゃんと八重さんがいるけど、みんな可愛いし綺麗で良い人よ？」にこやかに思い出しながらそう話す鈴音を見て、修斗は安心すると同時に複雑だった。

予想以上に好意的で上手くやってるのは良いが、この国にいた時よりも余裕が出てきて穏やかな表情になっているのが気にくわない。

三週間いたこの国より、人間じゃない、誰も足を踏み入れたことのない神の国にたった五日しかいなかったのに、そっちにいた方が馴染みが早いことが気にくわなかった。見たこともない曉に対して敵対心が芽生える。皇子のその様子を察してか、気を使って榊が久々に皇子とお茶でもどうですかと鈴音に進めた。しかしそんな榊の気遣いも虚しく、疾風が一刻も早く調べたいことがあるからというから榊は仕方なく書庫へと案内した。書庫には膨大な量の書物が納められていた。

今は亡き先人たちが当時の出来事を書きためて大切に受け継いできたのだらう。

本は歴史を感じる。

その中から巫女に関するものを選んで調べることにしたが、巫女に関するものはかなりあった。

ざっと数えて千くらいはあるだろう。

これを読んで巫女として目覚めるヒントを探す。

もしくはその方法を見つける。

先は長いが頑張ろうと鈴音は気合いをいれた。

そうしてる間も疾風はもう読みはじめ仕事に入ってる。自分もやらなければと適当に選んで本を開けて落胆した。忘れていたが自分はこの世界の文字が読めない。修斗と神からの手紙も全くわからなくて霞乃に読んでもらったのだ。大事なことを忘れて、書物をもったまま固まっている鈴音に修斗が気づいた。

「どうした？」

「あ…字…読めなくて。」

「なんだそんなことか。というか読めないのになんで来たんだお前は。」

「ごめんなさい…。 暁を助けたくて。」

「龍神を助ける？ なにか困ってるのか。」

「うん…話せば長くなるけど。」

そう言つて鈴音はこれまでに起こったこと、暁の身が不完全であること、そして輿入れの本当の意味を話した。

「それは本当かッ!？」

「暁がそう言つてた。嘘じゃないよ。」

「…婆様は輿入れの本当の意味はご存じないだろうな。」

「だから私は暁を助けない。だけど巫女として目覚めてないから今のままじゃ暁を助けてあげられない。だから調べにきたの。」

真剣な眼差しでそう語る鈴音は本当に暁を助けないに違いない。それにこの話しを聞いたからには皇子として傍観してるわけにもいかなかった。

「わかった。俺たちも協力しよう。神、お前暇だろ？ 本読むの手伝え。」

「私にもいろいろ仕事があるんですけどね…。皇子がそう言うなら
そうしますけど。」
榊はしぶしぶ皇子の命令を聞いて本を読みはじめた。鈴音は字が読
めないので修斗に声にだして読んでもらった。それからしばらく書
庫の中で四人は黙々と巫女について調べた。本をめくる音と、修斗
の声だけが響いていた。

その頃暁は美月と遊んでいた。

疾風と鈴音が中都国へ出かけていった後、疾風が言ったとおり美月
がやってきたのだ。

しかし始めは二人で話していたのだが、美月が飽きたらしくごっこ
遊びをしたいと言ってきたのだ。

美月はわりとおませで大人びた発言をする時もあるが、まだまだ子
供。やはり遊びたい盛りなのである。ちなみに美月と暁の関係はと
いうと、暁がもともと疾風と八重を友人にもち、美月はもつと小さ
いころにひとりでいたところを八重に拾われたのだ。それから美月
は八重に連れられて暁のところに来るようになり、暁にとっては妹
のような存在になったのである。だから本当の妹のように思うし、
まだまだ幼いから可愛いとも思う。

だが遊びの相手をするのはあまり好きじゃなかった。

美月がよくやりたがるごっこ遊びの設定が嫌なのだ。

必ずと言っていいほど暁が悪役で、美月がヒロインを演じる設定な
のだ。

悪役を演じるのはいいがやられたふりばかりするのは飽きてしまっ
た。

もつとバリエーションがあるならいいのだが、美月は何故かこれし

かやりたがらない。

こだわりというやつである。

それが大人たちには分らない。

子供だけがわかる醍醐味というやつなのだろう。だから今日も曉はやられたふりをしてパタリと横に倒れている。美月はよく分からないうがひとりで決め台詞をしゃべっているようだ。中都国の人間が恐れ、同族の龍たちにも恐れられる最高神『曉』が子供にごっこ遊びで倒される役ばかりやらされているなど夢にも思わないだろう。

「曉様、次はなにやる」

次もあるのかとうんざりしながらも、可愛い妹のためなら付き合おうと思えた。

一方日も暮れはじめ、書庫で本を読みあさっていた四人にはさすがに疲れが出てきた。

「神もお疲れになるんですね。」

榊が疾風に言う。

「お前たちが勝手に神ってあがめてるだけだろう。俺たちはいつからお前たちの神になったんだ。ちよつと力が使えてちよつと外見が違うからって神なんて変だ。言つとくが俺たちもお前たち人間となんら変わらない。不死身でもなんでもない。ちゃんと寝て、食わないと生きられない。それにいつか死ぬ。龍だつて生き物だ。」

「そうですね。これまでお互いなんの干渉もしてませんでしたからね。全く知りませんでした。参考になります。」

「そういえば鈴音、最高神曉様はどうしてるんだ？」

「え…今はお留守番。多分美月ちゃんと一緒にいると思う。」

「……本当に俺たちと変わらないんだな。人間的だ。」

「うん。だからね、人間と龍はこれから仲良くしていけるんじゃないかと思うんだけど。」

「まあ……そういう日がいつかくるかも……な。」

修斗は自信なさげに答える。鈴音としてはそうになったら素敵なことだと思った。「そろそろ日も暮れてきたな。鈴音、帰るか。」

「はい。」

「え？日帰り？」

「暁がさびしがってるだろうからな。明日またくる。」

「修斗、榊さん、明日またきてもいいですか？」

「ああ。構わない。」

「ありがとう。じゃあ明日。」そう挨拶を交すと疾風と鈴音は光に包まれて消えてしまった。修斗と榊はあっけにとられた。神業とも呼べる現象を初めて間のあたりにしたのだから。

「あんな術が使えてよく神じゃないなんて言えるよな。ただの生き物とは違うだろ。」

「そうですね……。」

「それに慣れてる鈴音もだんだん人間離れしてくんじゃないか……？」

二人はなんとも言えない空気がただよう書庫で、しばらく沈黙した。

眩い光が消えて目を開けると赤を基調とした屋敷の門の前にいた。帰ってきたのだ。すると屋敷内から誰か出てきた。誰かなんてすぐ分かる。曉だった。

『鈴音ッ！戻ったか。』

「ただいま。あかつ…」

名前を呼び終える前にきつく抱き締められて言葉を遮られてしまった。

『帰ってきた。良かった。鈴音…』

「ちゃんと帰ってくるって言ったよ私は。」

「あのさ…悪いんだけど俺がいるんだからもう少し気をつかいたまえ君達。」

疾風がひやかし半分と言う。

当然鈴音は曉からはなれようとするが、曉は彼女の腰をガッチリつかんで離す気ゼロって感じなわけで。

「…まあいいや。曉、今日は良い情報は手に入らなかったぜ？中 đềuには一応書物だけは大量に残ってるからこれから毎日中都国に行こうと思う。そこで書物を読みあさっても特に有力情報が手に入らなかったらまた別に探してみる。」

呆れた声でとりあえず今日の報告をする。『……………明日も鈴音はいないのか。』

声のトーンを下げてうつむく曉を見て初めて会ったときからなんとなく犬みたいだな、と鈴音は思っていた。がっかりする時は哀れなくらいしょぼんとするし、嬉しい時は満面の笑みを向けてきて自分に対するスキンシップも大胆になる。見た目は立派な大人なのになんだか子供みたいだ。大きな子供だな、とクスリと笑う。

「明日も私は中都国に行くけど、ちゃんと夜は戻ってくるから。」

「ん。そつだ鈴音、疲れただらう？俺と寝よう。」
「そつ言つて強引にグイグイ引つ張られる。」

「ちよつ…ちよつと待つて…！私今日は一人で寝たい。」
「だつて恥ずかしいから。と続けようとしたら唇を強引に奪われた。」

「！…んツ…んん…！！」

舌が唇を割つて入り込んでくる。口内を探るように舌が動く変な感覚に涙が出る。唇が離されても呼吸ができなかつた苦しさに息があがつてしまつ。

「ハア…ハア……………あ…かつき？何して…。」

「嫌だ。夜まで一人は嫌だ。」

後ろから溜め息が聞こえてくる。疾風のものだらう。

「全くお前は。美月がいただらうが。鈴音、悪いけど曉と一緒に寝るくらいしてやつてくれ。そいつアンタのこと昔つから溺愛してんだよ。」

疾風にまでそつお願いされては仕方がない。それに曉が自分を離してくれそつにもなかつたし、一緒に寝ることにした。

疾風はまた明日くると言い残すと一瞬にして消えてしまつた。自分もできたらどんなに便利だらうと思つた。その夜、曉と鈴音は昨夜のように身を寄せあつて眠りについた。幾千もの星がまたたき、安らかな静寂があたりを包んでいた。

第八話 睦言

ピチャン……………

遠くで水の音がする…

静かに滴が落ちて広がっていく音……………耳を澄ますと…

…誰かの……………鳴き叫ぶ声がきこえる……………誰？……………そこ
で泣いてるのは……………

……………その声を聞くと……………胸が苦しい……………

お願いだから……………泣かないで……………

「お願い……だから……」

そっと目を開ける。

『鈴音……？どうした？』 暁が心配そうにのぞきこんでくる。

「え……………」
頬を涙が伝っている。私なんてた？

『怖い夢でも見たか？』

彼が頭を優しく撫でてくれる。あたたかくて大きな手。外はまだ星がまたたいている。

私は起き上がって今みた夢を彼に話す。

「夢を見たの……。誰かが鳴き叫んでいる夢。私知ってる人だと思う。その人が泣いてると胸がしめつけられて……苦しくて……」

……………よく分からないけど……………」

暁は私を抱き締めて目尻にキスしてきた。涙を拭うように。

「……っ……………くすぐりたいよ……………暁……………ん……………」

今度は唇を唇で塞がれた。

軽く何度か触れ、息をつごと少し口を開けた瞬間に彼の舌が入り込んできた。

舌が口内を探ったり、舌に吸い付いたりしてきて体が熱くなってくる。昨日の強引にするようなキスじゃなくて、もつと優しくでも濃厚に。それがしばらく続いてやっと唇が離れた時にはキスだけで疲れってしまったてクツタリと彼の胸に寄りかかった。彼の胸に耳を当てるとトクントクンと心音が聞こえてくる。その音が伝わってきて安心する。

『鈴音：？眠ってしまったのか？』

小声で聞いてくる。私が本当に眠っていたら大きな声で起こしてしまったら悪いと思ったのだろう。彼のその優しさが嬉しかった。

「うん。寝てないよ」

ヒソヒソ話をするように小声で囁いた。静寂な夜には大きな声で話すのは似合わないから。

「曉：私ね、今まで何度もあなたに会う夢見てきたの。逢いたかったって言ってくれてね、でも顔は見えなかった。それでね、今見た夢も曉に関係することなのかなって思って。違うかな……………」
違うよねきつと。でも…今の夢で龍泉のこと思いだしたの。龍泉ってね、千年前に曉が泣いた時にできた泉なの。でも涙は止まらなくて…悲しくて…泉は溢れて今は川となって流れてるって話私その川に落ちてこの世界にきたんだよ？」

『龍泉か…。鈴音のもといた世界ではそう言われてるんだな。』

「うん。でも曉の流した涙が泉になったって話本当？」

『…いや、泉にはなっていない。そんな綺麗なものじゃなかった。』

「じゃあ違うものになったの？」

『流れたのは涙だけじゃない。血もだ。』

「血……………」

千年前に暁をとめようとして死んでいった龍たち、暁に殺された人たち。そして怪我をおった暁の血なのだろうか。きつと血生臭い戦いになったに違いない。

『血と混ざりあった涙などそんな綺麗なものじゃない…泥沼のように濁ってひどかったものだ。何故鈴音が千年前の話を昔話として聞いていたのかは分からない。だが、龍泉はそんなに綺麗なものじゃなくて血だまりだ』

そんなに酷かったんだ。まるで戦争のような出来事だったのだろう。鈴音は何も言えなくなった。なんて言葉をかけらいいか分からない。

『……暗くなってしまったな。もうこの話はやめてそろそろ寝ようか。朝までまだある。』「うん…。でも大事な話だし、巫女として知っとかないといけないと思って…。」

ギユウと子供が母親に甘えるように暁にしがみつく。いつからだろう。会って間もない彼を愛しく思うようになったのは。初めて会った時はただ使命感しか沸かなかつたのに。自分が今ここにいるのは、この人のためなのだ。彼の陽の気が暴走しないようにバランスを保つために自分がいるのだと。それだけだった。

でも、彼と触れ合ううちに、何故この優しい人がこんな過酷な運命に合っているのだろうと思い始めた。

同族の龍から一人離れたところに住み、いつまた自分が暴走するのではないかという不安にかられ生きていく。

ずっと次の巫女が生まれてくるのを一人で待ち、自分を完全な龍にしてくれることを期待しながら。

そしてやっと出会った自分を心から喜び、大切にし、愛してくれる彼。

龍神なだけあつて話し方が大人っぽいというか神様らしいと思つていたが、本当はすごく子供っぽくて、本当の彼を知るたびにもっと知りたいと思うようになった。初めてキスされた時も、驚いたが嫌とは思わなかった。寧ろときめいてしまった。もう、ただ使命感だけで彼のそばにいたいとは思わない。今は彼が好きだから一緒にいたい。

力になりたい。

「…曉…」

『ん？』

彼は自分にしがみついてくる鈴音の背中を優しく抱きながら、もう片方の手で頭を撫でてきてくれる。

「……………すき…」

彼が頭を撫でていた手を止める。鈴音は彼に抱きついたらまま。

『鈴音……本当に？』

信じられないという気持ちと、喜びの気持ちがない混ぜになって思わず聞き返す。

「うん」

鈴音が彼の胸に顔を埋めながら答えるので、吐息が胸にかかってあたたかい。

『本当に？』

嬉しいのになかなか信じられなくてもう一度聞き返してしまう。鈴音は彼の胸から顔を離すと面と向かって答えた。

「本当だよ…。暁が好き。そうじゃなきゃ抱きついたり一緒に寝たりしないし、嫌いだったらキスされた時にとっくにひっぱたいてるってば。」

なかなか信じない暁に少し機嫌を悪くしながら言う。暁にはそのムスツとした表情も可愛らしく見える。彼女は怒ってるのに暁は表情がゆるんでしまう。

『怒るな鈴音。私も愛してる』

「なによ。急に一人称、私なんて変えちゃってさ」

『鈴音の告白に対する敬意を込めたんだが。』

機嫌を悪くして体を翻し自分から離れようとする鈴音を後ろから抱きとめるが、鈴音はその腕からなんとか逃れようとした。たし始めた。暁はその動きを封じようとしてとっさに鈴音の白い首筋に舌を這わせた。ビクンと鈴音の体が跳ねて、暴れていた動きが一瞬だけとまる。

「…暁のエツチツッ!!!」

鈴音の羞恥心と怒気をふくんだ声が部屋中に響くと同時にまた暴れ出す。だが、いくら鈴音が暴れたところで暁の力にはかなわないのだが。暁は暴れる鈴音を抱いてその動きを封じると、首筋に顔を埋めて再び舌を這わせた。今度はねっとり味わうように。

「あつ……やだあ……」

舌が首筋を這うたびにぞくぞくとして力が入らない。それをいいことに曉は舌を這わせながら口づけた。

「……っ！……ダメえ……」

涙が出る。生理的な涙だ。その様子を見て鈴音が嫌がってると思ったのだらう、曉が舌を這わすのをやめる。

『すまない……』

「曉の馬鹿……」

力が抜けたように弱々しく答える鈴音を優しく抱き締めると、今度こそ寝ようかと言って鈴音を寝かせる。そしてその隣に自分も横になる。涙が滲む鈴音の瞳にキスするともうしないからと言って目を閉じた。鈴音は小声でもう気にしないとと言うと曉にすり寄るようにして眠りについた。逆に曉はそう言われ目が冴えてしまいしばらく寝つけなかった。

第九話 玉と巫女

鈴音が巫女として目覚めるために中都国で情報収集しはじめて十日目。鈴音、疾風の二人は中都国の書庫にいた。

「……………」

「……………」

疾風は黙々と本を読みあさり、鈴音はその様子を見守っている。

今日は脩斗と榊はいない。

二人は中都国全土の町や村の税の見直しをしなくてはならないらしく疾風と二人なのだ。

今日は字を読んでくれる脩斗も榊もいないので、ただぼんやりと疾風を見つめているだけだった。

疾風に少しでいいから読んで欲しいと頼んだが、いちいちそんなこととしていたら時間がかかると言っただけだった。ケチ、と心の中で文句を言う。何もすることがなくて、とりあえず近くにあった本を手にとってみる。パラパラと適当にめくってみるがどのページも全く読めそうになかった。ハアと溜め息をつく。

「字の勉強でもしようかな…」

「……………」

ボソリと呟いてみるが、疾風は聞こえてないのか何の反応も示さない。

こんな時暁がいたらな、と考える。

彼なら字を読んでくれそうだし、字を覚えたいと言ったら教えてく

れそつだ。

でも彼は天龍国から出てはいけないことになっているから、無理な話だった。私今日何もすることない……。ただぼーっとしてるだけは退屈で嫌なので、なにかないかとあさり始めた。すると奥から巻物が出てきた。墨で描かれただけの簡素な絵だったが、何かの場面の一部らしい。ところどころに説明書きだろうか、文字が入っている。クルクルと回しながら巻物を開いていくと龍の絵が出てきた。

空に龍が何匹も描かれ、下にはたくさん人間たちが描かれている。人間たちのポーズは様々で、空をとぶ龍に向かって祈っている者、離れたところには田畑をたがやす者がいた。

おそらくこの国の昔の姿なのだろうと思いつながら絵巻物を開いていく。

字は読めなくても絵なら分かる。

鈴音はやつと自分一人でもできることを見つけて、隅々まで絵をみ続けた。

絵巻物を開いて進めていくと、あきらかに他の人間とは違う女性が現れ始めた。

身なりの良い、長い髪を後ろに束ねた女性だ。彼女は円の中に星のようなものを描いた中において、何かを行っているようだ。よく見ると彼女は手に珠をもち、その周りにはたくさんの人で囲まれていた。

きつとこの人が巫女で、何かの儀式の最中なのだろう。これは大発見だと思い、疾風に声をかけて彼に見せる。

「見て疾風さん！奥からこんな絵巻物がでてきたんです。ここに来てくる女の人って多分巫女だと思うんですけど、なにか手掛りになりませんかね」

「見せてみる」

鈴音から奪うように絵巻物をもつと、開いて文字も読み始めた。疾風はそれを真剣な表情で見ている。疾風の横顔と絵巻物を交互に見ながら疾風の言葉を待つ。

「!...これは...」

「何か分かったんですか!？」

「ここ見てみる」

疾風が指さす場所を見ると、黒い丸が描かれていた。

「これが何か...？」

ただの黒丸にしか見えないが。

「これは玉の絵だ。かなり簡略化されてるが」

「ぎょく?」

「ここに描かれてる巫女の手見てみる。なにか持ってるだろ？」

「はい。さつき何だろうとは思いました」

「これは巫女が神事をする時に使うのと同時に、巫女の力を具現化するためにあるらしい。ここにそう書いてある」

「!じゃあこれがあれば巫女として力を使うことができるってことですよね!」

「ああ、そうみたいだ。やっと巫女に関する有力な情報を手に入れた。鈴音よく見つけたな。これが見付からなかったらいつまでこうして本を読みあさってたことか」

「他の本の内容はどんなのだったんですか？」

「巫女が関わった出来事が中心。何月何日にあれをやっただけの、これをやっただけのそういうのばかり。歴史書というか日記調のものが多かった」

「そうだったんですか。じゃあその玉はどこにあるんですか？」

「祠だ。祠に納められてるとある。巫女が現れた時にだけ巫女が持つとされてるみたいだ。」

「祠…。霞乃さんは知ってるかな…その場所」

「霞乃…？」

「この世界にきた時巫女のことを教えてくれた御婆さんです」

「ならその霞乃に聞いてみるか」

「はい」

二人は絵巻物をもって霞乃の元へとむかった。鈴音は三週間中都国にいたから、霞乃の部屋はすぐに分かるのだ。鈴音は部屋から一歩も出させてはもらえなかったが、霞乃の部屋には少しだけ遊びにいったことがある。巫女のこと詳しい唯一の人物なので許されたのだ。疾風を霞乃の部屋まで案内し、声をかける。

「霞乃さん、私です。鈴音です。お久しぶりです。少しお話があるんですけどいいですか？」

「鈴音さん？ええ、どうぞ」

落ち着いた声の中から聞こえてくる。疾風に目で合図すると、疾風はうなずいた。そして鈴音は戸を開ける。広すぎず狭すぎの広さの和室の中央に久々にみる霞乃の姿がそこにあった。

久々に見る霞乃の姿に懐かしさがこみあげてくる。最近ずっと中都国にきていたのに、書庫にこもりっぱなしで霞乃と会うことは無かったから。自分を輿入れに出す時、まるで母親のように婚禮の衣装に身を包んだ自分を笑顔で綺麗だと言ってくれた霞乃。

それ以来の再会だった。なんだかんだ言って本当のお婆ちゃんのように接してくれる霞乃は好きだった。祖母のいない鈴音にとっては、自分のお婆ちゃんがこんな人だったらいいと思えるほどだった。「お久しぶりです。霞乃さん」

「鈴音さんも。そちらはもしかして…神…では？」

「はい。えーと疾風さんです。天龍国でお世話になっていて。曉の友達なんです。実は今巫女が神事に使う玉のことを調べていて、一緒にきてもらってるんです。」

「わけあってその玉が必要なんだ。鈴音は巫女として力を使う必要がある」

霞乃は少し考えこむと、何かを思い出したように顔をあげた。

「神が仰っているのは巫女の力を具現化するという玉のことですね。あれはこの宮殿から北の方、憑河山の奥に納められています」

「憑河山か…。よし鈴音、すぐいくぞ」

疾風がせわしく煽りたてる。

「はい！」

鈴音はあわてて返事した。そんな二人を霞乃が制した。

「お待ちなさい。あの山は危険です。二人で行くには危険すぎます」

「俺は龍だ。そんな山くらいどうってことない。危ないって言うなら鈴音はここで待たせて俺一人で取りに行く」

「それは出来ません。玉は人を選びます。巫女である者以外台座から抜き取ることはおろか、触れることも出来ません。それから憑河山は大変霧が濃く、年中晴れないので大変危険なのです」

「じゃあ今まで巫女たちはどうやって玉をとりに行ったんだ」

「それまでは憑河山には霧などなく、桜が咲き乱れる美しい山だったと言われます。ただ、千年前龍神様がお怒りになられてからは地形が変化し、憑河山も今では霧が晴れぬ不気味な山になってしまったのです。それにこれまで巫女は現れなかったので祠は無事なのか定かではありません」

霞乃の声が静かに響いて静寂が広がる。

「…でもっ…、私は行きます。巫女として」

「鈴音さん…。どうい理由があるのかは分かりませんが、あなたが巫女として目覚めたいと思ってくれるのは嬉しいです。けれどやはりあの山は危険です。一度入って戻れた者は過去に誰もいませんでしたから」

「それでも行きます！私はやらなきゃならないことがあるんです！」

疾風はそう言い切った鈴音の瞳に決して揺るがない決意が感じられて好ましく思った。鈴音なら本当にやれそうな気がする、暁を救ってやれるかもしれない。ならば自分は鈴音のサポート役にまわるだけだ。疾風は鈴音の肩にポンと手をおくと前に歩みでて言った。

「俺たちは本気だ。それに巫女さん本人がこう言ってるんだから玉は巫女の手にあるべきだ。俺はあんたたちが言う神ほどでは無いが、人間よりは鈴音の役にたつだろう。なにせ龍だからな。術くらいいろいろ使えるさ」

「疾風さんありがとう！」

鈴音が満面の笑みを疾風に向ける。疾風はフツと静かに微笑みかえした。

「…確かに…神がついているのならまだ安心ですね…。では、まだ霧がないころの憑河山の地図をお渡しします。どうかあなた方の無事をお祈りいたします」

霞乃はすぐに地図を用意してくれた。地図を見ると、そんなに難し

そんなルートには見えなかったが、霞乃は心配そうな顔をするので、鈴音は安心させるように笑顔で必ず戻りますと約束した。こうして玉のありかをつかんだ鈴音と疾風は、今日はもう遅いので霞乃に別れの挨拶をすると天龍国へと戻った。天龍国へ戻ると曉が屋敷からでてきてきつく抱擁してきた。いつものことだが、抱き締められて次に発せられる言葉は

「寂しかった」であった。毎日会っているのではないかと思うが、曉は本当に寂しそうな表情をしてるので、オーバーだなあと思いつつ抱き締めてあげるのである。そうすると彼はとても喜ぶから。そんな二人を横目に見ながら疾風が溜め息をついている。これもいつものことである。そしていつものように疾風がその日の報告をする。「曉、そういうわけであれば明日晴れば憑河山に向かうことにする」

『危険だな…。鈴音をそんな場所に行かせるなんて』

「…俺を信じるよ」

疾風が不満そうな顔をする。だから鈴音をひとりで行かせるわけじゃないと言っているのに。

『別に疾風を信じていないわけじゃない。ただ鈴音が心配なんだ』

そう言っつて鈴音を抱き寄せると髪をすくように頭を撫でてくる。鈴音はどうせ曉は離してくれないだろうからそのままされるがままになっつていた。それに頭を撫でられるのは気持ち良かった。美容師さんに頭をいじられていると気持ち良くて眠くなる現象に似ている。

『疾風を信じてないわけじゃないが二人じゃ危険だろう…。白銀もつれていけ』

「はぁ…分かった」

腑に落ちないが確かに二人よりは三人のほうが何かと心強いだろうから、そうすることにした。それに、白銀はあまりみた時はないが冷静だし有能そうな雰囲気をかもしだしていたから役にはたつだろう、と疾風は思った。

「そういうわけだから、鈴音はゆっくり休んでおけよ？」

「はい。また明日頑張りましょう。疾風さん」

手を振ると疾風は後ろ向きのままヒラヒラと手をふって消えた。疾風がいなくなったのを確認すると、とりあえず二人は屋敷内に入った。

「暁、もうすぐだから待っててね？玉を手に入れて私が巫女として力を使えるようになったら、あなたを助けてあげられる」

『すまない鈴音。俺が外に出てはいけないばかりに鈴音にだけ負担をかけているな』

「ううん。そんなことないよ。疾風さんいるし、脩斗にも榊さんにも霞乃さんにも皆に助けてもらってるもの」

『そうだな。八重にも美月にも助けられている。感謝しなくては。でももし憑河山で何かあったら必ず助けに行く。決まりより鈴音のほうがずっと大事だ』

頬があつくなる。曉はいつもそういうことばかり言うから。

それに寢所ではもっと愛の言葉を囁きながら接触してくるからドキドキして眠れないのだ。

「ありがと。でも大丈夫だよ私は。じゃ、明日も出かけるから早めに寝るね。おやすみなさい」

そう言つて布団にもぐりこむと目を閉じた。曉が自分になにかしてくる前に寝なくてはと思った。鈴音が寝るといふと曉も決まつて布団に潜りこんできてスキンシップをとろうとするから。ところが今日は曉が布団に入つてこない。いや、期待してたわけではないが、変に思えたから。

薄目を開けて周りを見てみる。

障子戸は開いていて、曉は縁側に立つて月を見ているようだ。

銀髪に赤い水干をまとつたの青年は、月光に照らされて幻想的なオーラが漂わせていた。月光が髪を透き通つてキラキラと光っているようだ。鈴音は絵になるなあと声に出さずに静かに曉を見た。しばらくそうしていると曉がこちらに気づいたのか頭をこちらに向けた。慌て目を閉じて寝たフリをする。曉はクスリと笑つと戸を閉めて布団の中に入ってきた。温かい体温を隣に感じた。曉の手がのびてきて鈴音の手を掴んだ。

『俺を見てただらう？』

「……………」

鈴音はあくまで寝たフリを貫きとおす。曉は掴んだ手を口元へ運ぶ

とそこへキスした。鈴音の手がビクツとし、思わず手を引っ込めようとしてしまった。クスクスと笑い声が聞こえてくる。

『やっぱり寝ていなかったな。』

鈴音は演技が下手だな』

「……………だつて暁が卑怯なことするから…手にキスするなんて」

『夫婦ならこれくらい普通だ。鈴音は奥手なんだな』

クスクス笑いながら抱き締めてくる。優しい抱擁だった。

「暁ってスキンシップ好きだよな」

『すきんしっぷ…。触れ合うことか？』

「うん。そう」

『それはそうだ。鈴音を愛してるから』

額にキスをおとす。彼に愛されてるといふ実感がわいて幸せな気持ちになる。鈴音も彼にキスをした。唇をはなすと彼は満足そうな顔をしている。

「そんなに嬉しい？」

『鈴音からしてくれたのは初めてだ』

「そうだったけ？」

『ああ』

「ねえ、さつき月見てたでしょ？いつもみたいにくすぐり入って来ないから何してるのかと思った」

『…ということは鈴音は俺が布団に入ってくるのを期待してたわけだ』

彼がニヤリと笑う。意地の悪い表情をうかべているが、曉がするとさわやかに見えた。

「べつ別に期待してたわけじゃ……！！寝ないのかなと思って……！」

曉がクスクス笑う。笑った顔を見て相変わらず綺麗な顔だなあと鈴音は思う。肌は綺麗だし、睫毛は長いし男なのにうらやましいと思つた。女として負けた気がした。

「笑わないでよ。私明日早めに起きるからもう寝るね。おやすみ」

『あつ、待て鈴音』

「？」

『明日憑河山に登るのだろうか？一応疾風と白銀がついてくが心配なんだ。俺が行ってやれないのが残念だが、変わりにこれを持っていてくれ。お守りだ』

暁はなにやら小さな赤い石のついた首飾りを取り出した。金のリングの中に赤い石がひとつ垂れ下がっているもので、シンプルだが高価そうに見えた。

「綺麗：ありがとう暁」

暁が肌身離さずもっていると言っているので、鈴音はさっそくそれを首に下げて、着物の中にしまった。

「これでいい？」

『ああ』

「何で出来てるの？石か何か？」

『違う。俺の鱗の一部』

はい？暁の鱗の一部：？意味がわからない、と鈴音は頭に？マークをたくさんつけている。

『これは俺の、龍の姿の時の一部』

「あ、そうだった。暁って龍なんだよね」

『忘れてたのか？』

「だって龍になってくれないし、曉すぐく人間くさいから忘れちゃうよ。今度見せて？龍姿。私、龍見るの初めてだし！」

『いつでも。見たい時に見せてやる。鈴音の望むままに。』

「やった！約束だからね！」

自分の龍姿を見たいなんて言うのは鈴音くらいだろう、と曉は思った。

紅い龍、すなわち己は他の者からすれば思い出さたくない過去の一部に過ぎない。

だから、普段は人間の姿をとる。

自分がいつもこの姿の理由を知ったら鈴音は悲しむだろうか。

そうだったらいいと心から思ってしまう。

鈴音が自分のために心を痛める姿はつらいが、それはつまり鈴音が己を愛してくれているということなのだから。世界を敵にまわしても、鈴音だけは守りたい。彼女さえいてくれれば他は何もいらぬ。自分はこんなにも彼女が愛しくて仕方ないのだ。それを彼女は分かってくれるだろうか。分かって欲しい。そう思うと鈴音に触れずにはいられなくなるのだ。

「曉？」

急に黙りこんでしまった曉が心配になり、頬をつついてみる。眠っちゃったのかな？なら仕方ないよね。私も寝ようつと、と右向きに横になっていた体を仰向けになおす。が、グリーンと横向きに向きなおされた。それと同時に唇を塞がれた。とっさのことに体を固くす

るが、唇をわって入ってきた舌が口内をおかしはじめると力が抜けていく。

「ん……っは……んん！」

クチュクチュと唾液が混ざりあう音がして、ほてった身体がとろけてしまいそうだ。

唇をはなすとハアハアとお互いに荒い呼吸になる。

暁は今まで自分にキス以上のことはした時がない。

濃厚なキスを含め、抱き締めたり、首筋にキスマークを作るくらい
のことはしてきたが、それ以上の男女の営みはしてこなかった。

鈴音としてはきつと自分を大切にしてくれているんだろつという都合の良い解釈をしている。だが果たしてそうなのかと言われると彼に直接聞いてないからわからない。それともそれ以上のことをしたいと思う欲望がわからないのか、そもそも龍にはそんな欲求はないのかこの中のどれかではあるだろう。願わくば最初の答えであって欲しいものだと思った。

『鈴音…愛してる…』

彼の艶っぽい声にドキツとする。こんなに心臓がバクバクしては眠れないではないか。

『鈴音…抱きたい』

「へ…！？」

ど…どっしりっしょっしっしょっ！…いきなりきたあゝ…！！…？？

まさかの展開にパニックになる。自分が変なことを考えたから曉が察したのだろうか。わからない。わからないがとにかく今日はダメだ。ダメ！と言おうとした時…

『今夜じゃなくていい。ただ、いつか本当にそうなれたらいいと思っただけなんだ』

安心したような少し残念なような…？いやいや期待はしてないのだが。

『また話しを続けてしまったな。寝ようか』

「う…うん」

『おやすみ鈴音』

「おやすみなさい曉」

鈴音はまだおさまらない心臓の音が鬱陶しく感じて、落ち着いて眠るまで時間がかかった。かたや隣ではスースーと安らかな吐息が聞こえてくるから憎い。そもそも曉があんなこと言うからいけないのに。心の中でたっぷりと文句を言っているうちに睡魔に襲われた。明日は憑河山に登って玉を手に入れる。それを決意して、鈴音は深い闇へと落ちていった。

第十話 憑河山（前書き）

こんにちは。一週間ぶりに更新です。つたない文章ですが読んでいただけると幸いです！そしてご感想下さった方々、ありがとうございます！
います（*^^*） 本当に作者の励みになります。これからもうぞよろしくお願いします。

第十話 憑河山

深い白い霧がたちこめる。晴れることのない、深い霧。鈴音、疾風、白銀の三人は憑河山の麓にきていた。

「ここから見ると空まで真っ白ですねえ……」

「本当にすごいな……。こんな山あるんだな。ま、ここでつつたつても仕方ないしさつさと行って帰るぞ」

「はい」

三人は山を登りはじめた。祠までの距離はそんなに遠くはないと霞乃から教えてもらっていた。女性である巫女がとりにいくのだからそんなに高い場所にはないのだろうと思った。

それでも体力をできるだけ消耗しないよう三人は必要以上には会話せず、黙々と山を登って行った。疾風を先頭に、鈴音、白銀と並んで登って行く。登ってみるとわりと緩い傾斜が続いていて、さほど疲れないだろうと思っていたがそんなこともなかった。緩い傾斜ほどじわりじわりと疲れがたまっていくものはない。

登りはじめて小一時間くらいたっただろうか。

鈴音は早くも疲れが見えはじめて、呼吸が早くなってきた。

先頭の疾風も後ろの白銀も歩のスピードは相変わらずで疲れている様子もない。最近運動を全くしていなかったためか鈴音には少々辛い。

そういえば疾風と霞乃に巫女の話聞きにいったとき、疾風は憑河

山をそんな山どつてことないと言っていたのを思い出した。それにひとりで行けると自信満々に答えていたし。それは危険な山でも恐れないということと、体力的な意味もあったのだろうと思った。ふと疾風が歩を進めるのを止めた。鈴音は足元をみて歩いていたのでそれに気づかず疾風にぶつかってしまった。

「いたっ……。どうしたんですか？」

「いや？ただ周りを見渡してただけだ」

「どこ見ても同じですよ。真っ白ですもん」

「霞乃のばあさんが昔は桜が咲き乱れる美しい山だったっつうから、桜があるのかと思ってな」

「あ、確かに。木はたくさんあるんですけど、桜はないですね。一応今は春……。なんですよね？」

「ああ。だから正確にはこの真っ白いのは霧じゃなくて霞だ。」

「へえ……。そうなんだあ」

「ああ。よく春霞っていうだろ？昔はよく同じものなのに季節によつては名前を変えたんだ。面倒だよな。ところでさっきから黙ってるお前、なんかしゃべれよ」

そういえば白銀は出発の時から何も話していない。

もともと口数は少ないのだろうが、何も話してくれないとこちらが気まずい空気になる。

「何をしゃべればよろしいですか？」

「あゝ…そんな堅苦しい話方しないでいいって。せつかくの登山だ
しもつと気楽にいこうぜ？景色悪いし別に遊びにきたわけじゃねえ
けどよ」

「そうですね。なんか緊張しながら行くのもなんですし、リラック
スして行きましようよ」

「はあ…。しかしもともとがこうですので」

「んゝ分かった。無理に話さなくてもいいけど、何かあったら言っ
てね？」

「お前が言うセリフか？」

疾風がクツと笑う。

「しかし…なんとかならないもんかなあ…これ。どこみても真っ白
で飽きる」

「どうやってたら消えるんですかね…」

「暁が暴れたせいだつてばあさん言ってたが、それ本当だったらす
げえなアイツ。気候を変えたつてことだろ？…ある意味神だな」

なぜか笑ってる疾風に、白銀が初めて意見を言った。

「なんとなく山が晴れぬのは、何かを隠しているように見えますね」

「何かって何を？」

「分かりませんが、この山には今私たちが取りに行こうとしている玉があります。玉は貴重ゆえ、山が隠しているのではないかと思いましたが。ただの想像ですが」

なるほど言われてみればそういうふうにも見える。

山全体を真っ白に染めてしまっほどの霞はよく考えればおかし。

「ま、いろいろ考えられるよな。でもここで謎ときしても仕方ないことだし、いくか」

「はい」

「そうですね」

疾風を先頭に三人はまた歩きはじめた。鈴音は足元の枯れ葉や小枝でうめつくされてる大地をパキパキと踏み鳴らしながら歩いた。一体今はどこらへんにいるのだろう。

まだそんなに奥までは入ってきてないと思うが、景色がどこを見ても同じなので位置も方角も全く分からない。ただ先頭にいる疾風の背中についていってるだけだ。鈴音はあたりをキョロキョロと見渡しながら歩いた。これと言って意味はないが、何かないかと探してしまう。草花も動物も何もなさそうなの場所は、霞乃が言っていた所よりもずっとずっと寂しいところに見えた。

そのうち歩いていくと、チラツと遠くに洞穴のようなものが見えた。思わず足を止める。後ろから白銀にどうかされましたかと聞かれる。それに気づいた疾風も足を止めてふりかえる。

「なんだあ？どうした。鈴音」

「今、あっちの方向になにか洞穴みたいなのが見えたんです」

「洞穴？……………。何も見えないぞ」

「でも見えたんです」

鈴音は洞穴が見えたと思われる方向一点を見つめながらそう答えた。

「行ってみるか…？」

鈴音がずっとそちらから視線をそらさないので、行ってみることにした。

「このへんか？何も無いぞ」

「もうちょっと先です。こっち」

疾風には分からないが、鈴音は何か吸い込まれるように歩いていた。自分自身それが何かは知らないが、導かれるように足が動いていた。不思議な感覚だ。まるで自分がその場所を前から知っていたような気さえする。

しばらくして、真っ白で何も見えなかった場所に突然洞窟が現れた。

明らかに人工的なつくりのものだ。かなり風化してはいるが、入り口の両脇に龍を象ったそんなに大きくない像がたてられていた。龍が天に登っているような縦長の像で、片方は上半分が折られたように二つに壊れていて、片割れが地面に落ちていた。それが哀愁を感じさせる。

「本当にあつたな……。この奥が祠か？」

「多分……。そんな気がしません。途中でここを見つけた時何故か目が離せなくて行かなきゃいけないって思ったんです」

「巫女として何か感じとったってことか」

洞窟の入り口は長方形のようになっていて、人ひとり通るのにちょうどいいくらいの幅だった。中を除き込むと風のうなるような音が出て、不気味だ。鈴音はゴクリと唾をのんで、中に入ろうとした。だが、鈴音が先頭じゃ危険だからと疾風が先に入ってくれた。白銀は入り口で待機してもらおうように疾風が指示すると、素直に頷いてその場に座った。

白銀と分かれ、二人は中へと入った。鈴音は一步一步足元を確かめながら進んだ。明かりがないためよく確認できないのだ。何かにつまずいたら転んでしまうこと恐れて、そろりそろりと歩く。その時、前方がぼう、と明るくなつた。

疾風が火を起こしてくれたのだ。というか掌にすっぽりおさまるほどのサイズの炎が、疾風の手の中でゆらめいている。さすがと呼ぶべきか。龍だから火を扱うことも簡単に出来てしまうのだろう。魔

法使いみたいだな、と思い、自分もそんなことができればどんなに便利だろうかと思った。

わりと細めの洞窟を進んで行くと、だんだん壁には壁画が描かれていることが分かる。いつの時代の人が描いたのだろうか、人らしきもの、動物らしいもの、無数に並べられた幾何学形態、それが一体何を意味するのかは分からないが、世界史の授業で習ったようなな\nん前年も前の文字に似ているようなきがした。ところどころ劣化して読めないが（もともとこの世界の文字すら読めないが）それがまた歴史を感じさせて風情がある。壁画を見ながら奥へと進んでいくと、こじんまりとした所にたどりついた。正方形の形をした部屋のようになっでいて、壁のみならず天井まで絵が描かれていた。そしてどうやらここで行き止まりらしい。一応玉を探してはみたが、それらしきものはそこにはなかった。ここは玉が納められてる祠ではなかったのだろうか。

「どうやらはずれみたいだな」

疾風が溜め息まじりにそう言って引き返そうとしている。

「待って下さい……。もう少し調べたいです」

「だいたいは調べただろ？その結果玉は無かった。ここは祠じゃなくて、別の用途で使われてた場所だろう。白銀も外に待たせてあるし、ここを出るぞ」

「でも、もう少しだけ…お願いします」

疾風は仕方ないなと言いながらドカツとその場に座りこんだ。もう少しだけ時間をくれるようだ。

鈴音は疾風に感謝するとあたりを調べはじめた。

一見なにもなさそうに見えるが、鈴音はここを見付けてからずっと違和感を感じていた。

胸がざわつく感じがして、ここに引き寄せられる感覚があった。何も無いわけではない。

鈴音は自分のそんなよくわからない感覚に、この場所に絶対何かあるという確信があった。根拠はないが、外のあの何も見えない空間でこの場所を見つけたのはきつと何かがあるからだ。鈴音はそう信じた。床も壁も、何かないかと隅々まで調べる。手探りで床をはい回ったり、壁を押してみたり、出来る限りのことをしてみた。だが、結局時間が過ぎていくばかりで何も見つけられなかった。

「何も無かったな…」

シユンと落ち込んでる鈴音をなくさめるように、立ち上がって頭を撫でた。その時落ち込んで下を見ていた鈴音は、疾風の手の上で揺らめく炎に照らされた壁に異変が起こったのを見逃さなかった。慌てて疾風をその状態のまま立ち止まっているように言い、違和感を感じた壁にそつと手を触れた。わずかだが、小さな窪みのようなものがある。しかもそれはある形をしていた。

「疾風さん！見て下さい！ここを照らしてみてください」

疾風は言われるままにその場所を照らした。すると、窪みの凹凸が照らしたされ影となり、模様がうかびあがった。

「！？これは…」

「ここ、窪みが出来てるんです。小さくて気づかなかったけど、何かの形に窪んでます」

「ああ。これは……円が二重になったような形だな……」

疾風が確かめるように窪みをなぞった。鈴音も指でなぞって形を覚えてた。どこかで見たような形だ。

「ここに何かはめこんだのかもしれない」「ん……なんだろう……。この形私知ってる気が……。あっ！！！」

「なんだ心当たりでもあるのか……！？」

鈴音は胸元に手を突っ込むと昨夜曉からもらった首飾りを取り出した。

「これ。この形、そっくりじゃありませんか？」

「！本当だ。……というかその赤いの曉の鱗じゃないか！？」

「はい。昨日寝る前に曉からもらったんです。お守りにつて。」

「アイツ……俺たちが中都国で調べてる間何してんのかと思ったたらそんなの作ってたのか。それ石みたいに見えるけど、もともと龍の鱗が固くて厚いから削るとそうなるんだぜ？」

「へえ……。そうなんですか。曉は赤い龍だから、赤い石みたいになるんですね」

「龍が自分の鎧とも言える大事な鱗を、誰かにやるなんてなかなかないぜ？よっぽど好かれてんな鈴音は。」

そう言われると少し照れる。

暁がくれたお守り。

大事な鱗を削ってまでしてくれた大切なもの。

鈴音はそつと首飾りを握った。

そして今は天龍国にいる暁のことを思う。

ありがとう、大事にするよ、と心の中でお礼を言う。優しく赤い瞳が綺麗な彼。見た目良し、性格良し、けれどその内に秘めてるものはとても不安定で…。

「おーい…大丈夫かあ……？」ぼーっと物思いにふけり、首飾りを握りしめながら動かない鈴音の目の前で掌をヒラヒラと振りながら尋ねる。それにハツと我に返った鈴音は慌ててごめんなさいと謝る。

「鈴音、とりあえずその首飾り窪みにはめてみるか？なんか起こったりして。暁の手作りだけど」

冗談半分、本気半分に言ってみる。鈴音はさつそく首飾りを窪みに押し当ててみた。するとカチツと音がして、窪みどおりにはまった。同時に大きな音になって、壁が左右に開きはじめた。

「マジかよ……」

まさか冗談半分で言ったことが本当になって、驚きを隠せない。ゴゴゴと大きな音をたてて、さらに奥へと続く通路が現れた。

「…すごい技術ですね…」

「ああ。………行ってみるか」

映画のワンシーンのような展開に探求心がかきたてられる。それと同時に諦めなくて良かったと鈴音は安堵した。首飾りを窪みからは

ずすとまた首にさげて、二人は奥へと進んだ。先程と変わらないような通路を進んでいくと、奥に祭壇があった。

祭壇の上にキラツと光るものが見える。近づいて見ると台座に少し黒っぽい、けれど澄んだ透明な球体が、はめこまれていた。

「!...これが...玉...?」

「...多分な。見つけた。お前の力を発揮するための玉。この絵巻物のとおりだ」

疾風が巻物を取り出して鈴音に見せてくる。前に見た、ただの黒丸だ。

「これを描いた作者はちょっと絵...下手だったんだろうな...。実物とだいぶ違う」

フツと疾風が鼻で笑う。まあ艶も立体感もない絵だが、玉と文字で記されているから間違いないだろう。疾風が笑ったせいで、絵と実物を見比べていた鈴音もついつい吹き出してしまった。

「玉見つけたんだし、持って帰るぞ。あとは用ないし」

「はい。じゃあはずしますね?」

鈴音が玉に手をのばした。

そつと両手で包み込むように持ち上げる。コトツと音がして外れた。大きさは直径10センチくらい。両手にすっぽりおさまる大きさだった。鈴音はなんとなく漫画や映画の世界を想像して、はずした瞬間玉が光ったり、突然地震が起こって建物が崩れてきたり、何かしら起こるのではないかと身構えてしまったが特に何も起こらなかつ

た。

ちよつと期待はずれでガツカリ（？）したものの、外に白銀も待たせているし、玉も手に入ったので後は帰るだけだと二人は出口に引き返した。

疾風の灯りを頼りに足元に気をつけながら出口目指して歩いていく。最後に壁画を眺めて祠の歴史を感じながら一歩一歩あるいた。もともと鈴音は古いものが好きだった。

アンティークとか、年季の入ったものは独特の味が出るし、当時のことが分かるから面白い。

ただ、学校の授業で教えてもらった範囲内だけだから専門的なことまではわからないが。

専門的なことは大学で勉強しようと考えていたのだが、それも今は叶わない夢となってしまった。

けれど、大学には行けずとも、こうして違う世界の歴史に触れることが出来る。それだけで充分だ。鈴音は前向きに考えるようにした。別の世界にきてしまったが、本来の自分があるべき世界なのだし、故郷も同然だ。後悔する必要もないし、自分には使命がある。家族に会えないことだけを除けば平和に生きていられるだけ有難い。そう思えた。

出口が見えてきた。外の光がさしこみ、眩しさに目を細めながら外へ出た。風が微かに吹いていて、久しぶりの外の空気が気持ちいい。

「おかえりなさい。お二人とも。中はどうでした？」

外で待機していてくれた白銀が脇からでてきた。

「白銀、ほら見て。奥にこれがあつたの。絶対探してた玉だよ！」
ゴソゴソと手に入れた玉を白銀の前に差し出す。白銀は少々驚いたような顔を見ると、少し微笑んで

「さすが巫女様です。巫女様はご自分で玉の気配を感じて、この場所に気づいたに違いありません」と誉めてくれた。それに対して素直にお礼を言った。

「さて、あとは帰るだけだな。この全く晴れそうにない霞…どうしたものかね」

「…そうですね。でも山を下るだけなんだから簡単じゃないですか？」

「いやいや…お前ここにくるまで上りだけだったか？山がへこんでたりして結構上ったり下ったりしたる？」

「でも…元きた道戻れば大丈夫ですよ」

「ん…まあ。…よしっ…多分こっちな。ここの入り口が右向きに見えたからこっちに行けば元きた道にたどり着くだろ」

「巫女様、すみませんが、手に入った玉で試しに力を使ってみてはいかがですか？」

「あ…それいいな。やってみろよ鈴音。練習になるし。そうだな…この鬱陶しい霞をぱーっと消してみてくれよ」

いきなり無茶なことを言う。確かに玉は手に入ったが使い方がわからないではないか。呪文を言えばいいのか、念じればいいのか、全

く見当がつかない。巻物に描かれていた巫女は玉を両手にもってか
がけるようなポーズをとっていただけだったが。そうすれば良いの
だろうか。二人にやってみると言われて嫌だなんて言えない。だっ
たら試してみるだけだ。

「あの…使い方わからないけど、とりあえずやってみます」

鈴音はとりあえず玉に念じてみることにした。

「……………」

「変わりました？」

「…何も変わらないな」

「じゃあ今度は…お玉様お玉様…どうかどうか霞を消して下さい…
！…」

「……………お玉様って……………ださっ」

「……………だっ…だっ…だっ…分かんないんだもん…！」

真剣にやっているのにひどいことを言われて泣きそっになる。

「これでも精一杯やってるのに。」

「…巫女様、玉はあくまで巫女様の力を具現化するためのもの。玉に頼むのではなくて、巫女様ご自身がどういう力の使い方をしたいのか想像してみてはいかがですか？」

「でも…念じてみたけど出来なかつたし…」

「ですから想像するのです。山が晴れて景観が見渡せるようになったところを。やってみて下さい」

疾風と違って、白銀は真面目に具現化の手助けをしようとしてくれる。

鈴音は気は進まないがもう一度やってみることにした。玉を胸の前に持ち、静かに目を閉じた。霞が晴れて、年中霧が晴れない不気味な山ではなく、木々が生い茂る美しい山を想像する。意識を集中させてそれだけを考える。疾風も白銀も何も言わずに彼女を見守る。しばらく静寂と緊張が漂う中、鈴音に変化が起きた。

「！…これは」

「しっ…！静かに…。巫女様が集中なさってますので」

玉が光りはじめて、鈴音の体を包みはじめる。蒼白い、淡い光りが集中する彼女を包みこむ。神秘的なオーラがあたりを照らし、それに目を奪われていると、霞が徐々に薄れていく。

「！？…（これが巫女の力…）」

山全体を覆う霞が消えていき、空が見え始め、遠くに中都国の街並みが見えてきた。完全に霞が消え去ると、集中していた鈴音からは蒼白い光が消え、ふと目を開けた鈴音は力が抜けたようにヘタリと

その場に座りこんだ。額には汗が浮かび、ひどく疲れた顔をしていて、ハアハアと荒く呼吸してる。

「鈴音っ…!! やったぞ! 成功だ!! 憑河山から霞が消えたッ! 見てみる」

疾風が興奮して歓喜の声をあげる。白銀は力なく座りこんでる鈴音を支えている。

「巫女様、上出来です。初めて使う力がこれほどとは…。失礼ですが期待していた以上です!」

「ハア…ほん…と…う…?…よかつ…た…あ」

うつすらと目を開けながら話すと、鈴音はそのまま気を失ってしまった。

「鈴音ッ!?!」

「大丈夫です。体力を消耗しただけです。おやすみになられば良くなります」

疾風は安堵するとあたりを見渡す。先程まで山全体を覆っていた霞は嘘のように晴れ、夕暮れに入りそうな太陽がこちらを見下ろしている。

「大したもんだ。まさか本当に霞を消すとはな」「先代の巫女の生まれ変わり、ということに嘘偽りはなさそうですね。これで証明で

きたわけです」

疾風は軽く頷く。そして晴れた山を見下ろして、帰路を探す。それはすぐに見つかった。疲れて気を失った鈴音を抱き上げると歩きだす。

「失礼ですが玉も手に入り、こうして霞も消えたことですからわざわざ徒歩で戻られることはないのでは？」

「そうだけだよ。なんかせつかく山晴れたし？たまには人間の真似して徒歩で移動してみるってのもいいだろ。それに霞乃のばあさんにちよっくら報告したら普通に帰るしな」

「分かりました」

二人は太陽を背にして山を下りた。

憑河山に蒼白い光が突如現れた。光は淡く、決して強い光ではないが確かな力を感じさせる。なにか起こっているのか。光を見つめていると、晴れることのなかった霧が消えていき、憑河山本来の姿が現れた。

「！…婆様。一体なにが起こってるのですか」

「脩斗…。おそらく鈴音さんの力です。無事玉を手に入れたみたいですね。」

「アイツの！？あの山は千年も姿を見せなかつた憑河山ですよ？それをアイツがとり払ったというのですか！？」

「彼女の力に間違いありません。素晴らしいわ。相当の力の持ち主ね。あの子は」

「婆様……。前に輿入れの真意をきいたんです。巫女は龍神の妻としてじゃなくて、龍を完全な状態にしてやるために輿入れて名で嫁ぐらしいです。だとしたらアイツが龍神曉を完全な龍にしたら、もう用はないんじゃない……？」

「何が言いたいのですか脩斗」

「いや……。好きでもない神に嫁いで、さらに用無しになったらアイツが可哀想かなあ……。その後が気になったので」

「鈴音さんが気になるのですか？」

「えっ！？いやっ……。そのっ……………」霞乃は困ったような表情をした。

「まさかあなた……。鈴音さんが好き、とか？」

「え！？」脩斗はその質問に答えられず、かわり榊が答えた。

「すみません。そのまさかです。皇子は鈴音さんのことが好きなんです。一方的にですけど」

「榊ッ……！余計なこと言つな」

「いいえ言います。皇子は鈴音さんが好きなんです。」

霞乃は大きな溜め息をつく、手を額に当てて話した。

「…………困ったわ。」

……脩斗、鈴音さんのことは諦めなさい。いいですね？彼女は暁様の妻。あなたが想っても仕方ないのですよ……。それはあなたが一番よく知っているはずですよ」

そんなことは分かっている、と脩斗は思う。

ただ人生初めての恋をこんな形でしかも即諦めろと言われていらいらした。

好きななんて気持ち、なりたくてなつたわけじゃない。

でも、鈴音が部屋で物思いに沈んでいた時や、書庫で字が読めなくて困っているところを見ると助けてあげたいと思ってしまうのだ。だから輿入れするまでの期間ちよくちよく鈴音の部屋に行つてはわざとからかった。そうすると物思いに沈んでいた顔がみるみる元気になっていくから。それが好き、という気持ちと分かるのに時間はかかったが。

「…皇子の初めての恋だったんですけどね…」

ボソツと霞乃の陰で呟く。霞乃もそれは分かっていた。ただ相手が悪かった。相手が鈴音ではなく、違う女性なら良かったのに…と。それに昔龍神暁は前世の鈴音を見初めている。念願の妻を手放す気などないだろう。

「…皇子…?」

眉間にしわを寄せたまま黙ってる脩斗。返事が返ってこない分何を思っているか分からないから怖い。脩斗は黙って霞乃にも挨拶せず、に部屋を出ていってしまった。柎はやれやれと溜め息をつく、皇子のご機嫌をどうとろうかと思案しながら後を追った。

「皇子…！皇子待つて下さい」

駆け足で脩斗を追う。脩斗は機嫌が悪いのと、元々長身な上に大股で歩いてきたため、意外と追い付けない。

「……………」

脩斗は柵を無視して自室へと戻ろうとしている。大股でつかつかと歩いていると、向かい側から二人歩いてくる。それも無視しようとしたが、よく見ると片方の人物は女性を抱いて歩いていた。しかもその女性は鈴音だ。

「あ、お前脩斗だろ？ばあさんの部屋ってどこだ？ちょっと話したいことがあるんだが」

「……………婆さまはあっち。それより鈴音は…？」

「疲れて眠っちまったんだ。憑河山の霞を全部消したからな。見えただろ？」

脩斗は頷くと、疾風が鈴音を抱いている状況を見て思いついた。

「鈴音を抱いたままでは婆さまのところに行くのは大変でしょう。鈴音を俺の部屋で休ませてはどうですか？」

「まあ…確かになあ。ずっとこの状態だと疲れるんだよな…。じゃ

あお言葉に甘えて鈴音を休ませてもらうわ」

脩斗は自室まで案内すると、鈴音を寝かしつけて疾風と白銀は部屋を出ていった。入れ代わりに榊が入ってきたが、妙にニヤニヤしている。

「考えましたね皇子。久々に鈴音さんと二人きりになるために休ませるよう言っただんですか？」

「う…うるさいなツ…そんなんじゃないよー！第一お前がいるんだから二人きりじゃないだろ」

ギロツと榊を睨みつけるが、睨まれてる本人はどこか楽しそうだ。

「ははっ。ではごゆっくり。皇子」

パタンと戸を閉めて榊が出ていった。念のため戸を開けて廊下に誰もいないのを確認すると、いそいそと鈴音の枕元に座った。静かに寝息をたてている彼女を眺める。彼女が自分の部屋にいる。それだけで何故か嬉しい。最近はずいぶん忙しくて彼女の手伝いが出来なかったから、こうして側にいられるのは久々だった。顔をのぞきこむと初めて会った頃より大人びた気がする。髪も少し伸びたし、女性らしさが増してきた。ほんの少し前はあどけなさの残る少女のようだったのに。

「…巫女として頑張ってるんだな…。お前は」

ボソツと彼女を起こさない程度に語りかける。

「お前も大変だよな…。いろいろあって。ところで暁はどんな奴な

んだ？俺は会ったことないけど、親切にしてもらってるそうだな…。
…それならいいけど…いや…良くないかあ…

一人で自問自答していて虚しくなる。彼女の嫁いだ暁がどんな人物なのか気になって仕方ないのだ。会ったことも見たことも無い相手に勝手に嫉妬している自分がいる。彼女に暁のもとへ嫁いで欲しいと言ったのは自分なのに。ハアと盛大な溜め息をつくど、いつから起きていたのだろうか、鈴音がこちらを見つめている。

「何が良くないの？」

さっきの独り言を聞いていたのだ。脩斗は驚きで声が出ない。

「聞いている？…もおいしいよ。ね、ここ中都国のお屋敷でしょ？私な
んでここにいるの？」

「え…ああ。憑河山で力を使ったお前は疲れて眠っていたんだ。だ
からここで休ませていた」

鈴音は思い出したようなそぶりを見せて、疾風と白銀を探しに行こうと立ち上がる。脩斗は裾をつかんで鈴音を制し、二人は婆さまと面会中だと伝えた。

「お前は休んでろ。疲れてるんだから」

「…でも休んだから大丈夫だし…」

「…そう思ってるのは自分だけだろ…？疲れた顔してんぞ」

確かに目元はまだだるかった。ただ、一人だけ寝てるのは悪い気が

したのだ。

「じゃあ…もう一回横になるけど、眠れそうにないからさっきの話聞かせて。良くないって何が良くないの？」

先程の独り言がひどく気になったらしい。またその質問をしてくる。

「何でもねー。ただの独り言だ」

暁と鈴音の仲が気になって自問自答していたなんて言えるわけがない。

「だって暁がどうのこうのって言ってたじゃない。脩斗は暁のこと気になるの？だったら教えてあげるけど」

知りたいことは知りたいのだが、鈴音の口からはあまり聞きたくない。彼女の口から他の男の情報が発せられるのは嫌なのだ。自分勝手な理由だが、誰だってそういうものだろう。

「いや、別に？興味ないし」

ポーカーフェイスを装っておお嘘をついた。榊がその場にいたら吹き出していたに違いない。

「そうなの…？」

鈴音はいささか残念そうにしている。そんな顔すんな。暁の話したかったみたいじゃないか。イラストとする。目の前に自分を好いてる奴がいるのに。

「じゃあ〜…なんか面白い話ない？」

「面白い話？……………無い…」

「え〜〜…皇子なのに？」

皇子関係ねー！！と一人ツッコミを入れながら、それでも退屈し
ぎになりそんな話題を探す。

「ねえ今何時？あ〜…何時っていつか今は夕方？夜？」

「？何かあんのか？一応夜だ。ちょうど戌の刻あたり」

「そんな時間なの！？じゃあ帰らなきゃ」

「なんで」

もう遅いし今日一日くらい泊まっていくだろうと少しばかり期待し
ていたが、急に帰ると言い出すから何か大事な理由があるのだろう
か。

「だって曉お留守番してるから。私たちが帰ってくるの待ってる
と思うし」そんな理由にガクツとする。なんだそれ。

そっいえば前に一度、疾風が曉は鈴音がいないと寂しがるから、と
言って帰っていったのを思い出した。

曉：一体どんな奴なんだ。

謎は深まるばかりである。

脩斗の中では威厳があり、最高神として恐れられるようなイメージ
があった。だが、疾風や鈴音の話を知っている限りでは、威厳どこ
るか子供っぽさの方が勝っていて、まるでイメージとは違うのだ。

そんなよくわからない神に嫉妬してるのかと一人悶々してると、疾風と白銀が面会を終えて戻ってきたようだ。

「あ、鈴音起きたんだな？気分はどうだ？今日は疲れただろ？ゆっくり休めよ」

鈴音の体調を気遣って、疾風が優しい言葉をかける。鈴音は大丈夫です、ゆっくり休みましたからと返事すると、帰ると言い出した。疾風も白銀もその気で、脩斗も彼等を引き留めておく理由もなかったので、見送ることしか出来なかった。

疾風と白銀は早くも暁を完全なる龍にするために早く帰りたいらしい。当然鈴音も早くそうしたいと望んでいるし、脩斗もそうなるよう協力すると言ったので、鈴音とまた離れるのは名残惜しいが「頑張れよ」と彼女を励ました。

「ありがとう。脩斗もいろいろ頑張ってたね。」

笑顔で返されて内心ドキツとした。

次の瞬間、眩い光があたりを照らす。それが消えたころには彼等はもう目の前からいなくなっていた。

第十一話 鈴音のわだかまり（前書き）

性的な表現が含まれます。苦手な方はご注意ください。

第十一話 鈴音のわだかまり

ようやく巫女として力を発揮できるようになった鈴音は、玉を手にした日から度々練習するようにしていた。

初めて力を使った時、その反動でひどく疲れて倒れてしまった。しかし一度力を使うたびにいちいち倒れていられないから、力の加減や使い方を慣らしていく必要があるのだ。それに自分が一番活躍する時、つまり曉に陰の気を送り込む儀式では相当力を使うらしいからそれにあつた体力もつけないてはならない。やるべきことは沢山ある。とは言つてもいつぺんに出来るわけではないから、とりあえず力の使い方の練習をすることになっている。

ある特定の範囲を指定して、そこだけ雨をふらせてみたり、雷を咲かせてみたり、いろいろ試してみた。

練習しはじめの頃は力の加減が分からずに、気づけばよく庭の真ん中でぐうぐう眠っていたり、門で倒れていたりした。そんな鈴音を発見するのはいつも曉で、そのたびに彼は殺人現場を目撃したような、一瞬ひやっとした気分させられるのだ。慌てて駆け寄ってみれば、ただ気持ちよさそうに寝てるだけだから良いのだが。

でも心配なのに変わりはないから、彼は鈴音が練習すると言って外に出てくたびについていくのだ。彼女からすれば気が散るし、大丈夫だと言いつ張るのだが、どうも信じられない。自分でも過保護だと思つ。今だつて、だいぶ力の加減もうまくなつていて倒れる心配もないというのについつい側にいてしまう。

今は鈴音は庭の真ん中で何か対象となるものを探し回っては試しているようだ。

走り回るたびに彼女の首にさがる首飾りが揺れるのを、曉はただただ見ていた。

自分が鈴音にお守りとして渡した首飾り。

自分の鱗を使って作ったものだ。

自虐的だが、それを渡したのには理由がある。
ひとつは鈴音の居場所を把握するため。

自分の鱗から発する気を感じすることで彼女の居場所が分かるのだ。いわゆるお子様ケータイのようなものである。ケータイのように話すことはできないが。そしてもうひとつの理由が彼女を守るためである。もし彼女の身に何かあった場合は彼女の盾になるようできている。まあ、まずそんなことは無いだろうが。

「なあにぼーっとしてるんだ曉？」

突然現れたのは疾風である。今は儀式を行うための準備にとりかかっているのだとか。

『鈴音を見ていた』

はいはいと疾風は呆れ顔だ。

「曉に聞きたいことがあった。憑河山に行った時に気になってな」

『なんだ…？』

「お前のアレ。鈴音にやったって首飾り。あれさ、なんで玉が納められてた祠の鍵になるわけ？」

『やあ…』

「さあ…ってお前…鈴音が憑河山のぼるから渡したんだろ？最初から祠の鍵になるって知ってて渡したのか？」

『……………』

「知ってたんだろ？なんであれが鍵になるのかさっぱり分かんないけどな」

『……………』

「なんとか言えよ…。別に怒ってるわけじゃねえんだけど」

暁はフウ…と一呼吸おくと、面倒臭そうに話し始めた。

『あれ自体は正式な鍵じゃない。あれはその鍵を模したものだ』

「ふーん…本物とかあるんだ？」

『ああ。……………だが壊れた』

「なんで？」

『俺が壊した』

衝撃の事実に一瞬固まる。暁はうしろめたい表情だ。何をやったというのだろうか。

「な…なんで…？」

『千年前にちよつとな』

「…ちよつとつて？」

『……………沙羅に会いに行った時に誤って壊した。事故だったん

だ
』

「…沙羅ってあん時の巫女か…。あゝ…思い出した思い出した。お前沙羅に一目惚れしてちよくちよく中都国に行ってたよな。そんなもって沙羅が巫女だって分かった時はおお喜びしてたっけ。輿入れの相手は沙羅だったってな」

『ああ。中都国にはよく行ったが、結局話しはしなかった。いつも陰からみてた』

「へ！？だつていつつも会いに行くつてすつとんでつただろ！？それが話してないだあ？意味わかんね。曉つて意外と奥手…？」

初耳の情報ばかりで、疾風は興味津々だ。

「そんでツ？結局その後沙羅とは話したのか？」

『沙羅とはその後、嫁にきてくれって頼んで……って鍵のこと知りたいんじゃないのか』

話しが違う方向にいきそうなので元にもどす。

「あ？そうそう、鍵鍵」

自分で聞いたとしてそっちにはすでに興味なしという態度である。

「えゝつとなんで鍵壊したんだっけ？」

『…鍵となる首飾りはもともと沙羅がしていたんだ』

「へ…へえ……」

疾風はその時本当に暴走しなかったのは奇跡だと思った。それにしても曉にそんな過去があったとは思ってもよらなかった。

曉はまだ鈴音から目を離さない。ふと鈴音がこちらを向いた。曉と目があう。鈴音は曉のあつい眼差しに無言で頬を染めると、プイツとあっちの方向を向いてしまった。曉はその様子にクスクス笑っている。

「あゝあ。照れてる照れてる。かわいいなあ」

『いくら疾風でも鈴音はやらない』

すかさず曉が敵対心を向ける。誰もお前からとったりしねえよ、と心の中で訴えた。

「実際に鈴音はどんな感じなんだ？うまくやれてるか」

『ああ。うまくやれてるよ。毎日練習ばかりしている。あんな感じで』

鈴音を見ると、目をつむって集中しているようだ。憑河山の霞を消した時のように蒼白いオーラが鈴音の体を包むように光っている。すると一定の範囲内だけ雨が降ってきた。サアアと音をたてて空から降ってくる。しばらくたつと雨はやみ、鈴音は集中を解いた。だいぶ続けて練習していたせいだろう、眠いのか欠伸をしている。

「へえ…さまになってきてるな」

『初めは庭の真ん中でしょっちゅう倒れていたから焦ったものだ』

疾風は疲労で眠ってしまった鈴音を知っているから、想像がつきやすかった。

「鈴音がああやって練習してる間はお前はこつやって見てるだけ？」

『大抵はな』と退屈そうに答える。 曉が何もすることがないのも可哀想なのでひとつ提案してみる。

「曉、そういえば鈴音に自分の姿見せたか？見せてないなら見せてやれよ。どうせ暇だろ」

疾風に暇人扱いされるのは癪だが、鈴音がきてから結構たつのに今だに自分の姿を見せてないのは本当なので、それもいいかもしれないうと思った。

「鈴音、疲れたろ？こつちこいよ。 曉がいいもん見せてくれるってさ」

「いいもの？」

休憩がてら何を見せてくれるのか、興味津々と言った様子で駆け寄ってくる。

曉はそんな彼女を腕の中に捕まえると、軽くキスをして広場までくるように伝えた。

言われた通りに屋敷と門をつなぐ広場に移動した。鈴音は毎度ながら玄関である門から屋敷内にまでの距離が遠いと感じていた。 ちよつとした校庭みたいな広場に三人は集まると、曉は一人離れて中央に立った。鈴音は何を見せてくれるのだろうと想像がつかなくて？マークを頭にたくさんつけている。 疾風はじつと曉を見ている。

一人中央に立つた暁が突然光ったと思った瞬間、目の前に現れたのは真紅の巨大な龍。

「暁……!?!」

突然現れた龍に驚きで開いた口が塞がらない。ギラツと怪しげに光る紅い大きな瞳。人ひとりなど簡単に食べてしまいそうな大きく裂けた口。

そこから覗く鋭い牙。
まるでワニのようだ。

頭には立派な角が二本。さらに小さな角も何本か生えている。頭から背にかけては銀の鬣がなびいていた。体長はかるすく二十メートルはあるのではないだろうか。胴が長くその蛇のような巨体を四肢が支えている。

牙ほどではないが鋭い鍵爪が前肢には四本、下肢には五本生えていた。そして長い尾。その初めて見る龍の姿に圧倒され、声が出ない。

「これが本当の暁の姿だ。すごいだろ？」

その巨大な龍から目が離せず、コクコクと頷く。

「すごい……龍ってこんなに大きいんだ……。……触ってもいい？」

おそろおそろ近づいてみる。

「いいんじゃないの? な? 暁」

「……………噛まない?」

「噛まねえよ……」

そつと触れてみる。

表面は硬く艶があつて、ひんやりとしてる。手触りが面白くてナデナデと触っていると曉の大きな瞳と目が合った。口が大きく避けている頭部はなんとなく恐くて近づきたいが、手をのばして彼の頬あたりに触れてみた。少し高い位置にあつて届きにくそうにしてると龍は触りやすいように頭を下げてくれた。

「わっ…。ありがと曉」

少し緊張しながら撫でてやると、龍は目を細めておとなしくしている。撫でられて気持ちよさそうにしてる猫みたいだ。

「あはっなんか可愛い」

「かわいいのか！？」

疾風は全く予想外の感想に、鈴音の感覚がわからない、と言った表情だ。鈴音はというと慣れたのか、あっちこっち珍しそうに触れては「わぁ」とか

「すごい」とか感嘆の声をあげてる。

「お腹は柔らかいんだねー！あつたかいし」

胴の内側をふにふにとつつつきながらそんなことを言っている。

「ありがとっ曉。元に戻っていいよ」

鈴音は満足そうだ。曉は体を起こすとスウ…と人の形に戻った。

『鈴音、どうだった？』

「うん！すごかった。鱗は固いけど鬣はふさふさしてたし面白かった！」

「そうかそうか。曉の腹とか胸とかなでまわして楽しかったか。良かったなあ〜曉」

「ちよっ…／＼／＼変な言い方やめて下さい…！」

赤面する鈴音が面白くて
ついつい意地悪な言い方をしてしまう。

「曉は気持ちよさそうだったぜ？鈴音に触られて。な？」

『ああ、すごく感じた』

曉がニッコリと微笑み返してくる。鈴音はこれ以上ないほど顔が真っ赤になっていく。

「馬鹿ツ！エッチー！！曉なんて嫌い！もう一緒に寝ないんだから！！！」

そう言って走って部屋に戻ってしまった。

「あゝあ。怒っちまったな。これからは一緒に寝ないってさ」

『…………ふざけすぎた』

「でも半分本気だったろ？」

『……………』

「とりあえず部屋戻ろうぜ？」

疾風が曉を促して部屋へと戻った。曉は鈴音の機嫌が気になるので、いつも二人で使ってる部屋へと向かった。ガラツと襖を開けると、鈴音がちよこんと座っていた。手にはなにやら大事そうに紙切れを持っていて、こつちを振り向こうともしない。曉は無言で部屋に入ると、彼女を後ろから抱きすくめる。

『なにしてた？』

甘えるように、優しく彼女を抱き締めながら、耳元でそつと囁いた。鈴音はそんな曉を無視すると持っていた紙切れを綺麗にたたんでしまおうとした。気になった曉は鈴音から取り上げると、文字が書かれていたので手紙だと分かった。

「ダメっ！返して。私の大事なものの！！曉には関係ないんだから！！！」

今の鈴音は機嫌が悪いとわかっていても、曉には関係ないと言われれば、意地でも読んでやろうと思った。彼女は必死に手紙を取り返そうともがいている。曉は片手で彼女をおさえて、内容を確認した。

『……脩斗……。中都国の皇子か。ずいぶん親しそうな口調だな』

「中都国でお世話になったの。だから仲良くなっただけ。それは興入れする日に不安な私を元気づけようとして書いてくれた手紙なの。読んだなら分かるでしょ？だから返して」

曉は鈴音に手紙を返してやると、考えこんだ。千年前の記憶が蘇る。自分が愛した巫女、沙羅。沙羅の心の中にいたのは弥太。そして弥

太は彼女の命を奪った張本人だ。

当時、弥太は中都国の第一皇子だった。

弥太と沙羅は恋におち、相思相愛だった二人は婚約をした。そこに自分が割って入って、沙羅に妻になるように言った。

もちろん中都国の人々は沙羅が最高神の自分に嫁ぐように言った。神の手助けになれるのならば、沙羅は暁に嫁ぐべきだと。

当然のように沙羅は弥太と引き離され、暁の妻となるために輿入れの準備をさせられた。

彼女は弥太を忘れられず、弥太も彼女を諦める気はなかった。彼女は言った。

私の心は弥太ただ一人のものだと。
たとえ結ばれなくても心は彼のものだと。

それからそんなに経たない内に彼女は弥太に命を奪われた。それがあの悲劇の始まりである。

そして今、沙羅の生まれ変わった鈴音が自分の側にいる。彼女が転生しただけで嬉しかった。だが、中都国の皇子はまたしても彼女と接触していたようだ。しかも仲が良くなってしまったらしい。

中都国の皇子が自分の巫女を奪ってしまう。そんな不安が頭をよぎる。鈴音が中都国の皇子から手紙をもらっただけでも嫌なのに、

それを大事そうに持っていたのが気に入らない。沙羅はダメだったが、鈴音は自分のものだ。

千年前の怒りの記憶と独占欲がふつふつと沸いてくる。身体中が熱くなり脈うつ。

だがハツとなり慌てて怒りをおさえる。ここでまた怒りをあらわにしてしまえば何が起こるか分からない。しかし抑えようとしても、

一度熱くなった身体はなかなかおさまらない。ドクドクと脈うつように、身体中をめぐる陽気。落ち着こうとつづくまると、さっきまで

暁を無視していた鈴音が近づいてきた。

「曉どうしたの？どこか具合悪いの？」

背中を優しく撫でさすって、彼女が顔をのぞきこんでくる。心配してくれているのか、眉を曇らせている。

『…大丈夫だ…』

「辛そうだよ…」

確かにおさえるのは一苦労なのだが、鈴音が触れてくれるところから徐々に熱がひいてく気がした。脈うつ身体からうずきがひいていく。

『もう大丈夫だ。鈴音が触れてくれたからかな』

鈴音が頬をふくらませて不機嫌になる。

「またふざけてる」

『違って… 本当に助かった』

ふざけると信じてもらえなくなるから控えようと反省する。まさかの返答に反省する。先程のことをまだ根にもってるようだ。鈴音は相当奥手なのか、照れやすいからつい意地悪してしまうのだ。鈴音可愛さ故の行動なのだとわかってほしい。

『…でも助かった。しばらくこのままだったら辛かったから』

「具合悪かったんでしょ？急にうずくまるからどうしたのかと思った」

『陽の気が騒ぎ出したから落ち着こうと思って。心配かけた。それにさつきはすまなかった』

「もういいよ。だってあつちこつち触ってたのは本当だし…、曉気持ちよさそうにして可愛かったから。その…変なところ触ってたらごめんね?」

頬をほんのり染めながら上目遣いで見つめてくるから堪らない。そんないじらしい鈴音が可愛くて曉はすぐ許してしまう。鈴音に出会ってすっかり馬鹿になってしまったと自分で思った。そんな鈴音を見て我慢できずに抱き寄せると、そつと口づけた。軽く触れるだけのキスに、鈴音は潤んだ瞳で見つめてくる。

『クスツ…足りない?』

「…そつ…そんなことは…」

『素直じゃないな鈴音は』

曉はぐいっと鈴音の腕を引き寄せて、彼女を自分の膝の上にのせると今度は濃厚なキスを交す。

「んんっ…んん」

何度も何度もキスを交して、やっと唇をはなした頃には鈴音がクタクと寄りかかってきた。そんな鈴音にかなり満足の曉。

「…どうでもいいけどさ…俺のこと忘れてない?」

曉の異変を感じとって駆け付けてきた疾風が廊下にたっていた。

『帰ったのかと思った』

自分に寄りかかっている鈴音の頭を撫でながら、顔だけ疾風のほうに向ける。

「ひでえやつ……。お前がまた暴走したんじゃないかと思ってきてみれば、いちゃいちゃいちゃ長いキスしてるし。心配して損した」

『覗いてたのか。変態だな疾風は』

「変態って 暁……お前最近俺に冷たくない……？」

『いや？どこも変わらないぞ』

「そうかよ……」

絶対嘘だと思いつつ、それ以上は言わない。長年の付き合いからそうしたほうが良いとわかっているからである。

「な、そろそろあの儀式やらないか？お前ももう不安定な生活送りたくないだろ？」

『とはいえまだ鈴音は完全に力を使いこなしているわけじゃない。今の状態でやったら失敗するか鈴音が危険だ』

「それはそうなんだが……。実は儀式を行う日、目星はつけてあるんだ。一番お前にも鈴音にも負担がかからなそうな日。」

『占いか何かで探ったのか？で、いつなんだそれは』

「七日後だ」

『七日後！？早すぎないか？鈴音はまだ

「…できます」』

二人の話を聞いていた鈴音は、暁から身をはなすと言った。揺るぎのない眼差しで二人を見る。

『鈴音、まだ力を使いこなしてないんだ。そんな無茶しなくていい』

暁の静止がはいるが、鈴音は静かに首を横にふる。

「大丈夫。これでも練習して少しはうまくなったし、本番は七日後でしょ？時間はまだあるよ。だから無茶なんかじゃないし、絶対うまくいくようにするから。だから信じて暁」

鈴音のまつすぐな眼差しに強い意志を感じ、暁はそれ以上何も言えなかった。

「鈴音、コイツを完全な龍にしてやってくれ。そうしないと暁はいつまでたつてもこの場所から出られない。また暴走するようなことがあれば今度は生かしてもらえない」

『！…？どういうことですか』

「そのまんまだ。今度暴走すれば、暁に命はない。もしそうなら天龍国の龍全てで暁を殺す」

疾風の口から残酷な言葉を聞かされる。天龍国の全ての龍で曉を殺す…？なんで？半端な龍だから？暴走すると大変だから？曉の方をみると彼は真剣な顔でうつむいている。

『儀式に失敗したらそうなる。だが仕方ないことだ。半端な生まれの者はただの出来損ないだ。誰にも必要とされない。必要とされないどころか煙たがられる。そういうものだ。だから死を何度も考えた。こんな苦痛を味わって生きるなら死んだほうがましだと。ただ鈴音と出会って、大切なものが出来て、失いたくないと思った。それまでは自分にとっての大切なものはなかったし、手に入らなかったから』今は鈴音を支えにして生きている。そう告白されて、自分ができることはただひとつ、儀式を成功させよう。鈴音は固く決意した。

「私、必ず成功させます。だから七日後…よろしくお願いします！」

「その言葉が聞けて良かった。さっきの話は万が一の話だからな。鈴音ならきつとつまくやってくれるって信じてる。頼んだぞ鈴音」

「はい！」

疾風は鈴音の返事に必ず成功させてくれると信じた。

「でもあんまり頑張りすぎて本番へるへるになってたら意味ないからほどほどにな」

「分かりました。気を付けます」

『…本当に大丈夫か…』

「なんだよ曉。鈴音を信用してないのか。コイツなら大丈夫だ。うまくやってくれるから心配すんな」

『そうじゃなくて…鈴音は頑張りすぎるところがあるから不安で』

「大丈夫だって。本人がそう言ってるんだ。自分の力の限界くらい自分で分かってるだろ。それにあの沙羅の生まれ変わりなんだぜ？何も心配することないって」

『沙羅…そうだな』

二人の会話に出てくる沙羅という名前。一体誰なのだろう、と鈴音は思う。疾風は自分を見ながら沙羅の生まれ変わりだといった。ならば沙羅は前世の自分？曉が見初めたという巫女の名前だろうか。

「沙羅って誰…？」

「沙羅は前世のお前。それで曉が惚れた女。すごかったんだぜ？当時は。よく中都国に出かけていっては沙羅のこと見てたんだって」

『沙羅は優しく美しかった。あんな女性が妻ならどんなに幸せだろうと思っていた。鈴音は沙羅によく似ている。それに彼女は巫女としての才能もあつたし完璧だった。』

曉が当時のことを生き生きとした表情で語る。本当に好きだったことを物語っているようだ。鈴音はそんな曉に胸がもやもやした。なによ、つまり私はその沙羅の代わりなんじゃない。今まで愛してるとかキスしたりしてきたのは全部自分に沙羅の面影を重ねていただけにすぎないのではないか。鈴音は無償に腹が立った。

『そんな彼女に恋人がいたと知った時はガツカリしたが、でも彼女を興入れさせないと俺は完全な龍にはなれないから、弥太には悪いが内心勝ったと思ったんだ。当時は』

「へへ、結構悪いヤツじゃん。曉」はははと二人は笑いあっていて楽しそうだ。鈴音はそんな二人にイライラとした。

『あの時はな。でも今は鈴音が…』

「もういいッ！！曉なんて嫌い！！大ッ嫌い　　！！！！」

「……………す…鈴音… ……どうした？」

二人は急に怒りだした鈴音にあっけらかんとしている。特に曉は突然大嫌いと言われて動揺する。

『な…なんで怒ってる？鈴音』

とりあえず彼女を引き寄せようと手を伸ばすが、鈴音はその手を叩いてかわすと、今度はぼろぼろと大粒の涙をこぼしはじめた。ぎよつとする曉。

鈴音は二人が見てるにも関わらず、次々と涙がこぼれてとまらない。

『鈴音……急にどうした。俺なにか気に触ることも言ったか…？』

突然怒って、泣きじゃくる彼女にどう対応していいのかわからない。そもそも自分が嫌われるようなことをした覚えもない。

「鈴音、どうした。言ってみるよ…」

これには疾風もどうしたものと困り果ててしまふ。曉もこんなに泣く彼女を初めて見るので、困惑していた。とりあえず手を伸ばしたら振り払われ、近寄ればまた嫌いと言われそうで怖い。二人はお互いに動けないでいると、

「うっ……ひつく………曉なんか……嫌い……」

彼女は弱々しく告げると顔を覆って走って行ってしまった。曉は嫌いと言われたショックと、呆気にとられてぽかんとつつ立っているしか出来なかった。

「もしも……追い掛けなくていいわけ……？」

疾風が心配して声をかける。

『……疾風……。俺なにか悪いこと言ったか……？』

「……さあ……でも一つだけはつきりしてることがある」

『なんだ！？教えてくれ』

「それは

鈴音はお前が嫌

いってことだ！！大の字がつくほど！！……って痛ッ！殴るなよ」

『そんなこと分かっている。まったく。期待して損した』

「鈴音のとこ行ってこいよ。なんなら俺が代わりに行ってやるっか？」

『待て。疾風に行ってもらうほどのことじゃない。自分で行く』

「はいはい……………。大ッ嫌い!!!なぐんて言われたからシヨツクで僕ちゃん行けな〜いって言うんだったら代わりに行ってやるうと思つて…つて痛え!!!?…何度も殴んなよ…」

『お前が馬鹿なこと言ってるからだ』

ふざける疾風をぐーで殴ると、暁は鈴音の後を追いかけた。

「うう…………ひつく……………なによお……………私は沙羅の代わりなんじゃない……………」

その頃鈴音は、物置でひとりいじけていた。書物や使われていない家具が山積みになっていて、鈴音はそこに隠れるように丸まっていた。先程の暁の言った言葉が頭から離れない。沙羅のことを話す暁の顔が消えない。

「沙羅は優しく美しかった。鈴音は沙羅によく似ている……………」と。

自分が似てるから?沙羅の生まれ変わりだから好きって言ったの? どんどん嫌な気分になってく。

「…暁が好きなのに…」

好きなのに。

彼も自分を愛してくれてると思っていたのに。

あれは自分に向けられたものじゃなかったの？ 私はあなたに抱き締められてキスされると、どうしようもなく愛しくて体がとろけそうになるのに。

暁に出会って、恋すら知らなかった自分がどれだけあなたに変えられたことか、あなたは知らないよね。

夜、男の人と寝るなんてこと恥ずかしくて出来るわけなかったんだ。でも、初めはドキドキ緊張して眠れなかったけど、あなたが緊張する私を優しく抱き締めてくれたから安心して眠れたんだ。

一緒に寝ようなんて言うから変なことされるんじゃないかって警戒したけど…。

そんなことなかったね。

それは自分に魅力がないから？なんて悩んだ時もあったけど…。抱きたいって言われた時は心の準備ができてなかったし、急だったからビックリして何も言えなくて。

でも暁はそんな私を察してくれたのか、いつかそうなれたらいいって微笑んでくれたよね。嬉しかったなあ…。大事にしてくれてるんだって思えて。でも暁が私を沙羅の生まれ変わりとして見てたなら悲しい。いくら私が沙羅の生まれ変わりだったとして、魂が同じで顔もよく似ているとか言われても私は鈴音だし、沙羅の時の記憶なんてもないから全くの別人なんだよ？

暁は沙羅だった私も、鈴音としての私も両方知ってるけど、私にはそれはわからない。

いくら前世の自分と言われても、私にとっては沙羅っていう他人ってくらいにしか思えない。だからつまり私は、今、沙羅に嫉妬してるんだ。暁が好きになったっていう相手。彼が愛しそうに彼女を語るのが許せなくて、だから怒ったんだ。そして同時に自分を見てくれてなかったんだって思ったら、悲しくて涙が溢れてきて。

「ハア……馬鹿……みたい。いじけて泣いたりしてさ……カッコ悪い……私……」

たくさん泣いたら少しは落ち着いた。冷静に考えられるようになってきた。胸のわだかまりは完全には消えてないけど。怒りにまかせて嫌いなんて言ってしまったけど、本当はその逆。好きだから、だから自分をみて欲しい。沙羅と比べないで。
ねえ、暁……？

「……暁……」

『呼んだ？』

聞き慣れた低音。振り向くとそこには暁がいた。いつからここに？
鈴音は涙を流し続けてはれぼったくなつた顔を見られたくなくてパ
ツと背けた。

「…なんできたの」

来てくれて嬉しいのについて可愛くないことを言ってしまう。

『鈴音が呼んだから』

「呼んでないよ…。あっち行って」

なんでこんなことしか言えないのだろう。

これではすねた子供と一緒にだ。

頭では分かっているのに曉がいると素直になれない。

謝りたいのに謝れない。

曉は鈴音の目線に合わせるために、その場にしゃがんだ。

『鈴音、俺が嫌い？』

子供に話しかけるようにゆっくりと、優しい口調で問いかける。

「……………嫌い」

『理由は？』

「……………」

『…俺のどこが嫌い？』

「……………全部」

曉はまいったな、と頭をポリポリとかいた。

『そんなに嫌われたんだ？俺。悲しいな』

小窓がひとつ、ぽつかりと開いてるだけの薄暗い空間に、曉の傷ついた声が響く。違う。こんなことが言いたいんじゃないのに。彼は優しい。優しくすぎて、つい甘えてしまう。

『鈴音、俺は愛してるよ鈴音のこと』

ドキツとする。二人きりの空間で愛を囁かれて胸が高鳴る。嬉しくて嬉しくて仕方がない。

私も好き。あなたが大好き。

『……でも鈴音は俺のこと嫌いなんだ。仕方ないか…昔っから一方的に好きなんだし』

「…の方が…き…でしょ…？」

『ん？もう一回言って』

また涙が溢れてくる。

『沙羅…の方が好き…なんでしょ？』

やっと声を振り絞って言ったことが嫉妬の言葉。惨めすぎて、でも言わずにいられなくて声を押し殺して泣いた。顔をふせて小さく丸まって泣く鈴音を包みこむようにそっと片腕で抱いた。小刻に震えながら泣いてる彼女が弱々しくて守ってあげたいと思う。それと同時に何故彼女があんなに怒って泣き出したのか、理由が分かっておかしな話だが嬉しくなる。

愛しさが込みあげてそっとキスしようとする、いやいやと首をふって拒んでくる。手をのばせば彼女は両手で阻止してくる。それを繰り返してるうちに軽く取っ組み合いのようになってしまった。

『鈴音……ちよっ……キスくらいさせて…?』

「いやあっ……」『鈴音……』

仕方なく強引に鈴音を組み敷くと、荒々しく唇を奪った。

「んっ　んん……やあ……暁……やめっ……」

『ハア…やめない。俺は沙羅じゃなくて鈴音を愛してる。愛してるんだ。分かってくれるまで絶対やめない』

鈴音の両手を床に押さえ付けると、再び唇をむさぼった。暁がのしかかってきて少しばかり重い。けれど、体重があまりかからないように気を使ってくれてるようだ。

「あ…かつき、やめて…」

観念したような瞳で見上げるが、まだダメだと目で訴えてくる。

『ダメだ、やめてやらない。俺がどれだけ鈴音を好きか、体に教え込んでやる。…そんなにやめて欲しいなら…俺を好きって言って。』

大嫌いって言われて傷ついたんだからな』
そう言って首筋に舌を這わせる。

「……っ……あっ……!!」

ピクンと体が反応する。恥ずかしい。

『いい眺めだ鈴音。かわいいよ…』

鈴音の着物に手をかけると、シユルツと音がして帯がはずれた。ウエストを圧迫していたものが取り払われて解放感があったが、それはつまりいつでも着物を脱がされる状況にあるわけで。鈴音は羞恥から慌てて着物を抑えつけた。

頬を赤らめながら観念してか

「好き」と言おうとした。やめて欲しいだけじゃくて、本当に彼が好きだから、謝罪の意味も込めて自分の気持ちを伝えようとした。

「曉…私…あなたが好 ああっ!!」

服の上からギュ…と胸を掴まれる。やわやわと揉んだり、鷲掴みにしてみたり強弱をつけられてもてあそばれる。

『鈴音……。聞こえないもう一度言っす?』

着物を握りしめている手をはがして頭上で押さえ付けると、もう片方の手で着物を脱がしていく。帯を外された着物は容易くはがれおちていき、真っ白い素肌があらわになる。

「あっ…! やだあ……………恥ずかしいっ……………見ないでえ…!」

抵抗しようにも両手を頭上で押さえ付けられてなすすべがない。

『クスッ…。好きって言うてごらん? そしたらやめてあげる。』

「うう……………曉、すきい……………大好き…ああっ! 胸っ…そんなにしたらダメえ…っ!!」

ちろちろと舌で胸の先端を刺激されて、たまらず腰をくねらせる。その扇情的な姿に欲望をかきたてられて、もっと乱れる姿が見たいと思う。

「なん…でっ。好きって言うてるのに…」

半分泣きながら訴えてくる鈴音の表情にまで煽られて、曉はもうやめられなくなってしまう。何かのスイッチが入ったように、夢中で鈴音の体を味わうと、未開のそこに手を差し入れた。

「きゃあッ……………!!」

ビクンと大きく体が跳ねて、反射的に脚を閉じた。

「あつ、あつ、曉、そんなとこ触っちゃ……いやあ」

いやいやと言葉では拒んでも、体が熱くうずいて変な感覚だ。鈴音は初めての出来事に怖くて涙が出てしまう。

「曉……あつ……！指　　やあ……！」

体の中に指が入ってきて、異物感と少しの痛みを感じて曉の体を離そうと必死に抵抗した。

だが、必死の抵抗も虚しく、彼には全く通用しない。

『鈴音、好きだ。好きだからこんなことするんだ。分かってくれ』
曉も余裕が無いらしく、なけなしの理性で鈴音を慰める。

『力を抜け、鈴音。ゆっくりでいいから深呼吸して』

羞恥と初めてのことに困惑しながらも言われたとおりに力を抜こうと努力した。

そんな健気な姿に愛しさを感じ、なんとか彼女に感じてもらうと優しく指を出し入れする。

「ふっ………うあつ………あつ……あ」

初めこそ痛かったものの今は痛くない。むしろ触られたところが熱をもって何かがおしよせてくる感じた。

怖くて曉の背中にしがみつく。

曉は指をゆっくり引き抜くと鈴音の脚の間に体を割り入れる。

脚を大きく開いた恥ずかしい格好に顔から火が出そうだ。

「やつ………こんな格好。ああ　っ……！」

曉のものが入ってくる。

指とは比べ物にならないくらいの圧迫感と痛みに耐えるため、曉の背中に思いきり爪をたててしまった。

『鈴音……愛してる』

耳元で甘く囁かれて身震いしてしまう。見上げると、暁が優しく切なげな表情で見下ろしてくる。こんな彼の顔を見るのは初めてだ。余裕のない、色っぽい彼の表情に胸が高鳴る。

「暁、好き、大好き。」

暁はその言葉を合図に姿勢を低くすると腰を動かし始めた。

『もつと言って…鈴音』

囁きながら、首筋や胸にキスを落としていく。

鈴音は突き上げられるたびに甲高い声をあげた。

「あんっ！、あっ、あっ、あっ…好き…好き…好き…暁…」

『鈴音…鈴音…』

最高のシチュエーションに、暁は夢中になって腰を動かした。その間鈴音はひっきりなしに声をあげ続けた。

「あんっ…！…なんか…へん…ダメなの…何かくる。怖い」
たえまなく与えられる快樂に達しそうなのだろう。

『何も怖くない。俺もいるから』

ラストスパートをかけて一気に突き上げる。

二人の荒い呼吸と甲高い声が響いて、鈴音はとうとう達した。

それを追い掛けるように、暁も鈴音の中にその思いを注ぎこんだ。

体を離れた時には鈴音は意識が朦朧としていたため、暁が綺麗に着物を着せてあげた。

額にキスをして、乱れた黒髪を手ぐしで直す。『鈴音？』

「…ん…」

眠そつな鈴音にわざと話しかけて反応を楽しむ。

『眠い？』

「ん〜…」

コクコクと頷く。

『寢室行こう。ここじゃ寝れないから』

「ここでもいい…」

『ここじゃ風邪ひく。俺につかまって』

ヒョイツと抱き上げると鈴音が首にしがみついてくる。動物の親子みたいだ、とクスクス笑って薄暗い空間から出た。

太陽は西に沈み始めてる。宵闇に包まれて鈴音を運んでいると向かい側から疾風が歩いてきた。

「やっと見つけたのか」

暁の腕の中で眠る鈴音をみやる。

『説得するのに時間がかかった』

何があったかは言うことでもないから言わない。

「泣き疲れて眠っちまったか」

『ああ。だから休ませるところなんだ』

「そっか、じゃ俺は行くわ。いろいろあるしな」

互いに別れの言葉を交すと、暁は寢室に鈴音を寝かせに行った。

やっと、本当に自分のものになった女性の寝顔に心が満たされていく。

『こんなに幸せな気持ちになれたのは初めてだ。ありがとう鈴音』

眠る鈴音の頬を撫でながら、聞こえていないと分かっているでもこの満たされた気持ちを言葉にせずにはいられなかった。

第十一話 鈴音のわだかまり（後書き）

暁君、ついに鈴音を襲ってしまいました（笑）話を考えている時に、いつこの話を入れようかずっと迷っていたので、ここぞとばかりに入れてみました。苦手な方には申し訳ありません。今後も頑張っていきたいのでどうぞよろしくお願いします（*^^*）

第十二話 約束

目が覚めたのは夜明け前。まだ星が瞬いている時間だ。
変な時間に目が覚めてしまったと思っただ鈴音は、もう一度眠りにつこうと横になる。

なんだか体が重たい。それに下腹部が少し痛んだ。

「……………私……………曉に……………」

……………抱かれたんだ……………。

あまりよく覚えてないけど……………曉にあちこち刺激されてあえいでいた気が……………

記憶を辿るっていくと顔だけじゃなく身体中が熱っていく。
パタパタと熱くなった顔を掌で仰いで落ち着こうと努力した。

「……………しちゃったんだ……………」

友人の中には何人が経験した時があるとかないとか学校で聞いた時があったが、自分が体験するとなると違う。

ハツとして周囲を見渡すと、曉はいない。どこに行ってしまったのだろうか、こんな夜更けに。

しかしよく見ると、いつも曉と寝ていた部屋では無いことに気づく。
そこは鈴音が与えられた部屋だった。初めて屋敷にきた時に好きに使っていいと言われた部屋。ここには鈴音の替えの着物や、着ていた制服などが置いてあって、着替えはたいていここでする。

ガラ……………と襖を開ける。縁側に顔を覗かせて左右を見渡すと、人の気配はない。

完全に目が冴えてしまった鈴音は縁側に出ると、裸足の足で曉が眠

っているであろう寝室に向かった。

ぺたぺたと廊下を歩いて部屋の前までくると、中から淡く灯りが洩れてくる。こんな夜中に起きているのだろうか？気になってスー…と襖を開けてみる。

覗きこむとそこには上半身裸の暁がこちらに背を向けて立っていた。肌が露になった暁をみるのは初めてだが、背がなにやら赤っぽい部分があった。

痣…？なんだろう…と目を凝らすとそれは赤い鱗だった。そう、暁が龍になって見せてくれた時のものと同じものだ。すると暁がくるつとこちらを向いた。

『鈴音、入るんだったらこっちにおいで』

「あ…うん…。でも着替え中（？）なんじゃ…」

目が合うと恥ずかしくなつて視線を下に向ける。

だって暁…上だけとはいえ裸なんだもん…。

暁を直視できないしていると彼が近づいてきて肩に羽織をかけてくれた。

『夜風は冷える。おいで』

「うん」

着替えを済ませた暁に手をひかれる。

それだけでドキドキと胸が高鳴る。

「あの…暁…何してたの？」

『ちよつと確かめてた』

「？何を？」

『背中。鈴音も見えただろう？』

暁の背中…赤い鱗があった。そのことを言っているのだろう。

「赤い鱗があつたよね？そのこと？」

『ああ、そうだ。そろそろ俺の鱗も新しくなる時期なんだな、と思つて』

「…新しく？それつて蛇の脱皮みたいな？」

『まあ…似たようなものだな。ただ脱皮とは違って古い鱗は残らない。勝手に消滅する。その日がちよつと儀式の日なんだ』

儀式。その言葉に緊張がはしる。

「どうしよう…私できるかな…もう日もないのに」

絶対暁を助けると決めたのに、いざ本番が間近だと思つと不安になる。

『大丈夫だ鈴音なら。毎日練習も欠かさずやっているし、充分力はある。自信をもつていい』

そつと鈴音を包み込む。

「私はいつも暁に元気づけてもらつてばかりだね……………ごめんね…」

『謝ることない。鈴音に頼るしかない俺はこのぐらいしか鈴音にしてやれないから』

「ありがとう… 曉……………私頑張るね……………あのね、… 気になっただけで儀式の日と曉が脱皮(?)する日って関係あるの?」

『ああそれは…』

龍の鱗が新たに生じる瞬間、それは龍の力が最も弱くなる時である。曉の場合は陽気が最も静まる瞬間と言える。だから新たに生じる一歩手前を見計らって陰気を流しこめば、鈴音の負担も軽くなるし、曉も陰陽のバランスがとれた状態で生じることができるのだ。

『ただ力が弱まる日は自分じゃわからない。だから疾風が占術を使える者に頼んで調べてくれたんだ。俺はここから出てはいけないから…』

曉の表情が曇る。

「…でも曉が完全になつたら外に出ていいんでしょう?」

『…ああ』

「私いつまでも不安とか言っちゃられないよね!絶対成功させる。約束するから、はい」

小指を曉の前にさし出す。

「曉も!」鈴音に言われて小指どうしを絡ませると、指切りげんま

んをした。儀式の成功を祈るように。

『嘘ついたら針千本飲ますのか…すごい歌だな』

指切りげんまんの感想を素直に述べる曉。

「そつだよ。だから安心してね。私約束はやぶったことないから」

『それなら安心だな』

お互いに笑顔になる。

きつとうまくいく。この時鈴音はそう確信していた。

第十三話 儀式

儀式当日　。

亥の刻。星が瞬いていてもおかしくない時刻だが、曇り空なのか星どころか月さえも隠れてしまっただけに見える。まるで儀式に対する不安を示しているような、そんな天気だ。

鈴音は襦みそぎをし、輿入れした時の衣装に身を包んで、その時を待っていた。

(緊張する…人もたくさん見に来てるし…どうしよう)

今、鈴音たちは屋敷から離れた広場（儀式が行われていたらしい）にいる。草原のようなこの場所の中央に、円の形になった石畳がある。そこが儀式を行う場所になっていて、鈴音はあそこに立つのかと緊張していた。

松明に囲まれたそこは、神聖な雰囲気を持たせている。そう思うのは夜の闇の中にボウツと松明に照らされているからかもしれない。

周囲を見渡すと見物人が何千と集まってきた。皆天龍国の住人達である。暁の、最高神が完全たる姿になる瞬間を見に来ているのだ。しかしそれだけじゃなく、万が一の時に備えての龍達も中にはいるのだ。

疾風や八重たち以外の龍達を見た時が無かった鈴音はあまりの数の多さに驚きと戸惑いが隠せない。そのため待機所ですっとうろろして、じっとしていることが出来なかった。

そこに疾風が入ってきた。

「鈴音、今日は頼んだぞ。俺らも援助するからな」

「はい。頑張ります」

「健闘を祈る」

「はい！」

疾風からの励ましの言葉に気合いをだす。（大丈夫、今までちゃんとやってきた。周りは気にしないで儀式に意識を集中させなきゃ）

「鈴音、疾風、時間よ」

呼ばれた。いよいよだ。

「わかった。鈴音、いくぞ」

「はい」

疾風に続いて待機所から出る。外に出ると見物してる人たちが嫌でも目に入ってくる。ザワザワとなにやら話し声が聞こえてくる。

「あれが曉様に嫁いだ巫女だったさ…」

「大丈夫なのか…？」

「さあな…。ただの娘にしか見えない」

見物人の注目が一気に自分に向いているのが分かる。自分を見て不

安だと言っている声も聞こえてきて、嫌な気分だ。

(不安不安って…私が一番不安なんだけど…)

「鈴音、聞こえないふりしとけ。今は儀式に集中しろ」

前を歩く疾風が周囲の声に気をとられている鈴音に気づいて言葉をかけてくれた。

「あ…ごめんなさい。ありがとうございます」

疾風、鈴音、八重、その他知らない人だが儀式の参加者三名が加わり、松明の中央の石畳にそれぞれ配置についた。疾風、八重、その他三名の計五名が五角形になるような形で立ち、その中央に鈴音が立った。

あとは暁が来ればすぐにでも始まるだろう。

ドキドキと心臓が早鐘を打っているが、目を閉じ、深呼吸を何度かして気持ちを落ち着かせた。

「……そろそろ始まるな…」

「…暁様は何をやっている？」

「今日で暁様が生きるも死ぬも決まるってわけだな」

暁が来ないことに周囲がざわつく。

「逃げ出したんじゃないか？死ぬのが恐くなったとかで」

「失敗したら俺たちに殺されるんだもんな」

「あゝ俺半端な龍じゃなくて良かった！」

酷い…。鈴音はもう緊張など吹っ飛んで怒りと悲しみがわいてきた。

（酷い言い方…。暁はずっとこんな言葉から耐えてきたの…？）

胸が痛んで涙が出そうになる。暁は何も悪くない。ただ陰の気が欠けて生まれてきてしまっただけ。それだけなのに。どうして少しみんなど違っただけでこんなこと言われなきゃならないのだろう。外側ばかりで誰も彼の本質を見ようとしていないのではないか？その方がよっぽど欠けているような気がする。

彼は優しい。とつても。何故だろう？きつとたくさん辛い思いをしてきただろうに。いや、だからこそ、痛みを知っているからこそ優しくなれるのかもしれない。

周囲の龍たちの言葉を聞き、暁のことを思うと涙が一筋流れた。泣いてる場合じゃないのに。

「巫女さんが泣いてるわ」

「どうしたんだ？」

「あの場にたつてみたら緊張で出来なくなっただんじじゃないか？」

「情けないな」

あまりの言い用に黙っていた疾風も、耐えられずに見物人たちに口を挟もうとしたその時。

『…………誰だ？我が妻を泣かせるのは』

暁の登場に、ざわついていた見物人たちが一斉にシン…となる。

カツ…カツ…と暁が歩く足音だけが辺りに響く。

「暁…」

『すまない。待たせた』

暁の手が優しく頬に触れる。

ああ…なんて温かくて優しい手なんだろう。触れるだけで心が落ち着く。

「おせーよ暁、待たせんな」

皆が見ているので小声でボソボソ呟く。

『すまなかつた疾風』

「周りのヤツらも静かになったし早くやろうぜ」

『ああ、だがその前に

皆の者よく聞け

ッ！！！この者は我が妻にして稀有けうな力を操る習志野鈴音である！
！この者に対する愚弄、侮辱は許さぬ。しかと肝に銘じておくが良
い！！！』

暁の一喝に皆が固まる。

「すごい…。暁、偉い人みたいだね」

『一応偉いんだけどな』

はは、と微かに笑うと、暁はすぐに真剣な表情になって

『……さて鈴音、頼む』

「！…はい」

「皆様、準備はよろしいですか？」

鈴音、暁を囲む五人のひとりが尋ねてくる。皆、静かに頷くとそれは始まった。

周囲の五人、疾風、八重たちがそれぞれ集中する。彼らは淡い光に包まれて、徐々に光を増していく。

すると五人が囲んでいる範囲だけ地面が光りはじめた。

石畳だった足元が黄味がかった柔らかい光を放ちはじめ、二人を包

んでいく。

鈴音はその様子を見ながら玉を強く握った。疾風たちが力を使い、暁が龍の姿になっただら鈴音の出番だ。

『鈴音：大丈夫だ。大丈夫』

いつもの優しい笑顔。

「うん、大丈夫：約束したもの」

鈴音も微笑み返す。暁はそれを合図にするかのように、姿を変えていく。

一瞬物凄く光ったかと思うと、目の前に真紅の龍が現れる。この姿を見るのは二度目。

何度みてもその姿は堂々としていて力強い。けれど鈴音を静かに見つめる眼差しはとても柔らかく、優しい。

暁だからかな？きつとそうだね。紅い大きな瞳の奥から彼の大丈夫って声が聞こえてきそう。

（私があなただけを助けるからね）

鈴音は静かに集中する。

自分の持つ全ての力を出しきるように。

目の前の龍の鱗が消滅をはじめ。新たに生じるために。まるで砂のようにあの硬くて丈夫な鱗が消えていく。

一枚一枚……サラサラと光の粉になって。

皆がその姿を見つめている。闇の中、光り輝き消えていくその姿は

美しく儂げで、どこか寂しい。

中都国

。

「榊、天龍国の方…見る。紅き龍だ…あれが暁……。鈴音もあそこにいる」

中都国でも儀式の刻限は伝えられており、脩斗も皇子としてその様子を見守っていた。

「ええ…そうですね。上手くいくと良いのですが」

「鈴音さん…どうか…どうか頼みましたよ」

霞乃も祈るように龍を見ていた。

今、中都国の民も、天龍国の龍たちも、皆が固唾をのんで見守っている。

その思いを込めるかのように鈴音は集中し続け、自分の力を具現化していた。それは龍の形に形成されていき、暁と同様の形となって現れた。

「これが巫女の力…？」

「龍が二匹いるようだ……」

鈴音自身も少し驚いていた。龍の形となった陰の気の塊。何故この

形になったのかはわからない。けれどそれで良い。

暁が陽の気の龍ならば、鈴音の作りだした暁（龍）は陰の気の龍。暁の欠けた部分。今、ふたつはひとつになる。

暁の鱗はほぼ剥がれおち、龍をかたどった光りの塊としてそこにいる。

そしてとうとう最後の鱗が剥がれおち、天に消えていった。

「鈴音、今だ！」

疾風の声が響いた。

「はい！」

鱗が全て消滅し、今度は再構築がはじまる。その前に。

（暁、どうか受け取って）

鈴音が祈ると陰の気の龍が動きだし、暁の体に絡みついていく。陰気と陽気の龍が触れ合った瞬間、物凄い突風に見舞われた。

「きゃあっ…！」

「うわっ」

激しい風に松明は倒れ、鈴音たちも立っていられない。地を這ってなんとか飛ばされないようにするものの、目が開けられない。

（何が起こってるの!?!）

「でかい陰と陽の気がぶつかりあった衝撃で竜巻が起きてる！鈴音、飛ばされんなよー！」

（分かってるけど……。強風で全く動けないよ）

ただ分かるのは、たくさんの悲鳴とゴオオと唸るような風が勢いよく吹いてるということだけだ。

まさか　　失敗　？

一瞬その言葉が鈴音の頭をよぎる。

失敗はつまり、暁の死を意味する。私…駄目だった？

…違う！約束したんだ。必ず成功させるって。だからお願い、上手くいって！

〔失敗か…〕

〔失敗だ…！暴走してるじゃねえか〕

〔どつする。殺すのか！？〕

〔けど、近づけないだろう〕

失敗の言葉が飛び交っている。絶望の空気が漂う。そんな…違つよ…。失敗じゃないよ…。

目を細めて空を見上げる。暁と、鈴音が作りだした龍が絡まって渦を巻いているのが見える。あの中に暁はいる。

「暁…帰ってきて…。ねえ…」

「鈴音…！ここを離れるわ！きて」

八重に腕をひかれる。けれどももう何も聞こえない。今はあの強風を生み出している渦しか見えない。

「…暁…」

「鈴音早く！こつちよ」

八重に無理矢理ひっぱられて連れてかれる。どんどん渦から離されていく。嫌だ

「あかつき　　！！！！」

声を振り絞って彼の名を呼んだ。

すると強風を生んでいた渦は、一気に凝縮したかと思うと、破裂した。

渦から太陽のようにまばゆい光が漏れる。

「……………っ……………！」……………。

……………。

……………。

…？
何も聞こえなくなった。あんなに唸っていた風も、たくさんの悲鳴も、全てが無にかえったかのよう。不気味なくらいの静寂感に包まれて、別の場所にきたみたい。

「……………鈴音……………あれ……………」

疾風の声。良かった。みんないるみたい。

閉じていた瞳を開けると、朝日が目にさしこんでくる。

眩しい。もう朝なの…？まばたきして目を光に慣れさせると、皆硬直して天を見上げている。

どうしたのみんな…何を見てるの…？

鈴音も皆と同じ方角をみる。

視線を空へと移していくと、そこには一匹の紅い龍。

「あ……………」

言葉を発する前に、天に浮く紅い龍に向かって走り出した。

帰ってきたのだ。暁が。あの渦の中から。膨大な力を使ったあとで足が上手く動かず、転びながら暁の元に向かう。

転んで着物や顔についた砂ぼこりも気にせず、ただ走った。

鈴音は龍の真下までくると、顔を見上げて名をよんだ。

「お帰りなさい！あかつ……………き……………？」

鈴音は近くにきてようやく彼違和感を覚える。暁はこんなに大きな龍だったっけ…？前より一回り、いやふたまわりくらい大きくなっ

てるような…。それだけじゃない、紅かった瞳が黄金に輝き、真紅の鱗は、端だけ黄味がかって光をはなっているかのよう。

「……曉なの…?」

おそるおそる龍に尋ねる。

『……そうだ。習志野鈴音、礼を言っぞ。これが我の真の姿だ』

「あ…はい」

さっきまで曉が戻ってきたことが嬉しかったのに、今は何故か嬉しくない。目の前のこの龍は、曉であって曉じゃない…。そんな気がした。これは誰…?

「…曉はどこ…?」

『我が曉だ』

「でも…「曉様だ…。最高神の誕生だ!」」

誰かが叫んだ。後に続いてわぁあと歓声があがる。皆が喜んでる。儀式は成功したってことだ。でも私は…

「鈴音、よくやったな。さすが巫女さんだ」

疾風が笑ってる。

「正直不安だったけれどあなたは良くやってくれたわ」

八重も私がしたことを誉めてくれる。ここはきつと…喜ぶところ
なんだよね。でも…

紅き龍を見上げる。

暁も私を見つめかえしてくる。

眼差しは今までと一緒に。けれどその瞳の奥の、心までは読めない。
これまでの私を見つめる時の温かさが伝わってこない。これはただ、
私を見てるだけの瞳。

私の愛した暁はどこ

？

第十四話 忘却

全てはうまくいった。

暁は欠けた陰の気を私の力で補うことで完全たる姿に生まれ変わったのだ。

それは喜ばしいことだと思う。皆が暁を認め、彼を助けたいという私の願いは叶ったのだから。儀式を行った日以来、暁は天龍国の王として祝儀をあげられた。もう龍たちは暁を半端な者として扱わない。これからはひとりの王として、それまで疾風や八重、美月以外立ち寄らなかつた者たちも屋敷を訪ねてくるようになった。何もかもが以前と変わった。そう、私と暁の関係も…。

「暁…今日、一緒に寝て？」

枕を片手に暁の部屋を訪れる。

『…わざわざ一つの布団に二人で寝る必要性は無いと思うが』

「…。どうして？前みたいに一緒に寝ようよ…寂しいよ…」

『前？……………私は一人で寝る。そなたは部屋に戻れ』

「…。……………はい」

寂し気に部屋を出ていく。暁は前の暁じゃない。

儀式をしてから暁は変わってしまった。口調も態度も。別人みたい。

「何でこうなっちゃうの……………？」

儀式を終えたあかつきには、暁との幸せな生活が待っているものだ
と思っていた。けれど現実とは全く違う。暁は鈴音に無関心、しかも
以前の仲睦まじかった話を見ると、何故か頭に？マークをつけて知
らないといったそぶりを見せる。私のことは知ってるけど、以前の
生活のことはまるで記憶にないみたいなのだ。

「完全になつたから、陰の気が欠けていた頃のこととは忘れてしまっ
たってこと…？」

そんなのって無い。以前のように暁に必要とされなくなったら、私
はどうやって生きていけばいい？彼に愛されてたから、一人違う世
界に放り出されても今まで頑張ってたのに。それすら無くなっ
てしまったら私にはもう。

鈴音は首にさげていた首飾りはずした。

以前暁からお守りしてもらったもの。彼の鱗の一枚から削り出し
て作ってくれた大事なもの。

「暁…私、あなたに会いたい」

あの頃のあなたに。

掌でそっと握り締めて、祈った。

鈴音が去っていった後、暁の胸に何とも言えない罪悪感が残った。

自分はさほど悪いことをしたとは思っていない。ただ一人で寝ると
そう言ったただけだ。だが、寂しそうに去っていく鈴音の華奢な背中
を見ると胸の奥がズキツと痛んだ。

これは一体なんなのだ？

自分の意識とは関係のないものが自分の中にある。そんな気分だ。
いや、ただの気のせいかな。

『陰陽の均衡がとれたばかりの体に馴染むにはまだ時間が必要みたい
だな…』

暁はそう解釈した。まだ新しく生じたばかりで調子は万全じゃない
のだと。

翌日。

疾風と美月が屋敷にやってきた。用件は特になく、遊びにきたのだという。

「よう！！元気にしてるか？二人とも」

爽やかに笑顔を向けてくる疾風。それに対し曉は『ああ』と短く一言。

「疾風さんも元気そうで何よりです」

鈴音も微笑みかえす。

「鈴音は本当にお疲れ。よくやったよお前は」

偉い偉いと頷きながら誉めてくれる。疾風は儀式が終わってから鈴音を誉めてばかりだ。

「誉めすぎですよ」

鈴音はクスクス笑った。

「いいや。鈴音は本当に巫女として頑張った！そのおかげで今の曉があるんだからな」

今の暁……

「……そうですね」

鈴音の表情がくもる。

「？なんだ鈴音、嬉しくないのか？」

「いいえっ……そんなことないです。もちろん嬉しいですよ？みんなに認められる龍になったんですもん。巫女としての努めを果たせてよかったです」「うんうんそうだよな。巫女として立派にやってこれで肩の荷はとれたし、今度は妻として暁を支えてやらなくちゃな？」

「はい……」

「暁も！そんな鈴音を大事にするよ！あ、そこは問題ないか。だって鈴音にベタベタだもんなお前。ははは」

「鈴音と暁様は仲良し仲良し」

美月と疾風は二人で勝手に盛り上がっている。

『……………』

「あの……私ちよっと席はずします。ごめんなさい」

「？」

「？」

盛り上がった二人はピタツと動きをとめて部屋をでていく鈴音を見送った。

「俺たちなんかしたか？」

「美月悪いことしてない」

「だよな〜？じゃあ曉か？」

『私は何も言っていない』

「だよな〜？……………変な鈴音」

鈴音は縁側に座りこむと首飾りを取り出した。真っ赤に光るそれは宝石のように美しい。

「曉……………」

愛しい人の名を呼ぶ。いつもだったら必ずと言っていいほどすぐに飛んできてくれた。今は違う。曉はいるけど、いないのだ。いるの

は最高神としての暁。鈴音を愛し、必要としてくれた暁じゃない。

「ねえ暁…私どうしたらいい…？あなたがいなくて寂しいよ…」

……………。

「ねえ…………龍になった暁の背に乗せてくれるって言ったよね…………？ずっと一緒だよって言ったよね？どうしていなくなっちゃったの…………？忘れちゃったの？」

首飾りに話しかける。当たり前だが返事はない。

「…………暁…………」

『……………』

鈴音が話している声が聞こえてくる。ここに彼女はいないのに。外に出ていったのに、まるで直接語りかけてきているようだ。何故彼女の声が聞こえる…………。

「ねえ 曉…私どうしたらいい…？あなたがいなくて寂しいよ…」

「……龍になった曉の背に乗せてくれるって言ったよね…？ずっと一緒だよって言ったよね？どうしていなくなっちゃったの…？忘れちゃったの？」

『……………』

「？ 曉どうした？ぼーっとして」

『…何でもない。少し席をはずす』

「お前もかよ！？」

パタンと襖の閉まる音とともに曉は消えた。

「ここの主たちは客の扱いがなってないよな？ 美月」

「美月知らない」

美月に同意を求めるが、彼女は特に気にしてないようだ。

「…そ。」

「それでね、私その時初めて白銀と会ったんだけど、正直変な人だ
なってると思って」

首飾りに向かって昔話をしていると、暁がやってきたのでやめた。

『……………』

「…疾風さんとはお話終わったの…?」

『…終わった。それよりそなたの声が聞こえたのだ。何故だ…?』

「知らないよ…。だって私はここにいたんだもの。聞き間違いじゃない?」

『いいや違う。確かにそなたの声が聞こえたのだ。…籠になった私の背に乗る約束をしたと言っていた。ずっと一緒にいるとも。最後は忘れてしまったのかと問うていたぞ』

「え…」ピタリと鈴音の言ったことを当てたことに驚きを隠せない。
だって私はここにいて、暁はここから離れた部屋にいたのに。

「もしかして…これ?」

首飾りを見つめる。赤い鱗が光を浴びて輝いている。

『それは…』

「以前の曉の鱗。お守りだって言って私にくれたでしょう？覚えてないのね…」

『…覚えていないも何も知らぬ。だがそれは確に私の鱗だ』

曉が一步鈴音に近づく。

「これは私のだよ」

ぎゅっと握りしめて隠すようなそぶりをする。

『何故そんなに警戒する』

「だってあなたは曉… 曉じゃない…か？」

『…私は曉だ。そなたに陰の気をわけてもらい完全な龍となった曉だ』

「それはそうだけど、あなたは私の好きな曉じゃないもの」

『…そなたの愛した私とは何なのだ…何が違う』

曉が鈴音の腕を掴む。

「どうしてそんなこと聞くの…」

『気になる。そこまで執着する理由が知りたい。私と以前の曉では何が違う』

ズイツと迫られて、鈴音は後ずさった。
何で今…？

「暁はたくさん私に優しくしてくれたの。たくさん愛情をくれたの。いつも私の心を満たしてくれたの…」

トン…と壁に背がつく。暁に腕を掴まれていて身動きがとれない。
暁の金の瞳が鈴音を捕える。

（もう…あの妖艶な赤い瞳じゃない。黄金の、透き通るような瞳に変わってしまったのだ）

『私では満たされないのか。鈴音』

「…だって…何度も言ってるけど、あなたは私の好きな暁じゃないから。私を愛してくれた暁じゃないから」

『…ならばそなたを愛そう。そうすればそなたも満たされる』

そっと抱き締められる。

久々の温もり。

彼は変わってしまったけれど、鈴音を抱き締める腕、しぐさは変わってない。思わずうつとりとして身を寄せる。

「…暁…」

『鈴音…以前の私はこの後どうした？そなたに口づけたか？それともこのまま抱き続けたか？』

「……………わからない。どっちもだったと思う…ただ、愛しあうこと

に夢中だったからよく覚えてない……」

鈴音は暁の胸を押し、体を離すと、はずしていた首飾りを下げた。胸もとにちょうどペンダントトップがきて、装飾と一緒にキラキラと輝いている。

『……………』

「私を愛してくれるって言うてくれてありがとう。でも好きになるって、なるうとしてなるものでもないでしょう?」

『……………だがそなたが以前の私ばかり気にかけるのは嫌なのだ。心が曇る』

「……………」

『私の意思とは関係なく、心の奥底で何かがそなたに反応するのだ。そなたが悲しそうにすれば胸が痛み、そなたが以前の私のことばかり話しているのを聞くと、少しの怒りを感じる。妙な気分だ』

「…そうなの…」

もしかしたら暁は私を好きだった気持ちを忘れていないのかもしれない。暗く沈んでいた心に一筋の光がさしこむ。

「暁、さっき言うてたけど私を愛してくれるの?」

『ああ。そして心の奥底に潜んでいるものの正体が知りたい。これはそなたに反応を示すから』

暁が心臓のあるあたりに手をあてる。

「私も知りたい…」

『……鈴音……』

「暁様」

美月が駆け寄ってきて暁の足元にしがみついて隠れる。

『何している…』

「鬼ごっこ 疾風が鬼なの」

「美月、頑張つて逃げなよ？疾風さん容赦なさそうだし」

「うん 疾風大人気ないから頑張る！」

ふふつと笑みがこぼれる。本当にいつも賑やかな人達だなあと。

おかしくて笑つてると本気モード全開で疾風が走ってくる。

「美月〜！！待てー」

「きゃあ！きたあ〜 じゃあね、鈴音、暁様」

美月は疾風が迫ってくるのを確認すると一目散に駆け出して行って

しまった。その後を疾風が追い掛けて風のように去っていく。

あまりのスピードに呆気にとられてると、暁が庭に出て龍の姿になった。やっぱり前より大きな体になっている。

「どこかに行くの？」

『一回りしてくる。しばらくしたら戻る』

「そう。いつてらっしゃい暁」

『ああ』

そう言うと龍は空高く舞い上がった。紅い龍が空を悠々と遊ぶ姿を、鈴音は見えなくなるまでずっとずっと見ていた。

第十五話 弥太

「榊、鈴音は儀式成功させたみたいだな」

「そのようですね。鈴音さんは立派に巫女としての努めを果たされたわけですよ」

「そうだな…。だからか知らないけど、最近暁が良く空飛んでるの見るし」

「ほお…そうなんですか…？たまに消えると思ったら皇子は空なんか眺めてたんですね？今も仕事さぼってますし」

「う…。たまたま見たただけだ。しょっちゅう見てるわけじゃない。たまたま外を見たら暁が飛んでて…ってほら。今日も飛んでる。見てみる榊」

修斗に促されて外をしてみる。紅い龍が上空から国を見守るように、ぐるぐると回っている。

「本当ですね。立派な姿だ…あ…なんだかこっちの方来ますよ皇子」

「中都国に…？何しに」

「さあ？皇子、出迎えたほうがいいんじゃないですか？」

あからさまに面倒そうな顔をする修斗。

「ただこっちに向かって飛んでるだけだろ。俺に用があるってわけ

でもあるまい」

「それはそうかもしれないですけど……」

全く動こうとしない修斗に困りはてる。龍はすぐそこまできているのに。

「皇子、龍神がこっち見てますよ……?」

「嘘つけ」

修斗は手にとった書物を読み始めてしまった。

「嘘ついてどうするんですか。やっぱり皇子に用があるんじゃないですか?」

仕方なく書物から目をはなしてみると、暁が空に停滞してこちらを見ている。様子を伺っているのだろうか。

「……………龍が俺に何の用だ」

「皇子…なに喧嘩売るようなこと言ってるんですか」

龍神を恐れぬ皇子の態度に背筋が凍るような思いだ。相手は国を壊滅的に破壊した暁であるというのに。

『……………そなたが中都国の皇子か』

低い声が空気を震わせる。

「そつだ。俺に何か用か、龍神」

『…特に用はない。ただ久々の外。千年の時を経た今、中都国を統べる者の顔を知っておきたかった』

「ならば龍神、あなたの顔も見せるべきじゃないか？俺は天龍国のことを全くといっていいほど知らない。強いて言えば疾風くらいか」

短期間だが疾風と行動を共にしたときもあった。巫女の力について調査した時だ。その時に疾風を知り合ったのだった。

『…わかった。そちらの城に足を踏み入れることになるが良いか』

「別にいいさ」 修斗はそつこつ了承すると、暁は姿を変えた。眩い光に包まれ修斗と榊の目の前に現れたのは眉目秀麗、銀髪、金の瞳の青年だった。その美しさに男といえど目を奪われる。

「……………もつとおっさんかと思った」

修斗がボソリと呟いた。榊が慌てて注意する。

「皇子、もう少し口を慎んで下さい！」

『構わない』

二人を見て、暁がクスリと笑った。

「じゃあ改めて…、私が中都国の皇子、修斗と申します。お初にお目にかかれて光栄です。龍神暁」

『さて…初めてかな…？そなたは昔、会ったことがあるのではないか？』

「……………。…どういう意味かわかりかねます」

『…隠すことでもなかるう』

「……………」

修斗は沈黙する。その横で榊が二人の会話に入っていけず、ただ聞いていた。

「…あなたはどこまで知っている」

『知ってはいない。感じただけだ。そなたにはあの男の面影がある』

「榊、お前は下がれ。龍神と二人で話しをしたい」

真剣な眼差しでそう言われ、榊はおとなしく下がった。自分にはわからない二人の会話。しかしそこにはピリピリとした緊張感みないなものが漂っていて、自分はその場においていいものかと思っていた。皇子は龍神と話すのは初めてのはず。しかし龍神の口ぶりからして前に二人は会っていたのだろうか？疑問を抱きつつ、榊は部屋の外で待機することにした。

「…さて、俺が誰に似てるって…？」
「……………問わなくともそなた自身が知っているだろう。初めて会う私にそう挑発的な態度をとる理由を……………」

「……………ああ、そうだな。こんな記憶を持ったまま生まれたことを呪

「よ」

皮肉がましく笑う。

『そうか。ならば私を覚えているのだろうか』

「ああ…全部な…。久々だな。まあ、その姿のあんたと会うのは今日が初めてなんだが」

『そうだな。何せ千年ぶりだ、弥太よ』 「忘れもしないぜ？あんたに殺された日をな」

『こちらも覚えている。そなたは沙羅を殺した』

「あんたに娶られるくらいならまじだと思っただけだ。どうせ俺も沙羅を追って死のうと決めていたからな。だが、なんの因果か知らないが、またあんたに会った。沙羅も鈴音として生まれ変わっていた。俺みたいに記憶は残ってなかったみたいだが」

修斗はゆっくり部屋を歩きながら話しを続けた。

「それが幸か不幸か…、もう一度やり直すきっかけになると思っていた。だが…その時すでに遅し。あんたはとっくに永い眠りから目覚めてしまっていた。全く…永遠に眠ってて欲しかったんだけどなあ…。あんたはことごとく俺と沙羅の邪魔をする」

『邪魔をするのはそなただ弥太。巫女と龍は必ず引き合わされる。それを狂わせたのがそなただろう』

「巫女を愛して何が悪い。沙羅も人間だ…人間の女だ！それなのに

半端な龍一匹のために何故アイツが犠牲にならなきゃいけない！！
それこそそつちの勝手だろう！？龍神に見初められたとか都合の良い言葉を使って、まるで選ばれたことが幸せみたいな言い方して…
！そんなのおかしいだろう！？皆が認めても、俺は許せなかった！
「！！」

弥太の、激しい思いをぶつける。ずっとずっと胸に秘めていた曉への怒り。

『……そこまで怒りながら、何故今回も阻止しなかった…？』

激怒する修斗にあくまで落ち着いた様子で言葉をなげかける。

「俺はこの国の皇子だ。やがては王となりこの国を統べる者となる。そんな人間が、再び国を犠牲にしてまで阻止する気にはなれるか…？できるわけない。千年前の悲劇を繰り返すわけにはいかないんだ」

『……………。沙羅とそなたを引き離したことは詫びる。だが、私にも沙羅は…巫女は必要だった。それに、愛していた』

「愛していただと…？」

『…前の私が』

鈴音が好きだと言った以前の私。忌み嫌われ、孤独な日々をさいなまれた私。

「意味がわからん」

『分からなくていい』

何を言っても、こっちが激怒していても眉ひとつ動かさず、淡々としている曉に努気も萎えてくる。

「……あなた…大分変わったな。昔はちょっと触発されたら行き過ぎなくらい暴れたくせに、今は気持ち悪いくらい冷静といか、あっさりしててさ…」

これが儀式成功の結果かと思うと、かなりの効き目だと思った。修斗は溜め息をつくと床にドサツと腰をおろした。

曉は沈黙したまま修斗を見ている。互いに沈黙し、それぞれ思うことはあっても口には出さない。千年前はある意味敵だった。今もそれは変わらないかもしれない。

しかしこれ以上言い合っても仕方ない。憎しみの輪から抜け出すには己が変わらなくては。

「……。沙羅…鈴音は元気にしているか」

『ああ。…それから、今だにそなたからの文を大事に閉まっているぞ』

文…。一度だけ鈴音に送った手紙。鈴音が輿入れしていった日。一人送り出される彼女の身を案じて送った手紙だ。何を書いたかなんてもう覚えていない。それに鈴音は文字は読めなかったはず。それなのに今だに持つてるといふのだから信じられない。が、嬉しくもある。

「馬鹿だな…。輿入れしたってのに他の男が送った手紙をまだ持つてるのか…アイツは」

僅かに苦笑する。

「…あんた…本当に何しにきたんだ」

人を怒らせたり、喜ばせたり、俺の心を揺らして遊んでいるのか？

『中都国を統べる者を知るために』

本当かよ……。

「そうかよ…だったらもう分かっただろ？ 中都国はいずれ俺が統べる。今は父がいるがな。………そうだ…あんた鈴音に伝えてくれ。たまには中都国に来てな」

『……分かった。それと…そなたには感謝する。そなたの顔を見て、少し思い出したことがある』

「あんたに感謝されることなんてあるのか……？ ……ま、いい。…千年前じゃあ考えられなかったな。憎みあうはずの俺たちが、こうやって面と向かって話し合うなど。怒りしか沸かなかったのに」

脩斗は微かに苦笑すると、暁のほうへと向き直る。

「ともかくだ…。俺は確かに弥太の記憶がある。だから弥太同然だ。けどあんたからはそう見えても、他のやつらからは俺は脩斗という人間として見ている。だから俺を弥太とは呼ぶな」

『ああ。わかった。お前がそう言うならば』

それを聞くと、脩斗は疲れきったように肩を落とした。

「ハア…少し疲れた…：…なあ…あんた…、不本意だが、鈴音を頼む。
…あいつはあんた達といて幸せそうにしていたからな…。」

暁は静かに頷く。

「俺は、なんてことをしたんだろうな…。あいつを殺すなんて。鈴音が聞いたら俺のこと嫌いになるだろうな…。」

ボソリと暁には聞こえない程度に呟く。本当に罪なことをしたと、懺悔できるならしたいものだと思つた。と脩斗は思う。

『そろそろ帰る。邪魔をしたな』

「ああ……。」

暁は再び光をまとつて龍へと変じ、夕空へととびたつた。一人部屋に残された脩斗はしばらくぼーっと物思いにふけた。

「お母さん見てー！赤い龍が飛んでるー」

「あれは暁様よ。龍神様。とっても偉いのよ」

城下から親子の会話が聞こえてくる。手をつないで仲睦まじそうに歩いている。

(赤い龍…。龍神は帰っていったのか?)

脩斗に部屋を出てくよう言われて忠実にそれを守っていた。だが、外からの会話を聞くと、暁は帰っていったのだらう。ならば今部屋には皇子ひとり。入っても良いはずだ。榊は部屋の前に立つと、中にいるであろう脩斗にひとこえかけた。「皇子？お話は済みましたか？入りますよ？」

すると少し間があって返事が返ってきた。

「ああ…入れ」

疲れたような元気のない声。

「どうしたんです。喧嘩でもしました？そしてついでに負けたりでもしたんですか」

「馬ア鹿ちげーよ…」

「じゃあ何があつたんですか」

頭を垂れて、元気なさそうにされては、暁に何か言われて落ち込んでるようにはしか見えない。「榊：俺が弥太だって言ったらどうする？」

突拍子もないことを聞いてくるもんだと思う。

「伝承の弥太ですか？…そうですね…とりあえず頭大丈夫ですか？
って聞きます」

「……………。…フツ…そうだな。変な質問をした。忘れてくれ」

「なんだか皇子…悟ったみたいだな顔してますね…。気持ち悪いで
す」

「……………失礼なやつだな」

「皇子限定です」

「…そんなのいらん」

「はは。冗談ですよ」

「お前が言つと冗談に聞こえない」

「まあいいじゃないですか。それより仕事に戻って下さい。サボリ
すぎです」

さっさと仕事を済ませるように催促する。修斗は暁が来てせつか
く忘れかっていた用事を掘り返されて一気に気落ちする。

「皇子、いつまで頂垂れてるんですか。シャキッとして下さい。一
度殴って目え覚めます？」

榊がボキボキと拳を鳴らして迫ってくる。顔は笑っているが明らか
に陰りがある。冗談なんかじゃない。本気の顔だった。

「まてっ！…やらないとは言っていない。すぐ終わらせる。ていうか

「元気ない主に対して言うことがそれかっ……」

脩斗は疲れた体を叩きおこして柵から逃げるように慌てて部屋を飛び出していく。

残された柵はどこか楽しそうな様子でそんな主の後を追った。

第十六話 帰ってきた暁（前書き）

少しだけ性的な表現がありますので、ご注意ください。

第十六話 帰ってきた曉

「曉まだかな…」

縁側にちよこんと座りながら曉の帰りを待っている。昼間出かけると言つて飛びたつてから随分経つが、帰ってくる気配がない。

「何かあつたのかな…」

元いた世界とはだいぶ違うので、交通事故つてこともないし、物騒な事件に巻き込まれたつてこともないとは思うがやっぱり心配になる。というよりも、帰りが遅いと感じるのは鈴音自身が一人で暇をもてあましているために、淋しいからという理由が大きい。広い屋敷に一人は静かすぎて淋しいのだ。

「そつだ…たまにはご飯作つて待つてようかな」

私の世界の料理を食べたら曉喜んでくれるかな…。そう思つと彼のリアクションが気になつてきて、いてもたつてもいられずに急いで立ち上がつて調理場へと駆け出す。

料理がうんと得意つてわけでもないが、多少は作れるのでどんなメニューにしようかと迷つてしまふ。「…うーん…とはいえこの世界にある材料で出来るものつて…、そつだ！肉じゃがにしようかな。煮込むだけだし、簡単で美味しいものね」

何を作るか決まつたところで早速準備にとりかかる。なんだか新婚さんみたい。手料理を作つて夫の帰りを待つ、結構ウキウキするものだと鈴音は思つた。

ぐつぐつと鍋が音をたてている。だんだん良い香りもしてきて、お腹の虫がなり始める。日もおちて暗くなり、そろそろ暁も帰ってくるだろうと思う。喜んでくれるかな…と頬杖について待ってる。と、ビュウと強風の音がして、暁が帰ってきた。

「！暁、おかえりなさい」

暁が帰ってきた気配を感じて、すぐさま彼の元に駆け寄り、ニコッと笑顔で出迎える。

『…ああ…ただいま』

鈴音の屈託のない笑顔につられてフツと笑顔になる。見たところ彼女はとても上機嫌で、どこかそわそわと落ち着かない様子に見える。何かを見せたがってうずうずしてる子供のようだ。

『何をそんなにそわそわしている？』

「えっとね、暁に見せたいものが…というか、喜んで欲しいなあと思ってる…とりあえず来て？」

鈴音は自分についてくるよう手招きすると、前を歩き始めた。余程自信のあるものなのか、自分より一回り小さい彼女の背中に早く見てと書いてあるようだ。鈴音に導かれ、ついて行った先に見たものは。。。

『これは……』

「今日ね、私が晩御飯作ってみたの。私のお母さんがよく作ってくれた料理なのよ」

そう言っただけ差し出されたのは味噌汁に、肉じゃが、おひたしといった現代ではよくある家庭料理であった。

『…鈴音の世界の料理か…』

「うん。あの…食べてくれる？」

鈴音としては失敗しないような、誰にでも美味しく食べられるメニューを選んだのだが、家族以外で誰かに食べてもらうのは初めてなので、ちよつと恥ずかしい。ましてや好きな人に手料理を食べてもらうのはなおさら気恥ずかしいのだ。

『鈴音の手料理は初めてだ。食べる』

「本当？じゃ、一緒に食べよう？」

少し照れながら暁と向かい合うように座ると、自分のぶんも用意して顔の前で掌を合わせた。

「いただきます」

『…。いただきます』

ワンテンポ遅れていたいただきますの挨拶し、鈴音が作ったという料理に箸をつける。暁は内心感動していた。鈴音が自分のために作ってくれた、ということが。

昼間脩斗と会い、彼が弥太の生まれ変わりだと感じとった時、自

分の中でまた何か胸を揺さぶるような感覚に陥った。前は罪悪感。今日は激しい怒りに近い感情と敵対心。沙羅を愛し、鈴音を愛している自分の心が、脩斗・弥太、と分かった時に、沙羅の命を奪った人間として敵対心をかきたてたのだろう。脩斗を観察していると、沙羅を愛していた時の気持ちが少なからず蘇ってきた。

理由はわからない。けれど確かに自分は沙羅を愛していた、という気持ちは思い出した。そして目の前にいる鈴音も…。

じっと鈴音の顔を見つめる。今は自分の気持ちは嬉しいと言っている。鈴音が自分のために料理を準備して待っていてくれたということ、その行為が。

「……暁、ご飯美味しくない？口に合わなかったならごめんね？」

箸を休め、あまり手をつけていない暁に、自分の料理が口に合わなかったのだと誤解する。

『いや、違う。美味しい…』

「本当に？」

『ああ』

それを聞いて鈴音はホッと胸を撫でおろすと、ニコッと嬉しそうに微笑んだ。

「今日の肉じゃがはね、私の世界では、よくお袋の味って言われるの。それくらい親しまれてる料理なんだよ。私の家ではあと糸こんにゃく入れたりするんだけど、こんにゃくはこの世界に無いみたいだからちよっと残念かな」

『こんにやく…？は分からないが…本当に美味しいと思う』

「ありがとう」

二人は他愛のない話をしながら食事を済ませると、鈴音は縁側に座って月を眺め、曉も鈴音の横に座って同じく月を眺めた。

今夜は三日月。

綺麗に弧を描いた細い三日月だ。

庭の草むらから少し虫の鳴き声が響く。

夏が近づいている証拠だ。

思えば鈴音がこの世界にきてから約四ヶ月が経った。

曉のところに嫁いでからは大体三ヶ月。

三ヶ月だと、まだまだ出来立てほやほやの新婚さんなんだなあ」と鈴音はぼんやり月を眺めながら思った。

こてん、と右隣に座る曉の肩に寄りかかる。ちよつとだけならいいかな？と思つてやつてみたのだ。恋人どうしみたいなのを。

思えば嫁いできてからこの屋敷、龍宮から儀式や巫女について調べた時以外は一步も外へ出たことがない。天龍国の町並みはどうなってるんだろう？中都国みたいな感じで皆生活してるのだろうか？など、外への興味と外に出たいという欲求が生まれてくる。それに曉とデートを試してみたい、というのもあった。

「ねえ、曉。私、曉とデートしてみたい」

少し甘えながら、曉にデートのおねだりをする。

『でえと…？』

「あのね、一緒にお買い物したり、遊びに行ったりするの。恋人どうしならよくすることなんだけど…駄目？」

『……………』

暁は少し考える。考えるというよりは記憶を辿っているのだ。儀式を行う前の夜。鈴音とともに必ず儀式を成功させると約束した。その時ちらつと鈴音が外に出ていいのか？と言っていたのを思い出す。少しずつだが、鈴音との思い出のようなものが蘇ってくる。それに今日、自分一人だけ悠々と中都国まで出かけていっという、鈴音だけ留守番させるのはおかしな話だと思った。

『明日、行くうか』

「いいの？」

『ん』

「やったあ！約束ね！はい」

鈴音はそう言って小指を差し出してくる。暁は鈴音が何をしようとしているのか察すると、同じく小指を差し出して、彼女の指に絡ませた。前にもやった指切りだった。

「これで約束完了。暁、明日楽しみにしてるからね」

満面の笑みを浮かべて、抱きついてくる。暁はそんな鈴音が可愛くて、抱き締めかえすと額にキスをした。すると鈴音が驚いたように目をぱちくりさせて見つめてくる。

「珍しいね。暁がキスしてくるの」

別段珍しくもないのだが、今の暁だから、と思うと今まで普通だ

ったことも不思議な行為に思えてくる。

『珍しくもないだろう？前はたくさんしてた。しょっちゅうかな。こうやって…』

角度を変えて、顔を近づける。唇と唇が触れ、微かに鈴音の唇が開いた瞬間に舌を侵入させる。

「ん…」

舌の侵入に反射的に身を引いてしまいが、肩をしっかりと掴まれていて身動きできない。

「…あれ…曉、しょっちゅうしてたって思い出したの？」

『んー…ちよつとだけ』

「なんで？こんな急に」

『多分……中都国に行ってきたからだ。きつと』

「中都国に何かあったの？」

『まあ……ちよつと（昔からの恋敵がいたかな……）……』

「……………」

『……？』

じーっと鈴音が自分を見つめてくる。

『なに？物足りなかった？』

「違う……でも……本当に思い出したんだね……。だって暁が暁らしいもの」

儀式が終わってからのというもの、彼はどこか他人行儀で冷たかった。けれど、思い出したと言ってる目の前の暁は違う。

「暁、そもそもなんで忘れちゃったの。私、最近一人でいること多かったんだから」

『あ………すまない。おそらく儀式の衝撃でちよつと頭から抜けてみたいで。俺も信じられないな。鈴音をほつたらかすなんて』

「本当だよ！急に態度変わっちゃうんだもん。嫌われたかと思ったんだよ？私ずつとこのままだったら帰ろうって思ったんだから！」

『本当にすまなかった鈴音。だから落ち着いてくれ。それに、鈴音には悪いが、俺は鈴音を元の世界に帰す気はないから』

興奮する鈴音を抱き寄せ、なだめるようにいい聞かせる。

『鈴音を帰す気はないから。たとえ鈴音が俺のことを嫌いになっても、やっと手に入った奥さんを手放す気はないよ』

「……………じゃあ、もう忘れたりしないで……」

『……ん。』

互いに見つめあい、触れるだけのキスを交す。

『……………鈴音』

「…なあに？」

『久々に…しないか？まだ俺たち一回しかしてないし。物置じゃ狭かったらどう？』

物置。そこは二人が初めてひとつになった、思い出の場所。……のような、そうでもないような。とりあえずロマンチックの欠片もない場所だったというのは確かである。

『鈴音』

「え…！あ…曉！？」

フワツと体が浮いて、抱き上げられる。そのまま寝所まで連れられ、布団の上に寝かされた。

「待って…曉…」

恥ずかしそうにもじもじしている鈴音の上に覆いかぶさる。

「明日出かけるのに…起きれなくなっちゃう」

『昼くらいからじゃ駄目か？』

問いかけつつ、答えも待たずにすでに鈴音の着物を脱がしにかかっている。

「出かけるのは何時でもいいけど…」

『なら、いいだろう?』

多分今拒んでも、曉はきつとやめないに違いない、と鈴音は思う。初めて彼に抱かれた時もそうだった。何かの拍子に一旦スイッチが入ってしまつと、やめられなくなってしまうのだ。それに鈴音自身も彼に抱かれるのは嫌ではなかった。むしろ望んでいるくらいだ。構ってもらえない。愛してもらえない。ほつたらかし。そんな寂しい中、望んでいたのは彼の愛だったから。

愛して欲しい

「うん…。いいよ…?」

頬が熱くなつてくのを感じながら、曉に抱きつく。微かに香のかおりがする。

曉は抱きついてくる鈴音に優しくキスすると、壊れ物を扱つように、優しく着物を脱がせていった。鈴音はされるがままでは良くないのかな?と思ひ、彼の真似をして曉の着物に手をかけてみた。おずおずと、恥ずかしがりながらも一生懸命になつて鈴音が微笑ましくて、心の中でクスリと笑つた。

互いに肌が露になると、鈴音は急激に恥ずかしくなつて腕で胸元を隠した。

だが、そんなちょっとした抵抗も、曉によつて払いのけられてしまつ。

結局胸元を覆っていた腕は、頭の両サイドで押さえ付けられる形になる。

「む…」

身動きとれない体勢に口を尖らせる。

『鈴音が隠すからだ』

そんな不満そんな唇を奪つように舐めとると、あっという間に艶めいた表情へと変わる。

「ん……はぁ……」

時折漏れる鈴音の吐息が曉の欲情をそそる。それでなくても久々の肌の触れ合いで、興奮ぎみなのだ。そんな甘い声を出されては我慢ができなくなる。

『久々の情事だ。楽しもうな。』

「う……うん。」

はにかむ鈴音を腕の中に抱いて、互いに深く深く求めあった。

第十七話 初デート

『鈴音、起きろ。出かけるぞ?』

「ん〜……もうちょっとお……………」

『デート、するんだろ?』

「でえと……………!?!」

ガバツと勢いよくはねおきる。

「今何時!?!」

『巳の刻。安心しろ。まだ午前中だ。』

それを聞いて安心する。結局昨夜はなかなか曉に離してもらえず、何度も抱かれたのだった。おかげで睡眠不足である。なのに早起きできてる曉が不思議でならない。

『鈴音、ほら、服。裸のままじゃ出かけられないぞ?』

そう言って差し出された着物を受け取り、袖とおす。その様子をじっと見ていた曉が側に寄ってきて、俺がやるうと言い出した。

「着付けてくれるの?」

『たまにはな。』

曉は手慣れた手つきで着物を着せていった。鈴音はそれを感じしながら見ていた。最後に帯をしめれば着付けは完成。

「わあ……。早いね曉。」

『鈴音よりは慣れてるからな。さ、出かけるか鈴音。』

曉は鈴音を抱き上げると、縁側から庭へと出た。

「曉、ここ庭だよ？玄関は反対だよ」

『ん？ここでいいんだ。ちょっと待っててくれ。』

庭の真ん中に降ろされると、曉は少し離れて立ち止まった。そして、彼が強い光に包まれる。

(あ……。これって……)

光に目が慣れてきた頃、そつと目を開けると、そこには鈴音が思ったとおり、大きな紅い龍がいた。

『鈴音、乗れ。』

低い、心地よい声が響く。

「いいの！？あ……。でも……。高くて乗れない。」

乗るにしても大きくてどうやって乗ったらいいものか迷っていると、曉が頭をさげたと、

『俺の角に掴まればのれる。』

鈴音は言われたとおり曉の角につかまると、よじよじと頭の上に登った。それだけでも高く感じる。

曉は鈴音が乗ったのを確かめると、頭をもたげた。

「きゃあっ!!」

ゆったりとさらに地上から離れ、驚きで声があがる。

『大丈夫か？落ちないようにつかまっている。』

「うん。角に捕まってるから大丈夫。」

その言葉を合図に、曉は少し姿勢を低くすると、足をバネにして一気に空へと舞い上がった。

「きゃあああー!!」

どンドン上昇していき、鈴音は曉にしがみついているので精一杯だ。

『鈴音、もう大丈夫だ。目を開けてみる。』

「うう…。」

しばらくすると上昇するときの揺れがおさまり、ゆるやかになった。揺れがおさまった所で、おそるおそる目を見開くと、そこには広大な大地、青々とした空。風に誘われ、どこまでも流れていく無数の雲たち。

「わああ〜……！すごいーい！！！」

初めて見る景色に、感嘆の声があがる。

「すごいー！すごいよ曉！こんなに綺麗な景色見てたの！？雲が近いよっ！なんだか掴めそう。あ！アレ何？曉」

『ああ、あれは天龍国で最も栄えている有明という名の町だ。俺はあそこで生まれた。』

「あそこが曉の生まれた町。曉、私そこ行きたい。だって曉の実家があるってことでしょう？」

『……………まあ。』

「そういえば曉の家族構成って知らないよ？お父さん、お母さんっているんでしょう？」

『ああ、あれは天龍国で最も栄えている有明という名の町だ。俺はあそこで生まれた。』

「あそこが曉の生まれた町。曉、私そこ行きたい。だって曉の実家があるってことでしょう？」

『……………まあ。』

「そういえば曉の家族構成って知らないよ？お父さん、お母さんっているんでしょう？」

『……………』

急に口ごもる彼に、何かいけないことを言ってしまったのだろうか？と心配になる。まさか 曉には家族がいらないとか！？

「曉…ごめん。変なこと言った？」

『いいや…。両親はいる。けど、全然仲良くないんだ。』

それに対して反射的になんで？と言いかけたが、それを聞いたらデートしにきたのになんとなく沈んだ空気になりそうなので、また今度聞くことにした。

『…鈴音、ぱつと見どころか気になる所あったか？』

「え？んーと、やっぱり町に行ってみたい。あとは…アレ！あそこに行きたい！あの湖みたいな所。」

『わかった。』

曉は進行方向をかえ、鈴音が落ちないように気をつかいながら、ゆっくり地上へと降り立った。

着いた場所は有明という町。人がぞろぞろ行き来しており、活気のある町だった。こんなに人がいたんだ。キョロキョロと物珍しそうに見ている鈴音の肩を、人型に戻った曉が抱いた。

『行こうか。』

「うんー！」

嬉しそつに答えると、鈴音が指を絡ませてきた。

「手、繋くっつつ？」

「ん」

鈴音の手を握り返してやると、温かさが伝わってきて幸せな気分になる。

この温もりは決して離さない。何がなんでも

活気溢れる人混みをかきわけ、歩いていると、背後から声をかけられた。

「おや？ 曉様ですかい？」

振り向くと気さくな感じのおじさんがいた。

「灰かい二じか。久しいな。」

「ええ、ええ。そりやあもつ。千と十三年ぶりですわ。本当にご立派になられて…あの頃は米粒みたいに小さかったのに。」

「……そこまで小さくない。」

声をかけてきたおじさんは、目頭をおさえて豪快に泣きはじめた。

「いいえいえ。幼い頃の曉様は本当おくに米粒みたいに小さくて……。そのくせあっちこっち歩き回るもんだから探すのが大変でしたわ。」

『………………。米粒言っな。』

灰二を注意すると、裾を軽く引っ張られた。そちらを向くと鈴音が「誰？」と言いたげに見つめてくる。

『この男は灰二というんだ。俺が幼い頃よく世話になった人だ。見たとおり悪い人ではないんだが、どうも他人を食物に例える癖がある。』

「それで曉は米粒なの？」

『……………そうらしい。』

すると、やっと泣きやんできたのか、灰二がここで初めて鈴音の存在に気付いた。

「曉様、こっちの桃みたいに可愛らしいお方はどちら様で…？あ、もしかして…。」

『私の妻の鈴音だ。』

「あ…わたし習志野鈴音です。初めまして（私は桃なんだ…）」

「ほうほう……………。なかなかの別嬪さんだあ。俺はあ灰二です。どう

ぞよろしく。…いやいや…本当にお可愛らしい。」

顔を近づけてきて、じろじろと見られる。あまりに接近してくるので少々たじろいだ。

「いやあ…可愛い可愛い。もっと近くで…ぶっ…」

『鈴音が嫌がっている。やめろ。』

暁が灰二の顔を押しさえ付けてくれたので、なんとか助かった。透かさず暁の後ろに隠れる。

「いやあ隠れる姿も可愛いというか、暁様は信頼されてますねえ？」

『当然』

「良いことです。ところでお二人で仲良く外出ですかい？」

『まあ見たとおりだ。鈴音が天龍国を見てみたいと言っからな』

「そうですね。なら俺がお二人を引き止めるのも気が引けますね。どうぞ、楽しんできて下さい。暁様、鈴音様。」

「あの…、小さい頃の暁の話、今度聞いてもいいですか？」

「米粒の暁様ですかい？いいですよ。いつも暇してるんで好きな時にきて下さい。大歓迎です。」

「ありがとうございます。」

ペこりとお辞儀をして別れると、再び曉と手を繋ぐ。

「やっぱり町までくると、曉の知り合いの人に会えたりするからいいよね。」

にこやかに話しかけるが、曉はちよつと不満そう。

『俺の幼少期が知りたいなら俺に聞けばいいだろう？』

「だって…小さい頃のことって本人の記憶が曖昧なことが多いから、知ってる人に聞いたほうがいいじゃない？」

「それはそうなんだが……。」

自分に興味を持つてくれるのは嬉しいが、鈴音にとって灰二は少し危ない気がするから近付けさせたくないという理由もある。

「曉、曉、あれなあに？」

何か見つけたのか、ぐいぐい手を引っ張られる。子供のようにしゃぐ姿が愛らしい。数ヶ月ほとんど屋敷からでていないので、素直に楽しいのだろう。

鈴音は一軒の店の前に立っていて、初めて見る品々に目を輝かせて見ている。

『それは魔除けとしてもつ飾りだ。欲しいのか？』

「えっ！？えっと、そういうつもりじゃないけど、綺麗だなあって。」

それはキラキラと宝石のように磨かれた色とりどりの石がはめこ

まれたもので、形は花のようなもの、動物を象ったようなもの、様々だった。

その中でも鈴音の目に止まったのは、月の形をしたものだった。三日月を思わせるその形は、透き通る細かい石がはめこまれて出来ている。そしてアクセントとして一つだけ金の大きめの石がはめこまれていた。いたってシンプルなデザイン。そしてこの色は暁を連想させる色だと思った。暁の銀髪と金色の瞳。落ち着いた雰囲気が出ていて綺麗だと思った。

『これか？鈴音が欲しいのは。』

月の形のしたものを手にとって尋ねてくる。

「う、ううん。違うよ？色が暁に似てるなあって思ったただだよ。」

口ではそんなことを言っているが、顔には欲しい、と書かれている。

『これを貰おう。』

暁が店主に話しかける。

「…いいの？暁。」

『今日は初デートだし、その記念に。それに買い物したり、遊びにいくのがデートだって教えてくれただろう？』

「暁…、ありがとう！」

ギュウツと暁に抱きつく。

するとナデナデと頭を撫でられて、気持ちがいい。あつたかくて

大きな手。大好きな温もり。

人目もはばからず、いちやいちゃと戯れる二人を、周囲の人間がちらちらと見て通りすぎていく。

「あ、曉様とその奥方様だ。珍しい。」

「お二人とも仲睦まじいご様子ね。」

「羨ましいことだなー。」

ヒューヒューと冷やかしの言葉が聞こえてくる。鈴音は急に恥づかしくなって下を見た。

『鈴音、ほら。店主に話したらこれは鈴音にくれるそつだ。』

そつ言つて月を模した飾りを手渡される。

「いいんですか！？でも悪いです…。」

「いいんですよ。曉様の奥方様にウチの店の品を気に入っていただけただ。それだけで十分名誉なことですからね。」

店主はにこやかにそつ言つと、鈴音は感謝の気持ちを含めてお辞儀した。

『さ、鈴音。次行こうか』

「うんっ！」

元氣良く返事をして曉のもとに駆け寄る。曉は両手で鈴音を捕ま

えると、髪に軽くキスをして、鈴音の手をひいた。

嬉しそうに手を繋ぐ彼女が、彼女の笑顔が、いつまでも自分に向いているといい。いつまでも。叶わない恋、願いだと思った。それゆえに鈴音が自分を好きになってくれたことがこんなにも嬉しい。

この先たとえ鈴音が自分を嫌いになっても、絶対離すものか。もう鈴音なしの、一人の生活にはきつと戻れない。彼女がいたから、今こうして完全な龍として生まれ変わり、愛する彼女と手を繋ぐことが出来ている。この上ない幸せ。

鈴音、お前は俺のものだ

第十八話 初デート2

「ふう、お腹いっぱい！ねえねえ次は？次どこ行く？」

一軒の、お食事処と書かれた暖簾をくぐって、一組の男女が出てくる。

『そうだな……。食後に綺麗な景色でもみに行くか。』

「うん！」

元氣よく返事する鈴音の頬を、愛しげに撫でると、彼女は目を閉じて心地好さそうな顔をする。その様子が、まるで猫のようだと思う。

「あ、でも待って。もうちょっとこの町を見てってからでいい？」

『ああ。好きなだけ見てくといい。』

「ありがとう。」

彼女がにこつと微笑む。

そしてお互いの指を絡ませて手を繋いだ。

自分より一回り小さくて柔らかい手。握り閉めれば握りかえしてくれる、可愛い手。これが自分だけのものだと思うと嬉しくなる。暁がそんなことを考えながら歩いているとは知らずに、鈴音はきよるきよるしながら興味の赴くままに歩を進めている。かなり興味を持っていてくれるようで、嬉しく思う。

するとずんずん進んでいた鈴音が突然立ち止まった。鈴音しか眼

中に無かった曉は、何か気になった店でも見つけたのかと、彼女の視線を辿る。

しかしその目線の先には、店も無ければ人気も無さそうな路地裏。その先に見えるのは垣根だけだけだ。

『鈴音?』

「ねえ、ちょっとだけ探検してみない?私、初めて通る道を探索するの好きなんだあ。」

『俺は別に構わないが。』

「ごめんね?我が儘言つて。」

顔の前で手を合わせてお願い、兼謝ってくる。

別に遠慮はいらないのに。鈴音が楽しんでくれるなら何処へ行っても構わない。自分があるべき場所は鈴音がいる場所のみだから。

『今日は鈴音が外出したいって言ったからきたんだ。鈴音の好きな所に行こう?』

「曉、大好き!」

大好き!?!かあ…。抱きつきながら、可愛らしく言われては嬉しくて目尻が下がってしまう。いや、きつと下がってる。こんなデレデレした顔を疾風なんかに見られれば、きつとネタにされて笑われるに違いない。そう思いながらも、鈴音といると、どうもデレっとしてしまう。

「曉、行こう?」

鈴音の呼ぶ声にハツとして、緩んだ顔を引き締めると『ああ。』
と一言返事した。

路地裏に入ると、ずっと垣根が続いていて、民家だらけだった。
町から一步離れれば、そんなものである。

暁は別段珍しくもなく、ただ歩いていたが、一步前を歩く鈴音は
目を輝かせて歩いていた。たまに住民と鉢合わせすることもあり、
そんな時は鈴音が

「こんにちは。」とにこやかに声をかけるので、相手も快く挨拶し
てくれた。

鈴音の笑顔は、誰にでも暖かく、柔らかい気持ちにしてくれる、
そんな不思議な効果があると思った。きっと彼女の生まれもつての
才能なのだろう。

けれど、誰でも暖かい気持ちにさせてくれる笑顔だからこそ、自
分だけの笑顔であってほしいという独占欲も湧いてくるのである。

「あゝ…カメラがあつたら写真撮れるのに。残念。」

誰に対するでもなく、独占欲を沸き立たせていると、鈴音がなに
やら残念がつついる。

『亀ら…？しゃしん…？？』

聞いたときもない言葉。

彼女の世界の言葉だ。

暁は鈴音が嫁いだから、出来るだけ彼女の使う言葉を理解しようと
した。出来るだけ彼女と共感したい、もつと彼女と同じ目線で
物事を見られるように。最近覚えたのは「キス」に「エッチ」それ
から「デート」。鈴音が情事の際によく自分に言ってくる言葉なの
で自然と覚えた。けれど、あまり使い勝手のある言葉ではないと暁

思った。だからもつと違う言葉を覚えたいと思っていたところだったのだ。

「カメラっていうのはね、何て言ったらいいかな〜…このくらいのサイズの箱みたいなもの撮ると、ん〜…その時の場面を写真っていう絵みたいなもの残せる機械のことを言うの。原理はよくわからないけど。」

『へえ〜…便利だな。』

とは言ってみたものの、正直得体の知れないものなので曉には想像がつかない。とりあえず便利なものだということは分かった。

「そうなの。便利なんだよ〜。今もね、ほら。ここに綺麗な花が咲いてたから写真撮りたいなあって思ったの。あと曉とも写真撮れたら良かったなあ。そしたら私のお父さんとお母さんに紹介するのが私の旦那さんです！って。」

えへへ、とちよつぴり舌を出して照れる鈴音。

『俺を紹介してくれるのか。……………鈴音の両親……………見てみたいものだ。』

「あ！でもビックリされると思う。」

『何故だ…？人の姿をしていても変か？』

「ううん。変じゃないけど、銀髪に金の眼は派手すぎて驚かれるかもって話。あ、でも私は曉の銀髪も金の瞳も綺麗で好きだからね！」

『そうか。』

前にも一度、銀髪は珍しいと言われていたのを思い出す。まだ鈴音が嫁いできて間もない頃、褥を共にした明け方、髪をいじっていた鈴音にそう言われたのだ。

確かにこの世界でも、龍以外の者たち、中都国の人間たちは鈴音同様、髪も瞳も黒い。髪を染料で染める者もいるが、黒に近い色ばかり。だから一目見れば、龍か人間かすぐに区別がつくのだ。

『鈴音、行こうか。』

道のと真ん中で立ち止まっただけでも仕方ないので、移動しようと鈴音の一步前に出た。すぐに鈴音も後に続く。

民家を囲む垣根はこころへん一体に広がっていた。統一感のある民家、垣根、全ての景色が似たりよったりで、まるで迷路のようだ、と思った。

迷路のような垣根　？

暁は何か引つ掛かった。迷路、垣根、民家　。　ここは…？

脳裏に幼い頃の記憶がうすばんやりとフィルターがかかって蘇る。

はつきりとは覚えていないが、小さな男の子が垣根に囲まれている場所で一人立っていた。多分自分だ。服は薄汚れ、乱れて、うつろいだ瞳で俺はこの場所をさ迷っていた。そんな時だ。灰二が現れたのは。灰二は一人でいる俺に向かって笑いかけ「暁様ですよね？」そう言った。そして灰二は俺を自分の家に連れて帰った。

それからしばらく俺は灰二の世話になった。そうだ。俺はこの場所で灰二に拾われたのだ。

灰二が俺を何故育ててくれたかはわからない。けれど感謝していることに変わりはない。灰二に拾われなかったら今頃生きていたかさえも分からないから。

なら俺の両親は今頃何をしている？

さつきは幼少期のことは直接自分に聞けと鈴音には言ったが、よく考えてみれば鈴音の言う通り、はっきりとした記憶はあまりない。憶えているのは灰二と暮らしていたことだけ。灰二に食事の世話や読み書きの練習に付き合ってもらったこと。そればかりだ。灰二との記憶以前に出てくるべき人達の姿が出てこない。

昔一度だけ自分は捨てられたのだとぼやいていた時期があった。

両親恋しさ故に漏らした言葉。それだけ幼かった。

そしてそんな俺に、灰二は両親の名だけ教えてくれた。

【曉様のご両親は訳あって会えないだけです。いつかあなたが立派に成長された時、きっとお会いになれる日が来ることでしょう。だからそれまでは灰二で我慢して下さい。あと、曉様のご両親の名をお教えします。いいですか？一度だけしか言わないので覚えて下さいね？曉様のお父上の名は轟。お母上の名は時雨です。】

(轟……時雨……)

【お父上は雷の如く厳しく、聡明なお方です。俺もよく怒られました。そしてお母上はしなやかで美しい、優しい女性です。】

(立派になつたら会える。それは俺が完全体となることを指しているのか?)

「曉？あーかーっーきー!!」

『え？あ……ああ。』

裾をひっぱられて我にかえる。どろぐらいぼーつとしていたのだろつか。鈴音はどうしたの？と、きょとんとした顔をしているので、大して時間がたっていないことは分かる。

『ちょっと昔のこと思い出してた。』

「どんなどんな？」

『…灰二と会った時のこと。俺はここで灰二と出会い、拾われたんだ。』

拾われた…？

『と言っても両親はいる。俺が幼い頃なぜか一人でいるところを灰二に拾われたんだ。』

「今…ご両親はどこに？」

『さあ…さっぱりだ。』

「暁は会いたい？お父さんとお母さんに。」

暁は少し悩むと、顔をあげて言った。

『いや…、あんまり。今までいないも同然だったから何とも言えないな。ただ、どんな顔をしているのかぐらいは知りたいけど。』

気にならないわけじゃない。なぜ幼い頃一人でここにいたのか、両親は灰二とどんな関係なのかは知りたい。それくらいだ。今さらお前の父だ母だと言われても、自分の親は灰二としてインプットさ

れているから、何とも実感がわかないだろうし。

『外出したのはいいものの、話題がなんとも湿っぽくなるな。鈴音、移動しようか。』

「はい。」

「……………あれが曉。隣にいるのは巫女として嫁いできたという娘か。アレは使えそうだ。」

垣根の陰から、怪しげな人物が二人を見つめていた。

第十九話 平穩

有明の町の外れに、小さな日本家屋がある。

そこは昔、俺が灰二と共に住んでいた家だ。

俺が多分五才くらいの時から今の屋敷に移るまでの十年間を過ごした。

そこでは灰二に、生きる術と知識を教え込まれた。

俺がただぼーっと空を眺めていれば、雲には種類があると言って語りだし、書物を読んでいると横から割って入ってきて、その内容について討論しようと言いつ出す。とにかく俺に友人がいなかった頃は、灰二が何とかして俺の相手をしようとおれこれ考えて寂しい思いをしないよいいにと灰二なりに配慮してくれていたのだろう。しかし集中して書物を読んでいる時に声をかけられると、少し煩いと思ってしまう時もあったが。

そんな時は黙って家を抜け出したりした。

近所に黄金色に光るすすき畑が広がっていたから、よくそこに行った。すすきは背が高く、たった五才の俺なんかは隠してしまうほど大きかったから、抜け出した時の隠れ家としては最適だった。それにサラサラとすすきがなびく音が優しく、耳に心地好くて好きだった。そのうちすすきの揺れ動く音を聞きながらうたたねをしたっけ。

サラサラ……サラサラ……

ああ……あの時の音が聞こえてくるようだ。千年たった今も、あの場所に残っているのだろうか。

『……残ってるといいな。』

「何が残ってるといいの？」

ポツリと漏らした呟きが聞こえていたらしい。ちょうど鈴音が書斎に入ってきたところだった。

彼女の手には盆が握られていて、そこにお茶と羊羹ようかんが乗っていた。そろそろと近付いてくると、隣にちょこんと正座してそれを差し出してきた。

「お疲れ様です。はい、差し入れ。」

小皿に乗った羊羹を受けとり一切れ口に運んだ。小豆の香りと共にまるやかな甘さが口いっぱいに広がる。

『うま……。』

「美味しい？あのね、白銀から曉に羊羹を差し入れにもっていくと喜ぶからって教えてもらったの。お仕事大変そうだし、私何も力になれないからせめて差し入れだけでもって思っで。でも美味しいって言ってもらえて良かった。」

『ん。ありがとう。』

肩を抱き寄せ癖のない黒髪に軽く口づける。一瞬、花の香りが鼻腔をかすめていった。

「お仕事急に増えたね？」

卓上に並べられてる書類の数々に目をやりながら鈴音が言った。

『んー…最近…』というより儀式が終わったあとから、大事な内容だから目を通してくれたの、役所に手続きしたいから最高神の俺の許可をくれとかそんなのばかりなんだ。』

そう言っただけで差し入れにと出されたお茶をすすった。

「この国の仕組みはわからないけど、最高神で重要なんだね。私は役目終わっちゃったけど…【そんなことないぜ？鈴音。】」

突如聞こえてきた声に二人はそちらを振り向いた。ガラ…と音をたてて襖が開く。

『疾風か。』

「よっ！」

片手をあげて挨拶しながら疾風が入ってきた。相変わらず連絡もなしに突然現れる。

「こんにちは。あ、疾風さんも食べます？ちょうど休憩してたんです。この羊羹おいしいですよ」

「おっ！旨そうだな。ありがとな鈴音」

鈴音が差し出すと、遠慮なくといった様子で羊羹にむしゃむしゃとかぶりついた。

『で？疾風は羊羹食べにきたのか』

「違うって。かといって用はなかったけど……ただ通りかかったからきたんだけなんだ。そんでお前らが話してるのが聞こえてきたからきた」

疾風は羊羹を食べおわり、小皿を下に置いた。

「あ、そうそう。疾風さん。さっきの話で私の役目ってなんですか？」

「ああ。それな？それはさ、巫女としての役目は終わったけど、今度は妻としての役目があるってことになるんだ」

「はい」

「それはつまり、妻である鈴音にしかできないこと。女にしかできない仕事をしなきゃならないってことだ。わかるか？」

「私じゃないとできないこと？」

「なんだろう？と首を傾げる鈴音。難しい顔をして悩みはじめてしまった。」

「鈴音あ、難しく考えすぎだぜ？女にしかできないことって一つしかないだろ？ガキだよガキ。」

『…おい…疾風…』

「ガキつて…。え…。あ！も…。もしかして子供！？赤ちゃん？」

鈴音は驚きで声の上擦った。同時に顔が真っ赤になっていく。

「そ。最高神の妻は最高神の子供を生まなくてはならない！って決まりはねーけど、一部の民衆の間じゃ噂になってるぜ？仲むつまじい二人を見た。そのうち赤さまが生まれたなんて報告があるかも！つてな。まあ…。大体そういうの気にするのは女だけだな」

「えええ？そんなつ。わ…。私…。まだ赤ちゃんなんて生む予定ないつていうかッ！…。あ…。暁はどうなの…。？赤ちゃん…。欲しい？」

真っ赤になった顔を隠すように両手で顔をおおいながら上目づかいで聞いてくる。鈴音さん？それは誘ってるんですか？

『鈴音みたいに可愛い娘なら欲しい』

「え！女の子が欲しいの！？…。でも私だったら男の子がいいなあ。暁をちっちゃくしたような感じの子」

鈴音はそれをちよつと想像してみてもクスリと笑った。

「母上」なんて言いながら暁をちっちゃくしたような子がおぼつかない足取りで近づいてくる。そんな子が生まれたらきつとメロメロになっちゃうだろうなあ。と鈴音は思った。

『男は駄目だ。鈴音を独り占めできなくなるだろ？』

「え〜でも絶対可愛いよ〜？じゃあ一姫二太郎にしよう？これで公平」

『駄目』

疾風は本格的に家族計画をはじめた二人を横目に、残りの羊羹に手をのばした。

「絶対男の子！」

『駄目だ。女だけでいい』

「やだあ。それじゃあ曉だけ嬉しいじゃない。ずるい！」

「……ていうかさあ、腹の中じゃ性別は選べないだろうよ？お二人さん」

疾風の言葉に二人はピタリと意見をいいあつのをやめた。

『……というかまだ鈴音に子供を生んでもらう気はないから。まだまだ二人でいちゃついていたいし』

「……あ……私も。」

鈴音は少し照れながらポツリと言葉を漏らした。その言葉に、曉の表情がにへらと一瞬だらしない表情になったのを疾風は見逃さなかった。

（あーもー、バカツキめ。幸せそうな顔しやがって）

「おいバカツキ。鼻の下がのびて若干キモいぞ」

鈴音がえ？と曉の顔を見ると、曉は緩んだ表情を引き締めた。そして鈴音と目が合うと透かさず唇を奪った。

(……………詐偽だな……こりゃ)

「ん……。もう、疾風さんいるのに……………」

人に見られて恥ずかしそうに曉の胸を押し返す。けれど曉は腰を抱き寄せて離さない。疾風は人がいようがいまいが、すぐに甘いムードになる二人に少し嫌気がさした。というかこの腹立たしい感じは妬ましさからきてるのだろうか。

「……………なんか腹立つ」

『羨ましいの間違いだろ？八重とはどうなんだ。上手くいつてるのか？』

「なんで八重なんだよ」

「えっ！？なになに？疾風さんと八重さん付き合ってるの!？」

曉の腕から逃れようともがきながら鈴音が興味津々で聞いてくる。瞳がキラキラ輝いてるように見えるのは気のせいだろうか。なんか眩しいなあ……鈴音。若さか？

「馬鹿。八重とはなんもねーよ。何かあったら天変地異が起こる」

「そうかなあ……？疾風さんていつも八重さんと美月ちゃんと三人でいることが多いから、たまに夫婦と娘って関係に見えたりするんですよね」

「へ！？ま…まさかつ！有り得ないって」

「…そうですね…？なんか怪しい。疾風さん八重さんのことちよつとでも好きとか思ってるんじゃないですか？八重さん美人さんだから早くしないとられちゃいますよ？」

『鈴音の言つとおりだ。好きなくせに言わないだ疾風は。だから代わりに美月と遊ぶふりして八重の気をひこうとしてるってわけだ。遠回しな奴』

「ばっ…！だ…だからちげえよ！」

二人に同時に攻められて戸惑うが、八重が好きというのはあながち嘘では無かった。付き合いが長い曉ならともかく、鈴音の感が冴えていることにも驚いた。女ってこえ…。

「疾風さん戸惑ってる。凶星ですね」

『…凶星だな』

「…っ…！ああっもう俺のことはいいつつの！俺をからかうなら怒るぞ」

「からかってませんよ。もしそうなら応援しようと思ってるだけです」

確かに鈴音の目は真剣そのもので、嘘を言ってる目ではない。かと言って急に自分の色恋沙汰に興味をもたれてもそうだったことが苦手な自分にはどう対処して良いやら。ふらふらと気まぐれでここ

に来るんじゃないやなかつたと後悔した。

「俺、帰る」

ただでさえ甘いムードで居心地が悪かったのに、さらに状況が悪くなってきたので、早く退散しようと思われは立ち上がった。

『八重が待つてるからか？』

「え！？なにになに？同棲してるの！？」

これまた鈴音が食い付いてきた。余計なことじゃべるなよバカツキ。

「違うっつもの。鈴音は暁が浮気しないようちゃんと見張ってるんだぞ？」

「え…暁が浮気…」

『…鈴音…？なに本気にしてるんだ』

想像もしたくない嫌な単語をきいてシユンとなる鈴音。それを暁がそんなわけない、一切ないと弁解(?)してる。悪いなバカツキ。また今度くるぜ！疾風は今のうちにと、二人が気づいてないのを見計らって外へと出ていった。

「暁が浮気なんてやだよ？」

『するわけないだろ？千年間ずっと鈴音ひとすじなんだから』

「…うん。そうだね。暁は浮気しないと思う」

『当たり前だ』

「うん、ごめんね？あ、そろそろ休憩終わりにする？」

『そうだな。疾風、お前はどつす……………』「あ…いない」

』

二人が気づいた頃にはすでに疾風は部屋から出ていった後であった。

『逃げたな』

暁がフツと楽しそうに笑った。たまに思う。暁って優しいけど時々黒い部分が見える時がある。恐くはないけど、意地の悪いことをしてくる時があるからちょっとSなのかなって思った。

じつと見て分析していると、暁が何も語らずこちらを見つめてきた。

ドキツとした

まるで一瞬時が止まったよう。沈黙は言葉を交している時より気まぐずい雰囲気になると思う。それも面と向かってだと。ふいに恥ずかしくなってきた、目をそらした。

何かしゃべってくれればいいのに。なのに彼は私を見つめてくるだけ。その瞳からは何を思っているのか想像はできないけれども。するとクスリと横で笑い声がした。

「なんで笑うの」

いきなり笑われてちよつと不機嫌になる。暁はおかしそうに口元から白い歯を見せて笑っている。

『いや、鈴音が可愛いから』

理由になつてないよ。

『鈴音がちよつと見つめただけで顔真っ赤にしちゃうから。可愛くてつい意地悪したくなる』

やっぱりさだ。それって私をからかって楽しんでるってことですよ？

「ムッ」

頬をふくらませて怒ったそぶりを見せると、怒ってるのに可愛いと笑われる。あのね暁…私怒ってるつもりなだけだ。

「む…そんなに笑わないでよ。私もう部屋戻るから」

カチャカチャと盆に空になった茶碗と小皿をのせて、片付けようと立ち上がった。

しかし突然強い力で腕を引っぱられて、鈴音の体は横転してしまう。

「きゃあっ…」

結果、鈴音は暁の胸に飛込んでしまふかたちとなり、怪我はなかったもののいきなり何をするのかと余計に膨れっ面になった。

『まあそう言わずに俺の側にいてくれないか。一人は退屈だし寂し

いから』

「……………うー。…わかったよ……………」

『ありがとう』

暁は嬉しそうに笑うと、片腕で鈴音を抱きながら、もう片方の腕で仕事を始めた。

こんなに密着してはやりづらいのではないかと思ったが、暁は満悦の様子なので鈴音はそのまま身を委ねておとなしくしてることにした。

クスクス…

どこからか笑い声が聞こえる。

クスクス…

『八雲。あの子でしょ？　　が大事にしてる子って』

「…ええ。先日有明をうろついているところを見かけました。間違
いありません。あの者が巫女でしょう。充分利用価値はあると思
います」

八雲と呼ばれた男は主の前にひざまづきながらそう告げた。

『…巫女の力を利用するのもいいけど、僕はあの子が欲しいな』

「では奪いにいきますか？」

『そうしたいけど、　　がいるからね。少し難しいかな。一番
いいのは彼女のほうからきてもらうことだね。ま…問題ないか。僕
と　　は同じだから』

「……はい」

八雲は静かに頷いた。

『さあ……鈴音。君は僕のモノになるんだ』

男は金色の瞳を細めて笑った。

第二十話 誰そ彼時

日照りが強くなってきた昼。あぐらをかき、扇子で顔を扇ぎながら暁は筆を進めていた。新たにきた仕事だ。

『あー……』

まわりつくような蒸し暑さにうめきながら、仕事を進める。しかし暑さが邪魔してまったく集中できない。夏は嫌いじゃないが、暑いのは苦手だ。昼間は暑さで気だるく、やる気がおきないし、なに仕事をしないと溜る一方だから仕方なくやっている。それにやる気が出ないのは暑さだけじゃない。愛しい妻がたった今外出中で寂しいのだ。

『鈴音…早く帰ってこい…』

はあ…と憂い顔で溜め息を漏らす姿は、なんとも絵になる。その姿だけ見れば、女たちは一瞬で見惚れるに違いないだろう。

「暁様、巫女様…いえ奥方様はそのうち帰ってくることでしよう。ですから今は目の前の書類にお目を通して頂きとつございます」

すっかり筆がとまってしまった暁を仕事に向けさせようと試みるのは白銀。部屋の隅のほうに行儀よく座り、涼しげな顔で待機している。

暁はチラと白銀を盗み見ると、厳しい暑さにも顔色ひとつ変えず、普段と変わらぬ振る舞いの白銀が不思議でならないと首を傾げた。

その頃鈴音はというと有明の町中をうろついていた。曉とデートして以来もう一度遊びにきてみたかったのと、そろそろ曉が誕生日だということでは何か良いものをプレゼントしようと思ってきたのだ。

（何かいいものないかな）

一軒一軒店をまわってみる。食べ物、雑貨、その他何に使うのかよく分からないものいろいろ……。たくさんありすぎて何にしたらいいか分からない。そもそも曉の好きなものが分からなかった。

（曉の好きなものかあ……。それって私？…なんちゃって）

自分で思っておきながら苦笑する。馬鹿なことを考えたものだとそれよりプレゼントを考えよう。出来るだけ曉の好きなものをあげたいけれど、それは本人に聞かなきゃ分からないし、何か欲しいのがある？って聞いたら何で？と怪しまれそうなので却下。

（驚かせてあげたいのにバレちゃう…）

それじゃあつまらないからと、曉に遊びに行きたいと言って一人で外出してきたのだ。始めは曉も『一緒に行く』と行って立ち上がったのだが、慌てて

「仕事あるんでしょ？」と言ってとめたのだ。そして鈴音はあらかじめ白銀にそのことを伝えていたので、彼も一緒になって曉を止めてくれた。曉は不服そうだったが、最高神としての責任からか、おとなしく言うことを聞いてくれたのだった。我慢してくれた分、曉

が喜んでくれるような誕生パーティにしなきゃ。鈴音は心の中でクス笑った。

『…鈴音』

？

背後から聞き覚えのある声。まさかと思い振りかえる。そこには銀髪に金の瞳の青年が立っていた。

「!!!? 曉　!?!? なんている……の………」

まさかの曉登場に驚くが、彼の姿を見た瞬間、体の力が抜けていった。

(あれ………)

途端に目眩がして、視界が揺らいだ。ぐにやぐにやと世界がごちゃまぜになって、気持ちが悪い。

「あ………か……つき………」

フツと目の前が真っ暗になり、鈴音はその場に倒れそうになった。倒れそうになる彼女を、銀髪に金の瞳の青年が素早く支えた。彼女は完全に気を失っていて、それを確認した青年はニヤリと不適な笑みをこぼした。

「鈴音　違う。僕は曉なんかじゃないよ」

『終わった!』

筆をカタンと置くと、暁は後ろに寝転がった。

「お疲れ様です。暁様」

側に控えていた白銀が労いの言葉をかける。

外を見れば真っ赤に燃えるような太陽が沈みかけていた。丸一日かかって仕事を終えた暁は、肩を叩きながらひとまず安堵の溜め息をついた。

『鈴音、遅いな…』

「…ええ。明るいうちには帰ってくるかと仰っていましたが…、おかしいですね」

まだ暁様への贈り物のことで悩んでらっしゃるのだろうか。鈴音の外出理由を知っている白銀は心配になった。

『…遅すぎる。もう暗くなるのに』

横になり、くつろいでいた暁の瞳が真剣なものになる。暁は上体を起こすと静かに目を閉じた。

鈴音の身につけている首飾りの気を辿っているのだ。白銀はその様子を見守った。

『 ……おかしい。鈴音はある一点から全く動こうとしない』

目を閉じ、気を辿りながら暁は呟いた。

「奥方様はどこかにとどまっていらっしゃるといふことですか？」

『わからない。そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。場所は……有明だな。ずっとそこにいるみたいだ。白銀、俺は鈴音を迎えにいってくる。その間留守を頼むぞ』

「はい。仰せのとおり」

足早に部屋を出ていく主の後ろ姿を白銀は見送った。暁の足取りにどこか焦りを感じさせた。奥方様が心配で仕方がないのだろう。白銀もひそかに鈴音の無事を祈った。

「……………」

何かが頬をかすめていくのを感じて目が覚めた。まだ寝起きで視界がぼやけている。

『…起きた…?』

低く穏やかな声が響く。

「暁?」

ぼやけていた視界が次第に鮮明になっていく。すると自分は横になっでいて、“彼”が自分を覗きこんでいることが分かった。

「あ…れ?私…お昼に有明の町にお買い物しに行つてて…。それで…途中から目眩が…」

『鈴音は気分が悪くなって倒れたんだよ』

「あ…そうだったんだあ…ごめんね。暁。なんだか迷惑かけちゃったね」

すると“彼”は何故かクスクスと笑った。

「?」

何かおかしなことでも言ったのだろうか。倒れたらしい自分を助けてくれたから、お礼を言っただけなのに。

「まだ寝惚けているのか巫女は。目の前のお方が自分の旦那なのか、そうでないかも分からぬとは」

クスクスと笑う曉の背後から、男性のひどく呆れた声が聞こえてきた。

『フツ…八雲、そう言ってやるな。鈴音はまだ寝起きなのだから』

そう言いながら曉は相変わらずクスクスとおかしそうにしている。何がそんなにおかしいのか、そして八雲と呼ばれた男が誰なのか鈴音はちんぷんかんぷんだ。

「曉…、八雲って誰？知り合い？」

いつものように“彼”に問うと、“彼”は自分を優しく抱き締めてきて言った。

『八雲は僕の従者だ。見た目は怖いし、中身もそんな感じのやつだよ』

「主…それでは印象が悪くなります」

『そのままだろう。それとも好印象をもってもらいたかったのかい？』

また“彼”はクスクスと笑った。「僕」？曉はそんな一人称は使わないのに。どこか不自然に思った鈴音は、ぐるっと周りを見渡した。そこはまったく知らない、見たときのない場所だった。広い黒塗りの部屋で、壁には丸くりぬかれた障子戸がいくつもあり、わりとモダンな雰囲気のある部屋であると思った。

「……ど……」

『僕の家だよ』

「え？でも私たちが住んでるのはもっと裝飾が綺麗な和室があるお家じゃ…」

ハアと盛大な溜め息が遠くのほうから聞こえてくる。八雲だ。

「まだ寝惚けているのか。娘、お前の目の前にいらっしやるお方は最高神曉じゃない。黄昏様だ」

「！？ た…そがれ？？」

『くくっ、バレちゃったね』

黄昏は舌を出してバレたかとおちやらけて見せた。
だが鈴音は二人が何を言っているのかさっぱり分からない。

「黄昏って…？何を言ってるの？ だって、どうみたって曉じゃない。ほら、銀髪に金の瞳の…」

鈴音は“彼”の顔にそっと触れて確かめるように言った。どうみたって曉にしか見えない。いや、曉と一緒になのだ。黄昏は無遠慮に頬に触れてくる鈴音の手を掴んではずすと、その白い肌に口づけをした。

『悪いけど、僕は曉じゃない。僕の名前は黄昏だよ鈴音。だから初めまして、だね』

にこっと微笑んでくる黄昏。その不気味なくらい曉と酷似している優しい笑顔に、体中から熱が引いていくのが分かった。私、この

人達に誘拐されたってこと？頭の中が真っ白になって、声が出てこない。口をぱくぱくと動かして、声にならない声で何かを訴えようとしている鈴音を見て、黄昏の中に少しの同情心が芽生えた。しかし、それも一瞬だけ。

『今は混乱してるだろうけど、すぐに慣れるよ。それに僕は君をどうしようってわけじゃないし、ただ欲しかっただけだから。悪いようにはしない。だからこれからたくさん可愛がってあげるからね』

お気に入りの人形を愛できるように、鈴音の頭を優しく撫でてやる。

『僕がこの姿なのも君にとっては良いことじゃない？暁とよく似てるでしょ。髪も瞳も顔も声も全部。初めは僕が暁だと信じて疑わなかったくらいだしね。だからいいよ？僕を暁だと思ってくれれば』

「主、しかし最初の目的は巫女の『力』なのでは…」

『あゝ…そうだったね。でもさ、この子目はくりくりしてるし、可愛いから、こき使うよりかは僕が可愛がってあげたいかな。だから八雲は鈴音に触っちゃ駄目だからね？』

「ご心配なさらなくとも、そのような娘に興味はございません」

『うん。それでいい』

黄昏は満足そうに頷いてみせた。そして鈴音の方に向き直ると、歩み寄り、鈴音の顎を掴んで上を向けさせた。

『どっつしたの？僕が怖いのか？』

まだ暁そっくりの黄昏の登場と、自分が誘拐されたという事実が納得できず、しかしそれが本当なのだと気づきはじめて涙目になっている。

「あ…。暁のところに帰りたい…。お願い。私を暁のところに帰して」

『それは出来ないな。僕は最高神が妬ましいんだよ。羨んでるんだ。半龍として生まれたがゆえに頂点に君臨することができ、尚且つそれを理由に君みたいな可愛い巫女の同情を煽ってめとることができるともものね。そんなのずるいな。だったらどっちかでいいと思うんだよね。』

「…何なのあなた。暁はその代わりずっと辛い思いをしてきたのよ？ずるいとかずるくないとか関係ないよ。…ていうかあなた、暁と同じ格好するのやめてよ」

出来る限り相手を睨みつけて、ナメられないようにと試みるが、外見が暁なのでどうも調子が狂う。

「私、あなたのこと名前しか分かってないわ。一体何なの。私をどうするき？」

顎を掴まれたままの状態から逃れようと首を横に振るが、無理矢理に正面を向かされる。

『僕のこの姿が気に入らないみたいだね。愛する旦那様と同じなのが嫌かい？でもね、僕にはどうすることも出来ないかな。生まれつきこの顔、この体なんだから』

「ねえ…あなたと関係のある人なの？」

『あれ？ここまで言ったのにまだ分からない？』

まいったな、と人を小馬鹿にするように笑ってくる。少しイラッとするが、暁の声、顔で言われるから胸が痛くなった。

『僕は生まれつきこの顔、この体って言ったんだよ？意味わかる？』

「生まれつき……………。！？え…………まさか　？」

『くくつ、分かったかな？そう、僕は暁の双子の弟、黄昏さ。』

「！？」

暁に弟！？というか双子だったの？新事実に驚きを隠せないのと初めて会う暁の家族がまさかの双子の片割れで、動揺した。どうしよう…暁の家族だったなんて…。しかも双子…。私てつきり暁に変装した怪しい人だと思ったのに。

「えっと…。あのう、初めまして…習志野鈴音です。お兄さんの暁にはいつもお世話になっています。よろしくお願いします」

『……………。』

『ぶっ』

急にかしこまった態度になる鈴音がおかしくて、八雲がいるのも忘れて黄昏は床に笑いころげた。

『くくつ、さつきまでの警戒心はどこ行っちゃったの？面白いね君』
高笑いする黄昏が、暁の笑顔と重なる。というよりまったく一緒やっぱり調子が狂う…。

「あの、それでなんですけど…私を暁のところに帰してくれませんか？」

暁と変わらぬ雰囲気緊張が緩みはじめていた鈴音が尋ねると、それまで高笑いをしていた黄昏がピタリと動きを止めた。

(な…何…?)

再び緊張が走る。黄昏はゆらりと体を近づてくると、冷酷な瞳で鈴音を覗きこんできた。

その瞳からは感情が読み取ることが出来ない。怒っているのかななのか、ただ無表情に見つめてくる。鈴音はその瞳に恐怖すら感じ、身を固くした。

「それは出来ないね。さつきも言ったでしょう？僕は兄さんが妬ましい。双子に生まれたのに、今や兄さんは最高神の座に位置してる…ま、それはいいんだけど、僕は君が気に入ったんだ。だから兄さんのところには帰さない。ごめんね？」

黄昏は笑いかけてきた。その表情は笑っていたが、目元は笑っていないかった。違う。外見や仕草は暁とそっくりだけど、暁はこんなに冷めたい笑い方はしない。帰りたい。暁のもとに。でもどうやって？誘拐されてきたのに暁にどうやって助けを求めればいいの？

あ。

鈴音はいつも首に下げていた首飾りを思い出した。確か首飾りを通して自分の声が曉に届くはずだ。

鈴音は黄昏と八雲に気づかれぬように少し横を向くと、胸元にさげられている首飾りを取りだそうとした。

(あ……あれ?)

無い。胸元に下げられているはずのものが無い。体中を探ってみるが一向に見当たらない。何故……? 八雲は不審な動きをしている鈴音に目を光らせるが、黄昏が八雲の前に手を差し出し、制止するの
で動かずにいた。

(無い！本当に無い)

焦りからか、見るからに困り果てている鈴音を楽しげに見つめる
黄昏。

『何を探しているの?』

さもおかしそうにほくそ笑む黄昏。それがまた腹立たしい。

「私の首飾り、どこにやったの! 知ってるんでしょ! ? 返して」

『首飾り? さあ、僕は知らないね。君がそんなの付けてたなんてさ』

「嘘吐き! 本当は知ってるくせに! ! 返して! !」

『そんなに大事だったのかい？ああ…そう言えば似たようなのを見たけど、間違つてさっき捨てちゃったかも。今頃粉ごなになってるんじゃないかな』

「！？そん…な……」

助けを求められる唯一の望みが絶たれて、鈴音は絶望に陥った。

第二十一話 焦り

ザアア……………

空は暗雲につつまれ、雨がひっきりなしに降り続けている。

雨が勢いよく打ち付けてきて、屋根がバタバタと音をたてた。有明の町は大雨のせいで普段の賑わいを失っていた。何百と人が行き交う町並みの面影はなく、皆雨宿りをしているせいか道には人ひとりとしていない。たまに大雨の中傘をさし、足早に家路を目指す者がいるが、それくらいしか人の姿は無かった。

そんな中、傘もささず、一人どしゃ降りの中を走る青年がいた。髪も服も、全て濡れてしまっているのにも関わらず、息を切らしながら何かを探していた。

彼の右手には赤く光る首飾りが握られている。彼はどしゃ降りの中立ち止まると、掌の首飾りを見つめ、悔しそうに小さく呟いた。眉間に皺を寄せ、泣いているような、怒りにも似ているような表情でそれを見つめている。何がそんなに悔しいのか、何がそんなに悲しいのか。はたから見れば分からない。ただ青年の雨に濡れたその体は、ひどくみすぼらしく見える。

しかし今の彼には自分が雨に濡れようが濡れまいが関係が無かった。彼は今、自分の命よりも大切なものを失ってしまった。それを探し出すためなら、こんな天気など関係ない。今彼の心を占めているのは首飾りの持ち主であり、彼の大切な女性ただ一人であるから。

『…鈴音…ッ』

悲痛に顔を歪め、失ってしまった女性の名を呼んだ。しかしその声は大雨によって儂くもかき消されてしまった。

彼は掌の上の首飾りを固く握りしめると、再びどしゃ降りの中を

駆け出した。

「雨……やまない」

『そつだね』

「……」

黄昏は連れてきた鈴音が独り言を漏らしては、それにいちいち応えていたが、次に彼女から返事が返ってくることは無い。つまりは会話が成立していないわけである。

鈴音は自分の言葉にいちいち答えてくる黄昏には気づいていたが、それに反応しようとは思わなかった。いや、したくなかったのだ。

有明の町で一人買い物を楽しんでいた所、暁の双子の弟である黄昏に出会った。そこで急に意識が無くなって、気がつく知らない部屋にいた。つまり自分は黄昏の何らかの術中にハマリ誘拐されたのだった。

そんな理由から鈴音は黄昏と全くコミュニケーションをとろうとせずソツポを向いている。当然といえば当然である。

「帰りたい……暁のとき」

『……ハア……。君も飽きないね。またその話？』

「だってあなたが連れてきたんじゃない。私は好きできたんじゃない

いのに…それにあなたの目的もよく分からないし…。」

障子戸を開け、外を眺めていた鈴音がうつむき加減に振り返って言った。無視しても黄昏がしつこく話しかけてくるので諦め半分だ。

『それもさつき話したじゃん。君が気に入ったつてのと兄さんがずるいから。』

「ずるいつて…あなたは曉が嫌いなのか？」

『嫌いなんじゃないくて、ずるいの。それだけ』

言ってる意味が如何せんよく理解できないが、
曉が嫌いでこんなことをしたわけではないらしい。

「ねえ…あなたと曉と双子の弟なんでしょ？どうして今まで曉に会いに行つてあげなかつたの？きっと曉自身、自分に弟がいるだなんて思つてないはずだよ。両親の顔も知らないみたいだったし。」

『さあ…なんでだろ。僕だつて兄さんの存在を知つたのは最近なんだよ。それまで全く知らないで過ごしていたし。でも…なんでか知らないけど、手の届かないはずの最高神と間違えられることがよくあつてね。その理由がこの歳になつてようやく分かつたわけだ。双子だつたんだもんね。そりゃ間違えるわけだよ。』

知らなかつた？一体どういふことなんだろう。曉の家系は鈴音が想像しているより複雑すぎるような気がする。

「あなたの家の家族構成つて一体どうなつての…。」

『僕の家族？んー…多分父、母、兄（暁）、僕の四人だと思うけど。』

多分…て。把握できてないの？

『そっだよねー？八雲』

黄昏が側に控えている八雲に尋ねた。

「はい。黄昏様の仰る通りでございます。」

低い、ドスのきいた声で八雲は答えた。普通に話しているだけなのだろうが、そのガツシリとした図体に、低く唸るような声から、どうしても怖いという印象しか持てなかった。その分黄昏は話しやすい。だが、いくら話しやすく暁の弟といえども、自分を誘拐した張本人。あまり好印象は持てない。

「…私帰ります。じゃあ」

『帰るって兄さんのところ？無理無理。この屋敷には術がかけられるから迷うだけだよ？それより僕の相手してよ。鈴音。退屈なんだ』

「嫌です。」

『即答！？ひどいなあ………僕のこと嫌い？』

「…好きでも嫌いでもありません！」

屋敷に術がかけられて迷ったとしても、鈴音は暁と同じ顔の黄昏と一緒にいたくなかった。

そしてそそくさと退出しようとした。

が。

『待て。鈴音』

暁の声に、鈴音はピタリと足をとめた。

『あ。やっぱり兄さんの口調の方が反応するんだね？じゃあ今度から兄さんの真似しようかな。しばらく兄さんを観察してたから大体は分かってるつもりだよ？』

からかうように黄昏がクスクスと笑った。

「ふざけないですよ。いくらあなたが真似したところで本物の暁とは違うわ。」

『大して変わらないと思うけど』

「外見だけです」！

（暁、今どうしてる？私今…ちょっと困ってるかも…。）

ダンッ!!

『くそっ……!! 鈴音、一体どこに!!』

鈴音が行方不明になってから一日が経った。結局どしや降りの中一晩探したが、行方が分からず、手がかりも無い。ひとつも有力な情報が得られず、曉は苛立ちを隠せないでいた。

「まあまあ曉様。そんなに怒っても状況は変わりませんぞ?ここは一旦冷静になりましょう。どうです?ここはひとつウチの風呂にでも入ってきませんか?」

壁に八つ当たりしていた曉はキッと灰二を睨みつけた。

『こんな時に風呂なんか入ってられるかっ!俺の鈴音が行方不明になってるのに!!』

怒りのあまりに物凄い剣幕で灰二を怒鳴りつける。いつも穏やかな暁からは想像できないくらい怒りを露にしている、灰二は少したじろいだ。

（いやしかし…こんなに怒っていても暴走しないところを見ると、鈴音殿はよくやってくれたようだな。）

灰二は一人感心感心、と暁の様子を観察・分析している。

「暁様。そんなにカツカしても鈴音殿は見つかりませんぞ。それにそんなゆびしょ濡れのままではお風邪を召されます。今は落ち着いて考えるべきじゃありませんか？」

『それはっ…！！…そうなんだ…が。』

また勢いで怒鳴りつけるところだったが、灰二の瞳を見た瞬間、その衝動がピタリと止まった。

灰二の瞳はとても静かで、彼は今言葉を口にしていないのに、自分を諭すような、落ち着けと言っている眼差しを向けてきた。冷たいとも、温かくもない不思議なその眼差しに一瞬時間が止まったようだ。

不意に灰二がニコリと微笑む。

「落ち着きました？」

『あっ…、ああ。俺は冷静さを失っていたな…。済まない。』

暁は急に恥ずかしくなった。千年。千年たった今、最高神として頂点にたつようになつてようやく一人前になつたつもりでいた。

でも、幼少期に自分を育ててくれた目の前の人と比べたら……全

然だった。

「さ、とりあえず着替えだけでも済ませて下さい。本当に風邪ひきますぞ?」

そう言つて真新しい手拭いを差し出してきた。

この人は…俺が八つ当たりしたにも関わらず、そのことを咎めもせず全部受け止めてくれるんだな…。この人に比べたら、俺はまだまだ子供だな。手拭いを受け取り、髪の水滴を拭き取りながら一人苦笑した。それから灰二が持つてきてくれた衣に着替え、疾風、八重を呼び出し鈴音行方不明の原因を探ることにした。

「鈴音が急にいなくなつたつて? ついに愛想つかされたのか…:…
ぐはあつ…!」

右から灰二、左から八重の鉄拳をくらい、疾風は激痛に腹をかかえた。

(くそつ…冗談だったのに…)

プルプルと小刻みに体を震えさせ痛みを耐える。

「アンタ…ふざけすぎ。いつペン死になさい。」

さらつと酷いことを言われる。しかし八重の突っ込みなど疾風にとってはお手の物で、最近では八重の鉄拳も暴言も、一種の愛のような気さえしてきた。

(殴られて暴言吐かれて喜ぶつて…:…俺つて変態? いやいや違つぞ! 誰にでもされて嬉しいわけじゃない! 八重だからいいんだ…!)

！)

『…ああ…そうなんだ。』

「首飾りが落ちてたつてことは鈴音は誰かに連れ去られた可能性もあるわね。」

「しかし一体誰が…。鈴音殿が連れ去られたような情報は無かったですよねえ？ 曉様。」

いつの間にか三人で話し合いが始まっている。

三人は丸くなるようにして、疾風などおかまいなしに事を進めていた。

(あれ？ 俺は無視ですかあ？ 俺の心の叫びは一体……。…チツ…三人して俺に背え向けてよー！ なんだよ。俺も入れるよ)

曉と八重の間にかろうじて入れそうな隙間を見付けると、疾風はそこに割って入った。

「ちよつと失礼。」

無理矢理押しはいると両脇の曉と八重が鬱陶しそうな顔をしながら、隙間を空けてくれた。

(なんか俺…嫌われてる？…しょぼん…)

一人陰湿なオーラを放ち落ち込む疾風をよそに、三人は話しを続けた。

「曉様。鈴音殿が行きそうな場所とかはありますか？」

『それはわからない…。鈴音はまだ有明の町しかきた時がないし、行くならここしかないと思う。』

「中都国とかは？」

『あそこは遠すぎる。歩いて行ったら丸二日はかかるだろう。それに鈴音は中都国じゃなく、有明の町に行つてくると言つて出ていったんだ。それはない。』

「…じゃあさあ…鈴音はどこ行つたんだよ？いなくなつてから一日以上経つんだぜ？誘拐されたような情報がなかったら、鈴音が自分でどっか行つたと思えないだろ？本当はさあ…有明の町に行くとか言つて実は中都国の皇子に会いに行つてたりして。あの皇子、弥太だったんだろ？恋人奪還するために何かやらかしそんな感じのするヤツではあつたよな。だから鈴音をたぶらかして……………」
「…ついでにってええ！！！」

八重に腕をつねられ、悲鳴をあげる。

(アンタね…何しにきたのよ…。曉様を傷つけにきたわけ？)

物凄い剣幕で八重に睨まれ、疾風は冷や汗をかいて固まってしまった。蛇に睨まれた蛙とはよく言つたものだ。

「お…俺はいろんな可能性があると思つて言つてみただけで…本心じゃねえって！ほら、たくさん意見があるほうが推理しやすいだろっ！？」

「当たり前よ…。本気で言ったら殺す」

「八重殿。そのへんにしといたらどうですかね。今は鈴音殿のことについて話し合う時間ですから。」

灰二が柔らかい声で八重を制すると、八重はもう一度だけ強く疾風の腕をつねってから彼を解放した。

『…八重、疾風の意見には一理ある。だから気にしないでくれ。それと、ありがとう。』

「いえ…。」

八重は暁に向けられた笑顔に遠慮がちにうつむいた。

（おーおー、なんだよ八重のヤツ。暁と俺じゃ態度違すぎだし）

疾風はつまらなそうに視線を向けつつ、あまり表情に出すとまた八重の拳がとんできそうなので、表にでないよう努めて我慢した。

『鈴音：鈴音は俺が嫌いになったのか…？』

「まさかっ！鈴音は暁様のことを愛していますわ。そんなことありません」

やっぱり疾風の言ったことが気になったのか、落ち込む暁を八重が必死になって慰めた。

『そもそもなんで鈴音は一人で外出したがつたんだ…？結局教えて

くれなかつたし……。』

「それは……。」

コンコン……

部屋に響くノック音。玄関のほうだ。

「おやあ？お客ですか。はい、どちらさんで？」

灰二がそそくさと立ち上がり、玄関に歩み寄った。

「私、曉様にお仕えしている白銀と申します。曉様はこちらにいらつしゃいますでしょうか。」

丁寧で品のある声が扉から聞こえてくる。曉はその声に反応すると。立ち上がって、玄関まで出ていった。

「曉様にお仕えしておる方ですかあ。どうぞ、狭いですけどお入り下さい。」

灰二の言葉に

「失礼します」と声がかかり、扉が開いて中に白銀が入ってきた。

『白銀、どうした？何か鈴音のことで分かったか？』

「いえ…申し訳ありません。まだ有力な情報はひとつも…。しかし、奥方様がいらつしゃらなくなった日、何故奥方様はお一人で外出なさったのかという理由だけ存じておりますのでお伝えに。」

『それは本当か！？教えてくれ。』

白銀を中に招き入れると彼を座らせて、耳を傾けた。

「奥方様は実は曉様を驚かせようとして外出なさったのです。」

『俺を驚かす…？』

「はい。もうしばらくで曉様は生誕千と二十八年目を迎えられます。

奥方様は曉様に何か贈り物をしたいと仰いまして、それでお一人で外出なさったのです。」

『俺の…誕生日…？』

鈴音の外出理由が俺のためだったなんて。だから必死に隠そうとしたのか。良かった。嫌われていなかったと曉は安堵した。いつも不安で不安で仕方がないのだ。彼女の気持ちが無に落ちてしまったらと考えると。だからいつも一緒にいて、触れ合っていないと落ち着かないのだ。

そして白銀の証言でひとつだけ分かったことがある。

『…なら鈴音は自分の意志でいなくなったわけじゃなさそうだな。』

「そうみたいですなえ。」

「やっぱり誘拐か。」

「誰が……………」

鈴音の行方不明の原因としては誘拐に絞られそうだが。しかし犯人

に思いあたるふしがない。

「犯人はどうやって鈴音を…。」

「町の人はそのような現場無かったと言っていたのでしょうか？」

「うーん……。」

「なあ……。」

疾風が何か思いついたように言う。八重はすぐさま疾風を睨みつけ、何か余計なことを言う前にと攻撃体制に入っている。

「八重ツ！真面目な話だったつ。そういうのは聞いてからにしてくれ」

「信じられないわ。」

『まあ待て八重。疾風、何か分かったのか。』

「これはあくまで推測だからな？犯人が鈴音を連れ去ったにしては誰にも不審に思われなかったってことは、逆を言えば鈴音という不自然じゃなかった人物だったってことじゃないか？」

『確かに……。』

「奥方様として不自然じゃない人物ですか…。」

「それって誰…？」

うーんと頭を悩ませる五人。皆目見当がつかない。

「あ…、いるじゃん。ここに。」

『誰だ！？』

暁が勢いよく身をのりだす。

「お前だよ。」

疾風がぴつとさした指の先は、自分に向けられている。他の三人も揃って暁を見た。

「はあ…。確かに。」

「疾風は馬鹿ね。そんなわけないじゃない。暁様が犯人だったらこんなに慌てふためかないわよ…。」

「八重殿の言つとおりです。」

灰二、八重、白銀の三人はお互い顔を見合わせながら口々に言った。

『期待して損した…。』

参考にもならなかったと暁は肩をおとして落胆した。

「…悪かったな。」

結局何も分かってない。暁は鈴音の安否が気になって焦りが出て

きた。

(駄目だ。焦ったら。いい考えが浮かばない。)
暁は気持ちを落ち着かせようと深く深呼吸し、心のざわつきを抑えた。

「降り出しに戻ってしまいました…。」

「疾風が余計なこと言うからよ。みんな落ち込んだじゃない。」

「俺のせいだよ…。」

『二人ともやめろ…。俺はもう一度有明の民に鈴音のこと聞いてまわるから。今日はもう遅い。皆は家でゆっくり休んでくれ。急に招集をかけて済まなかった。今日は集まってくれてありがとう。』

暁は全員に向き直ると、感謝の気持ちをこめて礼を言った。忙しい中、慌てふためる自分のために皆集まってくれた。そして真剣になって話し合いに参加してくれたことが何より嬉しい。俺は皆に支えられてるんだ。

「暁様、何を仰います。私は奥方様が見つかるようあなたと供にお探し致します。私はあなたの従者ですから。なんなりとお申し付けを。」

「私もです。鈴音が誘拐されたとなれば一大事ですもの。みつかるまで私も一緒に探します!」

「あ…俺も。なんたって暁の親友だし!」

「曉様は良きご友人、従者をお持ちになりましたね。灰二も嬉しい
ですなあ。もちろんこの灰二もご協力いたしますぞ。」

『皆……、ありがとう』

鈴音、必ず見つけてみせるからな。

第二十二話 束の間の幸せ

『あーあ。僕だいが悪者扱いされてるね？八雲』

「…。」

目の前にある小さな泉の中に、鈴音の行方をさぐる曉たちの姿が映っている。夜中だというのにせっぱつまった様子で搜索をしているようだ。探しても見つかりっこないのにね。よくやるよと、呆れたような溜め息をつきながら後ろを振り返る。

『ねえ、鈴音はどうしてる？』

「今は寢所で眠っているようです。」

『そっ。』

黄昏の顔が悪戯にニタリと笑った。良からぬことでも考えているのだろう、と八雲は思った。

「どちらへ行かれるので？」

一歩踏み出した主にストップをかけると、黄昏は首だけ振り返って楽しそうに答えた。

『寝るだけだよ。おやすみ八雲。』

スタスタと足早にかけていく黄昏。絶対あの娘の所だと思い、何故この兄弟はそんなに娘に惹かれるのかが分からないといった様子

で主を見送った。

スウー……………

パタン。

音をたてないよう静かに襖を開けては閉めて、布団の上で横たわる人物のもとにそろりと近づいていく。

(ぐっすり眠ってるかな…?)

そおっと起こさないように顔を覗きこむと、すやすやと安らかな寝息をたてている鈴音の顔がそこにあった。

(かっ…かわいい…!!)

黄昏はもつと近くで見ようと鈴音の横たわる布団の隣にうつ伏せになって、顔を近づけた。かすかに風呂上がりの香りが漂って、黄昏の鼻腔をくすぐった。

(良い匂い…)

くんくんと鼻を近づけてみると、鈴音の、女の甘い香りが漂ってくる。その香りに酔いしれながら、そのサラサラとした黒髪に触れてみた。櫛ですかなくても流れる髪を、指に絡ませてはもてあそんだ。

(兄さんはやっぱりずるいな。こんなにかわいい子を奥さんにするなんて。僕のこと好きになってくれないかな。)

淡い期待を抱きつつ、無防備な姿で眠る鈴音を見つめた。蒸し暑いのか、鈴音の体に掛けられた布団は半分しか掛ってない。黄昏は腰とお腹は冷やしちゃいけないと、ずれた掛け布を掛け直してやった。

鈴音は兄さんとベタベタしながら寝てるよね…。羨ましい。

思えば鈴音が気になったのは有明の町で曉とデートしている時だった。儀式を成功させた娘とはどんな人間なのか。あわよくばその力を利用できないかと考えた。けど、僕と全く同じ姿の兄さんに甘えるところ見ちゃったらそんな気失せちゃったんだよね。だってごく普通の女の子と大差なかったし。あ、でもちよつとだけ容姿が違うかなあとは思ったけど。幸せそうな兄さん見てたら急に羨ましくなっちゃってねー。ってあれ？僕は一体誰に説明してるんだろかね？ま、いつか。

なんだか眠くないし、このまま鈴音のとなりで添い寝でもしよっかな。

「……………」

あ。鈴音起きちゃったのかな？別に僕が煩くしてたからじゃない

よ？だってこれは心の中で思ってることだし。声にはいつさい出してないもの。

「うー… 曉…？」

あらら…。寝惚けてるね。残念だけど僕は黄昏だよ？

「曉……ギョツとして…」

寝惚け目でそんなこと言ってくるけど、いつも抱き合って寝てるからだよね？こんなこと言っの。えーどうしよっかな。いいのかな？僕でも。まあいつかー！鈴音を抱き締めて寝れるのは今しかない！ねえ兄さん、まだ話したこともない兄さん。兄さんには悪いけど、今だけ兄さんの振りさせてもらっよ。どうせその内鈴音を取り返しにきちやうんでしょ？だったらちよっただけ…いいよね。

『よしよし』

そつと鈴音を抱き締めてみる。寝惚けた鈴音は案の定僕の体にしがみついてきた。

うわっ…、し…至福…！

思ったよりもふわふわで柔らかい鈴音に胸がドキッとした。ヤバイ…これは癖になりそう。

胸の高鳴りを感じながら黄昏は鈴音をさらに抱き締めてみた。胸に鈴音の顔が埋められているのと同時に、安らかな寝息が聞こえてくる。

寝ちゃった…。でも、幸せっ！！

黄昏は鈴音を抱きながら、すやすやと聞こえてくる寝息に次第に視界がまどろみ始めて、いつの間にか夢の中へと落ちていった。

第二十三話 不穏な影

もう何日たったのだろうか…。黄昏に連れてこられてから幾度となく夜をあかしては新しい朝を向かえた。何度それを繰り返したことが、鈴音には分からない。

ただ黄昏に与えられた部屋の中で、たった一人の愛する人への会いたい想いをつのらせるばかりであった。

「…暁…」

薄暗い部屋に一筋の光がさしこんでくる。それはまるで聖なる光が邪悪な闇を断ち切るような、美しい、シャープな光の線を描き出していた。

その光の延長線上に、今日もまた一睡もできずに朝を向かえてしまった男が横たわっている。男は右手を額にあて、かかっていた前髪を軽くはらうと、半ば虚ろな瞳で横をみた。

『…ああ……』

男は落胆の溜め息を漏らすと、掛っていた掛け布をぐっと両手で握り締めた。

今日も彼女は…鈴音はいない。いつも隣で眠る愛しい妻の姿はない。

暁は鈴音失踪から一睡もできず、気が気でなかった。

ただ、暁があまりにも体を休めずに鈴音を探しに行こうとするも

のだから、灰二や白銀がみかねて、休むよう強制的に屋敷に押し込められたのだった。

しかし、こうして一旦屋敷に戻って体を休めるために布団に横になっても、頭の中は彼女の安否でいっぱいで一睡もできずにいたのだ。ただ、理性的に考えれば、焦ったところで鈴音が見付かるわけでもなく、一睡もせずに自分の体を痛めつけてばかりいても仕方がないことはじゅうぶん分かっていた。だからせめて横になって、体の筋肉の疲労だけでもとろうと努力はしていたのだ。そうしているうちに朝がやってきたのだ。

曉はゆっくりと体を起こす。一晚横になったせいか疲労感はない。それに頭も異常なほど冴えてはつきりしていた。鈴音を思うあまり、一種のトランス状態に陥っているのかもしれない。きつと脳も疲労しているはずだが、精神がそれを感じさせないほど興奮しきっているのだろう。

早く鈴音を探し出す。曉の目的はそれひとつだ。

曉は立ち上がり、早々と身支度を整えると、一筋の光がさしこむ襖を開けて外へと出た。

「曉様、おはようございます。」

外に出ると落ち着いた物腰で白銀が挨拶をしてきた。

『…おはよう…』

「…曉様。まだお疲れのご様子。どうか今一度休まれますよう。」

浮かない声色で挨拶をする曉に、白銀は主を労って休むようにと背を押して寢所へと促した。

しかし、曉はその手を振り払うと大丈夫だと一言いい放ち、白銀

から距離を置いた。

『…心配してくれているのは感謝する。だが、俺は大丈夫だから。』

「しかし…」

その場に重たい空気が漂う。空は晴れているのに気まずい空気が流れる。

『白銀、そんな暗い顔しないでくれ。俺は一晚ゆっくり寝たし、鈴音が俺を待つてると思うといてもたつてもいられないんだ。なに、鈴音が見付かったらゆっくり休むさ。』

「…分かりました。ですが、あまりご無理をなさらないよう。私も僅かながらお力になれるよう努めますゆえ。」

その言葉に曉はふとかすかに笑って答えるだけだった。

その表情は…

お前を信頼している　微笑んでみせた主の顔は確かにそう訴えていた。

曉が唯一家臣として信頼をおく白銀。そこには友情とも、何とも呼べぬ信頼関係が築かれていた。

だから白銀は主にそう目で訴えられては、自分も主のために鈴音を全力で探しだそうと思ったのである。

そして曉はクルリと体の向きをかえると、龍の姿へと形を変えて飛びたった。

「さて…私も主のお力になれるよう奥方様を探しださなくては。」

「……ねえ……いつまで私をここに置いておくつもり……？」

部屋から一步も外に出させてくれない黄昏に不満と苛立ちをつのらせながら鈴音が問う。ただでさえいきなり連れてこられ、その目的も不可解なまま閉じ込められて腹がたっているのだ。勝手に誘拐しといて、特に何もしないままただ部屋に軟禁しておく。全くもって意味が分からない。

なんとか外へ抜け出そうと試みるが、たとえ部屋からは出られたとしても黄昏いわく屋敷になんらかの結界が施されていて外に出ることも叶わず、曉に会いたいと言えば即却下される。鈴音は心にもやもやとした不快な気持ちを抱かずにはいられなかった。

それになんと言つても一番不快に感じるのは、黄昏が曉と全く同じ姿だということ。初めて自分は曉と双子の弟だと名乗られた時には、驚きと少々不信感を覚えたが、最近あながち嘘ではないような気がしてきてしまった。性格や言動は全く違うものの、時折みせる彼の行動は曉を思わせるものがあつたから。

朝目が覚めると、必ずといつていいほど何故か隣で添い寝されていたり（しかも人を抱き枕のようにして寝ている）、抱きついてきたり、可愛い可愛いと何故か必要以上にまとわりついてくるところがそうであつた。

しかし、抱きつかれたり、一緒に寝るのは夫である曉だから良いのであつて、黄昏にそれをされるのは曉を裏切っているようで嫌だつた。だが、何度振り払つてもまとわりついてくるし、普段へらへ

らしたような言葉で『鈴音』なんて言ってるくせに、たまに曉の真似をした言葉を使ってわざと鈴音を困らせるようなことをするのである。

それには鈴音もまいってしまって、なにせ姿が同じだし、唯一違う言葉使いまで同じにされてはとも調子がくるってしまって嫌だと言いにくくなってしまつのだ。

「ねえ…聞いている？私はいつまでここにいなきゃいけないのっ！」

今もまた鈴音にすりよってくる黄昏をなんとかかわしながら、なかなか真面目に話を聞こうとしない黄昏を怒鳴りつけた。

『え〜？僕の気が済むまで。もしくは兄さんがここを見つけるまで、かな？（笑）』

ニヘラとふざけた笑いを浮かべる黄昏。その態度はさらに鈴音の苛立ちという名の導火線に火をつけた。

「もう！ふざけないでよっ。私で遊ぶのはいい加減にしてっ！こっちはあなたの遊びに付き合ってるほど暇じゃないの」

『……………っ！？』

「それにねっ！結界だかなんだか知らないけど早く解いてよっ！こっちは帰りたいって言ってるでしょ！？」

怒る鈴音に呆気にとられていると、突然ガツと胸ぐらを掴まれ体勢を崩す。

『ちよっ……！鈴音っ！？』

「なによっ！！早く解いて！曉の元にかえしてっ」

『わわっ…』

普段とは違って変わって怒り出した彼女に困惑して動けないでいると、ガラツと勢い良く襖が開かれた。

そこに立っていたのは黄昏の家臣、八雲であった。その姿を確認すると黄昏は安堵の溜め息をもらした。そしてすっかり安心したのか、今だ胸ぐらを掴まれたままなのにも関わらず、余裕の笑みを溢す。

『あ、八雲。ちょうど良かった。助けてよ。鈴音が機嫌悪いみたいでさ。僕じゃ対応できないっていうか。』

八雲はその情けない主の姿に落胆しつつも、主の望みを叶えるために一歩一歩鈴音へと近づいていった。

一歩一歩大股で迫ってくる男に鈴音は一瞬たじろぐ。ずいたいが大きいだけに、側にこられるだけで自分が押し潰されるような錯覚を覚えてしまう。

「小娘。その手を放せ。でないとその細い腕をへし折るぞ。」

「……………」

『あ…駄目だよ八雲。鈴音を怖がらせちゃ。』

八雲の威圧に胸ぐらを掴む手が緩むと、黄昏はぐいっと、たじろぎ固まってる彼女の体を抱き寄せた。

「あつ…！」

不意をつかれて彼女は自然と黄昏の胸の中に飛込む形になってしまふ。

腕に力をいれて離れようとするが叶わず…。

『あく良かったよ。八雲が来てくれて。だって鈴音ったら僕にいきなり掴みかかってくるんだもの。あのままだったら嫌でも僕が君をおさえつけなきゃいけなかったからね。傷つけるのは嫌なんだよ。だって痛いのが嫌だもんね。』

「じゃあ放してっ」

鈴音は黄昏に捕まったのが嫌でジタバタと暴れた。

『やだよ。』

「こつちだつてやだあ！」

ぎゃあぎゃああと騒ぎあつ二人ははたから見れば痴話喧嘩をする力ツプルである。

「……………。黄昏様…少々お時間よろしいですか。」

『え？何？』

呼ばれて振り返ると、部屋の外にくるよう合図された。こんな時は大抵八雲のお説教か、重要な話がある時くらいだ。どちらにせよ、呼ばれたらすぐに聞かなければならない。

(ちえつ。つまんないの。せつかく鈴音と遊んでいたのに…)。

渋々立ち上がり、鈴音を解放してあげるといい子にしてなよ？と子供にいい聞かせるような口調で八雲と共に部屋を出ていった。

二人が出ていきやつと解放された鈴音は部屋の隅に駆け寄ると、カタンと小窓を開けて外を眺めた。この場所で唯一外を眺めることができるのがここだった。庭にでも、結界のせいで外がクリアに見えない。まるで憑河山に濃く霞がかかっていた時のようにぼんやりとして見えないのだ。

だが、どうにかして脱け出すことはできまいかと密かに部屋中を調べていたところ、この場所だけ外の様子が伺えることを発見した。それからというもの、晴れた日、外がよく見える日にはここから助けを呼べないかと覗いていたのである。

(ここだけ外が見えるのは何故だかわからないけど、もしここから見える空を天かける龍が通ってくれたら…。もしかしたら助けを呼べるかもしれない。)

小窓から覗く小さな空には、しばしば龍の姿をみかけることがあった。

…ここを愛しい龍が通ってくれたら…

そしたらここから脱け出せるかもしれない。

(ここから出してもらえないなら、自分で脱け出すチャンスを見つけておかなくちゃ。)

鈴音は小窓にびたりとはりついて動かず、じっとかじりつくように空を見つめたのだった。

「黄昏様…あの娘に構うのはよろしいですが、本来の目的をお忘れとは言いませんよね…」

『分かってるよ。なんのために結界まで張って彼女を隠してると思ってるの？僕だってそこまで馬鹿じゃないよ。あの子はあれでも巫女だからね。利用価値がある。だから捕えた。そうでしょ？』

「はい。仰るとおりでございます。」

『でもなあ…僕はあんまり気が進まないよ。あの子の力を利用して虚無を称する“アマツラ”を呼ぶなんて』

気乗りしないのか黄昏はハア、と溜め息をつく。

「アマツラ”は我らの先祖と言って良い存在。“アマツラ”こそが我らの真の神。今の暁様程度の力ではかなわないほどの莫大な力を持ち合わせている龍と聞きます。」

『ふーん…。で、その虚無を呼んで半龍を無にしてくんでしょ？半端な奴はいらないうってかい。酷い話だね。』

「彼の“アマツラ”が生きていた太古では、“アマツラ”が絶対。突然変異で半龍が生まれると“アマツラ”の力で無へと変えていたそうです。そのため天龍は安定していたそうですよ。」

真顔で主に訴えてくる八雲から目をそらし、馬鹿馬鹿しいとでも言うかのように黄昏は嘲笑った。

『今になってまた“アマツラ”を蘇らせる…か。……父上も変わったお人だ。』

「轟様は龍であることに誇りを持っていらっしやる。それが太古に“アマツラ”が滅ぶと、半龍を消す者がいなくなってしまう。そうして我らはいっしか人間の力。巫女の力に頼り、半龍を抑えるべく人間と交渉をもつようになった。それが私としては情けなく感じております。人間の手を借りるなど…」

『…少し黙りな八雲』

八雲の言葉を遮り、顎に手をやりながら何やら考え込む様子。八雲は一瞬主を機嫌を損ねてしまったのではないかと思ったがそうではないらしい。しかし家臣としてはペラペラと喋り過ぎたと心中で

反省した。

「………………。黄昏様？如何なさいましたか」

こ難しい顔をして何やら考えている主に声をかける。

腕を組み、しばらくの間動かない主を見つめっていると、やがてぱつと顔をあげて振り返った。

『“アマツラ”ねあ…。人間は別に嫌いじゃないけど…父上や上層階級のじいさん達がお望みじゃ…仕方ないよね。やるつか、八雲』

「はい。主」

暁は龍の姿で天龍国を飛びまわっていた。

鈴音の行方がわからなくなったのは間違いなく有明だ。

だから有明を中心に探しまわっていたが、結局何の情報も得られなかった。

ならばその外、有明以外にいる可能性もなくなるはない。

だから搜索範囲を広めて探すことにしたのだ。

もちろん暁だけでなく、疾風も八重も、灰二や白銀も協力してくれ

ている。疾風に少数人数で探すより、最高神の権力をもって搜索させるのはどうかと言われた。それも全く考えなかったわけではないが、事を大きくしすぎてもし鈴音をさらった犯人を刺激させてしまつたら…。それこそ鈴音を危険にさらすことになるかもしれない。犯人の目的が何にせよそれだけは避けたかった。

ともかくここは自分の信頼のおける人物達だけで極力事が大きくならないように動くことが先決だった。

とはいえ最高神自ら探しまわるのもかえって目立ってしまう。が、もともと有明以外の空はあまり飛ばないので、表向きは国中の権力者に民の様子を聞いてまわるといふ最高神らしい仕事ということにし、それと同時に鈴音の搜索もするということにすれば良いということにしたのだ。

そして何かしら異変があったら、互いに通じあうようにすれば良い。それが暁の考えであった。

そして今は有明からずっと北の方、高山に囲まれ、豊かな自然に恵まれている真羅へと来ている。

北の土地、真羅を治める領主は朔夜という男である。まだ九百年余りしか生きていない若さ（外見年齢は二十歳くらい）で立派に北の大地を治めているのである。他にも南、東、西と四方を治める領主がいるが、その全てをまとめるのが暁の仕事であった。

（まあ、まとめるとは言っても元々半龍。信用なんかあまりされていないだろうが…。）

意地けても仕方ないと首を横に振って邪念を打ち消すと、真羅の領主宅へと向かう。スタスタと歩いていくと空から暁が降り立つの

を見ていたのだらう、真羅の民達は家屋から出てくると曉を出迎えてくれた。

口々に曉様だと言っては子ども達は興味の眼差しを向けてくる。曉はそれに微笑で答えた。

領主宅の門までくると、朔夜が後ろに二人家臣を連れて立っていた。朔夜は微笑みもせず、ピクリとも微動だにせずにとちらを見ている。

曉としても朔夜と会うのは初めてだったので、そのぴりつとした空気感に少々緊張した。

『朔夜殿ですね。』

「……ええ。」

曉としては第一印象が大事だと努めて明るく声をかけたが、相手はこちらを警戒しているような、あるいは様子を伺っているような目でみてきて、ワntenポ遅れてから答えた。

この時点で直感的にあまり社交的なタイプでは無いなと曉は思った。

『突然の訪問申し訳ない。最高神として覚醒したのがほんの最近のことであつたため挨拶が少しばかり遅れてしまいました。』

(…本当は鈴音と遊んでたから、とは言えないな)

「……。いえ。こちらこそ最高神であるあなたの元へご挨拶に参らず失礼しました。父が領主を引退し、私が代わって領主になったのは最近のことですから。」

……。

それより長旅お疲れでは？どうぞ中へ……。」

無表情な朔夜に誘われ、曉は微笑んで促されるまま中へと入った。

北の地、真羅の領主 朔夜と向かい合うように座る。

相変わらず朔夜の両隣には二人の家臣。いつでも対応できるような側の付き従う姿は優秀な家臣と見てとれる。

「……。曉様、真羅の様子をと話では伺っておりますが、現在真羅の民は平穩に暮らしております。」

朔夜が顔をあげてそう話すと、彼の艶やかで長めの髪がサラサラと揺れた。そう、鈴音のように……。

「……。曉様？」

頭に疑問符をつけて、朔夜が不思議そうな顔をした。曉は領主の前でほうけていたことにハツとし、不謹慎であったと自分に喝をいれた。

『あつ、いやいや申し訳ない。少し疲れがでたよう。確かに真羅は先程見た限り、私を温かく出迎えてくれる民ばかりでした。これも朔夜殿、前領主殿の賜物でしょう。』

「……。それは有難いお言葉だ。時に曉様、あなた様は我等の最高神。私のような者に敬語など不必要では？……。それに頂点にたつものが威厳をもたねば下の者は何度言ってもついてこなくなります。私はいつてもその区別は欠かしません。」

皮肉まじりのその言葉に、曉は全身が熱くなるのを感じた。そして裏をかえせば、もっとしつかりしろと言われたのだ。

年下の朔夜にそう言われるとは最高神としてまだまだ自分は未熟だということ。ついで朔夜のほうが領主としてきちんとしていることが伺えてならなかった。

『…忠告、確かにきき届けた。以後気をつけたいと思う。して朔夜殿、ひとつ聞きたいが、良いか。』

ゴホンと咳払いをすると、最高神らしく振る舞う。

「なんなりと。」

『…。真羅は穏やかな様子は分かった。これから朔夜殿にこの地を治めて欲しい。それと…最近何か変わったことはなかったか？』

曉の問いに朔夜はうつむいて考えこむ。

「…変わったこと…ですか。…真羅の地では特に聞き及んでおりませんが。…それが何か？」

『いや…無ければ良い。何かあった時に対処できるよう、私としては把握しておきたかったのだ』

無いなら無いでその方がいい。もし国を乱す者がいるならば俺が許さない。曉は使命感に燃えた。

(……………良い瞳だ)

朔夜は声には出さずに暁の燃えるような瞳を見つめた。正直話しの途中で呆けるなど最高神としては抜けているが、その曇りなき瞳はまっすぐだ。もう少ししっかりしてくれればきつとこの方は良い最高神となるだろう。朔夜は直感でそう思った。

それから暁は朔夜から真羅の細やかな様子を聞き、できる限りこの地の状況を把握しようと努めた。

そして帰り際、真羅の民達に見送られながら去ろうとした時、後方から朔夜に引き止められた。

「暁様お待ちを。先程変わったことはないかと仰られましたね。真羅の地ではありませんが、南の睡蓮では不可解な出来事が起こっているとかいないとか。」

『それは本当か!?!』

「はい。外からは確かに屋敷に見えるのに近づくと消えてしまつとか。真かは分かりませぬが、私が聞いているのはそのくらいです。」

『有難い。私は明日にでも真意を確かめにいく。今日は急ですまなかつた。朔夜殿には感謝する。これからもこの地を守ってくれ。』

「もちろんです。お任せを」

南で起きてる怪奇。今の暁には十分な収穫だ。はやる胸を抑え朔夜と真羅の民に別れを告げる。

赤く燃ゆる夕陽を背に暁は空へと飛びたった。

愛しい彼女を見つけるために。

第二十四話 動き出した者たち

日もとつぷりと暮れ、空が闇に沈み始めた時刻に龍宮に帰ると、ちょうど白銀が問の前に立って出迎えてくれた。

長いサラサラとした銀髪を垂らし、暁に向かってお帰りなさいませと丁寧にお辞儀をしてくる。

暁はただいまと一言告げては、白銀を引き連れ中へと入った。

部屋の中は白銀が用意してくれたのだろう行灯が置かれてあり、明るく照らされていた。

暁はゆっくり腰を降ろすと、一息つく。今日手にいれた情報は真羅が変わらず平穏であること、そして南の地 睡蓮で怪奇が起こっているとのことである。真羅は朔夜殿がいるから大丈夫だろう。やはり気になるのは怪奇がおこっているという睡蓮だ。

もしかしたら鈴音と関連性があるかもしれない。また、無いかもしれない。けれど確かめてみる価値はありそうだ。

ふうと息を吐くと、落胆の溜め息ととらえたのだろうか、白銀が静かに部屋に入ってきて労るように言葉をかけてきた。

「本日もお疲れのご様子。どうかあまり思いつめなさらなくて下さい。我々も全力で奥方様をお探し致しますゆえ。」

『え?... あ、すまないな白銀。』

そんなに落ち込んでいるように見えたのか。確かにあまり寝ていないし疲れているのだが、今日は収穫があつた分少しは元気になった気でいた。

だが、自分では分からずとも白銀に気をつかわせるほど表に出ているのかもしれない。暁は眉を寄せてこちらを見ている家臣を安心させるように微笑んでみせた。

そして思い出したように、今日あったことを白銀に話した。

「それは真ですか曉様。実は私もご報告しようと思っていたのですが、南で怪しげな屋敷があるとのことでした。奥方様と何かしら関係があるのではないかと思います。ご帰宅なさった時分に申し上げようと思っております。」

『！白銀もか。…とにかくその屋敷調べてみる価値はありそうだな…。明日現地に行こうと思う。疾風たちにも一応声をかけておいてくれ。』

「かしこまりました。」

白銀は頷くとスウ…と姿を消した。

翌日、皆が龍宮へ来るようにと前日の夜に収集をかけておいた。今は明け方、まだ集まる予定の時間帯ではない。ただ朝早くに目が覚めた曉は部屋で一人瞑想した。日差しも弱く、鳥たちが目覚めてさえずりだすか否かのこの時間は空気も澄んでいて、心を落ち着かせるには最適だ。その中でこうして心を静め、目をつむり空気と一体になると雑念が取り払われて頭が冴える。閉じていた目をふと開ける。と同時に溢れんばかりの光が瞳孔の中に入り込んでくる。暗闇から一気に眩い光の世界へ…

目の前にはいつの間にかきていたのか、疾風、灰二、白銀がいた。
「おはよーさん。目え覚めたか？」

あたかも今起きたばかりかだろ？とでも言つように悪戯つぽく笑う
疾風。

『寝てたわけじゃない…』

「…。…うん。分かつてる」

予想どおりだが普通のリアクションがかえってきて、疾風としてはちよつと面白くない。

（曉って冗談つうじないよなあ…。こつ、もっとノリ良くなって
「曉っ！おはよっ！」『おう疾風、今日も元気だな！』ガシッ！！
つて肩くんじゃうような爽やかなやりとりができるといいんだけど
なあ。）

『疾風…何考えてる？』

「いゝや？何も？」

勝手に想像を膨らませているのを、何となく悟られたがそしらぬ
顔でかわす。

（まっ、曉がそんな熱い男だったらキモいよな！…いやでももし…
…そしたら絶対面白……＜省略＞）

朝からブツブツ念仏を唱える疾風はさておき、皆を見渡して八重がいないことに気づく。するとこちらから問うまでもなく白銀が一步前に出てきて口を開いた。

どうやら八重は美月が熱を出したらしく目が離せないからということであらうらしい。

(美月か…。最近会ってないな。ずっと鈴音探しをしていたから…とはいえ久々に会ったら会ったで絶対ヒーローごっこに付き合わせられるのだろうな…)

などと物憂いげに考えたところで、顔をあげ行こう、と皆に向かって言った。

薄暗く、足場は湿っぽい洞窟の中を二人の男が歩いている。一人は銀髪、赤眼の平均より少し身長が高めの男で、もう一人はそれをはるかに上回り、筋肉が隆隆と盛り上がった体格の良い男である。

銀髪の男が先頭に、体格の良い男が後ろをついて歩き、互いに言葉は交さない。二人は何やら緊張した面持ちで歩を進めていった。

暗い洞窟の中は、僅かな口ウソクの明かりで照らされ、かろうじ

て足場が見えるくらい。奥は真つ暗で、どこまで続いているのか不安になるくらい深い闇に包まれていた。

だが男たちはその先に何があるのかを知っている。

さわっ…と不意に風が頬をかすめていく。

決して心地よくもない…湿って生温い嫌な風…

男たちはその風を感じるや否や、一旦足を止め額に冷や汗を浮かべた。

『…もう何度もここにきてるけど、この空気には慣れないな…』

「…私もです。前回よりも覇気が増していらっしやる気がします。さすがは黄昏様のお父上…」

『まだ姿が見える距離まできてないのに足がすくむよ…。(ちよつと化け物並じゃない…?) ……ちびりそう』

「(なっ!?!化けっ…聞こえますよ黄昏様っ!)……我慢なさつて下さい(下のほうも)。相手はあなたのお父上なのですから。」

『…分かったよ…』

……。

(やっぱ八雲一人で行ってきて ?) 『

』。甘えないで下さい」

『 ……はい』

軽く立ち話しを済ませ、再び二人は奥へと進み行く。

先へ進んで行くと、突然吹き抜けの広い場所へと辿りつく。球を二つに割ったようなドーム型の広間。人為的に掘られ、整形されたことが伺える。ここにもやはり幾つもの蝋燭が灯され、広間を淡く照らし出していた。奥には大きな扉が見える。

『 (薄気味わるっ ……) 』

今度は声に出さずに心の中で思う。

黄昏は生温い空気を吸いこみ、深呼吸すると前に歩み出て、固く閉じられた大きな扉の前に立った。

『 ……父上。僕です。黄昏が参りました。どうぞ御目通りを』

岩石でできた広間に、黄昏の声だけが響いた。

『 …… …… 。 』

フッ

「！」

突如広間を照らし出していた蠟燭が消え、視界が漆黒の闇へと変わる。

《……黄昏か……。入るが良い……》

どこからともなく、男の酷く低く唸るような声が響いた。

すると目の前の固く閉ざしていた重たそうな大きな扉が、ギギギ
…と音をたてて開き始めた。

ひやっとする冷たい空気が中から流れ出て、あたりの空気が白く
色付く。

黄昏はぐつと息をのむと八雲についてくるよう合図を送り、扉の
奥へと足を踏み入れた。

カツ…カツ…と足音が壁に反射し幾重にも重なって響きわたる。
肌寒い空気の中、二人は足音を踏み鳴らしながら確実に進んだ。

カツン……………

最後の響きと共に、黄昏は立ちどまる。そして見上げたその先には…

…不気味な…ドス黒い一体の龍…

その巨体はとぐろを巻く蛇のようにうずくまり、唸り声をあげながらゆっくりと動いていた。

よく見ないとどこが頭か分からぬほど黒く、うごめいている。

『ち…父上、今日はお呼び頂いたので参上しました。』

その不気味な巨体に、震える声で話しかけると、黒い龍はゆっくりと頭をもたげ始めた。

シューウウウ………と龍の呼吸音。

ゆっくり首をもたげた龍は、高い天井に届いてしまうのではないかと思うくらい伸び、その巨大さに二人は圧倒された。

《黄昏：我が息子よ…よくきた。》

『はい』

頭をもたげた龍の瞳は今だ閉じられたまま。黄昏は龍から漂うただならぬ覇気に眩暈がするほどだったが、何故か龍から目が離せない。

見えぬ何かに引き寄せられるように、黄昏の視線は龍の閉じられたままの瞳へと移動する。

今は閉じられているが、開眼した時のその瞳の恐怖ははかりしれない。一度見たものは体が氷ついて動けなくなってしまう。

《お前を呼んだのは他でもない…“アマツラ”についてだ。“アマツラ”は我らの神。だが、莫大な力と虚無の名をもつ神は太古に滅んだ。

…何故だか分かるか？》

大地を揺るがしそうなほどの低い、冷たい声

『……………す…すみません父上。分かりません。…でも、“アマツラ”も老いには勝てなかったんじゃないかと僕は予想しますが。』

《ふむ…お前はそう考えるか。》

「? ……はい。“アマツラ”は神と聞き及んでいますが、僕らと変わらない龍という一種の生き物だったのでしょう?ならば生身の体は年月とともにいつかは朽ち果てていくもの。それが自然の摂理なのでは。」

《…確かに自然の理とはそのようなのだとお前に教えていたな。だが、“アマツラ”だけは違うのだ。あれは我らとは次元の越えた生き物。虚無という名がつけられた所以には、ただ消し去るだけの意味のみならず死すらも無にするという意味もあるのだ。》

「そ、それはまさか…!」

《そうよ。死すらも無に。則ち永遠の命を意味する。》

「!」

永遠の命!? そんなものが太古の時代にあつたというのだろうか。そんなおとぎ話のような生物が存在しただって? そんな馬鹿なと半信半疑だが、目の前の父が嘘をつくはずがない。

「父上、でも“アマツラ”は永遠の命を持ちながら滅んだということになるのでは…。これではつじつまが合いません。どういうことですか?」

《それがこれからお前たちに話すことだ。心して聞け》

閉じられていた龍の瞳がゆっくりと開かれる。

二人はごくりと息をのんだ。あの一度見たら忘れられないほど霸気を放つ瞳が再び自分らの目の前に晒される…

ゆつくりと開かれた黒き龍の瞳は、血に塗られたような紅。その妖しさ漂う紅の瞳の中に蛇のごとく金に輝く縦長の瞳孔が一本入っている。

この悍ましい色合いの瞳に二人は寒気がした。何度見ても薄気味の悪い恐ろしい瞳をしている、と。まるで鬼灯を思わせるその瞳は見ただけで相手を射抜いてしまうほどの妖しい光を放っていた。

冷や汗をかき、固まっている二人を見て轟は嘲笑うかのごとく大きく笑った。

《クツ…ハハハハツ…！我が恐ろしいか？仮にもそなたの父であるうが。何を恐れる必要がある》

轟は大口を開けてまた笑った。

『…ち、父上の気迫さに負けたのです。僕は父上のように強くはないですから。』

《…それはいかん。我の息子であろうとお前はいずれ我を越えねばならぬ。息子よ…龍であることを誇れ。そして龍らしく強くあれ。それを忘れてはならぬ》

轟は笑うのを止めて静かに諭すように言った。

《また話がそれたな…。では本題に入るぞ》

『はい。父上』

一方、曉たちは睡蓮へと到着していた。曉らは着くや否や睡蓮の民達に怪奇の話しを聞いてまわった。だがおかしなことになかなか怪奇を知っているという人間に出会えない。一体どういうことなのだと一行は頭を悩まされていた。

すると、ちょうどその時貧相な身なりをした老夫婦に声をかけられた。

「アンタらあ…変な噂話を流しとる、ちゅう一行かね？」

「はっ？変な噂あ？」

「ここらで怪奇が起こるとるなんぞ言ってまわっている。そうじゃないかえ？」

その言葉に皆それぞれ互いの顔をみあって首を傾げた。どうやら変な噂をたてている怪しげな一行として住民たちからみられてしまっているらしい。

『済まないが御老人。私たちは怪奇が起きていると聞いてそれを解決するためにきた。変な噂を流しているつもりは無いのだが…。』

「そつだぞ！じいさん、ばあさん。それにコイツはな、こつ見えても最高神『曉』様なんだぞ！！そんでもって俺は親友の疾で……ムグツ」

余計な自己紹介はいらないと灰二に引つ込めさせられる。

「！なんと曉様とな！？」

曉は黙つたままコクリと頷く。

「じいさま。確かにこの方銀髪に金に輝いた瞳をもつてらっしやる。間違いなく本物の曉様じゃないかえ？」

「ふーむ…確かにのう。」

「なんだよ曉。こころじゃ知名度低いなー」

『正直あまりこちらにはきていないからな…』

「お前、屋敷に鈴音と籠ってるか有明にばっかりいるもんな。はははっ」

『……』

疾風のからかいに言いかえせずにいると、老人が何かひっかかるようなそぶりを見せた。

「はて、鈴音とな？」

「じいさま。鈴音という娘御どこかで聞きましたよねえ？」

『なっ…：本当か！？』

「そうじゃなあ。確か…：おお！そうじゃった。黄昏殿が拾ったという娘じゃなかったかの？」

「そうじゃそうじゃ。暁様があまりにも黄昏殿そっくりじゃったから、黄昏殿に化けた不審人物かと思ったのですよお。すみませんねえ暁様。」

黄昏…？俺がそいつに似ている？いや、それゆりそいつが鈴音を拾ったとはどういうことだ！？

「その話詳しく聞かせて頂けますでしょうか？」

白銀がずいと前に歩み出た。老夫婦は誰？不審な顔をしたが、暁が家臣だと告げると快くいいですよと答えてくれた。

老夫婦から話を聞くと、睡蓮には黄昏という若き青年が住んでおり、いつも身なりの良い衣服を纏って家臣を連れて歩いていることから良い所を出ている御曹司であろうと言われていた。人あたりも良くこの辺りでは評判も良いとので地元ではちよつとした有名人だった。それが最近、憐れな娘を見つけたらしく同情して拾ってきたとのこと。その娘の名は鈴音と言って、その愛らしい姿から拾った本人も大変気に入っているのだとか。

「わしは娘御をあまり見たときはないが、本当に黄昏殿はその娘を大事にされてるそうで中々家の外に出たところは見た時ないのじやよ。」

「でも良かったじゃないのお。黄昏殿に良い人が見付かったという証拠よじいさま。」

わいわいと盛り上がる老夫婦。 曉はわなわなと肩をふるわせながらそれを聞いていた。

拾ったただ!? 確実にその男が鈴音を連れ去った犯人であろう。 心臓の鼓動が早くなり、頭に一気に血液が集中していく。 再び鈴音を奪われた初日のあの絶望感と怒りがまざまざと蘇ってくる。

(曉様、どうか今はお怒りになさるな。)

その様子に気づいた灰二が老夫婦に聞こえない程度の声でぼそりと囁いた。

曉はぎりつと歯をくいしばって一時的に怒りを沈めると、老夫婦に向き直り平静を装って尋ねた。

『御老人、詳しい話聞かせてくれて感謝する。その黄昏殿、私に似ているとは実に興味がある。一目会いたい。黄昏殿はどちらへお住まいか。』

「黄昏殿はこの道を通き当たりまで行き、右に行くことやがて垣根が見えてきます。そこを左にいけば黄昏殿のお屋敷がありますぞ。ただいつもあるとは限りません。あの屋敷は特別な術が施されているらしく在る時は在るし、無い時は無いですからのお」

術を施す。その時点で怪しい。だが、老夫婦の様子を見るかぎり

それをおかしいとはちつとも思っていないようだ。寧ろそんなのは日常茶飯事、当たり前前という表情で語っている。それは先程黄昏を語っていた時のように黄昏という人物を信用しているところからくるものなのだろうか。

人あたりが良く評判も良い。だがそんな人物が術をわざわざ家にかけるなどどう考えてもおかしい。とにかくそこへ行ってみなければ。黄昏が拾ったという鈴音という娘も、もしかしたら自分が探し続けていた人かもしれない。

『御老人、では我々はそろそろ行くこうと思う。』

「ええ、ええ。また何かありましたら言って下さいませ曉様。」

老夫婦と別れ、すぐさま教えてもらった屋敷へと向かう。

「曉、鈴音みつかったも同然だな！」

『ああ。だが油断は出来ない。黄昏という男が何者なのかわからないからな。』

「術式を施す者ですから侮れませんな……」

「とにかく奥方様がどうかを確かめなければなりませんね。」

一行は自然と駆け足になって目的地へと向かう。

第二十五話 再会

曉は黄昏邸へと急いでいた。先程老夫婦から聞いた話ならば、今駆けている道の先に鈴音が待っているはず。

やっと…やっと会える！

その思いだけを胸に一目散に走った。怪しげな術を施してであろう黄昏邸が待ち受けていようが構うものか。そんなもの全て取り払ってやる。そして彼女を己れの元に連れ戻す。曉の頭の中はそのことで一杯で、はるか後方を走る疾風、白銀、灰二の三人のペースなどお構い無しである。

「あんのバカツキっ！一人で先に行きやがって。鈴音を連れてった犯人、敵陣に行くつてのに何一人で行ってんだ！！全く、考えなし！！無鉄砲！」

前方の小さくなつていく曉に向かって愚痴をこぼすが、当の本人には聞こえない距離である。聞こえても多分振り返りもしないだろうが。

「鈴音殿に会いたい一心なのであるうな。曉様は本当に一途になられて…。一生懸命な姿がこれまた健気で…。うう…。」

灰二はほろりと感動の涙を流し、それを裾で拭った。

「おっさん…。走りながら泣くなよ。おっさんが泣いても絵的に美しくねえしな」

「疾風殿…それより曉様を追わねば。見失ってしまいます。」

「…はいよ」

白銀にさりげなく注意されると、前方の曉を見失わないように目で追いながら走った。

『…ハア…ハア…、ここ……か？』

肩で息をしながら、目の前の原っぱを見つめる。老夫婦の言っていたとおりの道を走ってきた。間違いは無いはずだ。しかし、目の前に広がるのは屋敷一軒くらいが建ちそうな広さの空き地。

これが老夫婦の言っていたことなのか？

【…無いかもしれないし、あるかもしれない…】

そんな屋敷

確か術をかけていると言っていたな……。だとしたらその源を探し出さなければ。

おそらく建物自体が消えたということはないだろう。だとすれば一時的に見えなくして隠しているに違いない。

しかし自宅にわざわざこのような術をかけるなど怪しさ極まりない。なのに、この住民が不審がらないのは黄昏という男の人柄からなのだろうか。ある意味それは洗脳に近いかもしれない。

一体どんな奴なんだ…

黄昏がどんな人物なのか気になりはするが、それよりかは鈴音救出のほづが先だ。

「おいつ！一人で行くなっつもの！……ってここが黄昏ってやつの家がある場所か？」

やつとのことで追い付いてきた疾風が息をきらしながら尋ねる。

「なんもねえな。結界ってやつか？結界張ってあるって言われなきや、ただの空き地だな。」

『…だが、そう見えるだけだ。』

「行きますか？」

『ああ。』

暁は一步前へ進み出ると慎重に空き地のあるほうに掌をかざした。

その瞬間
！！

バチッ！！！！

『っ…！？』

かざした掌に突如激痛が走り抜けた。

「おいつ！！大丈夫か」

「「暁様！」」

直ぐ様疾風と白銀、灰二が歩み寄る。

『…っ…俺は大丈夫だ…。それより前を見る。』

一瞬とはいえ痛むのか顔を歪めて手をおさえている暁を労りながら、三人は言われた方向を見た。そこには先程まで無かった、半透明の薄いフィルターのようなものが空き地を覆うように浮かびあがっていた。まるでバリアーを連想させるそれは、しばらくするとスウ…と透明になって消えた。

「なんだ今の…。これが結界か？」

『…ああ、おそらくな。それも強力なものだ。自慢じゃないが…俺を拒むほどのな』

暁は痛む手をひらひらと振って具合を確かめている。

「ええ。最高神である暁様の力は天龍国一です…。それを跳ね返すとは…」

「暁お前、結界壊そうとしたのかよ？」

『強行手段だ』

「いきなり！？強盗かお前はッ！！」

『…。何でもいい。それよりこの結界、厄介だ。俺たちを中にすら入れてはくれないだろう。』

暁は地面に転がっていた小石を掴みあげると、それを空き地めがけて放り投げた。

するとバチチッ！と音をたてて、小石は結界にぶつかり碎け落ちた。

「…うわ…小石も侵入禁止ってか。なんだこの危険な結界。こんな結界張ってる家あったら変だろ？なんで睡蓮の連中はほったらかしにしてるんだ」

『それは俺も思ったが、睡蓮の民は黄昏という人物をなぜか相当気に入っている様子だ。だから多少おかしいことをしていても誰も何

も言わないんだろ。でも…こんなのは普通じゃない。黄昏に連れてこられたという鈴音も気になる。鈴音がここにいる可能性は充分高い。それから結界が侵入者を拒んだのに対して、結界を張った主が中から出てこないところを見ると、留守…かもしれないな。侵入するなら今だ』

「でも結界が邪魔じゃねえか。どうすんだよ。曉でも壊せないんだろ？お前以上に力のあるやつなんてこん中にはいないぜ？」

疾風は後ろにいる灰二から白銀、曉と顔を見渡してそう言った。それに対し、曉はほくそ笑んだ。

『いつ俺が結界を壊せないと言った？確かにこの結界は至極強力ではあるが、壊せないような結界じゃない』

「へえ…って、でもさ、おもいつきり怪我したじゃんかよ。」

大丈夫かよと疑いの眼差しを浮かべる疾風に、曉は少しムツとすると見てるとムキになって再び結界の前へと歩み出た。

スツと静かに右手をかざし

バチチツ！！

『……………っ！』

暁が触れた瞬間、再び結界が現れ暁の侵入を拒む！！

「暁様っ」

結界に接触している右手に見る見るうちに切り傷ができ、真っ赤な血液が流れ始める。暁は苦痛に顔を歪めながら、それでも結界から手を離さず、破壊しようとしてさらに傷ついた腕を前に押し進めていく。

『…くっ…！！』

バチバチと破裂するような音が鳴り響き、
結界にとうとう暁の右腕が貫通した瞬間 ！！

ビキビキと結界に大きな亀裂が広がり

パリンッ…！！！！

硝子が壊れたような音とともに、結界は粉ごなに碎け散った。

碎けた破片は、地面に散らばる寸前に全て消えて無くなっていく。

『…………壊せたな…』

結界を破壊し、血だらけになった右腕を押さえている暁に灰二が駆け寄る。

「曉様、出血が…」

『大したことは無い。見た目ほど怪我してないしな』

そうは言っても三人からは出血が酷く、痛々しく見えるので灰二はとっさに自分の着物の裾を引き千切り、曉の負傷した右腕に止血用にと巻いてやった。

『灰二、礼を言う。それと…結界を壊したおかげでやっと屋敷が現れたな』

結界が無くなり、空き地だった場所には立派な屋敷が建っていた。黒塗りの屋根に黒壁。全てが黒一色。人の気配もしない。

『行くっ』

「ええ」

曉の声に皆縦に首を振ると、慎重に中へと入っていった。

その様子を陰で見ていた者が一人、二人……

（壊した……あやつ壊しおった。黄昏様のお屋敷を守る結界を。知らせねば……知らせねば黄昏様に）

（我らが主、轟様と黄昏様のために　　）

四人は一応裏門から中へ入ることにした。侵入するのに堂々と真正面から入る気にはなれない。

裏門の扉をあけ、中へと足を踏み入れる。

ギィイと扉の軋む音がシンとした敷地内に響き、不気味に聞こえる。人の気配も無いし、まるで幽霊屋敷のようだ。

だが、中に入るとわりと普通の屋敷だった。

庭に植えられた木々、草花は美しく手入れされていた。黄昏の趣味なのだろうか。そんな事を思いながら、四人は鈴音を探しにかかる。人の気配はしないが、もし黄昏という屋敷の主がいた場合、結界を壊して侵入してきた自分たちは確実に不審者として狙われるに違

いない。曉は鈴音の無事を祈りつつ、辺りに気を配りながら奥へと進んでいった。

するとほどなくして、屋敷の奥から微かにカタンという物音がした。

四人はピタリと足を止め、とっさに庭の木の影に身を潜めた。

不味い。人がいたのか？

四人に緊張がはしる。

四人が固唾をのんでジッと身を潜めていると、ひたひたと小さな足音が聞こえてくる。

それは確実にこちらに向かってきていて、段々音が大きくなってくる。

人がいた…！？

四人は襲いかかれた時のために、いつでも動けるよう身構えた。

ひたひたと床を這う足音がさらに近づく。

（来た！！）

四人は息をのんだ。

とその時、黒髪の娘が姿を現した。

『!?!?』

見間違うはずがない。それはずっと探し続けていた愛しい娘であったから。

「誰かいるの?.....黄昏?!!?」 鈴音はキョロキョロと辺りを見回して、黄昏の名を呼んだ。だが、返事は無し。

「...気のせい?」

鈴音は不思議そうな顔をしている。暁はすぐさま木の影からはい出て、鈴音の元へと走った。

『鈴音!?!?!』

暁は鈴音の背後から、ギュウと強く抱き締めた。

「きゃあー!!」

誰もいないと思っていた分、突然背後から抱き締められて鈴音は悲鳴をあげた。

腕の中の鈴音はビクリと肩を揺らし、逃げようともがき始める。

「また黄昏ね!? 人に抱きつくのやめてって言うてるでしょ!! 私が好きなのはあなたじゃないって何度言ったら…」

鈴音はクルツと勢いよく後ろを振り向き、ひっぱたこうとした。
が…

『鈴音、俺だ! 曉だ!』

「…………え…?」

あかつき…?…曉?

確かにそう言った目の前の青年に、鈴音はぽかんとした。

『俺だ鈴音。迎えにきた。』

鈴音は状況が呑み込めず、しかし、自分を見つめる二つの金色の瞳に、懐かしさと愛しさが込みあげてきた。

黄昏の紅い瞳とは違う、この黄金の瞳は紛れもなく

「あか…つき…?」

信じられないというように、漆黒の瞳が大きく開かれる。

『そつだ。俺だ、曉だ。鈴音を迎えにきたんだ。一緒に、帰ろう？』

そつ言って驚きで微かに開かれた鈴音の唇に、そつと自分の唇を重ねた。

「あ…曉、曉いつ…！」

大きく開かれていた漆黒の瞳に見るみるうちに透明な滴が溢れてきて頬へと流れ落ちていく。

『鈴音…』

曉はこれ以上無いほど鈴音の体をきつくきつく抱き締めた。

鈴音もそれに応えて、その広い背中に腕を回した。

「曉…ううっ…会いたかった」

『俺もだ。眠れない夜を何度過ごしたことが…』

二人はかたく抱き締めあって、互いの温もり、存在を確かめあった。

『鈴音、鈴音を連れてきた奴は今ここにいるか？…人の気配は感じないんだが…』

ずっと抱き締めていたいが、場所が場所だ。曉は鈴音から体を離すと周囲の気を配りながら尋ねた。

「うつ…うつ…それって黄昏のこと…うつん…いない。よく分かんないけど、今朝早くに今日は帰りが遅くなるからって出てきたきりだから」

『そうか…。なら好機だ。今すぐここを出よう。疾風たちもいるんだ』

暁が顎で指した先の木々から、ガサガサと音をたてて三人が出てきた。

「疾風さん、白銀、灰二さん!!」

懐かしの面子に鈴音の顔が笑顔でいっぱいになる。疾風は元気そうでなによりだと軽く手を振って見せる。白銀と灰二は穏やかな微笑みを向けてくる。

みんな…私のために

鈴音の胸の中は嬉しさと感謝の気持ちでいっぱいになった。

「さあ、暁様、鈴音殿、今ここに鈴音殿を連れ去った犯人がいないのならば長居は無用です。急ぎ龍宮へ戻りましょう。それからゆっくりと話しを聞くことにしましょうか」

「はい。灰二さん」

鈴音はコクツと頷く。そんな鈴音を暁はギュツと横抱きにする、裏門まで一気に走った。

第二十六話 会談

久方ぶりの龍宮。紅く彩られた門をくぐり抜け、自室へと続く長い廊下を通り、やっと夫婦の寢所へと辿りついた。

「ああ……落ち着く」

ドサツとだらしなく寝転がる鈴音。部屋の匂いも、景観も、全てが懐かしい。それでいて包みこむような温かさを感じるのは、住み慣れた家だからだろうか。鈴音には部屋全体が自分をおかえりと言つて出迎えてくれるように思えた。黄昏邸にいた時とはおお違いだ。

黄昏邸で案内された部屋は物が何もなく殺風景。暗い配色の壁。冷たい床。捕われの身のわりに自由に行動することを許されていたとは思うが、つまらない所であつたと思う。

それから鬱陶しい黄昏と、下手なことをすれば殺されるのではないかと思わせるような怖い雰囲気。あの二人の目的は結局何だつたのかは分からなかつた。

ただ弟の黄昏からすれば暁がずるくてやつたと言つていたけれど……。何それ……って感じで。

暁にも会えないし、ストレスが溜る生活だつた。

「ふあ……」

それに比べてここは安心できる場所で。思わず安堵の溜め息が漏れる。

するとクスクスと後ろから笑い声が聞こえてきた。

鈴音の後を追つて暁が部屋に入ってきたのだ。だらしなく寝転が

っている鈴音を注意することもなく、寧ろ安心しきっている彼女の様子に満足しているようだ。

そうしてうつ伏せになって落ち着いてる様子の彼女に手を伸ばすと、頭を軽く撫でてやった。

「ん…」

気持ち良いのか、ナデナデと頭を撫でられ擦ったそうにうめいた。甘いメロディーでも流れてきそうな雰囲気、二人はやっと平穏な日常が戻ってきた、と思った。が、そう思ったやさき、すぐさま邪魔が入ってしまう。

「おおい、お前らー、和んでないでこっち来い。あー、やっぱり鈴音だけでいいや。話し聞くからさ、こっち来い」

「あっ…はい」

疾風の呼びかけに鈴音はムクツと体を起こして立ち上がった。話しとは自分を連れ去った黄昏のことだろう。どういった人物なのか、目的はなんだったのかとか、おおよそそんな所だろう。それに鈴音から言っておきたいこともあった。

……特に曉。

自分を連れ去った犯人は曉の双子の弟なのだ、と。この事を話したら彼はどう思うのだろうか…？

捨てられたと思って生きてきた彼にとって、双子という肉親がいることは喜ばしいことに違いない。

けれど、今まで一人っこだと思ってきた曉には血をわけた兄弟が

突然現れたと言っても実感が湧かないだろうし、ましてこんな形……妻を拉致した犯人が弟となっては複雑すぎると思う。鈴音はちらつと、先程寝転がっていた場所を見た。すると、膝をついて鈴音の頭を撫でていた暁と目が合う。彼は不意に目を細めて笑った。

いつもの優しい笑顔。

でも、以前見た笑顔よりも少しやつれたように見えた。

『眠れない夜を何度過ごしたことが……』

助けにきてくれて抱き締められた時、暁はそう言っていた。まだ帰ってきたばかりで、自分がいない間みんながどうしていたのか聞いていないから分からないけれど、暁のその言葉は本当なんだと思う。

だってそういう人だから……

まだ数カ月しか共に過ごしていないけど、これでも理解してきたつもり。基本的に優しく、ちょっと過保護かなって思う所もあるんだけど、それでもそれは彼なりの愛情表現なんだよね？きつと。

でも逆にそれが心配で。私のことを思ってくれるのは嬉しいけど、あんまり私のことばかり気にかけてくれると暁を縛っちゃってるよ。うな、私のせいで疲れてしまっんじゃないか？って思ってしまったことがあるんだ。今日の前で私に優しく微笑んでくれるけど、なんだかやつれて疲れきってるようにも見えるよ。

こんなこと思うと、助けてもらっておいで嬉しくないのか？ってなっちゃうね。何だか素直に喜べないひねくれた人みたい。そういう訳じゃなくて本当に感謝してるし、とても嬉しいんだけど……。

自分のことも大切にしてくれませんか？

『どうした鈴音？話しに行くんだろ？ぼーっとしてないでほら、行こう？俺も聞きたいし、疾風がうるさいから』

「あ…、うん」

膝だちしていた曉は立ち上がると、急かすように鈴音の背中を押した。

「あつ！曉、右腕怪我してるんだから押さなくていいよっ！！」

自分の右肩に添えられている曉の右腕には手の甲から肘にかけて包帯が巻かれていて、結界を破った時の傷の深さを物語っていた。

『え？ああ…。ただのかすり傷だから大したことない』

「包帯巻くほどの怪我はかすり傷とは言いません！」

『ははっ』

真面目に注意しているのに何故か曉は嬉しそうに笑った。

客間に入ると、待たせていた灰二、白銀、疾風が遅れて入ってきた二人を一斉に見た。

皆、ついさつき睡蓮から帰ってきたばかりで疲れているはずなのに、鈴音を連れ去った犯人のことを知ろうと龍宮に立ち寄ってくれていたのだ。

卓を挟んで奥に灰二と疾風が二人並んで座り、そこに向かい合うようにして曉と座った。白銀はというと、曉の側に控えるように卓から少し離れた場所に座っていた。こうして五名が揃うと、一番最初に口を割ったのは灰二であった。

「鈴音殿、ご無事でなによりです。帰ってきて早々何ですが、我々は鈴音殿を拐った犯人を知らねばなりません。何せ最高神の奥君を拐った犯人ですし、場合によっては罰を与えねばなりませんからのお」

「……罰…ですか」

黄昏が罰せられる。当たり前と言えばそうかもしれない。だって人を誘拐するってことは悪事とされているし、自分だってそう思っている。けれど、罰するほど酷いめにはあっていないような気がします。

「名は黄昏というふうに聞いています。どういった人物なのか、また、犯行時になにかあったのか私らに教えて下さるな？」

灰二はまっすぐに鈴音を見て言った。疾風と曉の視線も鈴音に集中する。

「…はい。私が誘拐された時は、私が有明の町に買い物をしに行っていた時でした。何を買おうかお店ですつと悩んでいたら、後ろから声をかけられて。振り返ったらそこに曉が立っていたんです…」

そう言つと、今度は皆一斉に曉を見た。

『?…俺はその時出掛けずに此处にいたはずだが…』

「ええ。私が曉様を見張っておりましたから有明にはいるはずはございません」

白銀が曉の言葉を証明するかのようにつけ加えて言った。

「…うん。そう。でもね、確かにその時は曉だつて思つたんだけど…違ったの。私、その時曉じゃないって全く気づいてなくて、うっかり近づいた瞬間気を失っちゃったんだ。次に目が覚めた時はあのお屋敷の中にいて、またその人が現れたんだ。その時にその人……」

『悪いけど、僕は曉じゃない。僕の名前は黄昏だよ鈴音。だから初めまして、だね』

「最初は何言ってるんだろ? って訳がわからなかったけど、話しているうちに全く違う人だつてことが分かったの。でも何で外見がこんなにも曉なんだろ? って思っていたら、黄昏は…自分は曉と“双子”の弟だつて…言った…の…」

『!?!?』

「双子?!?!?」

皆一斉に大声で叫んだ。疾風にいたっては両手を目の前の卓上にバンツ！と叩きつけて身を乗り出すという始末である。こうなることは少なからず予想していたつもりであったが、疾風の卓を叩く音には逆にびっくりして、鈴音はピクリと肩を揺らした。

「嘘だろ！！？」

「でも…本当にそう言ってたし…。見た目がそっくりだったから本当のだと…思いました…」

疾風の勢いに鈴音は思わず萎縮してしまい自信なさげに答える。

「おまつ…、曉！兄弟いたのかよ！？」

「いや、知らないっ。そもそも俺はずっと捨て子だと…一人だと思っただけ生きてきたんだぞ？そんなの知るわけないっ！灰二は！？灰二はこのこと知ってたのか？俺にずっと黙っていたのか！？」

衝撃の事実に興奮したのか、曉は灰二を責めるような口調で問いただす。

「曉様、私は弟君がいらっしやるとは聞いておりません。ですからこの灰二も、曉様に兄弟がいらっしやるという事実を今初めて知ったのです。嘘じゃありませんぞ」

灰二はあわてて手を左右に振りながら弁解した。

「とーにかーくッ！！鈴音っ！今の話、本当なんだな！？」

「…は、はい。本当です…。…信じてくれないんですか？」

鈴音の瞳がだんだんウルウルとしてくる。

「うわっ…！泣くなよ鈴音っ… 悪かったって」

『このっ…馬鹿疾風！鈴音を泣かすなっ』

曉はキツと疾風を睨みつけると、すぐに涙目になってる鈴音を両手で抱き寄せてよしよしと慰めた。

「（曉は鈴音を甘やかしすぎだろ…）」

曉に対する不満を言いそうになるのをぐっところえ、心の声で愚痴を言った。

相変わらず人の目も気にせず、曉は鈴音をかたく抱き寄せて疾風の言うことは気にするなと慰めている。

だが、鈴音は腕の中で首をフルフルと横に振った。

「違うの…。疾風さんが言ったことじゃなくて…ちょっと嫌なこと思いだしちゃって…」

『黄昏に何かされたのか！？どっとう目的で鈴音を連れ去ったのかは知らないが、黄昏が俺の弟なら余計に許せないな』

「…うっん。それもちょっと違う…」

『じゃあ何だ…？』

疾風の言ったことでもなく、黄昏に何かされたでも無いなら、
体何なのだ？

「私…私…… 暁を裏切るようなことしちやった」

『う…裏切り…？』

鈴音が泣くほどのこと…。鈴音は黄昏邸で何をされた…？誘拐…
そして軟禁…… しかも連れ去った犯人は男で…

『！……ま、まさか…』

暁は背筋に嫌な汗が吹き出るのを感じた。

男が女を誘拐したら、そのまま放置ということは無いだろう。犯
人が男だったら……しかも相手が鈴音という美少女だったら……きつと
変な気を起こしかねない。

まさかつ……まさかまさかまさかまさか…！！

……強姦……！？

暁の頭の中にはもうその単語しか浮かんでこなかった。

「暁…私、私ね…」

鈴音が涙を拭いながらその重たい口を割ろうとしている。

嫌だ……嫌だ……嫌だ嫌だ…

その単語だけは、口にしないでくれ鈴音

「私……私………」

…ドクン…

「私、寝惚けてて暁と間違えて黄昏にキスしちゃったの…！ごめん
なさい…！！…うう…」

『…え…？』

(キス…？強姦じゃなくて…？)

「ごめんね…？ごめんね。私、暁の奥さんなのに…他の男の人とキスなんて」

必死に謝る鈴音をよそに、暁はどつと緊張がとけてハアと安堵のため息をついた。

「！…ごめん…なさい。こんな私、嫌いになったよね…」

暁のため息を呆れられたのだと勘違いした鈴音は、再び瞳に大粒の涙を溜める。

『あつ…違う違う鈴音っ… いや、良かった。キスで…。っていやいや…良くないけどっ！でも、鈴音が俺と間違ってたんだっいたら仕方ないし、嫌いにもなってるから。だから泣かないでくれ鈴音』

「うう……ありがとう暁。それと…ごめんね？お詫びといってはなんだけど、私何でもするからね？」

「じしと涙を拭くと、申し訳なさそうに暁を見つめた。

『何でもするってそんな……。あ…』

「…？」

何か思いついた暁は鈴音の耳元に顔を近づけた。

『…今夜、愛し合おうな…』

ぼそりと囁かれたそれは疾風たちには聞こえない。

鈴音はみるみる顔を真っ赤にしては、コクリと頷いて見せた。

会えなかった月日を埋めるには、それしか思い付かない。ましてや眠れなくなるほど辛い思いをした暁にとっては早く鈴音の温もりを感じたかったのだ。色のオーラを漂わせている二人に、三人は暁が鈴音に何を言ったのか察すると、ゴホンとわざと咳払いをして二人をこちらの世界に引きずり戻した。すぐさま灰二が話しの続きを始める。

「鈴音殿、話しの続きですが、黄昏殿の目的は一体？」

「えと、黄昏は暁がズルイからって言うてました。暁は最高神の地位にもついてて、…あの…自分でも言いにくいんですけど私みたいな娘を奥さんにできてるからって…」

鈴音はもじもじと身じろぐ。

「…はあ…ズルイ…ですか。よくわかりませんが妬みからやったわけですな。私はてつきり巫女のことに関係しているのではないかと思っただんですが…」

「あ…黄昏はともかく、八雲っていう人はそうだったんじゃないかって思いました。だってあの人、本来の目的が…とかぶつぶつ言っていたり、私を見る目がモノを見るような冷たい目でしたから」

「ふむ。八雲という男、気になりますな。本来の目的…とは何なのでしょう…」

「…それは…分かりません。ごめんなさい」

「ああ、いやいや鈴音殿は気にしなくていいのですぞ？…おや、空もいつの間にか暗くなってしまうましたな。曉様、鈴音殿、私はそろそろおいとまさせて頂きます。話しも充分聞けましたし、黄昏殿と八雲という男のことが気になりますから少し調べてみます。何か分かりましたら曉様に御伝えしますので」

『ああ。頼む灰二』

「いえいえ。では失礼致します」

灰二は深々とお辞儀をして退出した。その際、白銀が見送りにいくと言つて一緒に部屋を出ていった。

「…じゃあ俺も帰るかな。八重と美月が待つてるし。鈴音が戻ってきたことは二人に伝えておく。曉、お前今度は鈴音から目え離すなよ?」

『肝に銘じておく』

「じゃあな!」

「疾風さん、今日は助けてくれてありがとうございます。気を付けて」

鈴音の言葉に疾風はヒラヒラと手を振り、部屋を出た。

二人きりになった部屋に、しばらくすると白銀が戻ってきて言っ

た。

「曉様、鈴音様、すっかり暗くなって参りました。夕げのご用意をさせて頂きましたのでどうぞお召しあがり下さいませ。では」

『ありがとう白銀。鈴音、疲れたろう？夕飯食べたらゆっくり休もう』

「うん」

二人は一緒に立ち上がるて客間を後にした。

第二十六話 会談（後書き）

次回、性描写あります。苦手な方はお気をつけ下さいませ。

第二十七話 閨事（前書き）

性的表現が含まれます。嫌悪感を持たれる方、苦手な方はご遠慮下さい。

第二十七話 閨事

夕餉を済ませ、鈴音は湯舟に浸かり疲れきったその身体を温めていた。背中まで伸びた髪を束ねて、お湯がかからないように気をつけながら首もとまで浸かる。温かい湯に包まれ、全身が温まってくのを感じた。

鈴音は透明な湯を掌で掬い上げる。湯は掌の僅かな隙間を通って下へと落ちた。それをぼーっと眺めながら何度も何度も繰り返す。多分10分くらいはそうしていたと思う。でもなかなか湯舟があがれず、ただひたすら湯を掬っては落とし、掬っては落とすという行為を続けた。

「ふう〜…」

若干ため息に近い息を漏らす。湯舟が気持ちいいだけじゃない。鈴音は少し悩んでいたのだ。そう、湯舟からあがる勇気がわかない。

理由は簡単。湯舟をあがった後に行われるであろう行為に緊張してしまっているのだ。夕餉を済ませる前、鈴音は夫である暁から求められた。鈴音もそれに対しては合意した。

だから湯殿で身体を入念に洗ったし、洗い残しなんてないくらい気にしながら洗った。後は寢所に籠って、夫がくるのを待てば良いのだが、久々の行為に生娘でもあるまいに無駄緊張してしまっただけかな。湯舟があがれないでいたのである。鈴音は生娘ではないが、異性との付き合いが少なく、わりと淡泊だったためにこういったことには疎い。だから夫をもった今も、生娘のままの心なのだ。だから必要以上に悩む。

しかし、いつまでも湯舟に浸かっているわけにもいかない。身体が

だんだんのぼせてきて、意識が危うくなってきたから。鈴音は悩んでいても仕方ないと、やっと決心して勢い良く風呂から立ちあがった。

新しい衣に身を包み、暗い廊下を歩いて寢所に向かう。スツと襖を開けると、一組の布団に対し枕が二つ並んでいて、鈴音はそれだけ見てドキリとってしまう。

自分でも意識しすぎだし、緊張しすぎなのも分かる。けど、ただ二人で仲良く横になって寝るといっただけではなく、情事となると別だ。

鈴音は開けた襖をすずかに閉めると、どこで夫を待っていたようか悩んだ。あたりは布団一組と、鏡台、それから小さな卓があるだけ。鈴音の生まれ故郷であり、物に溢れた日本とは違い閑散としている。

「贅沢な生活を送りすぎてたかな」

ポツリと独り言を漏らし、布団の上にちゃんと座る。

そろそろ来る頃だろうかとそわそわしながら暁を待った。

しかし一向に待ち人は来ず…。仕方なく書物を引っ張りだして文字を読む練習をしはじめた。

そうしている内に、やっと襖の開く音がした。

『あれ？まだ起きてたのか。仕事してたら遅くなったから…もう寝てしまったかと思ってた』

暁は後ろ手で襖をカタンと閉めて、近寄ってくる。

そして鈴音の隣に胡座こざをかいて座った。

『待った……？』

顔を近づけると、鈴音は少しはにかんで首を横に振った。

「ううん。本を読んでたから、そんなに待ったって気はしないし、
覗きてくれたし……ね」

鈴音がゆつくりと曉の胸にもたれかかる。ごく自然に身を預けてくる鈴音を腕の中におさめると、彼女の体から微かに香しい香りがして鼻腔をくすぶっていく。

ただでさえ柔らかい身体を抱いているだけでも理性が吹っ飛んでしまいそうになるのに、香りまで漂ってくるとなると鈴音に飢えていた身体は熱く疼いて仕方がない。

だが、かといってこの久方ぶりの抱擁に感動の再会的なムードを己の欲でぶち壊してしまうのも躊躇われる。

（まだ…まだ駄目だ。

もう少し良い感じのムードに盛り上げないと、夫婦の営みも鈴音にとっては味気無いものになってしまう。）

それでは駄目だと曉はあれこれ知恵を巡らせる。そんな曉に変わって、鈴音は曉の腕に抱かれ、彼の心音に耳を傾けながらその心地好さに浸っている。

『おかえり鈴音』

とりあえず優しい言葉をかけ、こうして寄り添える幸せを共有しようとして試みた。

「ただいま…暁」

暁の胸板に頬を擦り寄せながら素直に応える鈴音。単純に可愛く思える。顎に手をかけて上を向かせる。子犬のように潤んだ黒目がちな瞳。紅くて小さな唇。白く滑らかな肌。その全てが己の欲を膨れ上がらせ、堪らず細い両肩を押しした。

トサツ…

鈴音の髪が敷き布にひろがり、己を見上げてくる。二人とも言葉は発しない。ただ見つめ合うだけ。それでも、互いに互いの気持ちを読み取り、どちらともなく口づけを交わす。

始めは触れるだけの。

しかしさらに欲が沸き上がってきて、鈴音の帯をしゅると外すと、早急な手つきで衣を左右に広げた。

風呂あがりで浴衣に帯一本だけという軽装だった鈴音はあつという間に一糸纏わぬ姿となる。

抱かれるとは分かっていても、早急に裸体にされたことが恥ずかし、鈴音は両腕で胸と己の大事な部分を覆った。

だがそれも一瞬で、覆い隠した腕を暁に掴みとられ、敷き布に縫い付けられる格好になる。腕を封じられてはもう隠すものなどない。

「あ、待つて暁…」

『待てない。…今すぐ欲しい』

『欲しい』 その言葉は鈴音の身体を熱くさせた。彼はそのような言葉を口にするのに躊躇いが無い。そしてそれは愛してるとい

愛の言葉を囁かれるよりも遙かに生々しくて、恥ずかしい言葉だった。

裸体を晒しているという事実でさえ羞恥で胸が破裂しそうなほど脈打っているのに、そんなことを言われてはどうにかなってしまっそうだ。

暁は羞恥で顔を真っ赤にする鈴音にキスをおとすと、自分も着ているものを脱ぎ捨てた。そして無防備に肌を晒す彼女の首筋に顔を埋め、手は胸にのばし、性急に愛撫を始めた。

「あっ」

突然のぴりりとした刺激に声があがる。恥ずかしい…。

何度肌を重ねても、行為自体、何処いけないことをしているような感じがして仕方ない。

愛しあうという行為の最終形態のように思えるこの行為。こうして肌を重ねていけば、いつかは己の身に新しい生命が宿るのだろう。新しい生命を宿すための行為。その神聖な儀式を、神様はどうしてこんなに恥ずかしい行為にしまったのだろう。そう思うのは私だけかな？

鈴音は暁の下で喘ぎながら頭の中ではそんなことを考えていた。

『鈴音？何考えてる？』

「えっ」

不意に声をかけられ、鈴音は自分に覆いかぶさる人物を見上げた。暁は下腹部を愛撫している手は止めず、そのまま鈴音を見下ろし

ていた。興奮しているのか、頬がほんのり紅く、金の瞳を細めて見つめてくる。それは悩ましげな大人の色香を放っており、鈴音は一瞬ドキッとした。

「……………あ……………ちよつと、あんっ！…考えごとを…何でもな…い…よ」

己の問い掛けにきちんと応じない鈴音に、暁は下腹部をまさぐっていた手を脚の間へと滑り込ませると、彼女の感じる場所を適確に探り当てて刺激した。

「ああッ！！」

『へえ…言えないことが…』

隠し事をされたのと、自分が愛撫を施している最中に他のことに気をとられていたことが氣にくわない。

『鈴音、言え。何考えていた…』

「た、大したことじゃ……………あぁっ…！！！」

暁の長い指が中に入ってくる。

「なっ……んでも……ないのに…ッ」

中を擦られ、せまりくる快樂の波に抗いながら、攻めつづける暁にしがみつく。何かに掴まっていないと耐え抜けそうになかったから。

生理的な涙をこぼしながら快樂に耐える姿が健気ではかなくて、

可哀相とさえ思えるほどだったが、逆にその姿に情欲をそそられるものがあつた。こんな俺は狂つてるのだろうか？

愛ゆえにそう思うのだと言えば聞こえはいいが、虐めることで愛しく思うのであればそれは異常なのかもしれないな…と一人苦笑する。

ともあれ今自分に必死にしがみついてくる彼女を愛しく思う気持ちに変わりはないのだから、まあいいかと頭の隅に追いやつた。

「あぁっ…あっ…あぁ！！！」

鈴音は一際甲高い声をあげるとビクリと身体を震わせて絶頂に達した。鈴音の中から指をゆっくり抜き取り、荒い呼吸を繰り返す彼女に見せ付けるようにその指を口に含んだ。

それを切なげに潤んだ瞳で見てる彼女。快楽の余韻で意識がはつきりしないのだろう。暁が指についた鈴音のいやらしい蜜を舐めとっていることに気がついていない。何をしているの？といった度合いでただこちらを見つめるだけ。

暁はクスリと笑うと、意識のぼんやりした鈴音に顔を近づける。とろんとした瞳がなんとも無防備で愛らしい。暁は鈴音の蜜のついた指を彼女の前に差し出す。

『…舐めてごらん』

優しく子供を諭すように言うと、鈴音はちろちろと赤い舌をつき出して舐め始めた。

(こんなに素直な鈴音も始めてだな)

暁はほくそ笑む。普段の鈴音なら恥ずかしがってきつと嫌だとい
うだろう。だけど今日は違う。素直に暁の言葉に従っているではな
いか。鈴音の新しい一面をまた見れたと内心喜びながらも、そろそ
ろ自分の欲望も満たしたいと思う。

指を舐めていた鈴音から手を離し、彼女の脚を大きく割り開く。
よほど気持ち良かったのか、鈴音はまだぼんやりとされるがままに
なつて暁を見ている。

『鈴音だけ気持ち良くなつてたら不公平だろう？』

暁は微笑みかけると、鈴音の腰を引き寄せて一気に貫いた。

「あああっ!!」

突然の挿入感に、ぼんやりしていた意識は解け、鈴音は悲鳴にも
近い声をあげた。

そして己の全てを納めた暁は、すぐに律動を開始する。

「あんっ、あ、やつ、ま…つて……あん!!」

突然の挿入感に、ぼんやりしていた意識は解け、鈴音は悲鳴にも
近い声をあげた。

そして己の全てを納めた暁は、すぐに律動を開始する。

「あんっ、あ、やつ、ま…つて……あん!!」

激しく下肢を揺さぶられ、身体中が熱を帯びていく。

『はぁ………鈴音』

下で喘ぐ彼女を抱き寄せ、くちづける。

離れていた時間の寂しさを埋めるように、深く深く彼女に刻み付けるように。

その夜 この部屋からは絶えまなく喘ぎ声が響きわたった。

第二十八話 異変

「ハア……………」

盛大に溜め息をつく銀髪の青年。眉間に皺を寄せ、酷く不機嫌な様子である。その青年の一步うしろを、がたいの良い男が無言で青年を見つめている。

「全く……………帰ってきたら結界は壊されてるし、鈴音はいなくなってもぬけの殻状態だし……………アンタ達、監視の意味分かってるの？」

ぎろりと睨みつける視線の先には、弱体な老夫婦。

「もっ……………申し訳ありませんっ！黄昏様。まさか曉様が結界を破壊することなど出来ぬと見てびびっております……………。また、そのことを黄昏様にご報告するのが遅くなったのも事実です……………」

老人の男のほうか、恐縮そうに肩を縮こまらせて怯えた。

「……………本当だよ……………。アンタ達が僕の屋敷の場所も教えてたんで……………？何で教えてたんだよ……………。これじゃあ何のために屋敷を見えなくしたのかも分からないじゃん……………！」

「……………もっ……………申し訳ありません……………！」

大層ご立腹の様子な黄昏は、真横の壁をバン！と叩いて八つ当たりした。そこへ黄昏の後ろに立っていた大男が口を挟む。

「……………黄昏様。あの娘……………それほどお気に入りだったんですか？よく分

「かりませんね??」

全く理解できないと小首を傾げながら男は言う。

『何で八雲にはわかんないのかな…鈴音の良さを。…何て言うかこう、あの稀な純粹さっていうの?アレがいいんだよ。それからあのクリクリした瞳とか、あっ!サラサラした髪も触り心地が!それと……(略)』

機関銃のごとく次々と黄昏の口から鈴音の良さとやらが発せられる。それを始めは八雲も真面目に聞いていたが、やはり理解できないのと、聞き飽きてきたので最後は適当に相槌をうつだけになっていった。

その間、黄昏の留守を預かっていたらしい老夫婦は、あっけらかんとそれを見ていた。

『…という訳なんだ!分かった八雲!?』

やっと言い終えた黄昏の顔からは、すっかり怒りが消え、全く逆の清々しい表情に変わっていた。

「…主の思いは充分伝わりました」

あまりに生き生きした表情を向けられて聞いていなかったとは言えなくなり、とりあえず嘘をついた。

『ならいいよ。はあく僕はあの娘の力を利用出来なかった始めは思ったんだけど、今じゃ巫女の力なんていらぬ。そのかわりに彼女に傍にいて欲しいんだ!!』

「…は、はあ…（気分屋で困った主だ）」

やれやれと子供っぽい主に頭を悩ませていると、恐縮しながら老夫婦が声をかけてきた。

「あのう…私らはこの辺でおいとましても宜しいですかね………」

黄昏がじろりと老夫婦を見る。その眼差しにびくりとする老夫婦。何を言われるのか、緊張し冷や汗が流れる。

だ
が
。

『ああー…いいよ…？帰ったら？もう怒る気もないし。アンタ達もご老体だし働いてくれた方だと思うから』

言葉では少しの労いも感じさせるものだったが、明らかに今はこの二人に興味が無いという意味表示も伺えた。

老夫婦は今帰ればお咎め無しだといわんばかりに二人揃って深々と頭を下げるとそそくさと去って行った。

『……………ふう…。…さて八雲、仕事に移ろうか。父上に頼まれてることがあるから』

「はい。黄昏様」

二人は老夫婦がいなくなったのを確認すると屋敷内へと姿を消した。

「おい……」

「お……い……」

「お……い……」

「お、おおおおおおい、！！！！バカツキ！！起き……へブツ！？」

襖がタンツ！と勢いよく開いたと同時に、猛烈なスピードで扇子が跳びだし、庭にいた疾風の顔にクリーンヒット。そのままよろけて庭で悶える疾風。

と、そこに着物を着崩して不機嫌に眠そうな目をこする暁が中から現れた。

『おい……。朝から煩い。ぎゃーぎゃー騒ぐな疾風』

「くっ……このツ……眠そうなわりに見事な球（扇子だけど）投げやがっつて」

若干たれる鼻血をこすりながらムクリと起き上がる。

『……………。で……？朝からなんだ。というか白銀の許可を得て門から入れと前に言わなかったかな俺は？』

「はっ知るか。俺の場合白銀の目をかいくぐってこっから（庭）入ってくるのが日課つてものに……………いでえっ！！！！」

二度目の速球が疾風に当たる。

『……門から入れ。……………それと早く用件を言え用件を。ただ騒ぎにきたわけじゃないだろうな？』

「バーカツ！！あつたりまえだろ！？ただ騒ぎにきたに決まってるじゃん……じゃなくて！！！！」

ギロリと殺気を帯びた眼をとばす曉に焦りを感じ、直ぐさま言葉をいいかえる疾風。

「あゝえつとさ！アレアレ！黄昏って奴のこと調べてたんだ。灰二のおっさんと。その報告」

『……どんなだった？』

「あのな。おっさんともう一回あの屋敷に行ったんだ。そんな時も黄昏ってやついなくてな…帰ろうと諦めた時、俺たち見たんだ、お前にそっくりな奴を。それから用心棒みたいな大男が一人いたな。鈴音の言ってることは本当だった」

『お前な…鈴音を信用してないのか？ん？』

微笑みながらメキメキ指を鳴らす曉の額には青筋がたっている。

「バツ…！？ちげーよ！確認だつっーに！！それに俺が言いたいのはそのじゃなくて、あのさ、すいれん睡蓮に行った時老人に会っただろ？覚えてっか？」

『老人…。ああ…覚えている』

黄昏の屋敷まで道を案内をしてくれた老人のことをさしているのだろう。

「それがよお…………おっさんと張ってたら偶然聞いたんだが、黄昏とあのジジイ…………くるだったんだ」

『…！？』

「会話は全部聞こえたわけじゃない…けど！主従関係にはあるらしかった。迂闊だったぜ…睡蓮の連中…曉、お前が最高神とはいえ天龍の中にもお前に仇なす奴が出てくるかも知れない。気をつけるよ」

『…ああ』

張り詰めた空気が流れる。これからの未来が不穏に満ちているようにそんな空気。

「……………。まあ…これだけの情報じゃあどうなるかわかんねえし黄昏の目的も今一掴めてねえ。相手の出方が分からない以上、俺たちは様子見るしかねえよ」

『……………。』

曉は沈黙する。この先天龍はどうなっていくのか。今だ半龍から最高神へのし上がった自分を認めていないという声もある。それだけじゃない。先日妻の鈴音がさらわれた件にしても、また、人間と龍の国家関係の間起こるいざこざにしても、不安要素は指を折る程度のものじゃないくらい沢山ある。それらを如何に解決していくかは、頂点に立つ者が決めねばならない。『最高神』という名の逃げることの出来ない責任が重く肩にのしかかった。

曉は考えこみ、暗く重い空気になっってしまう。

（あゝあ…。暗くなっちまったな。

コイツ真摯だから考えこむと周りが暗い雰囲気になっちまうの分かってないんだろな。……よしっ！ここはいつちよ明るくなるような話でもしてみつか)

「なあなあ、曉」

「……ん？何だ。人が考えている時に」

真面目に考えていた曉は顔があげると、疾風はグフフと嫌らしい目つきでこちらを見てくる。一瞬キモいと思いつつ、突然薄気味悪く笑いだす彼に、とうとうおかしくなったのではないかと本気で心配になった。

「な……なんだその目は……」

「昨晚はずいぶんお盛んだったようで??」

疾風は曉の着崩れた着物姿を見て言う。明らかに短時間で、しかも適当に着たという感じであった。

だから、昨晚も二人は睦み合っていたのではないかと疾風は思ったのである。

「え…、あゝそうみえるのか」

曉は着崩れた自分の着物を見ながら言う。そしてこそごとくと簡単

に直し始めた。

「その反応ってことは…何もなかったのか？」

へへ意外といった顔でしげしげと暁を見据える。

『何かあつて欲しかったのか…？というか疾風…そんなこと聞くと
は、まさか俺達で想像してたりするんじゃないだろうな…』

疑いの眼差し、尚且つ呆れた白い眼で疾風を見る。

「バツ…ちげーよ！ちよつとからかおうかと思っただけだし、第一
そんな想像誰がするかよツ！！」

『だよな…。そんなことしてたら変態だしな。』

軽蔑するような暁の視線に意味もなく慌てふためく疾風。

二人でそんなやり取りをしていると……………

ギシャアアアア…！！

「『!?!?』」

突如、耳をつんざくような鳴き声が響いた。

「なんだ!?!? 龍の喧嘩か!?!?」

疾風が360度身体を回転させて声のした空を見上げる。

『……分からない。しかしそうだとすると大規模な喧嘩だな』

「冷静だなあ。なあなあ、見に行こうぜツ???」

喧嘩に興味があるのか瞳をキラキラ輝かせ、早く早くといった様子の疾風。そんな疾風に呆れながらも、満更でもない自分の心に少し嫌気がさした。

(俺も疾風と同レベルってことか。嫌だな…)

とか思いつつ、野次馬の如くさっさと龍へと姿を変え、先を急ぐ疾風を追って自然と足が前に出る。

が…

「あかつき…どろ、行くの…」

後ろからか細い声がして振り返ると、そこには襖の陰から覗くようにして鈴音が立っていた。

陰にいるせいで身体の半分しか見えていない鈴音は、少し不安げに眉をひそめてこちらを見つめてくる。

『どつした鈴音?』

その眼差しを訝しく思った曉は、疾風の後を追っていた足を止めて鈴音に近づく。

「…さっきの大きな音…なに?」

『ああ…あれは龍の…』

グオオオオオオオオ…!!

「!…また」

そう一言呟くと、鈴音は背を向けて部屋の奥へと入っていつてしまふ。部屋の中へと消えていく彼女の姿が、また自分のもとからいなくなってしまうように感じて、曉は慌てて彼女の後を追って中に

入った。

部屋に入ると、鈴音は膝を折って小さく座っていた。

無言のままの彼女のそばまでくると、その不安げにしている顔を覗き込む。

『具合…悪いのか…？』

心配になってそう尋ねるが、鈴音は静かに首を横に振るだけ。

『なんだか辛そうに見えるんだが…。どうした？』

なるべく優しく声をかけるが、彼女は何も喋らない。外では、相変わらず龍達が争う衝撃音が鳴り響いている。

鈴音はあの音が怖いのだろうか？

答えない鈴音に、曉は疑問に思った。

ギシャアアアアア…！！

グオオオオオオオ！！

「!」

また龍達の鳴き声。その声が響いた瞬間、鈴音がびくりと反応した。

なんだ、龍の叫び声が怖いのか。

雷鳴のように響く龍の鳴き声に反応した鈴音に、曉は絶対そうだと確信をもった。

だから、鈴音が怖がらないよう安心させるために彼女の肩を抱いて優しく囁いた。

『鈴音、あれは龍の声だ。ちょっと喧嘩してる奴らがいるみたいで騒がしいが、そのうち静かになると思うからもう少しの辛抱な』

こうして安心させるように言葉をかければ、いつものように「……うん」とか「本当……?」と言って不安げながらも納得してくれるに違いない。曉はそう思って彼女の反応を待った。

だが、彼女は予想に反し言葉を話し出した。

「駄目……。死んじゃうの……このままじゃみんな死んじゃう……」

『死……………？』

「悲鳴が……………みんな死んじゃう……………私のせいで」

鈴音

？

第二十九話 異変 - 2

「うう……あ……」

耳を塞ぎ、目を固く閉ざして震える彼女。

鈴音……

俺は彼女をぎゅっと抱きしめた。今の俺にはそれくらいしか思い付かなかった。

『死なない。誰も死んだりしないから』

だから俺の声を聞いてくれと懇願する思いで彼女に声をかけをするが、耳を塞ぎ全てを遮断する彼女には一向に届く気配がない。それよりか激しく苦しみ出した。

「うあ……いやあ〜！！聞きたくない！！もうやめてー」

『鈴音っ』

彼女の身におきてる原因が分からない。分からないが、このままだと彼女が壊れてしまいそうで、俺はすぐに白銀を呼んだ。

俺の焦った口調に気づき、直ぐさま白銀が現れた。

「曉様っ！これは一体何事です！？」

暴れ、泣き叫ぶ鈴音を押さえ付けるといっ構図に、白銀はそのただならぬ光景に目を大きく見開いた。

『俺にも分からない。鈴音が急に声が聞こえると暴れ出して……』

とにかくあれを！！鎮静させる薬をもってきてくれ！！このままだと鈴音が壊れてしまう！！』

「はっ！！直ちに！！」

俺の指示に従い、白銀は素早く姿を消した。

早く…早くしないと鈴音が…！！

俺はただただ焦った。

こんな鈴音みたときない。悲痛な叫び声をあげ、もがき苦しむ彼女の姿を見るのが辛い。

早く、いつもの鈴音に戻ってくれ。

お願いだから　　！

「あああ…いや、いやあー！！」

首を激しく振り、聞こえてくると言った声を掻き消そうとするかのように体をよじる鈴音。

『鈴音…！！』

俺は耐え難くなってきた、どうにか鈴音に自分の声だけでも聞いてほしいと耳を塞ぐ彼女の細い腕を両腕で掴み引きはがした。

そしてすかさず彼女の後頭部に手を添えると、俺の胸に彼女を押し付けた。

『鈴音、俺の声を聞いてくれ…！！』

と、そこに白銀がパタパタと駆け付けてきて、部屋に入ると、まだ苦しそうにしている彼女に鎮静薬を飲ませようと試みた。

だが、抵抗が激しくなかなか飲んでくれない。

そこで俺は白銀から薬を奪いとると、薬を自分の口の中に含み、そのまま彼女の唇を塞いだ。

「ううー……う」

叫び声をあげるほどの苦しみと、呼吸ができないという苦しみも加わり、彼女はハッと閉じていた瞳を開けた。

それと同時にコクンと彼女の喉がなる。

どうやらちゃんと飲んでくれたようだ。

あとは薬の効果でおさまることだろう。

俺は早速薬が効いてきたのか、暴れることをやめうつろいだ瞳で見ってくる鈴音に少し安堵した。

良かった…。

あとはしばらく気を失って次に起きた時には治っているだろう。

ホッと胸を撫で下ろそうかと思った瞬間

気を失う寸前に彼女が口にしたことは

「…あなたのせいよ…」

『え……？』

気づいた時はすでにおそし。振り向くと、彼女はすでに目を閉ざし、ぐったりと横たわったあとであった。

今、なんて……

【…あなたのせいよ…】

俺の…せい……？

どういうことなんだ……

教えてくれ…鈴音…

気を失う寸前に彼女から放たれた責めの言葉に、曉は横たわった彼女をただただ見つめることしかできなかった。

「曉様、奥方様を寢所に」

横たわる鈴音を見つめ、動かない曉に声をかけた。だが、聞こえていないのかぴくりとも動かない彼に白銀は怪訝そうな顔をする。

「曉様、奥方様を寢所に移動させましょう」

『…え？あ、ああ……』

曉はハツとし、ぐったりした鈴音を抱き上げた。彼女のあの言葉の意味は……

先程の言葉が気にかかり、膨らむわだかまりが胸につかえて仕方がなかった。

今考えても仕方ないか……。

彼女が目覚めた時にでも聞こう。

暁は頭を振つてもやもやした気持ちを振り払うと、鈴音を横たわらせて布団をかけてやった。

「奥方様…苦しそうでしたね」

今はもう安らかに寝息をたてている彼女の顔を眺めていると、白銀が静かに呟いた。

『そつだな…』

彼女の顔からはすっかり恐怖の色は消え、暁はホッと胸を撫で下ろすと、彼女の唇にそつと自分の唇を重ねた。

軽く触れるだけの優しいキス。

『おやすみ…鈴音』

彼女を見つめる暁の瞳は、慈愛と不安に満ちていた。

そんな、彼女を見つめる彼の背中が切なく陰って見えて、白銀は胸が締め付けられる思いがした。

暁様は奥方様を本当に愛して……

そんな思いを胸に、二人は鈴音が次に目を覚ます時には彼女が元気を取り戻していることをただただ祈るしかなかった。

第三十話 異変 - 3

鎮静剤を使つてからは鈴音はいたつて安静に眠っている。騒ぎ出す様子もなく、ただ静かに。

時刻は今は子の刻^ね。半日が経ち、真夜中になった今でも目を覚ます様子はなく、そろそろ心配になってくる頃である。

『鈴音の具合は…？』

「まだお目覚めになられる様子はありません」

『…そうか』

行灯あんどんの明かりで照らされた薄暗い部屋に曉と白銀はいた。曉は胡座をかき、黒い羽織りを着て肘をついていた。鈴音の身を案じているのか、浮かない顔をしている。はあ…と溜息。

「…曉様、奥方様のお傍におられなくて宜しいのですか？」

遠慮がちに問い掛ける。曉は白銀のほうを一瞬たりとも見ずにただ「…いい」とだけ答えた。

明らかに元気がない。そもそも鈴音ひとすじの曉が彼女の傍に行かないことが不自然でならない。

曉様はいかなされたのか…。

白銀はいつもと違う雰囲気きふんきの曉に首を傾げた。

「では、曉様もお休みになられてはいかがですか？あまり夜更けま

で起きられていますとお身体に障りますゆえ」

下臣として、主を気遣い睡眠をとるよう促す。鈴音誘拐事件の時のように何日も眠らないというようなことにはなってほしくはなかったから。

『…ん。そうだな。そろそろ休む。白銀も今日は休め。鈴音が安静にしてるなら今夜は大丈夫だろうから』

「はい。しかし何かありましたらお呼び下さい。すぐに参ります」

『ありがとう。』

白銀は頭を下げ、静かに部屋を出ていった。

一人部屋に残る曉。

眠ると白銀に言ったものの、すぐには寝付けそうになかった。

曉は考えていた。昼間の鈴音の言葉。

あなたのせいよ

鎮静剤の効果によって気を失う間際、彼女の口から放たれた言葉。意識を手放す瞬間にもかかわらず、ハッキリと告げられた言葉。その意味は何なのだ。

俺のせい……？

何か悪いことでもしたか？

分からない。

考えても考えても答えなんか出てこない。

『はあ……』

また溜息。

暁は鈴音が倒れてからずっとそのことだけを考えていた。

でも…分からないかった。今も。

それと同時に彼女の放った言葉に恐怖を覚えた。

あなたのせいよ

自分を責めるその言葉。聞いた時、ドキリとした。何も彼女に対して後ろめたいことがあるわけじゃない。鈴音には自分の全てを教えている。隠し事なんかしていない。互いの全てを知った上で愛したいと思っているし、愛されたいから。

だから…だから一瞬ドキリとした訳は、彼女の瞳。その視線にだ

った。自分を責める瞳。どこか辛そうに怒りと悲しみ両方に耐えてる、という憂いを帯びた瞳。

鈴音らしからぬ瞳だった。初めて見たその瞳に、正直うるたえた。鈴音はあんな瞳で自分を見ない。見たりしない。

泣くか笑うか…

怒るか喜ぶか…

恥ずかしかるか…

こう言ったら鈴音は怒るかもしれないが、わかりやすい少女なのだ。

だから安心できる。いつも鈴音が何を思っているのか、何がしたいのか、何を考えているのか。

不安に思っているならばその不安を消し去るために力いっぱい抱きしめてやろう。

不満なら、精一杯の愛情をこめて愛そう。

嬉しい時はもっと笑顔になれるよう、微笑んであげる。

俺が笑えば、鈴音はつられて一緒に笑ってくれるから。そうしたら気持ちも華やいで、幸福感を味わえる。

鈴音には悲しいのも怒りも似合わない。

ずっと笑っていてくれ。俺のために……。

だけど鈴音は、突然怒りと悲しみと不安と…全ての負の感情を入り混じらせて俺にぶつけてきた。

あなたのせいよ

たったそれだけ。

その一言。

その言葉を聞いた時、俺は頭を金づちで打たれたくらいの衝撃をうけた。

何故？

頭が真っ白になる。

思考が停止する。

こんな鈴音、知らない。

どうしたらいい？

抱きしめればいい？

何をしたら鈴音は………

そんな辛そうな表情をしなくて済む……？　そして責める、拒絶する
ような瞳で俺を見ずにいてくれる……？

そうだ。

鈴音の言葉、瞳に恐怖したのは、まるで拒絶されてるような感覚
に陥ったからだ。

鈴音に拒絶される。

この上ない恐怖。

その瞳に直面したから、だから怖いと思ったのだ。

あなたのせいよ……

ああ……あの瞳。あの瞳が怖い。

そう、まるで………

まるで……

あの人を思い出すように

『…！』

暁はハツとして即座に頭をあげた。
そうだ。

何故あの瞳が恐いのか。
俺は見た時がある。あの瞳を。

鈴音はあの人。《彼女》の生まれ変わり。
人格は違えど、大本は同じだ。

昼間の鈴音の一挙一動を思い返す。

鈴音らしからぬ言動、眼差し、異変。

沢山の悲鳴…

龍の雄叫び…

苦しみだした鈴音…

自分のせいで皆が死んでしまう、と……己を責めて縮こまる彼女…
酷い怯え…

それらが暁の脳裏に思い出さくはない忌まわしい記憶を呼び起す。

己を抑えきれず、狂った龍と成り果てた自分。人も龍も、無差別に襲い殺めた記憶。

そして

血にまみれ、蒼白な顔で横たわった愛しかった《彼女》の姿。

その《彼女》を殺め、大粒の涙を流しながら自分を睨みつけてきた《男》。

ああ、あの地獄絵図のような出来事。

何かの拍子に生まれ変わりれとはいえ、鈴音の中の《彼女》が一瞬だけ姿を現したということなのか。

もしそうだとしたら…

いや、違う。《彼女》は死んだのだ。ずっと昔に。

だけどあの言動と、千年前の記憶が合致してしまうのだ。それ以外、あの言葉が意味する出来事が思い浮かばない。

『彼女は……、今だに俺を怨んでる……？』

結婚を誓った恋人から《彼女》を引き離そうとしたことを。

第三十一話 過去の話（弥太と沙羅）

沙羅：

中都国の巫女であり、中都国の男と恋仲であった麗しき女性。

白い肌、黒目がちの少しつりあがった凜とした眼差し。紅をひかずとも赤く染まった悩ましげな唇。黒く長い髪を背中で一つに結び、いつも巫女装束を身にまもっていた。

その服装が禁欲的で、なのに艶やかな彼女の美しさに、民はみな彼女のことを神の愛娘だと称した。それは国中の誰もがそう言い、異論を唱える者が出ないほどだった。

そうして彼女は国のためにその稀なる力を捧げ、国のために祈った。神と会話することができる稀有な希少価値の存在であるとされ、やがて中都国の都、王が住まう宮殿へと移り住み、それはもう大切に扱われることとなった。

もともと庶民の出である沙羅のその華々しい世界への移転は、女ならば誰もが羨望の眼差しでみてしまうほどのことであった。

だが、沙羅じしんは民達が騒ぎ立てるほど特にそれが良いものだとは思わなかった。

天災が起これば神がお怒りだと国中が騒ぎ、そんな時ばかり、巫女に怒りを鎮めてもらうべきだと言って駆り出される。

もちろん嫌だなんては言わない。

巫女としての皆のために勤めを果たすことこそが自分の生まれてきた意味なのだと思っていて疑わなかったから。

だから、皆のために、自分のためにその稀なる力を使った。その対価として酷く体力が奪われてしまうこともわかってはいたが、民のみなへの継りつくような眼差しで見つめられてはいくらか自身が辛くとも頑張らねばならないと思ったことも少なくない。

それがまた沙羅を、巫女を疲れさせる要因になるとは誰も思っていない。誰も巫女の力にも限度があるということを知らない。沙羅だけが、沙羅だけしか知らない事実。だから孤独。

巫女という立場の者が一人しかいないという寂しさ。しかし、それは仕方のないことであると割り切っていた。

けれど、そんな時も、いつも。沙羅を思い、理解し、陰ながら彼女を支えたいと願っていた男がいた。

それが…弥太だった。

時は千年前にさかのぼる

一面に広がる黄金色の田畑。

「父様、母様、今年もお米が豊作ね！」

黄金色に光る稲の束を抱えて、少女がにこにこ嬉しそうに言った。

「沙羅のおかげだよ。沙羅が稲がよく育つよう神様にお願いしてくれたからだな」

「ええ、そうね。沙羅がお祈りすると不思議なことに何でも願いごとが叶っちゃうのよね。さすが私たちの自慢の娘だわ」

父様、母様と呼ばれた中年の夫婦が沙羅に笑顔をかえしながら褒めてやった。

すると褒められた沙羅はちょっとだけ照れ臭そう頬を染めると、二人のもとへ駆けていく。

「沙羅ね、神様にいっぱいお願いしたのよ？今年もみんながお腹いっぱい食べられるように、たくさんお米がとれますように！って。そしたらね、神様、いいよって言うてくれたの！！」

幼い沙羅は大好きな父にしがみつきながら二人にお願いご話をした時のことを得意げに話す。

二人はその愛らしい娘の姿に微笑みながら、そうかそうかと頭を撫でてあげた。

幸せな家族。

幸せな時間。

沙羅の済むここ、大和やまとの村では誰もがこの幸せな家族を微笑ましく思い、見守っていた。

「本当に沙羅ちゃんの良い子でかわいいわねえ」

「うちの子もあんな風に素直な子になってくれるといいんだけど」

村人たちが口々に沙羅の家族を見て羨ましそうに見ている。けれどそこに嫉み、そねみといった黒い感情は混じっていない。あるのは見ているだけで心温まる、そんな家族をいつまでも見ていたいと思う慈愛にも似た感情のみである。

しかしそれはあくまで大人たちの意見であって、子供らからすれば大人が無意識に口にする「沙羅は良い子」「うちの子もあんな風になれば」という言葉はただの嫌味にしか聞こえない。

たとえ大人からすれば別に子供を比較するようなつもりはなくても、そう聞こえてしまうのだ。だから村の中には沙羅をよく思わない子供がいるわけである。

「またうちの母ちゃん沙羅の話してるー」

「なんかムカつくな」

大人たちが微笑ましく沙羅の家族を見ている影で子供らのヒソヒソ話。男の子四人が集まった村でも評判の仲良しグループだ。するとリーダーらしい、体格の良い男の子が、木の枝をもった右手をかかげて言った。

「面白くないな。よし、沙羅のやつ虐めてやるうぜー！」

「「「さんせい」「」」

他の男の子たちはニシシと笑って面白そうにその提案にのった。

一方、沙羅はというと、大好きな両親と手を繋いで家路についていた。

「母様、今日の晩ご飯はなーに??」

「そうね、まだ決めてなかったわ。沙羅、何が食べたい?」

「ん〜、あ!母様、私お鍋が食べたい!父様と母様と三人でついで食べるの!あれ、だーいすき!」

「ばああと溢れんばかりの笑顔で沙羅は言う。そんな我が子を慈しむようにクスクス笑いながら母親は「わかったわ」と答えた。

「やったあやったあ!」

嬉しくて両親の手を繋いだままびよんぴよんと跳ねる沙羅。

「こらこら、落ち着きなさい。女の子はおしとやかじゃないと男の子にモテないぞ〜?」

「父様、別に私はモテなくてもいいわよ。だってモテて私がお嫁に行っちゃったら、父様、淋しいでしょ?」

「え?あ、ああ」

まさか幼い沙羅の口からそんなおませな言葉が出てくるとは思っていなかった父親は呆気にとられて情けない声を出してしまった。

「あらあら。沙羅ったら。お嫁さんになりたくないの?」

「父様が悲しむなら、私、お嫁にいかない」

「うう…、沙羅は本当に親思いの良い子だああ」

沙羅の言葉に感動し泣き出す父親。

沙羅は父様、泣かない、と言って手をぎゅっと握った。

「困った父様ね」

母親はクスクスと苦笑いしながら二人のやりとりを見ていた。

翌日

沙羅は友達の小春と一緒にトンボを追いかけて回して遊んでいた。

「小春ちゃん！みて。アキアカネつかまえたわ」

沙羅が逃げないようトンボの羽の部分をつまみながら得意げに小春にそれを見せる。足の遅い小春は、ぜえぜえ言いながら一生懸命、沙羅のところまで走ってきて止まった。

「沙羅ちゃん、走るの早過ぎ……ハア…ハア。あつ、アキアカネだ
ー。真つ赤だね」

少し茶色みがかった色素の薄い瞳を細めて小春がにっこり笑った。

「真つ赤でかわいいよね。私、トンボ好き」

ふふふと笑い返して、沙羅はつかまえたトンボを離してやった。

ところがトンボは飛び去るところかポトリと力なく地面に落下してしまっただ。

「えっ！なんで…」

慌ててその場にしゃがみ込んで見ると、トンボはまだ微かに動いていて死んではないようだった。それを見て沙羅は少しホッとす
る。

「沙羅ちゃん、トンボ、死んでない？」

「うん。でも元気がないわ…」

沙羅がしょぼんと肩を落とす。

小春は沙羅まで元気が無くなつてしまい、とりあえず慰めてみる
ものの、沙羅は一向に元気になる気配がない。

どうしようか迷っていると、小春は近くに男の子四人のグループが
いるのを発見した。すかさず小春は四人を呼び寄せるべく大きな声
で叫んだ。

「あつ、おーい！壮太君！弥太君！ミツキ君！チハル君！ちよつと
こっちきてー！ー！」

小春の声に気づいた四人は、顔を見合わせた後、ニカリと笑って近づいて行った。

「なんだよ小春ー。なんか面白いもんでもあったのかよー」

体は小さいが、人一倍生意気そうな態度の壮太が小春に聞く。

「面白くはないけど…、なんかね、トンボが元気ないの。ほら」

小春は地面でじっとして動かないアキアカネを指差して言った。

四人は一斉にトンボに注目した。

確かにトンボは元気がなさそうだ。

そしてトンボの目の前でうずくまる沙羅もまた、元気がないように見える。

壮太はトンボと沙羅を見比べて何事かと悟ると、にやりと笑って大声で言った。

「あー！！！沙羅がトンボ虐めたんだろー！！」

その言葉に沙羅の肩はビクリと揺れた。困ったような顔をして壮太のほうを振り向くと、弱々しく違うと首を横に振った。

「ちが…トンボ捕まえただけで…」

「嘘だー！！沙羅がトンボ虐めたに決まってるー！！弱い者いじめだ！最低だなー沙羅は！」

調子にのった壮太はさらに続ける。

「トンボ殺し！！トンボ殺し！！沙羅の母ちゃんにいつてやる！！」

「「そうだそうだ！言つてやる！！」」

チハルとミツキも壮太に参戦する。

沙羅は違つと首を横に振るが、三人も同時に言い寄られては太刀打ちできない。ましてや女の子。勝てるはずもない。それにトンボが弱々しくなつてしまつたのも自分のせいであるとも思つてゐるから、何も言い返せないでいた。

みるみるうちに沙羅の目には大粒の涙が溜まつていた。

見るにみかねて小春が三人にやめなよと言うもののでんで聞くようなそぶりを見せない。

小春が困り果ててゐるとついに沙羅は泣き出してしまつた。

「うえ……っ……ひっく……」

調子にのつていた三人はさすがにマズイと思ひピタリと体を硬直させた。

「沙羅ちゃん、泣かないで。もう！壮太君、ミツキ君、チハル君！三人とも沙羅ちゃんに謝つてよ！！」

小春がキツと三人を睨みつけた。

「な、なんだよ。沙羅が悪いんじゃない。トンボ虐めた沙羅のせい！俺達わるくないもんねー！。いこうぜ！」

「「お、おう！」」

壮太、ミツキ、チハルの三人は早々と走って逃げていってしまった。一人取り残された弥太はさつきからだんまりだ。

「弥太君も！なんであの三人とめてくれないの？弥太君が大将なのに！」

小春がふーん！と物凄い勢いで首を横に振ると、えぐえぐ泣いてる沙羅に大丈夫だよと抱き着いた。

それでも泣き止まない沙羅はトンボが…と譚言たんごんのように呟つぶやいている。

小春がなんとか泣き止ませようと必死に頭を撫でたりしていると……

「……………泣くなよ。沙羅」

さつきまでだんまりと傍観していた弥太が口を開いた。

そしておもむろに沙羅に近づくと、弱ったトンボを掌の上にくぐいあげた。

「どうするの？」

小春が怪訝そうに弥太を見つめる。沙羅も涙で潤んだ瞳を弥太に向ける。

「…。大したことないなこれ。沙羅、大丈夫だぞ。コイツ、すぐ元

気になる」

弥太は安心させるように沙羅に向かって微笑んでみせた。

「…ほ、んと？」

沙羅は涙目を大きく見開いて弥太をみつめた。

「ん。コイツ、疲れただけだと思う。沙羅、トンボの羽のそこ掴んでたたる。」

「う…、うん。なんで…わかったの」

「羽だけが動かせなくなってるんだ。ほら、胴体の部分は動いてる。息してる。よくわかんないけど、トンボってあんまり羽のところがまれてると動けなくなっちゃうんだぞ？俺も前にトンボ捕まえてこなくなった時あったから。だから、次捕まえる時は胴体をもったほうがいいんだ。トンボのためにな。あ…ほら、少し休んだからコイツもう飛べそうだぞ。」

その言葉に沙羅は弥太の掌の上にいるトンボをじっと見つめた。

トンボは羽を数回はばたかせると、今にも飛び立とうとしている。

「ほら。」

弥太がトンボの回復を見せ付けるように沙羅の前に掌を近づけた。そして…

「あ…」

沙羅が声をあげると、トンボは元気よく羽をはばたかせて、あっという間に空へと飛んでいってしまった。

「沙羅ちゃん、良かったね」

空を見上げる沙羅に小春がにこりと笑いかけた。そしてすぐに視線を弥太のほうにむける。

「弥太君、ありがとう。沙羅ちゃんもトンボも元気になって良かった。でも、あの三人にはもう沙羅ちゃんを虐めないでって言っておいてよね!」

念を押すように最後のセリフを強調する小春。

おっとりしているようで実は沙羅よりも姐御肌なのだ。

弥太は強く念を押されてうつ…と一、二歩後ずさると、罰が悪そうにわかった…と小さく答えた。

沙羅が一步前に歩みでる。

「弥太君、トンボ助けてくれてありがとう!」

ニコツと微笑む沙羅。

ドキッ…

その可愛らしい笑顔に弥太の心臓が跳びはねる。

なんだこれ…心臓がうるさい… 言いようのない気持ちに弥太は躊躇うばかり。

「沙羅ちゃん、あっちに行こう!」

「そうね！」

沙羅と小春は、動揺し立ち尽くしてる弥太をよそに楽しそうにどこかへ駆けて行ってしまった。

遠ざかっていく二人の姿。弥太はしばらく彼女たちが去っていった方を見つめていた。

ふと冷たい風が吹く。ひやりとした感覚に弥太は肩をふるわせて我に返った。

「ありがとう…か」

頭に浮かぶのはさっきの沙羅の笑顔。ちょっと可愛いと思ってたけど、笑うともっと可愛かった。自然と顔がにやける。

胸のあたりがあったかくなって、少しむず痒い。でも、全然嫌な気分じゃない。

今日はこちらからかうつつもりで近づいたのに、あの泣きそうな困った顔を見たら出来なくなった。

結果、仲間を裏切ってばーっと見てただけになったが。

それでも、仲間を裏切っていじめに参加しなかったことより、沙羅の笑顔を見れたことの方が百倍良いことだと思ったからいつか。

弥太はこのあつたかい気持ちを胸に、小走りでその場を去った。

これが弥太の初恋。

そしてこの時自分の心に芽生えたものが、恋心であったというに彼が気づくのは、それから数年後のことである。

時は戻り

く中都国く

「皇子、皇子……」

「…なんだよ」

「はい、今日のぶん追加です」

卓上に頬杖をついてぼーっとしていた脩斗の前にバサバサと紙の山がつまれていく。

「……………」

「今日のぶんですから、ちゃんと今日中に…は無理でしょう。夕方から夜が明ける前に片付けといて下さいね」

にっこりと薄暗い笑みを零す柚。

「……………」

「さーちやっちやとやって下さい！」

「……………。えええー……………！！！！こんなに、かよ！！！！
！っーか今、夜中！！俺は寝る時間だ！！！」

どっさり積まれた紙の山に目が釘付けになる。

「そんなの私だってそうですよ。というか、いっつも私が無理がないよう少しずつ持ってくるのに、今みたいにぼーっとしてみたり、抜け出したりして仕事ためてるの皇子が悪いんですよ。だから、今夜は徹夜で仕事してもらいます！！！」

そ、そんな……

脩斗は頭をかかえた。

あー……………なんで俺、よりもよって皇子になんか生まれちゃったんだー！！

あの頃（千年前）に戻りたい。

「…王族やんのも疲れるな。俺は村人？に生まれたかった……」

「…は？何を訳の分からないことを言ってるんですか。」

キョトンとする楯に脩斗はなおも独り言を続ける。

「…ガキ大将やってるほうが百倍いい……」

「?????」

「なんでもねっ！仕事すっから柊はあっち行っててくれ」

「えっ、いいんですかぁー？それって俺だけ寝てもいいってこと？」

「う……。お前だけ寝るのはずるい……。でも、いい。ちゃんとやっつくから」

「…本当かな…」

「本当本当！！」

柊は怪しい…とは思いつつも、疑いの眼差しでせっかくやる気になった脩斗を萎えさせてもいけないかと思ひ、執務室を後にすることにした。

「じゃあ俺寝るからー。皇子は頑張って下さいね。あ、明朝にちゃんと終わってなかったら……。、どうなるか分かってるよな…」

柊の瞳が一瞬キラリと光る。

その眼光に脩斗は怖じけづいたが、もう一度ちゃんとやっつく！宣言をして、柊はやっつと部屋を出て行った。

あいつ、こえーな…

脩斗はぶるつと肩を震わせ、

「……さて、やるか」

過去の思い出を振り払い、早速執務に取り掛かった。

第三十二話 あなたは私、私はあなた

夢を見た。

何も無い真っ白な空間。私はそこに、一人でいた。

空も、大地も鳥や草花も何もなく、私だけが存在してる不思議な空間。一人なのに、寂しいとか悲しいっていう感情はうまれてこなかった。

不思議とこの場所はあつたかくて、優しい感じがしたから。

そう。懐かしいって感じもした。

なんだろうね？ここは。

少し歩いてみる。私は、そんなに白い、寝巻き用の着物を身につけ、足元は裸足という格好だった。裸足だけど…、寒くはないからいいか。

私は何も気にせずひたすら歩いた。どの方向に歩いてても、なんの景色も見えてこない。本当に不思議…。

そう思った瞬間。

目の前に、美しい少女が現れた。この人は…？

歳は自分と同じくらいか少し年上。少女は、白い小袖に緋袴という格好をしていた。

瞳は閉ざされ、両の手を胸の上に重ねて少女は立っていた。

突如現れた少女は死人なのではないかと思われるくらい白い肌をし、艶やかで腰まである黒髪は、下のほうで一つに結わえられていた。

なんだろう…。

お人形さんみたい。
全く動かないけど、すごく綺麗な人。

鈴音は少しずつ現れた少女に近づきはじめた。
一歩一歩、近づいていくたびに少女の顔立ちがはっきりと見えてきた。

閉ざされた瞳を縁取る長い睫毛。傷ひとつない白い肌。形の整った赤くかわいらしい唇。
すべてが完璧だった。
鈴音にはそう思えた。

あまりの美しさに、思わず少女の頬に手を伸ばしかけた時…

あ……

少女は

ゆっくりと瞳をさました。

「あ……あの……。ごめんなさい!」

鈴音は慌てて後ずさり、触れようとしたことを少女に謝った。何
度も深々と頭をさげつつづける鈴音は壊れた玩具のようだ。

<あなたが鈴音…ですね…?>

頭に響く美しい声。

まぎれもなく目の前の少女のものだろう。

「え？はい。そうです。あなたは…どうして私の名前を…？」

瞳を開いた少女は、緑ががった黒い瞳をしていた。

不思議な色…。

鈴音は少女の瞳に見惚れながら、尋ねた。

不思議と、彼女からは怖いという感じはしなかった。

<私は、あなたです。鈴音>

私…？

<あなたは私。私はあなた。>

目の前の少女の口元は動いていない。でも、確かに彼女の声が、自分の頭に聞こえてくるのだ。

私が…あなた？あなたが私…？

「それは…どういう…」

そこまで言いかけて、鈴音は言葉をやめた。

あなたが私。私はあなた。

その意味はひとつしかない。

【外見は少々違っていても、命の大本は一緒。あなたは……の生まれ変わりなのです】

【鈴音は……にょく似ている。】

「あなたは……まさか……」

<鈴音、そうです。私はあなた。>

「あなたは……」

<私は……>

<……沙羅……>

少女は穏やかに笑った。

驚きはあまりなかった。彼女が声が頭に響いてきた瞬間、胸の奥が熱くなつて、もしかしたらという感覚が芽生えたから。魂が彼女と呼応したのかもしれない。私が私と出会ったから。

「あなたが、沙羅。」

<はい。>

彼女の声がこだまする。千年前の私。悲恋の末、命を落とした巫女、沙羅。そしてこの白い不思議な空間。

…ん？

え？？

ま、まさかつ……

「じゃ、じゃあ、わ、私、死んじやったってこと！？」

叫び声が白い空間に響きわたった。

嘘……！？

なんで！？私、お父さんにもお母さんにも、竜也にも暁にもお別れしてないのに……！！

まだ二十代にも突入してないのに。
がーん……。

沙羅は慌てたり、一人で落ち込んだりと忙しく動く鈴音に驚いたのか少しぼかんとしている。
けれど

<ふふっ…いいえ。違うわ。鈴音、ここはあなたの魂の中。そして私の魂の中でもあります。なにかのはずみに、あなたは魂の最奥、ここまでできてしまったのよ。心配しないで。現し世まこしよのあなたは深い眠りの状態にあるだけです。>

くすくすと、手のひらで口元を隠しながら落ち着いた声で説明してくれる沙羅に、一人子供のように大声で叫んだことを鈴音は恥ずかしく思った。

「そ、そうなんですか。」

うわあ…。

一人あせった自分が馬鹿みたい。沙羅とそんなに歳かわらないと思うのに、精神面が違いすぎる。……。外見も完全に沙羅のほうが綺麗だし。

暁、嘘ついた。

どこが私が沙羅に“似てる”の？

全っ然ちがうじゃないっ！

も～～～！

<鈴音？>

「あっ！は、はい！なんでしょう！？」

<ふふ。そんなに緊張しなくてもいいわ。だって私はあなた。あなたは私だもの>

再び沙羅はくすくすと笑った。

うう…またまた恥ずかしい……………。

あ…。

「ここは魂の中ってのはわかりました。沙羅の声が頭に直接聞こえるのはなぜ？そして、沙羅はずっとここにいるってことなんですよね？」

ふと疑問に思ったので聞いてみた。

すると沙羅はぴたりと笑うのを止め、少し悲しそうに眉をよせて笑った。

「私は、鈴音と違って死人です。声は失ってしまいました。肉体もただ巫女だった私だからこそ、念話としてあなたとこうして話しが出来ているのです…。そして肉体を失った私は魂だけが残り、今もあなたとこうして魂を共有している。ごめんなさい。千年も経っているのに、私は今だこの魂をあなたにすべて預けられないでいる。ずっとこの場所にいれば、またあの人と会える時がくるのではないかと、未練がましく淡い期待を抱いてしまっているのです」

あ……………。

鈴音は言ってからしまったと思った。

沙羅が一番好きだった人に命を絶たれたんだ…。だから魂だけが残ってる。私の中に。

少し考えればわかることだったのに。

なのに私ったら〜！

「けど…、あなたは私をあの人に少しの間だけ会わせてくれたわ」

え？私が？

沙羅の言うあの人って弥太のことだよな？

「え…？それは弥太に会ったってことですか？」

顔をあげると、沙羅は切なげにコクンと頷いた。

恋人に、弥太に再会できたってこと？

どうやって？

いつ？

弥太も亡くなった人だから、幽霊で会えた…とかそういうことなのかな？

<あなたが会わせてくれたの。あっちは、私のことは気づいてないけれど…>

ああ…悲しそうな顔。

初めて会った人だけ…。あなたの悲しみが私にも伝わってくるのはきつと命の大本が一緒だからだよな。

あなたは私。

私はあなただから。

「ねえ沙羅？ あなたの恋人は今、どこにいるんですか？弥太は亡くなった。あなたも亡くなった。二人はどうして今も会えないでいるんですか？」

<…弥太も私も死んだわ。けれど、私はあなたとして生まれ、弥太も、彼も新しい人間として生じたのです。あなたが生きる、この現し世に。>

現し世。

私が生きてる現世。

弥太も、どこかで生きてるということ？

「弥太も、私みたいに違う人間になって生まれたってことは…。私
が知ってる人？ってことですよ。それは誰？教えてくれたら、私
は弥太に会いに行きます。だってあなたは弥太に会いたいのでしょ
う？」

沙羅は黙ったまま、私を見ていた。

私は沙羅の言葉を待つことにした。

<……。ありがとう。新しく生まれた私は、私と違ってとても良い
子なのね…。>

「え？どういことですか？あつ……」

沙羅の姿が白んで真っ白な世界に溶けていく。

<目覚める時間がきたみたいです。あなたの龍が待ってるわ>

「でももう少し話しが聞きたかつ……」

<きつとまた会えるわ。…私はあなただから…>

そう言い残して、沙羅はまた瞳を閉ざした。

「まっ、待って!!まだ弥太のこと聞いてないっ!!!!って……い
った!!!」

ゴスツと、岩どうしがぶつかったような音がしたと思ったら、急
激に痛みが襲ってきて目の奥がツンとしてきた。

『うっ……』

よろけた体で隣を見ると、そこには同じく額を押さえて悶える曉
の姿が……。

ちよつと格好悪いかも……

ん？

曉がいるってことは……

「戻ってきたんだ!」

『……?戻ってきたって??……ああ、確かに目が覚めて良かった
……このまま目覚めなかったらどうしようかと』

曉は額を押さえながら四つん這いで私のそばまでやってきて、私
のこめかみにキスをした。

<あなたの龍が待ってるわ>

うん、そう。

私はね？沙羅。生まれ変わったあなた（私）は、あなたが憎んだ人を好き。

今の私が大切な人は、赤い龍、暁なの。

「暁、ぎゅってして？」

両手を広げて抱擁をおねだりすると、暁は優しく、でも力強く抱きしめてくれた。

私はこの優しく私を包みこんでくる腕が好き。

いつでも私を受け止めてくれる胸が好き。

触れ合った時の彼の匂いが好き。

大好き。

第三十三話 懺悔の時

抱き着く鈴音の温もりを感じながら、考えていた。今の話を巻き戻すと、鈴音は起きる瞬間たしかに弥太と言った。

弥太のことをまだ聞いていないと。

誰かと話していたのか？わからない。

『鈴音、鈴音』

暁が声をかけると胸に顔をうずめていた彼女がぱつと顔をあげた。

『弥太ってなんのことだ？』

そう言つと鈴音はすぐさま眠っていた時に見た夢のことを話しはじめた。

それはあまりにも驚愕すること信じがたいものであった。

「それで、今も沙羅は私の魂の奥底で生きているんだって」

死んだ沙羅が、新しく生まれ変わった鈴音の一部として残っている。

ならばあの時一瞬かいまみせたあの言葉は…

- あなたのせいよ -

あの冷たく俺を非難する言葉は…。

やはり鈴音ではない。

沙羅かのじよのものだったんだ…

鈴音が言つたわけではないのだという安心感と、沙羅は今だに俺

を責めるほど恨んでいるのだと思い知らされた。

それは千年の時を経た今でも胸に突き刺さる言葉。

自分のした過ちは真実だ。

否定はできない。

過去は変えられない。

責められて当然。

それだけのことを、俺はしたのだ。

それでも、一時でも愛した人に責められるのはやはり胸が痛い。

たとえ自分が悪かったとしても。

彼女とは多くは語らなかつた。むしろ会話などないに等しい。面

識もほぼ皆無。

それでも愛した。

愛さずにはいられなかつた。

彼女を見るたび、この胸の奥が彼女に恋い焦がれ、熱く燃え上がったから。

その思いは狂おしいほど熱をもち、俺を苦しめた。そしていつしか彼女を、“愛しい”から“欲しい”という欲望の目で見るようになってしまったのだ。その眼差しが、彼女をいかに嫌悪させたことか。計り知れない。

そうして彼女が弥太という恋人と結ばれるのだと聞いた瞬間、俺の中で膨れ上がった燃え上がる欲望がついに表へと顔を出した。

俺は彼女欲しさに、結婚を申し込んだ。龍の姿で。

人の姿をとらなかつたのは、龍と人というそのあまりにも掛け離れた存在と、その力の差を誇示し、拒むことを許さないと、時期王となる自分に逆らうなど許さないと、圧力をかけるためだった。

もちろん、人間と龍の差、そしてこの世界では龍は神と呼ばれるほどの絶対者として扱われる。その中でも、じき王となる危険な半龍が対となる娘を求めた時には、人間は逆らわず、娘をさしだすようになつていた。

そしてついにその時はきた。

俺は彼女に結婚を申し込んだ。

それはつまり、恋人という大切な存在から彼女を永遠に引きはがすことを意味していた。

俺はこの時、まだ龍としても、精神的にも幼く弱かった。

だから、己の内をめぐる陽の気を抑えることもできず、ただ欲しいと思った彼女が手に入るのだとただただ浮かれ、高揚し、冷静になることが出来なかった。

結婚を申し込まれ、拒むことも出来ずに恋人との別れを惜しみ、涙を流した彼女のことなど見てやれない。気づいてやることなど出来なかったのだ。

気づくことの出来なかったその浅はかさ。俺は陽の氣に負け、己を制御できない狂ってる龍。

憎んだだろう。

沙羅は。

俺を。

同じく弥太もそう思っただろう。

何故沙羅がこのような半端なうまれの狂った龍のために犠牲にならねばならないのだと。

恨んだ。

彼も、彼女も。

それにも気づかなかった。

彼女欲しさに彼女ひとりしか見えない。

そして輿入れ当日。

その時がきた。

俺は国で彼女をまぢきれずに、自ら中都国に足を運び、沙羅を迎えに行った。

中都国では、大勢の民が、巫女を失う悲しみにくれていた。そこに、自国でまぢきれず、彼らからみれば忌ま忌ましい龍が現れたのだ。野次がとんだ。

しかし、そんなもの彼女しか見えない俺にはなんの意味ももたな

い。

ただ自分よりはるかに小さな人間たちが、大勢集まり俺に何かを
呟いていただけ。

『なんで巫女姫さまがお前なんかの妻にならなきゃいけないんだ！
！』

『せっかく良い人との婚約が決まったところだったのに！』

もう、そこには龍を神だと恐れおののく人間の姿はなかった。

でもやはり俺には、彼らの言葉は何一つ耳に届かない。本当に気
になどならない。

俺の気をひき、俺の心を掴んではなさない彼女以外には。

『沙羅、そなたを私の妻に…』

『…ひとつ申し上げます』

婚儀の衣装を身にまとった沙羅は、静かに口を開いた。

『……』

『私は今日から暁様のもとへ嫁ぎます。しかしながら、私にはあな
た様より深く深く愛している方がいます。そのお方を思えば、私は
深海の闇に閉じ込められたような苦しさで悲しみに胸を痛めます。

私は今日からあなた様の妻。間違いはありません。でも…、私の心
は、私の心だけは、あの方の、弥太様だけのものですわッ！』

彼女は高らかに声をあげた。

俺はその気高さにまたもや惹かれた。

(…美しい)

俺は『輿入れの刻だ』と言い、彼女に近づく。

その時だった。

『アカツキいーっ！…！』

大声があがった方を向くと、そこにいたのは剣を片手にもった弥
太だった。

弥太は国民の制止を振り払いのけながら、確実に沙羅のもとまで
駆けてきていた。

『や、弥太…どうして…』

身体を震わせ、涙をこぼす沙羅。
あきらかに彼女は歓喜していた。

愛する人がきてくれたと。むせび泣いていた。

『沙羅………沙羅ッ!!』 弥太はやっとの思いで沙羅のもとにたどりつくと、必死に彼女をかき抱いた。

ドクン……

俺の中で何かが動き出す。

『沙羅…沙羅………』

『弥太様…、弥太ッ』

抱き合う二人を目の前に、俺の中の何かがうごめきはじめた。

ドクン…ドクン…

脈打つ身体が疼きはじめ、だんだん早く、激しく…。

『いやだ。お前を曉なんかにやりたくない!』

『弥太。私も本当は…。ううん。私たちは今日で終わり。最後よ。』

………愛していたわ。弥太』

見つめ合う二人。

やめる……。

それ以上、彼女に近づくな弥太。

俺の中の何かが、激しく動き、身体中を巡る。

ドクン…ドクン……

熱い。おかしい。

やめる。

離れる。

彼女から。

『俺もだ、沙羅。 ああ…沙羅』

二人は再び抱きしめあうと、身体をやっと離す。中都国の民は、もう弥太を彼女から引きはがそうなどとも思わなかった。今日が二人の最後。別れの日。

だったら最後の別れの挨拶くらい、させてやりたい。皆、そんな眼差しで二人を見ていた。

『…』

弥太は何もいわずにただ俺を強く睨みつけた。
そこには決して彼女を渡さないという強い意志がハッキリとうつ
しだされていた。

やめる…。

その目も、沙羅に触れるその腕も、俺に見せるな。

ドクン…ドクンドクン…

俺の中の何かが最高潮に脈うつ。

身体が破裂しそうなほどに熱い。

…熱い…！！

弥太は俺を睨みつけた後、優しい眼差しで沙羅をみやると、もう
一度だきしめ、辛そうな声で言った。

『沙羅……』

…「うめんな」…。

ザシュッ…！

何かが貫かれる音。

沙羅の瞳が大きく見開かれている。

沙羅の胸には…赤の血。

彼女を抱きしめてる弥太は、苦痛に顔が歪み、大粒の涙を流していた。

時が…止まった。

音も、聞こえない。

無音。

ただ目につつるのは…
大量に血を流し、それでも愛しい男に弱々しく微笑みかけ、力なく
崩れ落ちる沙羅の姿だった。

あ……あ………

失った…

消えた。

ずっと欲しかった存在が…

死んだ。

視界が狭く狭くなっていく。

ああ……………

もう何も聞こえない。

何も見えない。

助けてくれ。

助けてくれ。

誰か…

誰か………！！！！

ドクンッ……

俺の中の何かが大きく脈うった。

それと同時に、俺は意識を失った。

そのあとは歴史として語り継がれるほどの惨劇。意識を手放したはずの俺は、何かに操られたかのように意志をもち、激しく暴れた。それから人間も、俺をとめにはいった龍たちも……ほとんどが壊滅していった。

美しかった中都国は、建物は崩壊、草花も人も息絶え、命を失った。

もうそこは、都としと発展した中都国じゃない。地獄。まさに地

獄とよぶに相応しい場所となった。

いくつものこる血だまり。その中に、人なのかもわからぬ生物の死体と、必死に闘い深い傷をおってバタバタと死んでいった龍たちの姿がそこにあった。

その場にいた者で、生きていた者はいない。弥太も、沙羅も、死んだ。

みんな、死んだ。

ただ一人………

俺だけをのぞいては。

「あーかーっーきっ！ 曉？？ ねえ、なにぼーっとしてるの？」

沙羅か！？ 生きてた…

……いや、違う。

彼女は、沙羅であって沙羅じゃない。

鈴音だ。

こんな汚い存在の俺を、唯一愛し、愛することを心から許してくれた存在。

最も愛しい、俺だけの…

『習志野… 鈴音』

「え、なに？？ なんでフルネームなの！？」

その驚いた顔も、笑った顔も、沙羅とは違う。 やっぱり違う。 た
とえ魂の中に沙羅が少しでも生きていたとしても…。

俺を信じ、愛してくれてる時点で違うよ。

あなたは言った。 心は弥太のものであると。 心だけは彼だけのもの
のだと。

でも、沙羅。 あなたは新しく生まれかわり、全く別の存在として
生まれてきたんだ。

そうして今度は憎んだはずの俺を愛してくれている。

沙羅、あなたは新しく生じた鈴音の中に住んでいる。 完全には、
あなたの心を俺に委ねたくない、そういうことなのだろう…？

だからあなたはいまだに鈴音の魂の奥底に潜み、弥太を思っている。

そうだろう…？

俺があなたに憎まれるようなことは沢山してきた。自分でもそれは自覚している。でも沙羅、俺はやっぱりあなたの魂に惹かれるよ
うだ。

けど、あなた自身の魂じゃない。新しく生じた魂が好きなのだ。

俺は俺のために、あなたたちの命を犠牲にしてきた。許して欲しいとは絶対言わない。

でも、これだけは許して欲しい。新しく生まれたあなたを、鈴音を愛することを。

どうか……。

許して欲しい。

第三十四話 思惑と揺れる二つの心

鈴音に異変がおこった一件以来、もう沙羅が表に出てくることはなかった。

無念の一言を曉に告げたことにより彼女の気は収まったということなのだろうか。

たとえ収まっていなかったとしても、鈴音を愛することは認めてくれたんだと思う。

あなたの龍が待っていると、だから行ってやれと沙羅は鈴音に言ったのだから。

それはつまり 愛することを許してくれたということだろう？

貴女がそう言ってくれるなら、俺はできうる限り彼女に愛情をもつて接したい。守りたい。そう、必ず。

ぴちゃん

暗い洞窟の中で、水の滴る透き通った音が木霊する。

そこを曉と同じ、銀髪、金の瞳をもった青年と大男が一人、小さな灯を頼りに歩を進めていた。

二人とも腰に剣を携え、戦にでも行くような装いである。

だが二人は別に戦いに行くわけではない。彼らはある場所を目指して歩いていった。

この暗い、誰も立ち寄らないような不気味な洞窟の先にまさか抜け道があり、深い森に繋がっているなど、誰が知っていようか。

いや、知るはずがない。

この場所は古の洞窟。

今を生きる龍たちが知らないほど、長い時を経て入口は森の茂みに覆い隠され、存在すら忘れ去られてしまった太古の洞窟。

『…そして隠された太古の洞窟を抜けた先に姿を現すのは…、…神“アマツラ”の神殿…だっけ？八雲』

黄昏は後ろをついてくる八雲を見ずに質問した。洞窟の中を黄昏の低い声が反響する。

「はい。轟様のおっしゃる通りでしたら、そうなりますな」

黄昏の後ろを行く大男は、主の足元を照らしつつそう答えた。

『でもさ、さつきから歩いてるけど、抜け道なんて……よっと…全然見えてこないんだけど？』

「長い年月、自然に隠され、自然と一体化していた道なのです。風化が激しく足場が悪くなっているせいで速度が通常より落ちてるためでしょう。辛抱して下さい。轟様の命ですから」

そう。二人は黄昏の父である轟の命で動いていた。先日、父に呼びだされて行った時のことだ。

父、轟は息子の黄昏にあることを命じていた。

それは太古に滅んだ“アマツラ”を復活させるために必要な核を取りにいけ、というものだった。

轟の目的は滅んだとされる“アマツラ”を蘇らせること。そして、弱き人間を滅亡させ、龍だけの世界をつくること。ただひとつ。そして太古の神“アマツラ”がしてきたように半龍が生まれれば抹殺。

完璧な龍に生まれることができず、害をなすことしか出来ぬ、人間の巫女の力を借りねば完全になれない、忌まわしい不完全な龍。そんな者が生を受けてはならない。弱く要らないと思ったものは消し去るのみ。それが龍の国にとって最善なのだ。轟は考えていた。

あの日、轟は黄昏に耳を傾けさせた。

“アマツラ”が滅んだとされる理由を。

完全無敵の存在がどうしてこの世から姿を消したのかと。

【…黄昏よ。我が息子よ。父の声を聞け。“アマツラ”が何故滅んだのかを…】

【はい。父上】

黄昏はただならぬ気を放つ父の前で脅えながら、必死に父の目を見た。

カッと見開かれた父の目は、鬼灯のように赤い。見られているだけなのに、全身を射抜かれるような錯覚を覚える。

怖い

黄昏は父の放つ覇気に耐え切れず目を逸らす。

彼の心中を察し、轟は静かにその目を閉じた。

【お前にはまだ…我が眼光は強すぎるか】

未熟だな、と皮肉をこめて笑った。

【…すみません…】

弱々しく答えた黄昏はやっとのことで答えていた。父の眼光は、

生きる者に圧力をかける。

何故そんな力が備わっているのか、不思議だ。他の龍とは明らかに何かが違う。格の差とでも言おうか。

（父上が最高神として国を治めれば良いのに）

圧倒的な威圧感と、貫禄を持ち合わせた父こそが最高神として君臨すれば……彼の思惑を存分に発揮することが出来る。なのにどうしてこのような暗く冷たい洞窟に籠っていらっしやるのか。

黄昏は不思議だった。

【我が息子よ。聞け。“アマツラ”は完全には滅んではおらぬ。奴は今だに生き続け、静かに息を潜めてその時がくるのを待っている】

（まだ生きてる？太古って何億年単位の大昔なのに。どんだけ生きてるんだ。化け物だ……いや、神だから死なないのか）

【“アマツラ”は太古、その絶対的だった力をあろうことか人間の手によって封印された】

【人間に……？“アマツラ”は同じ龍すら敵わないほどの力を持つのでしょうか。それがどうして人間ごときに封印なんてできましよう】

【……それが憎らしいことに出来たのだ。……だが、流星に神を滅ぼすことは出来なかったらしい。その証拠に、奴は生きている】

【父上、その人間は何者なのですか。“アマツラ”と対抗できる人間なんて……人間の国にも神がいたということでしょうか】

“アマツラ”という絶対的な力をもつ龍。それに対抗しうる力をもつ人間、はたまた人間の神なのか。

まるで神話の話しをされているようだと思ふ。“アマツラ

”の話しでさえ、普通の龍とあまりにも掛け離れすぎていて実感が湧かないというのに。

父の言っていることは真実なのか。

真実なら、父は何故それを知っている？

【黄昏よ。人間の国には神などおらぬ。だが、それに近い存在はいた。今でも人間どもはその存在を讃え、崇めているではないか。たった一人の人間を】

【今も……………？】

少し考えてハツとする。類い稀なる力をもつ人間。一人だけ思いあたる人物がいる。

艶やかな黒髪の、少女。半龍である兄のために嫁ぎ、兄を完全にする儀を行った人間の少女。
騙して連れてきた時は何もできずに、ずっと帰りたいとばかり言っていた少女。

鈴音

【…ち、父上…。それは巫女ですか？しかし巫女とて人間。そのような力を持ち合わせているとはとても思えますまい】

黄昏が実際に見た時がある巫女は鈴音だけだ。千年前の沙羅は名だけ聞いた時があるだけで、直接本人を見たわけじゃない。彼女の最期はそれはそれは悲惨なものだったと聞かされただけであった。それに恋人に殺されたとはいえ、兄が原因で呆気なく死んだ女だ。そんなに兄に嫁ぎたくなければ、己の力を駆使してでも嫁ぎたくないといと兄を殺せば良かったんだ。それが出来なかったのは、たいした巫女じゃなかったからなのだろう。

鈴音も、力があるようには思えない。

【今の巫女も、千年前の巫女も、どちらにせよたいした巫女じゃありません。なら、先代のその巫女も、たいして変わらないのではないのでしょうか。“アマツラ”を封印するなど、出来るはずが…】

【そなたは我が嘘をついているとでも……？】

静かな声だった。冷ややかで感情の籠っていない。

黄昏は青ざめた。

父の言葉は絶対。それを否定するなどなんと恐れおおいことをしたものと、後悔した。

【す、すみません！！父上。出過ぎた真似を致しました。どうしても今の巫女からは想像できない出来事だと思ったので…】

黄昏は必死に弁明した。

【どうかお許しをっ】

顔は青ざめ、身体を震わせながら必死に許しをこつ姿はとても親子とは思えない。

まるで主従。

これでは失態を犯した下臣が、冷酷な主に必死に命ごいをする姿とまるで変わらない。

【黄昏よ…面を上げよ。父はそこまで鬼ではない。我が息子がそこまで情けない奴でどうする。堂々とせよ】

【は…は…っ】

許しを得ても、黄昏の恐怖は収まらずに恐る恐る顔をあげた。

【ともかくだ。“アマツラ”は巫女の祖先とも呼べる人間に封印された。正しくはその姿を保てぬようにされたのだが。その対価に当時の巫女は力つき、死んだ。が：喜べ。“アマツラ”は、我等が神は生きておるのだ。例え抜きん出た力をもった人間でさえ本当の神には勝てぬ。誇れ、我が息子よ。龍であることを】

黒い龍はほくそ笑み、高らかに笑った。

（父上は、龍であることを誇りに思っていていらつしやる。それにしても、人間をそこまで憎む理由が分からない。先代の巫女は“アマツラ”を危険と判断したから封印を施したのだろう。そのせいで今だけに半龍は生まれ続け、双方の国々に混乱を招いてはいるけど…）

果たして“アマツラ”を蘇らせることは本当に最善なことなのか、黄昏は悩み始めていた。

【黄昏よ。そなたに重役を任せる。ここへ、父の前に、今から言う神殿に封印された“アマツラ”の核を持ち帰ってきてくれ。アマツラは姿を封じられ、心の臓だけの姿となっているはずだ。なに、そなたならできるだろう？そなたは私の息子。出来ぬはずがない】

【は、はい……あの…父上、父上は兄の暁には頼らないのですか？
思っていたことを口にしたただけだった。

ところがそれが災いしてしまった。頭上に無数の雷がおちる。

【この愚か者めが！我はあのような成らず者は息子などとは認めん。半端な龍など私の息子であっていいはずがない！！人間に媚びへつ

らう思まわしい龍など、見ていて反吐が出るわ!!……………黄昏よ、二度とあやつの名を口にするな。……………良いな!!】

轟はありつたけの怒りを黄昏に吐き捨てた。

【…うう……………はい…】

怒涛の雷をもろに喰らって、黄昏は意識が朦朧とする中、微かに返事をした。

【主!】

八雲は即座に駆け寄る。轟は黄昏に駆け寄ろうとする八雲を一瞥すると言った。

【八雲、そやつに言っておけ。私の期待を裏切るような真似をすれば、息子といえど死を与えると】

【はい。しかと心得ます】

そう頷くと、轟は八雲の足元に小さな薬瓶を差し出した。

【愚か者につける薬などないが、それでも息子。特效薬だ。使え】

八雲は薬瓶をわしづかみ、瀕死寸前の黄昏に無理矢理飲ませた。すると、見る見るうちに黄昏の焼けた肌や、傷が綺麗に消えていき、黄昏はう…と呻きながら起き上がった。

【主、大丈夫ですか】

【う…、まあ、一瞬死にかけたけどね…】

心配する八雲に微かに微笑んで見せた。それはいつも八雲に見せている素の笑顔だった。

しかし、それも一瞬。黄昏はすぐに顔を曇らせた。彼はスクツと立ち上がると轟の前に歩いていった。

【父上、申し訳ありません。私は父上に期待されているのに、差し出がましいことを申してご気分を害してしまいました。その上、お手を煩わせることになるいとは。ふがない息子で、大変頭が下がります。そのかわりと言ってはなんですが、その重役、喜んでお受けさせていただきます】

黄昏はすつと膝を折り、頭をさげてひざまずいた。

【…それで良い】

黄昏の態度に気分を良くした轟は、クスリと笑んだ。

【黄昏、顔をあげよ。そなたには“アマツラ”の心の臓が納められている神殿の居場所を教える。ただし、このことは口外禁止だ。我等だけで進めていく。良いな】

【はい。父上】

コクリと頷き顔をあげると、真っ直ぐな瞳で父の姿を見つめた。

【良い目だ……。では心して聞け………】

そうして二人は、“アマツラ”の心の臓を目指して洞窟の中を歩いていた。

が、父に命じられた場所は、睡蓮の自宅からはるかに遠く、神殿までの道のりは険しいもので、二人とも予想以上に苦勞をしていた。龍体で一気に飛んでいける場所にあるのかと思いきや、“アマツラ”の神殿には空からでは見つけられない結界が施されているらしく、そのため地上を歩いての神殿探しになってしまった。

もう何日も二人さま迷って、サバイバル生活を余儀なくされていたのだ。

そしてとうとう、二人は神殿までの隠された洞窟を見つけたのだ。二人はおおいに喜んだのだが、洞窟の中に入ってから苦勞していた。なにせ風化して足場はがたがたし、暗いし寒いし、歩いてもなかなか抜け道が見えてこない。ここまでくると黄昏も限界で、愚痴のひとつや二つを言いたくもなってくる。

『父上は僕に期待してるっていうけど、僕のこと絶対、自分の命令をよく聞く駒の一つぐらいにしか思ってないでしょ』

父がいないことを良いことに、黄昏はぶつぶつと文句言いたい放題だ。

『こんな大変なところに心の臓をとりこさせるなんて…。父上、

道知ってるんだつたら自分で来ればいいのに。ねー八雲ー？」

「……………主……………それには私は答えかねます」

黄昏が同意を求めても、八雲はまさか主の父上を悪く言えるわけもなく、ただそう言うしかなかった。

『ちえ、八雲なら僕の気持ちわかってくれると思ったのに。あくそつかあ……………僕に父上の悪口を言ってたなんて告げ口されたら困るからそういうこと言うんでしょ。大丈夫大丈夫。今なら誰もいないし、これを機会に日頃の鬱憤をぱあっと晴らしてもいいよ？僕が許す』

えっへんと偉ぶって言う今の黄昏を見て、誰が父の前だと何も言えず震えて縮こまってしまふなどと思おうか。

八雲は呆れてなにも言えない。

（あれだけ恐ろしいめにあって、本人を目の前にしないとこれだからな……………困ったものだ）

「では、言わせていただきます。我が主はなかなか学習できない頭の持ち主のようだし、我が儘なのでいつも振り回されっぱなしです。今もまさに私の目の前でそういう行動をなさっていて、私を困らせます。もっと年齢に相応しい方になって欲しいものだ。……………以上です」

『……………』

前に行く黄昏の足がとまる。
必然的に八雲も歩を休めた。

『八雲は、僕をそう思ってるんだね……？ていうか僕の悪口だけでいいの？』

小さな灯が、くるりと笑顔で振り向く黄昏を不気味に照らす。

「他に誰がいますか。四六時中私に我が儘いっつのはあなたただけですからね。主。残念ですが、他の方の悪口など思い浮かびません」

率直に答える八雲に、黄昏の笑顔にぴしつと亀裂が入る。

『……ひどいな……八雲。いくら僕が許したからって僕の悪口言わなくても……』

「では悪口というより、あなたに直していただきたい所、ということにしておきますかね。こちらとしてはもう少し立派な行動をなさつてくれると助かるんですが」

『僕が立派じゃないってこと？』

「子供のようになんか不満を言ったり、人の悪口など言っていたらそうなりますかね。仮にもご自分で引き受けた仕事なのですから、ぶつかさ言わずに責任もってやることですね。それが立派な大人になるということでしょう」

そこまできつぱりと言われ、黄昏はぐ……と押し黙り、口では到底かないそうにない八雲に苦虫を噛みつぶしたような顔をした。

そして行くよと言ってさっさと行ってしまふ。

(……轟様の前にひざまずいた姿は少しは頼もしい若君に見えたんですが……、気のせいだったか?)

まだまだ未熟な彼に、私がいないと駄目みたいだなと意気消沈した八雲だった。

しかしそんな主でも一生ついて行こうと思ったのは、彼の持ち前の明るさと睡蓮の民に見せた優しさからだったとか。

彼は人を決して傷つけたりはしない。父の轟が我が子にしたような仕打ちは絶対にしない。

それは自身が痛いほど身に占めているからだ。

(そのお心を曲げることなく、どうにかして良い方向にお導きせねばならない)

それが下臣の仕事なのだとは八雲は言い聞かせた。そう考えると、彼を轟のもとに行かせ、彼の命に従い、このようなことをして良いものかと悩む。

轟様の考える“正義”は、本当に“正”なのか。弱き人間を滅ぼし、同族の龍にまで時には害をなす半龍を抹殺させて…優秀な龍の国を創るなどと。そして再び、滅ぼされた自分たちの神を蘇らせるなど

(主…黄昏様。私にはこれはどうにも良くない方向に向かっているような気がして…だんだん分からなくなってくるのです。主、主…、あなたは今、どのようにお考えなのですか　？ 暁様同様、人間の娘を好いているとおっしゃったあなたに、轟様の考えどおり、“アマツラ”の手によって人間が死ぬのを、人間の一人としてあの娘が死んでいくのを黙って見ていることは出来るのですか？ 主、私は知りたい。あなたの心を。轟様に言われて行動するあなたではなく、今一度本当のお心を教えていただきたい…。私の不安に揺れる心があるあなたの中にもおありなら…私はその時、あなたを違う道へといざなわなければなりません)

八雲の心は揺れている。彼の父である轟に従わねばならぬという義務と、弱き者を殺めていくだけの、勝者だけの世界を創るという考えが誤っているのではないかという不審感。その二つが彼の心を大きく揺さぶり始めていた。

『やくもーーーーー！！はやくーーーーー！！明かりがないと困るんだけどーーーーー！！』

遠くから木霊する彼の声にハツとさせられる。

黄昏は幾分か離れた場所まで進んでしまったようだ。明かりをもった八雲からだとの彼の姿は闇にとけて確認することができない。それがこの先、彼を闇に染めてしまうのではないかという暗示に見えて

「はっ……。はい！ただいま」

八雲はすぐさま声のする方に向かって早歩きした。

闇に堕ちさせはしない。私がいる限り。

あなたを誤った道へは決して導かない。

あなたの足元は私が必ず光溢れる道へと照らして行こう。

「主、お待ちせしました」

明かりを照らし、暗闇の中で待っていた黄昏を確認できて八雲は安堵した。

『遅いよ。あんな所で立ち止まってるんだもん。いまさら忘れ物でもしたの？』

「そんなまさか。主とは違いますから」

人が悩んでいたというのにこの方は
可笑しくて笑いが込み上げる。
同時に肩の力が抜ける。

『八雲はそうやってまた僕を馬鹿にする気なんだね？』

「いいえ。まさか。今は褒め言葉ですよ」

(脳天気の良いですねと)

『嘘だ！馬鹿にしたと正直に言え！』

「おかしな方ですね。私に馬鹿にされたいのですか？」

『う……………結構だ』

罰が悪そうにそっぽ向く姿がまたおかしい。

「さ、先を急ぎましょう？いつまでもこのようなじめじめした場所
にはいたくないでしょう？」

八雲が促すと、黄昏はコクリと頷いた。
そしてまた、二人は歩き出す。

第三十五話 救いの声

洞窟を抜けた先には青々と生い茂った緑が広がっていた。誰も手を加えていないため、木々や野生の草花は通常の数倍ある。数銃メートルも高く伸びた木々の間からはちらちらと木漏れ日が射している。空は高くそびえた木の葉に隠れてほとんど見えない。昼間なのに薄暗く感じる森の中は、太古の壮大な世界を想像させ、神秘さをももし出していった。

黄昏と八雲は突如現れた森を呆然と立ち尽くす。足元には睡蓮でも、有明の町でも見たときのない草花が咲いている。葉が紫で、その先についた蕾は橙から碧色に交互色を変えては光っていたり、人の手の平のような気味の悪い赤い花が咲いているのだ。木々も相当大きい。まるで異空間にでも転移したような気分がして、二人は声も出せずにボーっとその空間に見入っていた。

ぐるっと大きく見渡して黄昏が声をあげる。生い茂る森の中に、石でできた建物が見え隠れしている。それが“アマツラ”の神殿であることは間違いない。大きさは豪邸一軒ぶんくらいだろうか、石でできたその大きく堅固な神殿の壁には幾重も蔦が絡みあっていて、まるで森が神殿を飲み込もうとしているような光景だ。人工的に作られたそれは龍の祖先らが建てたものだろうか。人間に封印され、姿を変えられた神龍、アマツラを祖先はどんな思いで心臓をここへ安置したのだろうか。そんなことを考えさせるような立派な神殿であった。

そして二人は生い茂る茂みの中を踏みしめて進み入り口らしきものを探す。用があるのは神殿の中に納められている心臓。外観に気をとられている暇はないのだ。

『うわ…、もしかしてこれが入り口？がっちり塞がってるじゃん』

神殿のそばに寄り、入り口らしきものを見つけたのだが、石造りの重たい扉はしっかりと閉ざされていた。

「壊すしかないと思いますが」

「え、どうやって？こんな堅くてでつかい扉、どうやったら壊れんの？」

無理でしょ、と言う黄昏に八雲が提案する。

「主、お忘れかもしれませんが私たちは龍族です」

「それが何？え……、もしかして龍体で頭突きして壊すとか？嫌だよそんなの。僕の頭が痛いだけじゃない」

「龍体で頭突きしろなんて言ってますよ。そうじゃなくて術を使えばいいのです。主は轟様のご子息。そして暁様を兄上にお持ちの方。このぐらいの壁など簡単に決壊させることができますよ」

「術で？まあ…できないこともないと思うけど、疲れることはあんまりしたくないんだけど」

「主……あんまり怠けると轟様にこのことご報告しますよ」

「ちよっ！！それやめてよ！本当に殺されるよ僕。まだ僕死にたくないよ？可愛い女の子と恋して結婚して幸せに暮らすのが僕の夢なんだから」

「…女子のような夢ですね…」

手早く突っ込みをいれると、黄昏が顔を真っ赤にして反論した。

「いいの！僕は父上みたいに変な野望もないし、ただ普通に暮らしたいだけ。父上を見ててつくづくそう思うんだよ。覇者になるうとする者は欲にとりつかれて頭がおかしくなるのさ。昔は父上はあんな人じゃなかった。そりゃちょっと厳しいところもあったけど、あ

んな冷たくて暗い洞穴にずっと籠ってるなんて変だよ。本当…いつの頃からか変わられてしまった。兄さんのこともなんであそこまで犬猿するのも分らないし』

（やはり黄昏様も轟様の成そうとしていることに疑問を感じられて
いるのですね）

黄昏の本当の心を知り、八雲は少しほっとした。

（このまま私たちが轟様に力を捧げていってよいものなのか。しかし…このことを誰に言ったらよいものか…）

主の人生を思わしくない方向に導きたくはない。八雲は願いはそれだけだ。このまま父である轟のもとにいれば人生どころか心までお父上のようになってしまうのではないかと気が気でならない。それに黄昏は何度が殺されかけている。もしこの先黄昏が本当に殺されないとも限らない。それだけはなんとしても避けたい。

（助けを求めるにしても、一体誰に……）

主も自分も闇に手を染めかけている気がしてならない。そんな黄昏を救ってくれる者などどこにいるだろうか。八雲が悩みはじめたその時。

八雲の脳裏に一人の少女が浮かび上がった。一度は捕らえ、軟禁した少女。彼女は清らかで慈愛に満ちた少女だった。黄昏もよく気に入っている。彼女なら、父の力の前に仕方なくひれ伏す主の考えを改めさせ、救ってくれるかもしれない。それに彼女の夫は天龍一の力を持つ、最高神‘曉’だ。実の弟がこんなめにあっていると知ったら救いの手を差し伸べてくれるかもしれない。

（妻を誘拐されて黄昏様に良い思いはしてないと思うが、すべてを話せばわかってくれるかもしれない）

それがたとえ轟様を裏切ることになるうとも。

ドカァ……………ン……………！！！！

猛烈な破裂音に八雲は目を見張る。目の前は砂埃が立ちこめて白く視界を覆い隠していた。

『八雲ー。ほら、入り口に穴開けたから早くいこう？日没までには帰りたいしさー』

黄昏が自分を呼んでいる。だんだん視界がクリアになっていくと堅固な石の壁にはぽっかりと大きな穴があき、黄昏が中へ入ろうとしているところだった。

「主。やるじゃないですか」

『そりゃあ、僕だってやればできるんだよ。このくらい。なんとって最高神の兄さんと双子なんだからね？』

「そういえば双子でしたね、主は。じゃあ曉様とは一、二を争う力の持ち主だと考えてもいいんですかね？」

『あー。残念ながら、僕は半龍じゃないからそんなに力は強くないと思うよ？ほら、いこう？八雲。奥から変な音がするんだよね』

「変な音……ですか？」

『ドクンドクンて。たぶん‘アマツラ’の心音だと思っけど……。味が悪いからぱって行ってぱつとか帰ろう？ね？』

「はい。主」

二人はお互いの視線を絡み合わせると、静かにうなずいて神殿の中へと侵入していった。

その頃、龍宮では。

「曉様、中都国より使いが参っております」
『中都国から？何て言ってきたら』

昼下がりに。曉は妻、鈴音と戯れ心やすらぐ時間を過ごしていた。
白銀に呼ばれ、名残惜しそくに愛しい妻の膝から起き上がり体勢を立て直すと、すくりと立ち上がる。

「それが、中都国の夢占を行う霞乃殿が、天龍で不穏な動きがあると言っているそうです。気になっているので曉様にご報告にとのことでした」

霞乃：？と曉が首を傾げると、その名に反応した鈴音が、私が中都国でお世話になったお婆さんと教えてあげた。

「そのお婆さん、私のこと全部知ってたんだよ。その夢占で知ったんだと思うんだけど、百パーセント当たってるの」

すごいんだよ。と鈴音が誉めそやす。

『そんな夢占をする者が、天龍で不穏な動きがあると…。気になるな』

「曉、霞乃さんに直接ききに行こう？何かあってからじゃ大変」

『ああ。でも待ってくれ。白銀、その使者はどこにいる？まずはその者に話しが聞きたい』

「はい。休ませていますのでどうぞこちらへ」

二人は白銀の案内に続き部屋を後にした。

案内された部屋に入室すると、中都国の使者はまさか最高神曉直々出向くとは思わなかったのだろう、彼が入室するなり後ずさり恐

れ多そうに床に深々と頭を下げた。

「あああつ、こ、これは曉様！！私のような者のためにこのように足を運んで下さるとは申し訳ございません！どうかお許しをっ！」

（お許しをって……。まるで曉が怒ってるみたいな言い方……。何も言ってないのに）

鈴音は使者の態度に何かいいただったが、曉の止められた。

『良い。私が好きでこちらに来たまで。そなたは長旅ご苦労であった。ゆつくり休むが良い。…それと、霞乃殿と言ったか。天龍に不穏な動きがあるとの報告を受けたのだが、それはどういうことか』
「ああ、か、神。その…恐れおおいことながら…霞乃様が…黒龍は大いなる破壊の力で緋の龍を滅す…。その後、生きとし生けるものが皆消えると仰せなのです。詳しいことはわかりませぬ。ただ、緋の龍が滅ぶと世界が破滅するのだとおっしゃっておいでです。恐れながら私どもには緋の龍は緋あかの鱗をもつあなた様なのではないかと連想させてなりました」

瞬時に鈴音は曉を見つめた。

（確かに緋い龍は曉しか見た時ないけど…。緋の龍が滅ぶと世界が滅ぶって…）

嫌な予感がする。霞乃は不思議な力を持つ。初対面の時に異世界からきた鈴音が卒業式に向かう途中だったことをぴたりと言い当てた。全部おみとおしのように。その彼女が本当にそんな不吉なことを予言したのだろうか。本当だとしたら……

（怖い…）

世界が滅ぶところなんて想像できないけれど、テレビで見た、紛争に巻き込まれて腕や足を失った人達。地震や津波の自然災害で多くの人達が失った光景。日本という平和な国で生まれ育った鈴音に

は悲惨な光景というのはそういうものしか頭に浮かばない。でも、世界が滅ぶということはそれに近いのかもしれない。命あるものが死んでいくことに変わりはないのだから。

「私はこれしか言付かっておりません。詳しいことは恐れながら、霞乃様にお会いしてと聞いていたきたいのです。霞乃様はおつしやっております。一刻も争う重大なことになるそうです。貴方様に直接お会いして言わなければならぬことだと。こんな話、あなた様にとっては私たち人間の戯言だとお思いになるかも知れませんが、どうか信じて頂きたい。霞乃様はそちらにいらっしゃる巫女様ではありませんが、これまた夢占を行う類い稀なる存在なのです。これはその方のお告げ。霞乃様は今、足を悪くされているため、こちらへ足を運ぶことが出来ません。こんなことを神に頼むなど無礼も承知。天龍の神よ。どうか霞乃様の願いを聞き届けて下さい…!!どうか我らの国にお越しいただき、霞乃様の言葉を聞いていただきたい…!」

使者は頭を床になすりつけるくらいの勢いで曉の足元で土下座した。

それには曉も鈴音も白銀もびっくりして目を見張るしかない。使者はずっと頭を下げて「どうか…どうか…」と呟き続けている。彼の態度から、霞乃の言葉は相当重大らしい。一刻も早く。急がないと世界が滅びると…。

鈴音はまた曉を見つめた。

「曉、行こう。中都国に。どういふことなのか聞きに行こう!」

強く言い放った鈴音の言葉に、曉は頷いた。そして必死に頭を下げる使者を見据えて言った。

『頭をあげなさい。私は……。……いや、偉ぶるのも疲れるな。……あなたに言っても仕方ないことだが俺は神などじゃない。どちらかと言えば中都国からすればただの邪龍にすぎない。そんな奴に頭を下げる必要はないよ』

「そんなっ…！そんなことはありません…！神は…」

暁の機嫌を損ねたのではと使者の顔色が蒼白になってガチガチ震えはじめる。暁はそんな彼を安心させるようにふっと笑みを零した。

『そんなに脅えるな。俺はあなたの言う通り霞乃殿に会いに行く。世界規模の重要な話しになるのだろうか？仮に緋の龍が俺だったとして、俺を滅ぼす黒龍というのは、それはつまり天龍の中に世界を危機に脅かす者がいることだろう。一見平和には見えるが、俺を良く思わない龍も沢山いる。そういう企てを考える輩も出てくるはずだ。その危険を霞乃殿とやらが知らせてくれるのなら、俺はその方に会いに行こう。ああ…それと俺は天龍国と中都国の隔たりを無くしたいと考えている。だからもう、俺を神とは呼ばないでくれ。俺はただの一匹の龍にすぎないのだから…』

人と龍の隔たりをなくしたくて思い切って素の自分を見せてしまったのだが、使者の表情はまだ蒼白だ。

（やはり駄目なのか？俺の過去の過ちは、彼らの中から消えはしないのか）

人と龍の間に築かれた見えない壁を取り去りたい。この世界は人と龍の住む世界しか存在しないのだから、できるだけ彼らと良好な関係を築きたい。

人間の娘に恋した自分だから。そして転生して今自分を愛してくれてる彼女がいるから。

彼女のためにも、この隔たりはどうしてもなくしたい。

そう思うのに、彼らには早々伝わらないのだろう。

曉は少し落胆のため息を漏らした。すると鈴音はずいとお前に出てきて…。

「あの、中都国の使者さん…？ 曉ね、すっごく優しいよ。私だけじゃなくて、皆に優しい。だから神だって言っただけを恐れないであげて？ 私、人間だけど、結婚してからずっと幸せ。曉のおかげなんだよ。皆は龍と、曉と触れ合わないからわからないかも知れないけど、龍が怖いっていうのは偏見だよ。…確かに曉はその…千年前はあれだったけど…仕方ないことだったの。でも、今は違うからね？」

そう言い聞かせると、あっ！と声をあげたかと思うと床に座り込む使者の腕を掴み、曉の衣をひっぱって「早く！ 早く！」とまくし立てる。

曉は苦笑しつつ『落ち着け』と逸る彼女を制して中都国に行くのに準備がいるから鈴音も着替えておいでと愛しそうに髪を梳かしていった。

鈴音は「うん！」元氣よく頷くとパタパタと着替えに行ってしまった。

残された使者はぼかんとその様子に見入って。曉はぼかんと立ち尽くす彼にいつもこんな感じなんだ。可愛いだろうか？と使者に向かつてクスクスと笑ってみせた。

『ああ、そうだ。あなたは何でここへ来られた？』

「え、あ、わ、私は馬を使いこちらへ参りました」

『そうか。なら、戻るのに半日はかかるだろう。私があなたをお送りする。そのほうが早い。すぐに行くから外で待っていてくれ』

「いえっ、しかし。そんな…。神のお手を煩わせるわけにはいきませぬ」

恐れおおいと遠慮する使者に、良いから待つように、と優しく言

うと自分も出発の準備をするために客間を出た。

第三十六話 「黒き龍天ツ羅、緋の龍を滅し世界を禍つ」

すぐに中都国へ行くことになり、使者には急ぎ曉がそちらに向かうことを伝える手紙を書かせた。それを白銀に持たせ、中都国へと送らせた。白銀が手紙を片手で持ち、もう片方の手で縦横にスツと空を切ったかと思うとパツと手紙が消えてしまったのだ。手品のよくなその行為に目を丸くする使者に、白銀は「ちゃんと中都国の皇子のもとへと送った」と告げた。たった今の作業で本当に遠く離れた皇子のもとへ届いたのかと疑いたくなるほど呆気ない作業だった。

その間、曉と鈴音は出発する準備をしていた。中都国の皇子や霞乃に会いに行くとなるとそれなりの服装で赴かなければならない。

曉は何処にそんなものがあつたのか上下黒の衣に着替え、その上に袖がなく、膝が隠れない程度の見事な金刺繍の施された長衣を身につけ、最後に艶のある革製の黒のベルト（のようなもの）を腰に巻き付けた。イメージとしては西洋の軍服に近いが、服に施された金刺繍は中華風だ。全身ほぼ黒の衣服に肩や袖口、裾には縁取るように金の刺繍。胸元には一組の龍が向かい合わせになって尾を絡ませている模様が入っていた。漆黒に金刺繍。いつも緋色の狩衣を好んで身につける彼らしからぬ装いに鈴音は目が釘付けになる。

「かつこいいい…曉」

ほう…と無意識に出たため息は熱のこもったため息で。惚れ直しましたと言わんばかりの表情である。

『そうか？一応正装というものもあるんだ。堅苦しくて俺はあまり着ないんだが…。鈴音が誉めてくれるならたまには着るか』

暁は着崩れていないか身体を左右に捻らせて最後の服装チェックをする。そして、良しと言つと白銀を呼んだ。

『準備は整った。あとはあちらに出発するだけだが、書状は転送してくれたか？』

「はい。確実に中都国皇子へとお届け致しました。」

『そうか。ご苦労だった。少し留守にするがその間はここを頼む。』

「はい」

『じゃあ鈴音、行くか』

「うん」

中都国へ行くのはあつという間だった。馬で移動しても半日はかかるものの、暁の術にかかれば一瞬にして中都国城下まで移動していた。まさに神業。使者は驚いて固まっていたが霞乃さんのところに早くいこ？という鈴音の言葉にハツとして城までの道を案内してくれた。城内に入るとすれ違う侍女や側近たちが皆、暁を見ては慌ててその場にひざまずいた。

びつくりする光景に、この世界の人々の龍に対する意識とうものはこういふことなのだと言われ、鈴音は改めて気付かされた。そんな事を何度か目にしてさらに奥へ進むと榊が立っていた。彼は道案内した使者を下がらせ、この先は私のご案内致しますと丁寧に挨拶してきた。二人はそれに従い、さらに奥にある広間へと案内される。中は謁見の間ほどではないが、それなりに広い空間で、金銀細工の壺やらなにやらが飾られていて、中央にはこれまた立派な彫刻の施された木製の大きな長机があり、その脇にブラツと椅子が並べてあった。会議でも行われる部屋なのだろうと暁は思った。

「よつこそお出で下さいました」

そこへ品のある女の声がかかる。淡い鶯色の着物を着込んだ、白髪のお婆さんだ。

(この人が鈴音の言った霞乃殿か…)

「婆様、足をお悪くされてるんだ。挨拶なら私が先にいたしますから」

「脩斗、私の勝手なお願いをして来て下さったのですから。私にお話をさせて下さい」

使者の言った通り、足が思うように動かないのか右足を引きずって歩く彼女のすぐ後ろを、若く逞しそうな青年が心配そうにくっついて歩いている。彼こそが中都国皇子、脩斗である。彼が後ろを向き、小さく呟いたかと思うと控えていた側近二人が即座に霞乃の両側に立ち、彼女を支えるようにして中央の長机の所に座らせた。そして着席した霞乃を確認すると、脩斗が暁の前に進み出てその場に膝をついた。

「大変お見苦しい所をお見せ致しました。霞乃は足を患っておりますので貴方様より先に着席することをお許し頂きたく存じます。そして、大変申し遅れました。お初にお目にかかります。私が中都国皇子、脩斗と申します。以後お見知りおきを」

脩斗は床に手を付き、深々と頭を下げた。その瞬間、彼は鈴音を一瞬だけ捕らえる。暫くぶりを見る彼女は、一瞬だがまた大人っぽくなったような気がする。さらに彼女の服装は巫女装束。ちらっと視界に入った彼女は今も愛しい沙羅を想起させるものだった。

暁は足元で深々と頭を下げる彼を見据える。暁もまた、彼の視線が一瞬だが彼女に向いたのを確認済みである。彼にとって一度は諦めた彼女だ。だが本人を目にすると、彼女に対する未練が彼の中に

蘇ってくるのだろつ。

暁には一瞥もくれず、彼女に視線を向ける。そして極めつけはこの挨拶。

（初対面と申す、か。）

一度ならず何度か会っている。過去に。そして彼が脩斗として生じてからも本当は一度だけ会っているはず。そう、暁が現在の中都国の皇子はどういった者なのか確認しにきたあの時に……。

しかしあの時は過去の激情に流されて脩斗は胸の内の黒い思いを暁にぶつけて終わった。そして全てを言い放った後、不本意だが彼女を頼むと言ったのだ。それは暁も約束したことだった。

だが目の前の彼はその時の会話を無かったことにするように初対面の挨拶をしてきたのだ。

公の場。初めてみる霞乃や中都国の側近達がいる上、ここで丁重にそう挨拶されてはこちらとしてもそう話を合わせざるを得ない。それに隣にいる鈴音は暁と脩斗は初対面だと思っている。その彼女に本当は彼とは初対面どころか千年前にも付き合いがあって、実は彼が弥太だと気づかれては困るものがある。彼女は沙羅に、弥太も同じこの世界に新しく生を受けて生きていと教わったのだ。さらに、沙羅は鈴音のおかげで彼に何度か会えたとも言ったそうだ。そのせいで、余計に弥太に興味をもった鈴音が、転生した弥太は一体誰なのだと詮索してもらっては困る。

仮に彼女が中都国の皇子が弥太であると気づいて、鈴音の中の沙羅がその弥太に対する切ない思いがはずみとなって、また鈴音の身体に影響を及ぼすことも全くないとは限らない。

（彼女は習志野鈴音だ。沙羅じゃない。これ以上彼女を過去の醜い争いに巻き込むことは出来ない）

何も知らなかった鈴音。それでも過去の自分と暁が関わったことだからと全てのことには耳を傾け、全てを理解した上で受け止めてくれた彼女。愚かな自分のために涙まで流してくれた。

（俺が愛してるのは鈴音だ。もう、沙羅じゃない。隣にいる彼女自

身だ)

暁は深々と頭を下げている脩斗に、もう鈴音を沙羅として見るな、と心の中で叫んだのである。

『…中都国、皇子よ。面をあげられよ』

「…」

脩斗は躊躇わず顔を暁に向けた。下から見上げる彼の視線は暁の立ち位置から見ると強く睨みつけているように見える。実際にそうなのかも知れない。だが、いつまでも過去に縛られる気はない。

『私も自己紹介させて頂く。私は天龍国、最高神、暁である。あなた方の国より大切な巫女を妻として娶り、新たに龍として生まれ変わった。あなた方に感謝する。そして私はこの先、天龍と中都国の友好を計っていくこうと思っている。そのために今日こちらへ足を運んだ。よろしく頼む』

暁が友好の証として手を差し出すと、少しの間後、脩斗はスクリと立ち上がり同じく右手を差し出した。

二人の手ががっちり結び結ばれる。友好と親交を誓って。側近達の中にはその瞬間、龍の長と握手を交わした皇子の姿におお…と感激の声を漏らす者もいた。

だが、すぐに二人は離れると、脩斗は暁と鈴音を席に着かせた。

『…で、私は使者の方に世界が危機にあると聞いた。霞乃殿、あなたは夢占ができるそうで、そうお告げを出したと聞いた。信じ難いが妻からもあなたの力のほどは聞いている。詳しく聞きたいのだが…』

「ええ。私、先日夢を見たのです。中都国と天龍国、どちらも平和で、穏やかな風景が広がっている。草花が咲き乱れて人々は活気溢

れる城下で生き生きと生きているのです。…しかし、快晴だった空は突然暗雲に包まれます。明るかった空はどす黒い雲に覆われ、太陽と月が同時に空に現れ不気味に赤黒く光るのです。…そこまではまだ何事も起こらず、ただ不気味な光景が広がっているのですが、月と太陽が話すのです。「黒き龍天ツ羅、緋の龍を滅し世界を禍つだろう」と。その時に見えたのです。黒い龍、角が幾重にも生えた赤眼の龍。眼は四つ。背から尾にかけて鋭く鋭利な角が生えていました。まるで戦うためだけの機能を備えた恐ろしい姿でしたわ。私が見たのはそういう夢です。この頃同じを夢を見るので、これは何かあるのではないかと。しかも夢に出てきたのは龍。もし私の夢が現実となった時、中都国だけでは対処できそうにない問題だと思っただけです。曉様のお力をお借りしたいと。そして一つ気になる点があったのです。月と太陽の言う緋の龍…恐れながらそれはあなた様のことなのではないかと。」

「……。緋の龍が私だと。…確かに緋の鱗を持つ龍は私ぐらいのものだ。他に見た時はない。しかし黒き龍も、いることはいるが、そのような特徴の龍は……天ツ羅あまつらと言ったか……」

「はい。」
「……残念だが、私には天ツ羅という龍は知らない。聞いた時がない」

曉は脳内の記憶を巡らせるが四つの赤眼をもった黒い龍など聞いた時も見たこともなかった。

「婆様。曉様は最高神だが、千年の時しか生きておられぬ若き龍でいらつしやる。私も人間と比べれば長生きかもしれませんが、知らないだけなのではないでしょうか？」

「脩斗つ」「皇子」

唐突に言い放った不躰な言葉に霞乃も側近達も青ざめていく。龍

を起こらせるなどあってはならない。ましてや中都国を滅ぼしかねた相手だ。

だが、脩斗には分かっている。暁がこのくらいで怒りはしない。儀を終え、鈴音の力を得てから暁はもう情緒不安定ではないということ。それにつきさつき両国の友好を計ろうと握手をした仲だ。決して心から彼を信用して握手を交わしたわけではないが、それだけは分かっている。それに友好を計るのなら対等に意見していいはずだ。

青ざめる側近達を無視し、脩斗はさらに続ける。

「婆様の夢占は違えない。あなたは信じられないかもしれないが、私は婆様のお告げを信じています。今、世界は危機にさらされそうになっている。何が原因でそうなるのか、いつそうなるのかはハッキリとは分からないが、あなた方、龍の国が関わっていることは間違いない。あなたの国から、また、邪龍が生まれる恐れがあるということでしょう」

「脩斗！お止めなさい！！」

『……………』

明らかに暁に対する皮肉だった。それは言われた本人が一番痛感している。

「…暁様、どうか皇子の無礼をお許し下さい。どうか、どうか」

『…いや。霞乃殿が謝らなくとも良いことです。皇子はあなたのお力を信じられているようだ。妻もあなたのお力を信じている。そうだろうか？ 鈴音』

「……………うん」

出来ればこんな恐ろしいお告げは信じたくはない。けれど霞乃のお告げが嘘なわけがない。彼女は初対面の時からその力を見せてく

れているのだから。

『妻もこう言っている。天ツ羅という龍、確かに天龍から出ること間違いなしだ。龍は私たちの国でしか存在しないのだから。』

「曉様、信じて下さるのですね」

『…ああ…。ただ、天ツ羅と言われてもいつ現れるのか、なにが発端となるのか何も分からないままではなんとも…。』

曉は長机に両肘を付いて考えこんだ。

『何か手がかりがあれば…』

「曉……」

曉たちのやり取りを隣で黙って見ていた鈴音が心配そうに声をあげる。

(アマツラって何なんだろう。そんな怖い龍が急に現れるとは思えないけど。でも、曉が困ってる。原因が分からないじゃ解決しようがないもの。何か私に出来ることないかな……)

何か…何か…

巫女として自分にできることは何なのか。

「あの…。私の力でアマツラのこと調べられないかな。巫女の力つてどこまで出来るのか分からないけど、念じれば出来たりしちゃうから、私、やってみようと思うんですけど…。駄目ですかね…」

「まあ、鈴音さん。あなたがそう言ってくれるのは嬉しいです。私はお告げを見ることは出来ても、解決することは出来ないの…。無力です」

「そんなこと無いです。私、霞乃さんみたいに夢で見ることは出来な…い………ような…?」

(沙羅に会ったのは夢のお告げってわけじゃないけど、似たような

ものなのかな…?)

「鈴音さん？あなたもお告げを見ることがあるのですか」

「あ、いえ。お告げってというか…。夢の中で沙羅とお話したっていうか……」

「沙羅？沙羅に会っただと？」

ガタリと音を立てて脩斗が立ち上がる。机に手をつき、ぐんと身体をつき出した。

まずい。暁は焦った。もし、ここで鈴音が自分の魂なかにまだわずかながら沙羅の記憶が残っていると話してしまったら。脩斗(弥太)

は必ず鈴音の中の沙羅に問いかけるだろう。沙羅はあれ以来表に出ることはない。鈴音の口からも彼女は少しでも弥太が脩斗として生きているのを見ただけで良いと言っていると聞いた。沙羅らしい。だが、まだ脩斗(弥太)が彼女を忘れず生きているとしたら…。彼女もまた、彼に会いたいと、会って話したいと思うのではないか？そうしたら鈴音はどうなる？もし、彼女が一時でも鈴音の身体を使い、弥太に会いたいと願ったら？鈴音の人格を乗っ取りや太のもとへ行くこうとしたらどうなる？鈴音は弱い。少し彼女の悲痛な記憶に触れただけでも壊れそうになるくらい暴れたのだ。無理やり寝かしつけたが、再び目を覚ました鈴音が壊れてしまっていないかが不安になった。あんな思いは二度とご免だ。沙羅が自分と生きると決めた鈴音の背を押してくれたのは分かっている。彼女のことを信じないわけじゃない。だが、万が一そんなことにならたら。

「え、あ、どうしたの？脩斗」

「沙羅に会ったってどういうことだ？鈴音、答える」

脩斗は少し興奮気味に鈴音に問いただす。鈴音は驚いて身を引い

てしまった。

鈴音が怖がっていると勘違いしたのだろう。側近たちがすぐさま脩斗を制す。

「皇子、落ち着いてください。」

「脩斗。何を興奮しているのです。席におつきなさい」

『皇子よ。今、話すべきことは霞乃殿が見た夢についてだ。鈴音の夢の話じゃない』

皆に制されて、脩斗は黙って着席した。

しかし、彼の視線は鈴音から離れそうにない。生まれ変わりである鈴音に、少しでも自分と同じように記憶が残っていることを期待しているのだろうか。

少なくとも100パーセント彼女をあきらめたとは言っていない目をしている。

（まずいな。皇子と鈴音をあわせるのは危険だ。しかし皇子のほうも皇子だ。一度は沙羅を諦める。鈴音を俺に任せるといったのに。俺に対してまだ敵意むき出しか）

約束が違つと曉は思った。

『話を戻します。天ツ羅のことは存在すらどういったものなのか私には分からない。そんな龍が天龍にいるのかも、発生したという話もいっさい聞いてはいない。今のところは天ツ羅に関する情報を集めるしかなさそうだ。』

「ええ。私どものほうでも、そのような龍が存在するのかどうかは分かりませんから、出来るだけ古い伝承を探しつつ天ツ羅に関しての情報を集めたいと思います。あの、何度も申し上げますが、私は緋の龍はやはり曉様だと思うのです。天龍一の力をお持ちの曉様。それはつまりこの世界で一番の力を持った龍神様ということでしょうから。」

『仮に私がお告げの緋の龍だったとして、黒き龍天ツ羅に私が倒された時がこの世界が滅びるときだと？霞乃殿はそうお思いか』

「はい」

「…じゃあ、天ツ羅は暁より強い龍ってこと？そんな…」

『私より強いとなると、相当の力を持った半龍が生じるということかもしれない』

「そんな…」

(そしたら私は、暁から離れなきゃいけないの…?)

「今すぐに黒き龍がこの世界を禍つとは私は思いません。ただ、不吉な夢を毎日のように見るので、早く暁様にお知らせしなくてはならないことなのだと思います」

『ああ。話を聞かせてもらって大体のことは分かった。が、今の時点じゃどうしようもない。天ツ羅という存在が世界を脅かす存在であることは分かった。もし霞乃殿が夢占で何か手がかりとなることがあったら知らせて欲しい』

「そう致します」

霞乃は深々と頭を下げた。

『あなた方の話は聞いた。では私はこれで…』

暁が鈴音を促し、席を立とうとした。

「待ってくれませんか？龍神よ」

脩斗の声がいやに響いた。

『……何か』

「中都国には巫女に関しての伝承についての書物はこの城に丁重に納められている。そして鈴音は巫女として協力してくれるらしい」

『それが何か』

「天龍と中都国では行き来が不便だ。これから天ツ羅に関して情報を交換していくのに行ったりきたりして時間をくうのは無駄だと私は思います。あなたは龍だ。今日もまた龍特有の術でこちらへお越しになったそうで」

『……だから？』

「龍神には悪いですが、あなたの大切な妻をこちらで預からせて欲しい。巫女として協力してくれるのなら、巫女発祥の地であるここ中都国にいたほうが力の使い方、応用の方法を教授することが出来る。婆様は巫女ではないが、巫女に関して非常に博識。天龍にいるよりかはこちらにいた方が動きやすいかと思えます。そうでしょうか？鈴音」

「え……」

話しをふられ、鈴音は返答に困る。

(……鈴音。頷くな)

暁は内心焦っていた。ここで彼女が善意で首を縦に振ったとしたら、鈴音と離れなくてはならない。

「暁と、離れるの……？」

「脩斗、何を言っているのです」

龍神から妻を取り上げるなどと、と霞乃は咎めた。

「婆様、私は彼女の協力したいという気持ちを尊重して提案しているのです。取り上げようなどとは思っておりません。ただ鈴音は人間なので移動するのは大変でしょうし、儀式が終わった今、彼女は巫女の知識をさらに深めていても良いのではないかと思うのです。ちゃんと責任を持って預かりますし、少しの間、こちらで巫女の勉強するのも良いと思うのですが。もし離れるのが淋しいとお思いなら、こちらへ何度でも足をお運び頂いて構いません。暁様は術を使

い、一瞬にして移動することが可能。いつでも会える時に会うことは可能なはずです。暁様にお越し頂いた時にはこちらで調べあげた天ツ羅に関しての情報を提供致します。そして暁様からも天龍で得られた情報を私たちに教えて頂きたい。そうやって情報を共有しあい、天ツ羅の件が落ち着くまで助け合おうではありませんか」

脩斗はそう言うが、暁は絶対にそんな話しは飲めない。情報の共有や、鈴音に巫女に関する知識を教え込むと言っておいて、彼女から沙羅の話しを聞き出すに違いない。そしてら鈴音の中の沙羅は確実に心を揺さぶられる。そしてら鈴音が……。

『…その話しは断る』

「…暁…」

『私は鈴音と共にあると決めた。鈴音を愛し、守ると決めたものを曲げる気はない。だから私は鈴音から絶対に離れない。中都国との情報の共有が必要なのは分かる、だがそれは私が毎日ここへ来れば済む話だ。そして鈴音が巫女としての知識が必要ならば、私が鈴音をここに連れてこよう。ついでに私も巫女について霞乃殿に学ぶ。私だって巫女に関しての知識は疎いからな。だから何も私が鈴音と離れる必要など何処にもない。だから安心しろ、鈴音』

暁がそう言うと、鈴音の顔がぱあっと明るくなった。

「暁が一緒にいてくれるの？うん。それなら安心。ねえ脩斗、私の暁のいうとおりにするね。だって私…暁が好きだから。離れたくないんだ」

「！……」

暁が好き。

いじらしくもじもじと照れ臭そうにする鈴音の口から出た言葉は、

脩斗に大きな衝撃を与えた。

『鈴音』

「曉」

愛しそくに曉が鈴音の肩を抱き寄せる。お互いの名を呼び合い見
つめ合う二人は相思相愛の男女だ。巫女装束の姿の鈴音が曉に大事
そうに抱き寄せられて微笑んでいる。

彼女の隣にいたのは俺なのに

「……裏切り者……」

弥太だけ。あなたを愛しているわ。弥太

沙羅、そう言ったのに。それなのに。

「皇子……？皇子……？」

神の声に脩斗は我に返った。気づくと唇を強く噛みしめすぎて、
少し血が出ていた。それを拭い去り、熱くのぼせた頭を落ち着かせ
る。

（俺は…まだ未練があるのか……？確かに姿はあいつに似てるが、
沙羅じゃない。曉の隣にいるのは鈴音じゃないか…）

彼女は沙羅じゃない…

沙羅じゃないんだ。

『というわけだ。私は皇子の提案は断る。だが、出来るだけ情報を
集め、あなた方と情報交換をすることは約束しよう』

「…そうですか。わかりました」

(…俺はどうかしてる。鈴音は鈴音なのに…。沙羅じゃないのに。)
ただどうしても…。沙羅に‘会った’という言葉が気になって。
気づくと弥太の心が外に溢れ出てきていた。親しくする二人の姿に
嫉妬し、まるで鈴音が自分を裏切る沙羅に見えて、憎いとさえ思っ
てしまった。

(弥太の記憶が俺の中にあっただとしても、もう俺は弥太じゃない。
中都国の皇子、脩斗なんだ)

過去の人間とは違う。自分はもう弥太じゃない。なのにまだこん
なにも憎しみさえ抱きそうになるほど彼女を愛する強い気持ちがあ
るなんて。自分でも信じられない。

(これが女をつくれな原因の一つでもあるのかもしれない…)
皇子という地位にありながらなかなか姫を娶れないでいる自分を
脩斗は自嘲気味に笑った。

「お二人は仲が良いのですね。微笑ましい限りです。実は鈴音さん
が暁様の元へ嫁がれてどう過ごしてらっしゃるか心配していました。
けれど、その必要は無かったですよね。本当に大事にされてるよ
うで、安心しました」

霞乃が初めて見る二人の仲睦まじい様子に心からの祝福を送って
いる。誰も脩斗の口から「裏切り者」と薄暗い言葉が出たことには
気づいていない。

『私は鈴音を愛している。本当に心優しいよき妻だ』

「そ、そんな。私にもしてないし、いつも優しいのは暁だよ」

からかわないで、と言いつつまた恥じらう姿が可愛らしく、同時
にこんなものを見せつけられては、余計に弥太の気持ち収まらな
い。

こんなもの見たくない

脩斗は仲睦まじい二人を引き裂きなくなる衝動を理性でもって抑え、目を逸らした。気づくと脩斗の身体はいつの間にか自室へ向かう回廊を歩いていた。

いつあの部屋を抜け出したのか、ちゃんと皇子として挨拶ぐらいして部屋を出たのか記憶がない。誰も追っては来ないのを見ると、自分はどうかやらきちんと挨拶はして退室してきたようだ。そうと分かれば少しは心が落ち着く。また衝動に駆られて過ちを起こした後では遅い。また巫女の命を手にかけるわけにはいかない。

（俺は皇子なんだ。しっかりしろ。弥太の記憶に翻弄されるな）

自室に戻り、脩斗は一人寝所に突っ伏した。まだ沸き上がる嫉妬の炎を抑えるために。

幸せそうにする二人を思い出すと沸き上がるこの黒い炎のなんと熱いことか。身体がじわじわと焼かれて骨まで溶けてしまいうさだ。（この焼け焦がれそうな胸の苦しみが沙羅を殺めた代償なら……）死んだ方がましだ。

彼はしばらくの間、寝室で一人胸の苦しみと戦ったのである。

その後、霞乃の話を詳しく聞いた暁と鈴音は一晚だけ城で休んでいくことにした。せっかくお越し頂いたからという霞乃の計らいと、鈴音が徐々に霞乃と話しがしたいから、という理由からだ。暁はあまり賛成しがたかったのだが、普段龍宮で過ごす彼女にとって話し相手が沢山いる中都国は彼女を生き生きとした表情に輝かせていた。こうなつては反対も出来ない、一晚だけならと折れたのである。

鈴音は大いに喜び、懐かしみながら城内を駆け回っていた。巫女

であるため城に仕える侍女たちは何も言わず、寧ろ気さくに話しかけてくる鈴音と世間話をして楽しんでいるようだ。その間、曉は鈴音にほったらかしにされ手持ち無沙汰になった時間を同じように城内を散策しては暇を潰していた。すれ違ふ侍女や側近たちは曉と鉢合わせする度にその場にひざまずいたが、止してくれと普段の口調とその美しい笑顔で話しかけた所、始めこそ怯えていた側近達であったが、一向に曉が彼らのイメージ通りの、恐ろしい行動をとる気配もなく、道が分からないから教えてくれなどと困った笑みで話しかけて来たりするので、少しずつ彼らの中から龍に対する恐怖心が抜けていったのである。

人間の男と変わらぬ態度で接する曉に、怯えながらも少しずつ城内の人間が曉に話しかけてくるようになった。中には曉の美しい顔立ちに惚れこんだ侍女が、曉の道に迷った発言に実は龍神は優しくお茶目な所があると彼にとっては+ になるような噂を流し、私はその彼に話しかけられたと自慢げに話すので、それを聞いた侍女達がびくびくしながらも城内を歩く曉の様子を見に行くようになったのである。

「曉様の金の瞳は本当にお綺麗ですわ」

とか、

「龍神様ってなんて美しい殿方なんでしょう」

などと彼女らは遠目からヒソヒソ噂話しをしているので曉に一部ファンが出来たような感じになってしまった。そしてこそそそ曉を見てる彼女らと視線が合うと、曉もなるべく人間に怯えて欲しくなくて微笑み返すよう心掛けたため、侍女たちの間でさらにその惱殺スマイルのほどが噂になったのである。その噂は忽ち城内全体に広がり、恐ろしいとばかり思われていた龍神が、実はとても美しく優しい殿方だといつの間にかそれまでに植え付けられていたイメージが、彼女らによって少しずつ塗りかえ始めることとなる。人間との友好的関係を結びたい曉としては人間が寄ってきてくれること

は非常に良いことなのだが、女性、男性問わず興味本位で、しかもまだ近寄り難いせいから遠くから彼らの視線だけを感じ、曉は珍獣にでもなったような気分になった。そうして鈴音は鈴音。曉は曉で有意義(？)に時間を過ごし、時刻は日没から夜へと変わっていったのだった。

第三十七話 月下に酔ふ

その日の夜。暁と鈴音は客人として華やかな宴の中にいた。

脩斗の父である国王自らが主催し、最高神を中都国に初めて迎え入れた歓迎の宴として執り行われたのだ。

暁は遠慮したのだが、神にお越し頂いたのに何もせずにお帰り頂くわけにはいかないと、半ば強引に参加させられたのである。

そんな訳で急遽行われた宴に、二人は参加することとなった。

広間は酒や豪華な料理が次々と運ばれ、溢れんばかりの人と歓声で賑わっている。

初めに宴の主催者である国王からの堅苦しい挨拶があつたのだが、その直後、乾杯をし、酒が入ってからは人が入り乱れて、席も何も関係なくなる状態になっていった。

鈴音は側近たちや霞乃と話をしてそれなりに楽しんではいたのだが、そのうち人混みに酔い、耐え切れずこっそり広間を抜け出して静かな中庭へと出てきていた。

純和風な感じの龍宮とは違い、ここの中庭は中華風だ。休憩所として使われる東屋があるのだが、龍や白虎、朱雀に玄武らしき四神が装飾品として取り付けられている。朱色に彩られた屋根や支柱も金で縁取られていて中華街っぽいな、と思う。かと思えば霞乃が着る着物や自分の着ている巫女装束は日本ぽいから不思議だ。中国と日本を両方取り入れたような文化なんだろう。日本から来た鈴音にとっては統一感がなくて違和感を覚えたのだが。

(私が龍宮にいて落ち着くのはお婆ちゃん家に似てるからかも)

まだ天龍のほうが日本らしく感じられる。建物も町並みも。鈴音

が親しみやすく感じたのはそのためだろう。

「ここにいたのか」

不意に声がかかる。

「あかつき
「曉？」」

「ハズレ」

銀の杯を片手に現れたのは脩斗なかとだった。会談を行ってから彼は一人部屋に戻ると言っていたいなくなってしまったのでまともに話すのは今日初めてになる。

「なに残念そうな顔してるんだよ」

「してないよ。気のせい」

「第一声が曉？だったから、さぞ残念だったんじゃないかと思ってな」

「それ、残念だったの脩斗の方じゃん？私に名前当てて貰えなかったから」

「……………。ま、いいさ。あそこに座らないか？突っ立ったままじゃ疲れるだろ」

脩斗が指さしたのは豪華な東屋。椅子もテーブルもあるから休憩にはちょうどいい。私は早速頷いて華やかな東屋に移動した。

吹き抜けの小さな空間に月光が降り注いで、明かりがなくても脩斗の顔がよく見える。彼はお酒を飲んでいるのか微かにアルコールが漂ってくる。

「？お前も飲みたいのかよ」

脩斗が飲む様を見ていたら、杯を前に置かれた。

「えっ、いい。私、未成年だし」

「未成年？お前いくつだっけ」

「18歳」

「18？とつくに成人してるだろ。暁とは酒飲まないのかよ」

「暁はあんまりお酒飲まないもの」

「ふーん…。弱いんじゃないの？」

「弱くはなかったと思うけど…もともと飲まないんだと思うよ？でも飲ん兵衛よりは全然いい。酒癖が悪い旦那さんはイヤだもん。そういうば、脩斗と話すのは久々だね」

「まあな。お前ずっとあっちにいるし、こっちにだって用がある時にしか来ないだろ？」

「そうだね」

離れているからという理由もあるのだが、そんなものは暁に頼めば一発で解決する。しかし、暁は鈴音が外出することをあまり許してはくれないのだ。

「来たいつて思う時もあるんだよ？だけど…ね。いろいろあって」

「忙しいのかよ？」

「うーん、忙しくはないんだけど、暁が危険だから一人で外出は駄目って言うから」

「は？餓鬼じゃあるまいし、外出くらいどうってことないだろ？束

縛男なんだなあいつ。お前はそれでいいのかよ」

「暁は心配してくれてるだけだから。二人だったらいいって言うてるし、だから私はそれでもいいの」

「いいのって…。お前が我慢してどうするんだよ。危険だって言うなら一人でも出歩けるように治安を良くするのがお前の仕事だろっ？ 暁にそう言っつてやれよ」

脩斗は杯を口に運び、残りの酒を一気に飲み干した。少し不機嫌にゴトリと卓に杯を置く様からは皇子らしい気品さはまったく感じられない。酒が回っているのだろう。

「…。ね、脩斗、酔ってる？」

「酔っつてねえよ」

「酔っ払いは皆酔っつてないって言うんだよ？ 水もってくる？ あ、私、榊さん呼んでこようか。ちょっと待っつて」

鈴音は立ち上がり、東屋を出て行くとした。

が、咄嗟に伸びてきた彼の腕に捕まり阻まれる。

「！」

「…行くなよ」

背中から低い声が呟く。振り返ると脩斗は俯いていて、鈴音の位置からは表情が確認できない。

「…脩斗…?」

「行くなよ。いまは俺と話してんだろっが」

もう片方の腕ものびてくる。右腕を掴まれ、力強く引き寄せられる。その腕は肘から肩、肩から背中へと這い、二人の距離をじわりじわりと詰めていく。危険を感じ逃れようとするも、引き寄せられる力は強く、体はどんどん彼に接近していく。

「な、脩斗。どうしたの。やっぱり酔ってるんじゃない」

接近する二つの体の間を両腕使い剥がそうと力を込める。

(脩斗の様子が変。一体どうしたの)

が、両腕を使って接近を阻もうとするもか細い腕の力ではびくともしない。

「酔ってねえよ…。なあ…なんで逃げようとするんだよ…」

顔が近い。脩斗の顔はすぐ目の前にある。吐息がかかるほどに。

「脩斗、冗談やめて。ね、お願いだから。酔ってるのは仕方ないから…。はなして」

ただならぬ脩斗の様子に鈴音は一生懸命懇願する。酔っているには冗談が悪過ぎる。脩斗は今までこんなことしなかったのに。

「どうして俺から逃げようとするんだよ…」

「逃げるんじゃないくて榊さんと呼んでくるだけ。ね？脩斗お酒にだ

いぶ酔ってるみたいだから。お願い」

子供を諭すように出来る限り優しくお願いする。そしてやんわりと捕まれている腕を振りほどこうと手をかけた。

「…俺が嫌なのか」

脩斗が低く唸る。

「お前は俺が嫌なのか」

ゆっくりと顔をあげた彼の目は苦痛に満ちた瞳で。噛み切ってしまつのではないかと思うほど唇を強く噛んでいた。

どうしてそんな顔するの？さっきまで普通に話していたのに。訳も分からずただ彼の苦痛に歪む顔を見つめるしかなかった。

「な……脩斗…何言つて…。私、脩斗のことは嫌いじゃないよ。ただこの手を放して欲しいだけ」

「嫌いじゃないなら逃げるなよ。俺とお前の仲だろ…？」

脩斗の手が首筋を這い、後頭部まで達する。吐息が顔にかかつて酒臭い。違う。脩斗なのに目の前にいるのは脩斗じゃないみたい。

「脩斗、放して。脩斗へんだよ。私、榊さん呼んでくるから。本当に放して」

思いつきり腕を突っぱね、彼を突き飛ばした。しかし伸ばした腕は簡単に避けられ、空振り、宙をさ迷う。体勢が崩れて前によるけそうになるのを素早く彼に抱き留められた。

瞬間

ドクン
…

身体の奥でドクンと何かが反応した。

(え……なに……?)

脩斗が強く抱きしめてくる。密着した身体から彼の体温を感じ、心臓が張り裂けそうなくらい高鳴り始める。

熱い
…。

「……逃げんなよ」

脩斗が耳元で切ない声で囁く。

ドクン…

また何かが反応する。身体を中心にドクンと熱くなって、波紋のように熱が伝っていく。

(何……? なんなの…)

心臓がどくどく脈を打っている。耳で聞こえてしまうほどに。

「…好きだ。好きだぜ」

また彼が囁く。声が…甘く切なく、熱を持って全身に伝わってくる。

(脩斗が……私を好き……?)

驚いてるのに身体が石になってしまったみたいに動かない。
なんで? どういうこと……? 脩斗が私を好きって……

信じられない。信じられないのに、囁かれるたびに身体の中心が熱くなっていく。ドキドキと心臓が高鳴っていく。

(どうして……? 私は曠が好き。なのにどうして脩斗にときめいているの……?)

なんで……なんで……

鈴音は自分の身体の変化に戸惑うばかり。

その間も彼は鈴音を抱きしめる力を緩めず、甘い言葉を口にしていた。

「……好きなんだ。ずっとずっと。愛してる」

「な……がと……」

頬に彼の手が触れる。

だめ……だめだよ。言葉にしたいのに、拒まなきゃいけないのに、魔法にかかったみたいに身体が動かない。脩斗の腕に抱かれた瞬間、ぴくりとも動かない。

脩斗の顔が近づいてくる。日に焼けた浅黒い肌の彼の整った顔がゆっくりと。

だめ! だめなのに……

鼻先が触れ合う。目を閉じた彼の顔がもうすぐそこまで近づいて……

……私はゆっくりと目を閉じた。

吸い寄せられるように。彼に身を任せるように。

「愛してる………」

唇を離れた彼がまた囁く。

「愛してる」

沙羅

第三十八話 明かされた正体（前書き）

若干性的な表現があります。苦手な方はお気をつけください。

第三十八話 明かされた正体

さら　　？

不意に呼ばれた名に、私は目を見開いた。脩斗の顔が近い。彼は目を閉じ、硬直する私に何度も何度も口付けてくる。重なった唇が離れては重なり……。また重なって……。

「沙羅……」

切ない声。

さつきから何を言っているの？脩斗、違っよ。私、沙羅じゃない。鈴音。鈴音だよ。

違っって言いたい。沙羅じゃない、間違ってるって言いたいの……！

彼に抱かれた身体は私の意志と反して動こうとしてくれなくて。どうして？私、嫌だ。脩斗とキスしたくない。だって私は曉のことが好きで、妻になったんだから。離れなくちゃ。離れたいのにとっして動かないの？腕も脚も、指の先まで動こうとしてくれない。なのに、胸の奥がドキドキって高鳴ってる。

脩斗の一方的なキスを一回されることに身体が喜んでる。私には分かる。でも、彼にキスされて喜んでるのは私じゃない。だって私にとって脩斗は気兼ねなく話せる兄弟みたいな感じにしか思っていないもの。こんな急に告白されてキスされて喜ぶほど私は軽くはない。

じゃあこの胸がキュンとなるような胸の高鳴りはいったい誰のもの？

「…沙羅。今も、ずっと愛してる」

脩斗が唇を離し、私を見つめて愛を囁く。ううん、違う。脩斗は私を見てない。私じゃない誰かを私に重ねて告白してる。脩斗の瞳が、私と見るときと、いつもと違う。月明かりに照らされて色濃く落ちた影が、彼の男性らしいすっきりとした輪郭をよりシャープに見せている。瞳は月光の光を受けて、潤んだ瞳みたいに綺麗に輝かせている。私の目の前にいる人はマイペースで恋愛なんてどうでもよさそうな脩斗じゃない。私じゃない誰かの面影を重ねて見つめてくる彼のこの眼は、私を愛してくれるときの暁の眼と一緒に。私を慈しみ、守るように、熱のこもった暁の眼と一緒に。

「沙羅…」

脩斗から漏れる甘く切ない吐息。さつきから沙羅、と名を呼ばれていたのに、急激な彼の変化とキスされたことに気をとられてはつきりと気付いてなかった。

沙羅……………？

脩斗は沙羅に恋しているの？

沙羅は、1000年も前の人でしょう？

どうしてそんなに昔の人のことを好きなの？

会ったときもない人のことをどうして好きだと言えるの

…？

「な…がと。私は鈴音だよ」

ゆうこと聞かない身体を精一杯動かし、やっとのことで言葉を口にした。さきよりは胸の鼓動は収まってきている。でも一度熱くなつた身体からは、そう簡単には熱は引いてくれそうにない。

「違う…。お前は俺の沙羅だ」

様子のおかしい脩斗はなおも続ける。私を沙羅だと思っている。酔っているせいかもしれない、なんて思った自分が馬鹿。

「違うのは脩斗だよ。私は鈴音。暁の妻。輿入れのとき、不安な私のために元気づけてくれるお手紙、くれたでしょう？嬉しかったよ」

「暁……」

声のトーンが変わる。月光に輝いていた瞳が一瞬にして曇った。

「そう。暁。私の大好きな人なの。だから…、脩斗の気持ちにはこたえられな…」

「裏切り者……」

「え？」

「沙羅。お前は言うてくれただろう？俺だけだつて。結婚も約束して…、幸せになるはずだったはずの俺たち。それを邪魔したのはあいつだろう？なのにどうしてあいつのことを好きだなんて言うんだよ……」

「きゃあー！」

柱に身体を押し付けられる。

「いった……」

強引に押し付けられた衝撃で背中に鈍痛が走る。痛い。鈍い痛み
に顔を歪めて見ると、脩斗も苦しそうに顔を歪めている。すぐく、
すぐく悲しそうで、今にも泣き出しそうな顔で私を見てる。怒りと、
悲しみが入り混じった激しい感情。押さえつけられてる両の手首が
血のめぐりを失って冷たくなっていく感覚。

「痛い。やあつ…はなして！脩斗っ」

助けを求めて、必死に全身でもがいた。でも、びくともしない。
脩斗は身体を私に密着させ、柱との間に私を挟み、完全に動きを
封じる。脩斗はそのまま私の肩口に手を這わせると、ぐっと衣に力
を籠めた。

「やだっ！」

衣が勢いよくずれ、白い肩と胸元があらわになる。月下に照らし
出された鈴音のまろい肌が外気に触れ、鳥肌をたてた。脩斗はその
白い肌に吸い込まれるように露になた鎖骨に強く吸い付いた。チ
クリと強い痛みが鈴音を襲う。彼が顔をはなすと、そこは綺麗な赤
い印がついていた。

「沙羅は俺のだ」

満足気に口角をあげて笑う脩斗はその白い肩にさらに口付けてい
く。

「やだ…やだあ……」

こんなことされて嬉しくない。全然嬉しくない。助けて……助けて

て曉……。

涙をこぼしつつ心の中で愛しい夫の顔を思い浮かべる。

助けて曉。脩斗が変なの。今までこんなことしなかったのに、様子が変なの。

首を左右に振り、抵抗しようと試みる。

ドクン……

「あ……」

また鈴音の中で何かが反応しはじめる。トクントクンと、心音のように一定のリズムを刻みはじめ、徐々に速さを増していく。身体がまた熱くなっていく。

また嬉しいって気持ち^{すずめ}が身体の底からあふれていく。

違う、違う。私^{すずめ}じゃない。私の気持ち^{すずめ}じゃない。全然嬉しくないもの。こんな幸せな気持ちがあふれてくるなんておかしいよ……！！

鈴音はすべてを否定しようと激しく首を振った。

「沙羅……沙羅……」

違う！違う！沙羅じゃない！沙羅なんかじゃないのに！

やめて。そういいかけた時、あふれ出る熱い思いが誰のものなのか、自分じゃなかったら誰なのか鈴音はすべてに気付いてしまふ。

「愛してる……沙羅……」

さつきからずっと自分を沙羅と呼び、愛そうとする脩斗。彼の言葉に反応を示す自分の身体。否、自分^{すずめ}じゃない。

沙羅の……なの……？

沙羅の言葉が脳内にフラッシュバックする。悲しそうに、でも満たされたと言うように。あの真っ白な空間で話した言葉。

<あなたは私をあの人に少しの間だけ会わせてくれたわ>

あの人、沙羅の愛した人。

<彼も新しい人間として生じたのです。あなたが生きる、この現世に>

沙羅の愛した人。

……弥太……。

彼なのね？

だから沙羅はこんなに嬉しそうなのね。そうなんだね？

ああ……。どうして気付かなかったのだろう…。

彼（弥太）とはずっと前から、私、会ってたんだ。

<どの人が弥太なの？沙羅が会いたいなら私があわせてあげる。>

そう彼女に言った言葉。

弥太はとつくの昔に私と会っていたんだ。暁にもまだ会ってないときから……。

だからなんだ。だから彼は私を沙羅と呼び、裏切り者だと言ったのだ。苦痛に顔を歪めて。

「……ねえ……脩斗」

彼はぴくりと反応し、ゆっくりと顔をあげた。眼と眼が合う。

ドクン……

彼と視線が交差すると、また私じゃないもう一人の自分が反応した。

ああ。やっぱりそうなんだね。やっと分かったよ……。この嬉しいが誰の気持ちなのか。

「脩斗……。あなたが、弥太だったんだね……」

第三十九話 残酷な告白

「脩斗…、ううん、弥太…なんでしよう？」

「……ああ」

脩斗は、コクリと頷く。やっと会えた、と歓喜で声が震えている。愛する女性との再会に、心から喜んでるんだ。

私の中の彼女も、トクントクンと喜んでるの、分かる。会いたくてしょうがなかった二人が今、やっと会えたんだ。

…でも、弥太の目の前にいるのは私であって彼女じゃない。

胸の中で苦しいくらい弥太を思っている彼女を感じる。

けれど彼女私のほんの一部にすぎなくて、死んでしまった彼女の肉体はどこにもなくて…。言葉にしたいだろうに、それが出来ない。私には彼女の気持ちは痛いくらい伝わってくるけど、言葉にできない彼女の苦しみも伝わってくる。

この気持ちをどう表したらいい？

彼女の気持ちを私が弥太に代弁してあげたらいい？

私はどうしたらいいかわからなくて、そつと彼の肩を押しやった。密着していた身体が少しだけ離れる。

「弥太…、ねえ脩斗。あなたはいつから弥太だったの…？」

初めて会った脩斗は、そんなそぶり一度も見せなかったよね…？私を巫女かどうかも怪しい人物としてみていたよね？あの時のあなたはまだ脩斗だったよ。

「……いつから……。生まれたときからだ。再びこの世に生を受けたときからだ。俺は中都国の皇子、脩斗として生まれたが、ずっと弥太の記憶は残ったままだった。はじめはお前（沙羅）が死んでから、記憶が残ったまま俺だけ生まれ変わってまた生きることになるなんて思ってもみなかった。お前のいない世界で生きること、神は俺に罰を与えたんだとずっと思っていた。でも、婆様が言った。沙羅の生まれ変わりの巫女が再びこの世界に現れると。そのとおりの前は沙良草原（みや）に現れた。知っていたか？お前が死んでからあそこは忌まわしい千年前のあの日以降、お前の名をとって沙良草原と呼ばれるようになったんだ。かつてあの場所で争いが起きたことを忘れないように。お前を忘れないように」

…そうなんだ。あの場所はただの広い草原なんかじゃなかったんだね…。

巫女の沙羅にあやかかってつけられた場所だから。だから私はあそこに落ちたんだね…。

「お前はしきたりどおり、現れて間もないというのに再び巫女という役を課せられた。そしてお前も憎むべき龍神、あがつき曉に嫁ぐこととなった。弥太としての記憶が残っていたとしても、その頃はすべてを思い出していたわけじゃない。俺は脩斗として育ったから、脩斗として、皇子として振舞った。皇子らしく。でも…。お前を巫女として天龍に送り出す準備が着々と行われていくさまを見ていると嫌な気分になっていくんだ。自分でも信じられないくらい嫌な気持ちだ。新しく生じて生まれ変わったお前とは初対面で、たいして思い入れもないお前を天龍に送り出さなきゃいけないのに、それが嫌だった」

思い入れの無い…。

弥太の言葉が鈴音の心に突き刺さる。

今の彼は脩斗じゃない。弥太なんだ。弥太としてみたら私わたしなんて
どうでもよくて、大事なのは沙羅…

「嫌だから皇子としての仕事もあまりやる気にならなくて、でもそれなりに仕事を片付けてはお前に会いにいったさ。お前の何が俺にこんな気持ちにさせるのか。確かめたかった。何度かあっているうちに俺はすべてを思い出した。俺がお前を殺した時のことも、その日に何があって俺は沙羅の生まれ変わりであるお前にこんな思いを抱くのかも」

脩斗やたは苦しそうに自分の胸元を鷲づかむ。

「だからっ……！…お前がこの国を出て行く最後の日には、お前に会いにいきことが出来なかった。輿入れしていくお前を眼にしたら、きっと俺はまた同じ罪を犯す。それが怖い。だから部屋にこもってやり過ごす。そうしたかった。もう二度とあんな思いをしたくないし、皇子として、国を背負って生きる人間として生まれたから少しは国のためになることはなんなのかって考えて、輿入れを阻止したい気持ちを抑えて、それで…。でも神が…、最後に別れの手紙くらい書いてやれって、だから俺は沙羅に対する思いを抑え、“鈴音”に対して別れの言葉を贈った。後から聞いたんだが…輿入れして、儀式を無事に成功させた後もあの手紙を鈴音がもっていると聞いて正直驚いた。あんな…、うわべだけの手紙をまだ大事に持っているのかと」

「……………（え…？）」

鈴音の心が凍りつく。

うわべ…？

あれは…ただの表面的な言葉だったの…？

…嘘…

あの手紙をくれたのは脩斗…？弥太…？

私…、あの言葉に励まされて不安な気持ちを抑えて、まだ見もしない曉のところに行く勇気をもらったのに？

字が読めない私のために霞乃さんが代わりに手紙を読んでくれて霞乃さんが声にして脩斗の励ましの言葉を一字一句、確かに私の心に届けてくれて…。

短い期間だったけど皇子様なのに私なんかこんな温かい言葉をくれるんだって感激したの。

この世界で私に良くしてくれた人のこと、忘れないように。この手紙はずっと大切にとっておこうって胸に抱きしめて天龍国に入国したのに。それなのに。

信じたくない…

信じたくない…わたし…

「でも、少し嬉しかったな。ほんの少し関わっただけだが、俺を好いてくれているのかと思うと。悪い気はしない。巫女としてがんばっているようだし、見ていて危なっかしかったが」

この言葉は弥太の？脩斗の？

もっどっちの言葉か分からない。どっちも？

けれど、彼からつむがれる言葉は、私の心をじわじわと傷つけていく。

信じていたものがすべて壊されていくかんじ…

脩斗のことは異性としては好きになれなかったけれど、私を支えてくれる家族、お兄さんのようだって思っていたのに。
目頭が熱い。
心が痛い。

目の前の人は…、鈴音わたしに話しかけてるんじゃない。
すべて沙羅わたしに向けて話してる。
今、あなたの目の前で話を聞いてる鈴音わたしを見ていない。
さっきから話している口調からすべて分かる。

そう。この人は。最初から鈴音わたしなんて

…見ていなかったんだ…

いつから？ 最初から

誰を見てた？ 沙羅を

ねえ、私のことすずねは？ 鈴音は、沙羅としてしか見ていない。

そういつぶつに言われているみたい。気のせい？勘違いだったらしいの。

私、脩斗やたがそう言ってるようにしか聞こえない。被害妄想？
もうわかんない。

目元が熱い。視界がぼやけて何も見えない。私、泣いてるの？
知りたくなかった。脩斗が弥太なんて。
気付かなければ良かった。

ああ……、いやだ。脩斗は弥太だった。暁は1000年た今の暁として変わらない。二人は1000年の時を越えても変わっていないのに、沙羅わたしだけ変わった。鈴音わたしになった。どうして私だけ……。

脩斗はずっと沙羅だけを思ってる。今の言葉でわかる。

ずっと忘れないで彼女を愛し続けている。

じゃあ……、暁は……？

暁は私わたしのことどう思っているの？

私のこと好きって、愛してるって言うてくれるけど、やっぱり私が沙羅だからなの？

前に、暁、言ってた。

<沙羅は優しく美しかった>

<鈴音は沙羅によく似ている>

うつとり呟く暁に、あの時はやきもちを妬いておわった。あとから暁が今は沙羅じゃなくて鈴音わたしが好きっていつてくれたから。

でも…本当？

脩斗の言葉きいてたら、暁も今も本当は私を沙羅として見てるんじゃないか？って思ってしまう。

どうしよう。脩斗だけじゃなくて暁にも私を鈴音わたしじゃなくて沙羅としてしか見てないって言われたら。

鈴音はわたしどうしたらいいの？

鈴音は、この世界では必要とされていないんですか？

私はもう立っていらなくなってその場に座り込む。

次々とあふれる涙がとまらない。

これは弥太の言葉。脩斗の言葉じゃない。お願い。とまって。

「沙羅。泣くな」

違う。私、沙羅じゃない。

悲しい。悲しい。

なのに胸の奥は嬉しい。彼に会えて嬉しいって言ってる。

悲しい。嬉しい。悲しい。嬉しい。

鈴音はわたし悲しい。つらい。

沙羅はわたし嬉しい。弥太に会えて嬉しい。死んでも、こうして彼に会えると私はやっぱり嬉しい。

嫌だ。どうして沙羅はあなた鈴音の中わたしにいるの。あなたがいるから私は苦しいのに。やめて。

鈴音という人格が生まれなければ良かったって思っちゃう。そうしたら弥太も暁も本当に好きな人にまた会えたのにな。

二つの心が交差する。相反する心が一つの身体に存在する。

苦しいよ。

たすけて暁。たすけて。

「沙羅、泣かないでくれ。俺はずっと、お前だけを思っているから」

脩斗が、弥太が、しゃがみ込んで私を抱きしめようとする。

やめて。沙羅は喜ぶけど、そのかわり苦しむ私を無視しないで。

二人の世界を邪魔しているようで苦しいの。私がいるせいで二人は本当の意味で再会できていない気がして。

私、いないほうが良かった。

ねえ

沙羅は私の中に微かにいるけど、この身体は鈴音のものなの。

だからお願い。

お願い……………苦しめないで

苦しくて、身体が倒れそうになた時…

『弥太！それ以上、鈴音にさわるなッ！！！！』

助けて欲しいと願った人の姿が、そこにあった。

第四十話 狂乱

「あ………かつき………」

『鈴音』

あかつき
「あかつきが私のもとへ駆け寄ってくる。私の元へ。大好きな人。」

「私がこの世界で一番頼りにできて、一番信頼している人。その人が来てくれた。」

「本当なら凄く嬉しいのに。素直に喜べない。疑ってしまう。」

「あなたもなの……？私を迎えに来てくれたように見えて、本当はあなたも私をかつて愛した沙羅としてみているの……？」

「信じているはずなのに心から信じられない。」

「やるせない思いに動けないでいると、駆け寄る暁の前に脩斗が立ちふさがった。」

「またお前が邪魔するのか」

「脩斗は睨みをきかせ、暁に敵意を向けている。1000年前のあの日のように。」

「巫女を迎えに現れた暁。それを阻むように立ちふさがった脩斗。睨みあう二人はそれぞれ思う。この状況は忘れることのできぬあの日を想起させる、と。」

「暁は敵意を向けてくる脩斗を見やると、歩幅を狭めやがて立ち止まった。」

「そして冷静を装い、静かに言った。」

『脩斗…。弥太の思念を表に出しすぎだ。抑える。中都国の皇子だろっ』

暁は静かに命令する。そしてしゃがみ込んでいる鈴音のほうへ顔を向けた。

本当は今すぐに脩斗の背後にいる鈴音を抱きしめてこの場からすぐに立ち去りたい。しかし、彼が立ちふさがったままではそれは不可能だ。

『鈴音』

名を呼ぶと、微かに鈴音は身じろぐ。俺を見る瞳が涙で濡れ光っている。何をされたのかのか、何を言われたのかはこの場になかったから分からない。

だが、暁には大方予想がついていた。昼間に脩斗と対面したときから。脩斗は前回に対面したときよりも弥太の眼差しのそれに近くなっている。鈴音を見る眼も、鈴音が沙羅に会ったと呟いたことに過剰に反応した脩斗を見て、暁は予感した。彼もまた、いまだ過去の記憶に翻弄されている一人なのだ。そして彼は完全に弥太の視点で鈴音を見ていると。

『弥太、怒りを静める。俺はもう過去とは違う。お前も今はこの国の皇子だ。そう前に話して少しは分かり合ったつもりだったが……。これ以上過去のこと縛られて俺達がいがみ合っただろう。…沙羅はもういない。いないんだ。弥太、お前もわかっているはずだろっ』

暁は諭すようにそう言うと、脩斗はカッと目を見開き叫ぶ。

「違う！！沙羅ならここにいる！」

「きゃあ」

鈴音の悲鳴があがる。脩斗は鈴音の腕をつかみ、乱暴に立たせ、引き寄せる。

「ここにいる…。俺には分かるんだ…」

脩斗は引き寄せた鈴音の、心臓のあたりに手を這わせ、そこを愛しげに見つめた。

まるでそこに沙羅がいるかのように。沙羅に語りかけるように。

(鈴音の中に沙羅がいることを教えたのか?)

暁はふと思った。鈴音のことだ。この世界におちたときから親しくしている脩斗にはすべてを話してしまってもおかしくない。彼が弥太なのだと思い付かないうちに。

「……………」

脩斗に胸元をさわられ、鈴音は羞恥に頬を染め、いやいやと首を左右に振る。

嫌だ。さわらないで脩斗。好きでもない人にさわられたくない…！
しかし、鈴音の心とはうらはらは、もう一人の自分(さぶ)は彼が自分の存在に気付いてくれることに歓喜の声をあげていた。

トクン… トクン… と。

ああ… 弥太 私に気付いてくれているのね そう 私はここに
いるわ 完全に新しく生じることができなくて、私はこの子の一部
として残ったの

彼の触れたところに呼応するように、沙羅は鈴音の中で語りかける。

「何を嫌がる？沙羅。俺が好きだろう？これからは俺がそばにいるから」

トクン…

また心臓が跳ねた。

ああ…。

鈴音の頬を透明な涙が伝う。弥太の言葉ひとつひとつに沙羅が反応している。

弥太の一挙一動に確かに呼応しているのだ。

嬉しい

嬉しいわ……

彼女が私の中で歓喜している。

でも、喜びを表す彼女は少しずつ悲しい気持ちへと変わっていく。

嬉しい　こんなにも　あなたに思われて

でも　肉体がない　思いしか残っていない　本当はあなたに触れたい　でも　できない

そんな思いが鈴音の中に伝わってくる。

沙羅が直接弥太に会いたがってる。ひしひしと直に伝わってくる彼女の思い。

こんなに強い二人の思い。しかしそれが、鈴音の良心を締め付ける。

せつかく再びめぐり会えた二人は、もう触れ合うことはできない。沙羅の嘆きが聞こえてきて、鈴音はその心に涙した。

「ごめんなさい…。ごめんなさい…」

『鈴音…?』

ふと鈴音の口から零れ出る謝罪の言葉。何故謝る。暁は首をかしげた。

「沙羅…どうした」

脩斗も不思議そうに鈴音を見つめた。

ごめんなさい、沙羅。私が、鈴音として生まれてしまったから、あなたの大好きな人はこんなに目の前にいるのに触れることが出来ないなんて。

弥太は新しく生まれ変わってもずっとあなたのことを思っていて。こうして、ほら。愛を囁き続けている。

なのに沙羅は沙羅としてじゃなくて、私として生まれてしまっ…。

私…二人の邪魔をしているみたい。もし鈴音がいなくなったら、あなたは私の身体を得て、脩斗と新しい人生を歩んでいくことがで

きるのかもしれない。巫女としての役目、暁を完全な龍にする儀式も無事に終わっている。暁はもう、1000年前のようになつたりはしない。だから、今度あなた達二人の距離を隔てているものがあるとするれば、それは鈴音わたしの人格：なのかもしれない。

そう思うと心が、揺れてしまう。

こんなに強い思いを見せ付けられて。

感じさせられて。こんな二人の気持ちを前に、私の“好き”が勝てるはずない。

どうしよう……。消えてしまいたい。脩斗は私を見てない。ずっと沙羅だけを見る。

暁……、暁……、怖いよ……。胸が苦しい……。私の身体、私のものなのはずなのに、私のもんじゃないみたい。胸が苦しい。沙羅の弥太に触れたい。悲しい気持ちでいっぱい。頭の中も、沙羅の声がたくさん聞こえてきて、私、どうしたらいいか分からない。どうしたらいいの……？

「！」

あ……。また沙羅の声が聞こえてくる。

触れたい 触れたい 弥太に 一度だけでいいから 話したい
触れ合いたい お願い鈴音……

そんな……。そんなお願いしないで……。私の心を揺さぶらないで……。あなたの好きって気持ち、痛いほど分かるから……。
そんなこと言われたら……。私……。わ……。た……。し……。

「……………うう……………」

鈴音は突然頭を抱えこみ、呻き声をあげはじめた。

「…沙羅？」

『！』

(まさか…鈴音?!)

暁は鈴音の変化にいち早く気づき、呻く鈴音の元へ全速力で駆けよる。

『鈴音!!』

恐れていたことが現実になりそうだ。

(くそっ!! 鈴音の中に沙羅がいると分かっておきながら…目を離すんじゃないかった!!)

暁は宴の場で鈴音を見失ったことを悔やんだ。脩斗と一緒にしてしまふことを最も恐れていたのに、見つけたときには既に遅かった。脩斗が何を言ったのかは分からないが今の脩斗は完全に弥太として鈴音に接していたのだ。弥太の言葉に沙羅が無反応なわけがないのに。こんなことなら、見つけた時点で鈴音を引き剥がすべきだった!! 暁は後悔しながらも鈴音のもとへ急いだ。

『すずっ……………!!……………何をする!!』

全力で駆け寄り寄る暁の前に、脩斗が再び立ちふさがり、暁に掴みかかってきた。

「…俺たちの邪魔をするな…」

低い声で見上げる脩斗は本気の目だ。本気でここを通すつもりはないらしい。

『やめろ！！こんなことしている場合じゃない！！あの状態の鈴音を放っておいては駄目なんだ！鈴音が壊れてしまっ！退けッ！！』

しかし、曉がそう言っても、脩斗は聞く耳を持たず、問答無用で曉に殴りかかる。

曉はひよいと次々に降ってくる拳をかわし、鈴音の元へ近づこうと試みる。が、脩斗はなかなか曉を行かせようとしない。胸倉を掴み、これまでの恨みをぶつけるように曉を柱にたたきつけた。

『ぐっ………』

脩斗の咄嗟の攻撃に、曉は柱に頭部を強く打ち付けてしまっ。一瞬くらつと眩暈がして、意識を手放しそっになった。

「うあああああ…あああああああああ…！！！」

鈴音の声が呻き声から悲鳴へと変わる。髪をかきむしり、ガクガクと身体を震わせている。目は大きく見開かれ、大粒の涙を零し、操られたように激しく身悶える。

「あああああああああ！！うあああああああ…いやあああ！！！！いやあああ」

断末魔のごとく泣き叫び、地面に這いつくばって苦しみ悶える鈴

音の声に、曉はハツとなつて意識を戻した。

見ると、鈴音はこの前よりも酷いありさまになっていた。彼女は喚き暴れるだけでなく、なんと自分の身体に傷をつけ始めたのである。まるで自分の存在を消そうとするかのように。

その白くなめらかな肌に爪が食い込み、肌を傷つけていく。

曉は絶句した。

やめろ…やめてくれ。こんな鈴音、見たくない。曉は目をそむけなくなった。鈴音は何かに苦しみ、自分を傷つけている。このままじゃ、鈴音は壊れるどころか死んでしまうのではないかと思ってしまう。一体なにが、なにが俺の鈴音を傷つける。やめてくれ。鈴音を苦しませるな。鈴音が一体何をしたっていうんだ。こんな苦しませられるようなこと、何もしてないだろう！

曉の脳裏に、出会った頃から、これまでの鈴音の記憶がまざまざと蘇ってくる。

綺麗に着飾られ、慣れない巫女装束で一人龍宮にやってきた鈴音。

【……あの…あなたが龍神様ですか…？…えっと…習志野鈴音です】

愚かな過ちを犯した自分に心を痛め、綺麗な涙を零してくれた鈴音。

【（酷い言い方…。曉はずっとこんな言葉から耐えてきたの…？）】

儀式を成功させるために疲労で倒れながらも何日も何日も練習を続けた鈴音。

【絶対成功させる。約束するから、はい】

夫婦になって、互いに甘い言葉を囁きながら過ごした愛らしい鈴

音。

【…だって恥ずかしいんだもん】

龍体の自分に興味を持ち、恐れずに触れてきた日の鈴音。

【すごい……龍ってこんなに大きいんだ……。…触ってもいい？】

いつも大好きと言っては満面の笑顔で寄ってくる鈴音。

【暁、大好き！】

そして、何よりもいつも自分のことを一番に考えてくれる鈴音。

【（自分のことも大切にしてくれ？）】

（なんでこんな時に……。）

暁はあふれ出そうになる涙を堪える。

（鈴音は自分の生まれ育った世界でもないこんな異界のために、その優しき心と華奢な身体をおしみなく削っているというのに）

今日だって本当はここへつれてきたくなかった。だけど、心優しい鈴音は、世界が危機にさらされるかもしれない。霞乃の話を聞いて欲しいと聞いて、何も自分が行かなくてもいいのに、俺だけでも良かったのに、巫女として何かできないかと考え、自分から進んできた。

……それなのに！

暁の胸は怒りに燃えた。

自ら力になりたいと赴いた地で、何故鈴音がこんな思いをしなくてはならない？！何故鈴音が苦しまなくてはならない…！！
こんな思いをするためにここへきたわけじゃないのに！

暁は渾身の力で押さえつけける脩斗を思い切り殴りつけた。よろめく脩斗やたを振り切り、苦しさのあまり自分の肌に傷がつくほど腕に爪をたてている鈴音に近づぐ。

『鈴音！』

「うううううう…いやああああああ…！」

『…！』

鈴音の振り上げた腕が暁の顔を傷つける。つきたてた爪が暁の左頬をかすめた。かすかに血が滲みでてくる。

『鈴音…』

暴れる鈴音は柱にしがみつき、何かを恐れるように意味もなく空を裂いている。自分で傷つけたのだらう、はだけた胸元にはところどころ血がついていてその苦しみがどれほどのものなのか物語っている。自分の身体に傷つけても苦しみは止まず、ひたすらに鈴音はがりがりがりがりと地をひかつき、身体をかきむしって涙を流し続けている。

「きゃああああ…！あああああ…！！うあああ…！」

『鈴音、鈴音…』

暁は背後から近づき、鈴音を抱きしめようと腕をのばす。

しかし。

バシッ……！！

身を翻した鈴音がその手を振り払う。

「く……う……う……う……や……た。や……た……」

弥太。鈴音は確かにそう口にした。

『沙羅…なのか……』

暁は鈴音に尋ねてみるが返事はかえってこない。

「う……う……う……う……う……う……う……う……」

何かを捜し求めて、鈴音はうろつろつと這いずり回る。そして彼女は、気絶している脩斗のもとへゆっくりと移動していく。

『やっぱり…そうなのか。沙羅…なんだな……』

少しおとなしくなって、今地を這いながら脩斗のもとへ歩いていくいまの鈴音は沙羅に間違いない。

（鈴音の身体を使ってまで、苦しませてまで、そんなに弥太に会いたいのか）

そうさせてしまったのは自分。二人を引き裂いたのは自分なのだ。

「う……う……う……やた……や……た……」

しかしあと少しで脩斗の傍にたどり着くというところで、彼女の身体がビクリと跳ねた。

そして一瞬動きが止まったかと思うと。

「あああううううう！！！あああああー！」

また暴れだす鈴音。身体を大きくのけ反らせ、声が嘎れても叫び続ける。もうボロボロだった。自分を傷つけ、身悶えるほどの苦しみとはなんなのか。

願わくば、その痛みを俺に。

曉は無言で左右に首を振った。

『やめる…やめるんだ。もう、自分の身体を傷つけるんじゃない…』

沙羅が苦しんでいるのか、鈴音が苦しんでいるのか。

言葉もしゃべれず、ただ苦しみに悶える彼女は、あんなに明るく笑顔で笑いかけてくれた鈴音じゃない。

曉は悲しみに涙しながら、まだ自分の身を傷つけている鈴音にゆっくり近づいていく。一步一步。

「ふうふうふう…ああ…ふうふうふう…！！！」

鈴音は近づくと曉に威嚇とばかりに唸り声をあげている。しかし、その顔は。

眉を下げ、虚ろな瞳からはとめどなく涙があふれでて…。

(苦しい…。苦しい。たすけて…)

そう言っているような酷く悲しい、助けを求める顔で。

鈴音の心が伝わってくるようだ。

彼女は今、とてつもなく辛く、悲しい。自分を傷つけるほどに。

『鈴音』

暁は膝をつき、地を這う鈴音の目線と高さを合わせた。

そして彼女の腕を引き寄せると、自分の腕の中に強く強く閉じ込めた。

(鈴音…どうかとまってくれ…)

『鈴音……愛してる…』

暁は心からの愛の言葉を囁いた。

第四十一話 崩壊

愛している

愛している…君を

。

曉：本当に？

私、私うれしい。とっても。突然知らない世界に連れてこられても、巫女なんて言われて顔も知らないあなたに嫁がなくてはならなくなっても、それでもここで生きてける気がするのはあなたがいるからだよ。ね、私あなたの妻になって嬉しい。鈴音：鈴音って名前を呼んで愛えを囁ささいてくれるのが嬉しい。ねえ曉、ずっと一緒にいようね？ずっとずっと鈴音わたしの傍にいて下さい。

大好きだよ。曉。ね、約束しようか。ずっと一緒にいますって約束、指きりで。前に教えたよね？だから分かるよね？

さ、一緒に。

指きり、しよう？

スツと差し出した右手の小指。ね、曉も一緒に。

『……………』

暁は差し出された小指に見入って黙り込んでる。

……………暁？

どうして黙っているの？

鈴音わたしと一緒にいるって約束、しよう？

愛してるって言ってくれたものね。

私も愛してるから。お願い。

『……………ああ。指きり、しようか』

暁がにこって笑って、同じように小指を差し出してくる。

でも、私と暁の指は絡まることなく、ずっと私の身体を突き抜けて…

(……………え…。私、透けてる…?)

『貴女に誓う。俺は貴女を一生、この身に掛けて守る。愛しているよ……………』

背後で暁のはずんだ声が…、嬉しそうな幸せそうな声が聞こえる。

(私に、言ってくれているんじゃない…ない…い…い…い…い…?)

じゃあ、誰に…誰に…誰に…?

私はここにいるのに、暁は背後で私じゃない誰に話しかけていると…いつの…

おそろおそろ振り返る。身体が、見たくないって知りたくないって言って一気に振り返ることができない。私はぎこちなく無理矢理

身体をひねって、曉の音がするほうを向いた。

え……………

目を疑いたくなくなった。

こんなことって……………身体の熱がどんどん引いていく。動悸が……………眩暈が……………吐き気が……………どっと押し寄せて私に襲い掛かる。

息が……………出来ない。

嘘でしょう……………？

……………嘘って言うてください……………神様。

「曉……………曉……………？」

私が呼んでるのに、聞こえないの？ 曉。

お願い。こっち見て。私を、私を見て……………！

私の視線の先……………。 曉が愛を囁いているのは……………。

『沙羅、貴女を愛している。ずっとずっと、あなたを想ってきた。あの時は本当にすまなかったと思っている。だが、分かって欲しい。俺にはあなただけだ』

そう言って愛を囁いている相手　沙羅の手をとり、なめらかな
手の甲にそっと口付けた。

な…なにをしてるの曉、やめてよ。

< 曉…私もです。あの日はあなたをあんなに咎めたけれど…あれ
はどうしようも無かったことなんだから。大丈夫。私がいるわ。私
があなたの傍に。あなたの妻として >

『ああ…！沙羅、夢のようだ。貴女が俺のことを妻として愛してく
れる日がくるなんて』

< きゃ。 曉 >

「！？」

目の前の光景が信じられない。

曉が…思いつきり沙羅を抱きしめ、私にしてくれたように大事そ
うに目を閉じて頬ずりしている。

< ふふ…くすぐりたいわ >

沙羅がはにかみながらくすぐったそうに笑っている。

(いや…、やめて…やめて曉…！私を、鈴音を愛してるんだって言
ってくれたじゃない)

< 曉…、あの子はどうするの…？ >

『あの子？ああ、鈴音のことか』

まるで忘れていたというような口調で軽く言う。

『沙羅の一部としてまだ残っているのだろうか？』

<ええ。私がこの身体に戻るための仮初の人格、鈴音。向こうの世界にいるためにできた私の人格>

沙羅が胸に手をあてて言う。私があるところにいるみたいに。

仮初：仮初の人格：？何を言っているの

<私もこうして新しいからだを手にいれたことだし、この子の人格はもういらぬわ。あつちの世界で生きるためだけにできた人格ですもの>

『ああ。沙羅がこうして沙羅として戻ってくる日をどれだけ待ち焦がれたことか。まったく…沙羅が戻ってくるまでの仮初の人格にすぎないというのに、大事な沙羅の身体で一人出歩いて誘拐されたり、よく考えもせずに行動するから厭きたものだ。付き合うのが疲れる人格だったな…』

やれやれとみたこともないような呆れ顔で溜息をついた。

<仕方ないわ。あの子は仮初の人格だもの。でも、このまま私の魂の一部として残るのも嫌ね…壊してしまおうかしら>

『それがいい。俺達のことには首をつつこんだ一時の人格など不要だ。沙羅なら鈴音を壊せるだろう？』

< ええ。できるわ >

私を壊す……？仮初の人格？

嘘……嘘……。逆だよ。私の魂の中に沙羅の心がのこっていて、私じゃない。暁、どうしてそんなこと言うの？私を愛してるって言うてくれたじゃない。本当は、私のことそんな風に思っていたの？付き合つのが疲れる人格……、厭きたって……。そんな……優しい暁がそんなこと言うわけない。私のこと好きって言うてくれた。私も暁が好き。好き！そんな悪い冗談言わないで。お願い。お願い……！

< 私の中の鈴音があなたを愛している、って……。声が聞こえるわ >

そう。愛してる。私はあなたが好き。あなたも好きって言うて。

『……。……迷惑だな』

……ア……カツキ……

何かが、何かが崩れおちていく。

『俺が愛しているって言うていたのは鈴音の中で眠る沙羅に対して言うていたのに。勘違いされては困る。そんな人格壊してくれ』

ソナナ ジンカク コワシテクレ ?

暁が言ったの……、今の……、私、いない存在なの……。暁にも、本当はいらなくなって思われているの……？

迷惑 勘違い

そんな……そんな……

「あ……ああ……」

脩斗に続いて、暁もの……？私、いらなかった？邪魔だった？いつつも暁、好きって言うてくつついて……、迷惑だった？煩わしかった？

「ごめ……知らなくて……。わ……私、私……ごめんなさい……。仮初の、代わりの人格だったのね私……。私は、最初から沙羅の代わり。私、のうちに眠っている沙羅がこの世に戻るための……。」

「沙羅、愛してる」 『沙羅』

脩斗、暁。二人が私を見ている。

うっん。二人が見ているのは私の後にいる……。

スツと二人が私の横を通りすぎる。

え…… 暁もいつちゃうの？

やだ。行かないで、曉！

振り返って引きとめようとして咄嗟に袖を掴んだ。立ち止まった
曉に私は少しホツとする。

良かった。

でもホツとしたのもつかの間。

パシッ

あ……

曉は私の顔も見ずにその手を振り払い、行ってしまう。遠く
に。だんだん遠くに小さくなって、行ってしまふ。

行かないで。いっちゃんやだ。私を一人にしないでお願い。曉がい
ないと私、この世界で生きていけないの！

嫌だ！！いけないで！

私、この世界が怖い。龍もひと知らない人だらけ。頼る人もい
ない。こんな場所で私を好きっていつて私の中の暗雲を切り裂いて
光をくれたのは曉でしょう？であって間もない私を優しく包んでく
れたのは曉でつたよね？違うの？

脩斗と沙羅が、仲良く消えていく。後をおって曉もどんどん……

私は必死に追いかけるのに、届かない。どんなに腕を伸ばしても、
彼には届かない。

あ……あ……いかないで……。

おねが……い……

いやなの

いや
いや

「……い……あ……」

『鈴音!! 鈴音っ!!? しっかりしろ、鈴音!!!』

「……………」

鈴音は最後に大きく悲鳴をあげたかと思うと、突然糸がきれたようにぱったり動かなくなってしまった。どんなに身体をゆすつても、どんなに声をかけても、鈴音は瞬きひとつ、声すらも出せない。まるで人形のように見開かれた瞳に、光は宿ってはいない。うなだれ、だらりと身体を預けてくる鈴音は、生気を失いまるで死んでしまったかのようにだ。

死……

その言葉に背筋がぞつとする。

『鈴音！』

慌てて胸に耳をあて、心音をたしかめた。

トクントクンと小さく、確かに鼓動は聞こえてくる。まだ生きている。

俺は安堵のためいきをついた。額が汗ばみ、心臓が早鐘を打つ。

鈴音が死ぬなんてあつてはならない。あつていいわけがないんだ

……………！

しかし……、鈴音は動く気配がない。

『くそっ！！……………鈴音……』

地を殴りたくなる衝動をおさえ、曉は力なくうなだれる鈴音をぎゅっと抱きしめ、頬にキスをおとした。

『鈴音…帰ろうか』

優しく頬を撫で、微かに開いた瞳を閉ざした。呼吸音だけが聞こえてくる。その様子は、鈴音は昼ねをしているようで、ほほえましく感じられる。

鈴音を抱き上げ、立ち上がるうとしたその時。

「……………」

ふと呻き声があがる。

気絶していた脩斗が頭を押さえて起き上がったのだ。

『中都国の…皇子…………』

脩斗の姿が視界に入ってくるなり、曉は怒りで焼け付くような感覚に陥った。鈴音をこんな風にした張本人。なんの権利があつて鈴音を傷つける。

曉の怒りは頂点に達していた。

『許さない…………』

曉は殺気をこめ、よろよると起き上がる脩斗を睨み付けたのだ。た。

第四十二話 憎しみの姿

『許さない……』

俺には鈴音しかいないのに。

鈴音しかいららないのに。

なのに俺から鈴音を奪おうとするなんて。

「っ……、いつてえ……」

強く打ち付けた頭を押さえながら脩斗がよろよると半身を起こす。
右頬がズキズキと痛み、熱っぽい。

（なんだ？俺、殴られたのか？）

意識がはつきりせず、何故頬が痛むのかが分からない。身体がだるく、今だぼやける視界を煩わしい。

ぼんやり映るのは見覚えのある緑の芝と自分の両の脚。

（なんだここ。中庭か？）

自分は中庭で倒れていたのだろうか？そして頬の痛み…

脩斗ははつきりしてくる視界の中でぼんやりと地べたに放っている両足を見つめた。城内からは大勢の人の声。宴でもやっているだろう。なのにどうして皇子である自分はこんなところで寝そべっていたのだろうか。

「まったく…。おれ放置かよ。榊の奴どこいったんだ。」

ここにいる理由が分からず、苛立ちを覚えつつのっそりと立ち上がった。

「お…、皇子…!!」

「!…その声、榊か？」

よく聞く従者の声。振り返るとそこには蒼白の顔をした榊が立っていた。いつも淡々と事をこなし、表情をあまり変えない彼にしては珍しく慌てている様子だ。何事かあったのだろう。ああ、皇子である自分が何者かに殴られた後だからだろうか。脩斗は榊の視線の先が自分の背後にそそがれていることにも気付かず、一步一步榊のもとに歩みよっていく。

「榊、俺なんでこんなところにいんだ。つうか頬がいてえ…。殴られたみたいなんだが、不審者でも侵入してんじゃねえだろうな？それでお前、俺に報告しになんて言うんじゃ…。」

「皇子!! 曉様、鈴音様に一体なにをなさったのです!!!」

切羽詰まった榊の声が城中に響く。乱暴に両肩をつかまれ、身体

を激しく揺さぶられる。

「は？なんなんだよ榊！はなせ！！」

肩に食い込むくらい強く掴まれて腕を無理矢理振りほどき、榊を睨みつける。だが、そんなものに榊は怯みもしない。そしてさつきよりも焦り、上擦った声で叫んだ。

「皇子！！なんてことを！龍を怒らせてはいけないのに！」

「榊、少し落ち着け。暁と鈴音が何だっつてんだ。」

榊が何をそんなに焦っているのか分からない。龍を怒らせてはいけない…？龍…暁のことか。あいつがどうしたんだっつて言うんだ。

今頃、鈴音と二人で楽しく宴に参加でもしてるんじゃないのか。俺は少し風にあたりたくてこうして中庭にきただけなのに。なのに顔は殴られたみたいに痛いし、どうやら自分はそのせいで気絶していたみたいだし、さらに目覚めてみれば青ざめた榊にいきなりどやされるし。全く意味が分からない。しかも暁が怒ってる、と…？これだけの宴を開くという何が不満があるんだアイツは。

日中、暁と鈴音が城に来た時の事を思い出す。憎き相手だが、あの場では中都国皇子として天龍と友好的関係を結ぶことを約束したはずだ。そして父の、皇の命により天龍国王にして最高神暁の歓迎の宴を催すこととなり、今にいたったはずだった。

詳しくは分からないが、暁が怒る理由も、それで榊が取り乱す理由も皆目見当がつかなかった。

「榊、一体なんなんだ。分かりやすく説明しろよ」

さつきからちんぷんかんぷん過ぎて話しが繋がらない。と言いた

げに少し苛立ちを込めて言った。

サツと柗から血の気が引いていく。まるでこの世の終わり、あるいは今にも彼が倒れて死んでしまうのではないかというほどそこには生気がなくなってしまうたように見えた。

これには流石の脩斗も驚き、彼が心配になる。

「お、おい、大丈夫かよお前…」

「…皇子…気づかないのですか…」

柗がやけに低い声で話す。その視線は何かを捕らえているが、それは自分では決してない。そう、その先、脩斗の背後にそれは向けられている。柗は己の背後に何かを見つめ、おびえているようだった。

「？」

後ろに何かがあるのだ。脩斗が後ろを振り向こうと首を傾けた時だった…。

ゾクリ…

「！」

途端、脩斗は己の背に得も知れぬ寒気を感じ、その動きを止めた。

(な…、なんだ？この寒気は…)

それまで何も感じなかったのに、背後に注意を向けた瞬間身が凍

るような冷たい空気を感じた。見えぬ冷気が背を這い、腕を這い、脚を這ってくる。そんなイメージが、彼の脳裏にはいりこんできた。背後から絡みつくように這ってくる冷気。それはやがて樹木の根のように細く幾重にもわかればじめる。冷気でできた根は、背から、首、腕、脚、そして指の先までくまなく全身を覆いつくしていく。「侵食」に近い。

(な……なんだ、これは。身体が…、俺の身体が冷たくなっていく) 脩斗はみるみる体温が低下していく身体を温めようと必死になつて身体を抱きしめ、こすり始める。

(寒い…！)

冬の季節でもないのに、身体が寒い。唇は青ざめ、ガチガチと歯肉が震えあがる。

「お、皇子、どうしたのです！」

「…さ…寒い…。寒いんだ」

両腕で自分を抱きしめながら震える唇でやっとのことで答えると榊を見上げた。彼は相変わらず青ざめた顔をしているが、自分のように寒気を感じているわけではないようだ。心配そうに自分を見つめ、そして時たま背後を気にしている。

背後に何があるんだ。この寒さはなんだ。

俺だけ、この凍てつく寒気を感じているのは何故だ。

脩斗は寒さに震え、息を切らしながら、そうっと後ろを振り返る。

ゆるさない…

「！」

低く唸る声。

ゆるさないゆづさないゆるさない…！！

呪詛のように繰り返される言葉。
憎悪、怨念、怒り、悲しみ

全てを孕んだ深い負の塊

音じゃない。声じゃない。

脳に直接届いてくる言葉となって、びりびりと全身に伝わってくる

「あ……、暁……お……まえ」

脩斗は畏怖した。

初めてそこにいる人物を見て恐怖を感じた。

『ゆるさない……』

そこにいたのは漆黒の衣を纏いし銀髪の男。しかし、男の姿は脩斗の知るそれとは違っていた。

男は言う。今度は言葉で。

腕の中にくったりと力なく仰向けになる少女を抱えながら。

『お前だけは……、ゆるさない……』

少女を抱いた男は俯うつむいていて、その表情は捉とらえることは出来ない。だが、銀の髪の間隙からちらつく肌の色、黄金の光を携える双眼が人間のそれではなくなっていた。

そう、まるで蛇のような

俯く男がゆったりと顔を上げる。

ヒトの姿をとる暁は眉目秀麗。美しい顔立ちをしていた。それが今はどうであろう。

金の双眼は瞳孔が縦に伸び、鋭い蛇眼に。

そして白くシミ一つのない張りのある肌は、赤黒い龍の鱗となり。
額からは短い角が隆起していた。

もはや龍とも、ヒトとも呼べぬ醜い姿であった

第四十三話 悪魔の囁き

今にも消えてなくなりそうに儚なく、ぐったりとしている少女を大切そうにその腕かいなに抱き寄せている曉の姿は、もはやヒトとも龍とも呼べぬ異形いけいけいの姿だった。

腕にかき抱く少女は死んだようにびくりともせず動かない。

そんな彼女を腕にかき抱き、

大蛇のごとき黄金の瞳で睨みつけてくる男は、捕らえた獲物をかみ砕き、その肉を喰らいつくす化け物にしか見えなかった。

化け物に捕われた巫女姫。

彼女を抱く化け物と化した龍の男。

龍でもヒトの姿でもないそれは、その場に立ち尽くす男達の肝を凍えさせ動けなくさせるのに十分な邪気を放っていたのだ。

脩斗は冷や汗をかき一步もその場から動けない。金色の蛇眼からも目を反らすことが出来ない。足が地面に縫い付ける畏かかってしまったかのようだ。それは彼のすぐ後ろにいる榊も同様で。

一步でも、一ミリでも身体を動かせばその瞬間殺される……。

そんな気がした。それほどまでに曉は怒り狂い、身の内から湧き出る殺気を隠しもせず**にぶつけてくるのだ**。それが酷く恐ろしい。脩斗は思った。

(こんな…人型の曉も、あの日の狂った龍と成り果てた曉にもこんな思いを感じたことはなかったのに)

- 何故だ？

何がそうさせる？

俺をここまで恐ろしくさせるんだ？

初めての感覚に、脩斗の頭は冷静に考えることが出来ない。今も、脩斗の身体には冷気が纏わり付いてその身体を凍えさせようとうねっている。

「……くっ」

前方からの殺気と、おそらく暁の怪しげな力で作りだされた冷気に精神的にも肉体的にも多大な負荷がかかるのが分かる。

(くっ…！どうしたらいい)

脩斗は慌て、冷気のうねりから抜け出そうともがいた。

「うっ…」

榊が後ろで喚く。

重ったるく強い殺気に身体がたえられず、彼は地面に膝をついた。

・許さない・

暁が呟く。

蛇眼の暁は鈴音を抱いたままゆらり…と動いた

「?!」

(くっ…！)

うわごとのように許さないと呟いていた暁がついに動いた。
殺される……！

そう思った脩斗はぐっと身構えた。

「……………」

「……………」

だが、予想していた衝撃はいつまでたってもこなかった。
恐る恐る目を開いてみる。
暁はそこにはもういなかった。

「……………」

あたりを見回してみる。

誰もいない。

暁の気配も、鈴音もいなくなっていた。

気づくと中庭に漂っていた重たい空気はいつの間にか消えており、
身体に絡みついていた冷気も無くなっていた。冷気から解放された
身体はその呪縛から解放されたれ、温かい血液が巡って徐々に体温が
あがってくる。

「……？……いない……」

去ったのか……？

不意に感じる己の身体の温かさに、異形の姿の暁が姿を消したことに、脩斗は素直に安堵した。

己が命を奪われる危機感、焦燥感……。首を絞められるような思いから解放され、ドツとその場に座りこんだ。

「はぁー……………」

上を見上げれば、数多の星が輝いている空が見える。

中庭もすっかり元通り静まり返り、城内からは人のざわめく声が聞こえてくる。

…そうだ。まだ宴の最中だったのだ。

今の恐ろしい出来事が嘘だったのではないかと思えるほど、城の中からは人の楽しそうな笑い声が聞こえてくる。

人の笑う声というのは別段楽しいと思っけない人間にも伝染し、笑みをもたらす。

今の事がなければ、脩斗も笑ってまた会場に戻り、酒を飲みかわす事ができたかもしれない。

……しかし、そんな気分になれるわけがなかった。

龍を怒らせた。

それも相当だ。

その原因が自分であることは充分承知している。自分が何をしたのか。脩斗はひとつひとつ振り返ってみる。

ぐったりとして暁に抱かれていた鈴音。

あれは自分がしたことだ。暁じゃない。

酒に酔い、鈴音を壊すようなことをした。

鈴音を傷つけた。彼女の心を……。

彼女を沙羅と呼んだ。沙羅として声をかけ、愛してるんだと言った。彼女は応えた。俺（弥太）に。

それがどうしようもなく嬉しかった。

沙羅が生きている…！

あの時の自分にはそう思えて仕方なかった。

自分が弥太として鈴音に語りかけることで、鈴音の中の沙羅が徐々にに反応を示す。

鈴音が苦しいと泣いているのも無視して。

ずっとお前に会いたかったと。今も忘れずお前だけを思っている。

この思いは本当だ。沙羅が死んでも、ずっと愛してる。沙羅だけを。

思いがけない再会に心が躍り、沙羅の声がまた聞こえるのではないかと鈴音に迫った。沙羅と呼べば反応する彼女の身体。ああ…お前はまだ生きているんだ。そしてお前を殺した俺を憎まずにまだ愛してくれているんだな。

嬉しいよ。

沙羅、どうしたら会える？心はあるのに身体がなくて話せないんだらう？

もどかしいんだろう？

ああ、俺もお前に会いたい。触れたい。抱きしめたい。言葉を交わしたい。

どっししたら会える???

どっししたら……!!

目の前にいるのに触れられない悔しさに己の願望がピークに達した。

どっししたら…

どっししたら…!

恋い焦がれる思いは誰にも止められない。自分自身でさえも…

その時ふつと魔の囁きがあった。

鈴音を壊してしまえと。

第四十四話 鈴音を壊す

- - 俺たちを妨げるのなら、いつそ壊してしまおう。 - -

…そうだ。壊してしまえばいい。

沙羅が出たがってる。俺に会いたがっている。

俺は沙羅の恋人。

愛する人を助け出してやれなくて何が恋人だ…？

俺は俺としての人格のまま生まれた。

なのに沙羅は別の人格をもって新しく生まれてしまった。

鈴音として…。

鈴音…

ああ、鈴音は良い奴だ。優しくて馬鹿がつくほど正直で素直だ。だから放っておけない。

出会った当初は、沙羅がもう沙羅じゃなく鈴音という少女として生まれたことを素直に受け入れることが出来た。

それは沙羅が巫女としとも、一人の人間としても類い稀なる秀でた存在だったからだ。

彼女はずっと綺麗だった。心も身体も。他人ひとのためによく働き、

困った人間を見ると放っておけない性格だった。だから、感謝こそすれ反感を買おうようなことは決してなかった。曉に嫁ぐことを選んだのも、中都国の民を愛していたから。

なんて慈悲深い女なのだろう？

俺と一緒に逃げる道もあるのに、そうはしなかった。

絶対に逃げない。誰かのためなら。

自分を犠牲にしたとしても、他の奴らが幸せになってくれるのならそれでいいんだ。

俺を愛しているのに、自分の幸せを優先させず、民のことを思う。

俺には真似の出来ない行為。

そこが俺と沙羅の決定的に違うところ。

沙羅は綺麗だが、俺は汚い。

せつかく沙羅が自分の心を押し殺し、己が身を曉に差し出そうとしたのに、俺には彼女の思いを察して何も言わずに耐えて彼女を送りだすことなんて出来なかった。

沙羅は俺のだ。

結婚まで約束したんだ。

二人で幸せな家庭を作って生きていく様を夢に描いていた所でどうして俺たちを離そうとする？

許せない。

普通許せないよな？

そうだろ？

誰だって1番に愛してる人をそうホイホイ渡すか？

……無理だろ

わかったか…？俺の心つてのは昔っからはこんななんだ。
汚いだろっ。

だから、俺が弥太の自分を失わないまま生まれたのは汚い心を持つた自分に対する罰なんじゃないかと思ってる。

沙羅は違うから。

こんな俺とは違う存在だから、だから彼女が今度は幸せになれるように、悲しみの記憶をもったまま生まれてこないように、神様がそういう運命にしたんじゃないかって思った。沙羅じゃなくて鈴音っていう人間で。そして俺はずっと弥太のまま、沙羅のいない世界を受け止めて罰として与えられた第二の人生を生きろと。そういうことなのだ。

だから鈴音に沙羅を求めることなく、鈴音は鈴音として接してやった。

それが1番良い方法なのだったから。

でもな、お前の中に沙羅がいると知ったとたん、俺の中の汚い思いが逆上してきた。

沙羅がいる！

この身体のなかにいるんだ！

それを知った途端、俺の中の鈴音という少女と接した記憶は完全に凍結した。排除したに近い。

だから躊躇うことなく、泣く鈴音を無視して沙羅、と訴えかけた。鈴音には、最初からお前など見ていなかったと。

沙羅の生まれかわりだから接していただけだと人間としてとんでもなく下劣で最低な言葉の羅列を並べてしまったんだ…。

「はは…っ……………最低だ。俺」

涙が出る。涙が2、3粒頬を滑りおちて地面に染み込んでいく。

俺に泣く資格なんて全くないのに。

泣く資格なんて…

「……………ごめ……………鈴音……………、ごめん……………」

虚ろな鈴音の瞳を思い出す。光を宿さないあの瞳を。

青白い死人のような肌を。

生きているのだろうかあいつは。

無事なのだろうか。

のぼせた頭が冷静になる。俺が弥太から脩斗へと戻る。そうすると途方もない後悔が押し寄せてくる。

どうして俺は冷静さに欠けてしまうのだろうか。頭に血がのぼると周りが全く見えなくなる。情けない……。

暁は、あいつも今どうしているんだ。あんな…あんな姿になってしまつて。

本気で怒っていた。

顔の皮膚が割れ、龍の鱗と成り代わり、瞳も蛇眼へと変化していた。

恐ろしい姿だ。

怒りを形にしたような…そんな姿だ。

恐ろしさと同時に、あいつが鈴音を愛していることもよく伝わってきた。

俺が沙羅を殺した時以上に暁は怒っていた。儀式を済ませた暁はもう完全なる龍体なものにも関わらず、あの姿に成り果てた。

それほどまでに鈴音という少女を愛し、大切にしているのだ。

「俺は……お前が羨ましいかもな……」

過去にいつまでも縛られず、新しく生じた少女を必死になって守ろうとする。暁の愛し方は、そうだ、守るんだ。

あれが本当の愛なのか……？

「はは………」

わからない……。愛ってなんだ？

一途に相手を思うこと？

相手を思いやる心……？

守りたいと思う心？

相手の幸せを願うこと……？

「一途な愛……か」

俺の愛はなんだ？沙羅だけを思ってる。これも一途な愛……でいいの……？

でも俺はその愛が手に入らないとわかった瞬間、その命の灯を消してまで自分のものにしておきたいと思うのだ。力づくで

「歪んでる……」

こんなのは……歪んでる……。

俺の愛は、歪んでる……

そう思った途端、悲しくなった。

「……ああ……！！！！もっつ！」

俺は首を左右に激しく振った。

そんなの考えたってわからない。
わからないけど、今は、今は鈴音に謝りたい。
ただ、謝りたい。

それだけだった。

「鈴音…」

どうか、無事でいてくれ…

そう願わずにはいられなかった。

脩斗は星に願うため、再び夜空を見上げた。
と、上体を支えるために後ろに伸ばした左手が、ひたりと冷たい
何かにあたった。

見ると榊の手の平だ。

榊も、暁の殺気に耐えきれずに気絶したのだろう。バタリとうつ
ぶせに倒れたみたいだ。

「榊、しっかりしろ。暁はもういな……い」

気絶した彼を起こそうとして思い切り振り返った。
瞬間、脩斗は目を見開き、言葉を失った。

「そ………かき……？」

うつぶせに倒れる榊の背中には大きな傷ができ、赤黒い血を大量に流していた。

背中に獣が引つ掻いたような爪痕が三本。

しかし、どうみても大型の、それも熊や虎の類いよりも大きな爪痕だった。

「…………お、おい…………！！榊…………！！榊しっかりしろ…………！！」

しばらく呆然とその爪痕を見ていた脩斗だったが、不意に我に帰る。

早く手当しなければ榊が死んでしまう…………！！！！

「誰か…………！誰か医者連れて来い…………！！早く…………！」

脩斗は急ぎ医者を呼んだ。一刻も早く止血しなければと焦った声で叫んだ。

一体誰がこんなことを。

脩斗は考えた。熊よりも虎よりも大きな爪。こんな大きな爪痕を残せるのはこの世界の生き物の中ではたった一種類しかない。

まさか…………まさか………………

脩斗の脳裏に再び木霊する…………

あの、恨みの籠った声 -

呪詛のように何度も呟いていた。

「あ……ああ……、ま、まさか……そんな」

脩斗はガクリと膝をついた。

おかしいと思った。あんなに怒りをあらわにしていたのに、暁が自分に何もせずに去るはずがない。

だが、あの張り詰めた空間から解放されたことで自分はすっかり

安堵しきってしまった。

だからまさか怒りの矛先が背後に佇む榊に向けられているなど夢にも思わなかったのだ。

榊が背を引き裂かれ、一言も声を出せず倒れた音すら聞こえない。それほど暁の動きは俊敏、且つ音もださずに人間を殺せることを意味していたのだ。

- 許さない -

- 許しはしない - お前も大切なものを失う苦しみを味わうがいい
...

もつじりにはいないはずの曉の音が…そう言った気がした…

第四十五話 痕

それからのことはあまり覚えてはいない。

騒ぎ立つ城内。大量に流された血液の痕。

いつも俺の傍に仕えていた男が背中から大量の血を流して倒れていて、俺はコイツを早く助けなければと思った。それが最後の記憶で、あとから走ってやってきた従者達がガヤガヤと集まってきて俺に何か言ってくるがよく分からないままぼうつとした視界に血を流した男がどこかに運ばれていくのが見えて、俺は意識を手放した。

目が覚めて、視界にぼんやりと映し出されたのは天井だった。ごちやごちやと無駄に鳥だの花だので極彩色に彩られた天井。と、視界の端に黒い影見えて、何だ？とよく目をこらしてみると、「目が覚めましたか」とひどく安心したような声が耳に入ってきた。少しかすれた女の声。婆様だな、とすぐに分かった。今はいったい何時で、どうして婆様がここにいるのか聞かなくてはと、身体を起こす。それに聞きたいことも沢山あった。榊みかきはどうなった？死んだりしてないよな？曉あかつきと鈴音は？

「う……………」

身体を起そうとしてはじめて気付く。まるで鉛のように身体が重い。大怪我をして重症患者にでもなった気分だ。

それでも怪我をした覚えはないし、俺は重たいからだを無理矢理に起して部屋の中を見渡した。

夜明け前なのか、まだ薄暗い。そしてそこには婆様だけでなく親父と親父の従者二人もそこにたたずんでいた。皇おうである親父は眉間に皺を寄せ、なにやら神妙な顔つきだ。怒っているようにみえる。俺は次に婆様に目を向けた。逆光気味にうつっているせいもある。

か顔に影が落ち、その表情はよく見えない。ただ悲しそうに顔を下に向けている。

俺がおきたというのに、従者も皇も婆様も、誰も言葉を発しない。でも彼らの視線は確かに俺に向けられているのが分かって、俺の言葉を待っているのだと理解するととりあえず頭を一度下げた。

「おや……いえ…皇。榊は」

何から話せばいいのか分からなかった俺は、とりあえず一番気になっっていることを尋ねた。あいつは俺の信頼できる有能な従者であり、唯一無二の友である。もともとただの民として生きてきた弥太が現世で皇子なんていう面倒な役割を今までやってこれたのも気心知れたアイツがいてくれたからだ。そいつを失ったら、俺のこれらの人生がもつともつとつまらなくなる。沙羅もいない。榊もいない。つまらない世界。なのに嫌いなやつはいつまでも生きてやがる最悪な世界。そんなの耐えられない。

頼むから、親父。死んだなんて言わないでくれよ…

俺は祈るように、^{すが}縋るように皇を見た。

皇は一度唸るような低い声をあげ、大きいため息をついてから俺を睨み付けるように見て、それから答えてくれた。

「…榊は生きている」

低い声が短くそう答えた。

生きている。その言葉に、全身が安堵に包まれていく。鉛のように重く感じられたからだも、少しだけ軽くなった気がした。

良かった。生きていた。

相当ひどい傷を負っていたが、完治したらまた俺の支えとなって戻ってきてくれるのだろう。

俺は安堵のため息をついた。

「だがな……」

皇が続きを言おうとする。

本能的に嫌な予感がした。

柁は無事なんだろう？まさか生きてはいるが寝たきりになったとかじゃないだろうな？

いやな想像が頭をよぎる。

「…脩斗。お前は愚かなことをした」

「……………」

威圧感のある重たい言葉に俺は押し黙る。親父が俺を愚かだという理由なんて一つしか思いあたらない。暁を怒らせた。ただそれだけのことだ。しかしそんなことか、とも思った。あいつが怒ったからなんだ。中都国の人間はいつまでそうやって龍を崇め、恐れた生活を過ごしていかなくちゃいけないんだ？怒らせて、こっちはなにも太刀打ちできないからぺこぺこ頭を下げ続けるのか。そんなのおかしいじゃないか。たまには龍に歯向かう、もしくは俺達人間だけの世界を作ろうと思う度胸のある奴はいないのか？

龍がいなくなれば、俺達は巫女を捧げることも、龍が誇らしげに悠々と空を泳いでいる様を見てびびることもなくなるのに。神はどうして異種族をこの世界に生み出してしまったのか。

神という存在がいるのならば、俺はそう問いたい。どうしてきちりと分け隔てた世界を作らなかつたのか、と。

俺が瞑想にふけてっていると、親父の低い声が耳に入ってきた。すばやく顔をあげ、親父のほうを見る。

「お前がそこまで愚息ぐそくだとは思わなかつた。ようやく龍神と手を取りあい、少しずつでも人間と龍との間の壁を取り払おうと事を進めたところであつたのに。なんということをしたんだ」

皇は嘆かわしいことだと呆れた目で見てくる。その態度が今の俺を猛烈に苛立たせた。本当の俺の事情も何も知らないアンタに言われたくねえよ…。

「まさかお前が巫女殿を、龍神の妻となつた方を陵辱りやうじやくしようとし曉様の怒りを買うようなことをするとは！今やお前のみならず王族自体が民に失望されているのだぞ。この責任をお前はとれるのか」

俺は耳を疑つた。

「まつ…！！陵辱りやうじやくつて…」

今のは聞き捨てならない。龍神の妻を陵辱？！鈴音をか？

確かに俺はアイツに触れたけど、陵辱だなんて！それにあの時は鈴音じゃなくて沙羅だつた。沙羅が俺の名前を呼んで、俺もアイツの名前を呼んで、酔つた勢いつてもあつたがそれは恋人として触れ合いたかつただけで！！

怒りがこみ上げてくる。俺の愛し合う行為を陵辱とかいう穢れた言葉で汚された気がした。無理矢理なんかじゃない。アイツは俺にこたえたんだ。一方的な思いなんかじゃないのに！畜生ッ！！誰だ！誰か城の奴が見てやがつたのか。

苦虫を噛み締めたような思いが全身を駆け巡った。

「お前の愚かな行為を目にしたという従者に聞いた。公にせぬように口止めはしてある。我が国の皇子が龍神の妻に手をだしたなどといえるわけもないからな」

呆れてこれ以上何も言いたくないといたげな皇。くそっ！ここで違つと言い返したところで、俺の本当の事情を話したところで信じてもらえるわけもなく、気でも狂ったと思われて終わりに違いな。今は俺は脩斗。いくら心が弥太でも、脩斗という一国の皇子なのだ。不本意だがここはおとなしく皇子を演じるしかない。今までそうしてきたのだから。

「よつてお前にはこれから一ヶ月間の謹慎を与える。自室とお前の執務室からは決して出るな。そして己の恥ずべき行為を反省するのだ。良いな」

一ヶ月の謹慎か……。処罰にしては甘いほうなのだろう。親父は俺に少し甘いところがある。まあ、少しは執務をさぼったりはしてきたが、それなりに皇子としての役割はしてきたし大きな問題を起したことはなかった。それに一人息子ということもあって、そのせいだろう。王族なのに兄弟がないのが珍しいと思うが……。いまはそんなことどうでもいい。

「……………はい」

俺は静かに処罰を受け入れることにした。逆らつても意味はない。榊が生きていただけで充分だ。それだけで充分。俺は腹の中にたまる鬱憤^{うつぶん}を吐き出したい思いをぐつと堪えてこの場をやり過ごすことにした。

「一人の時を過ごし、頭を冷やしなさい。それと、早くお前も己の傷を癒すと良い。いずれお前は妻を娶り、皇としてこの国を治めていく義務があるのだから」

親父はそう言うと、行くぞ、と背に付いていた従者達に指示をだし、部屋をあとにした。

部屋に残ったのは婆様と俺の二人。婆様はでていかないのか？一人になってもう少し休みたいんだが…

「……………」

「……………」

沈黙。婆様は出ていく様子はない。微動だにせずにとそことたたずんでいる。

またか。と思ったが、先に口を割ったのは婆様のほうだった。

「皇は、ずっと貴方の心配をしてみましたよ。現に、もう夜明けだといつのにずっと貴方のそばで見守っていたのですからね」

「そうですか……………」

そしてまた沈黙。なにか話さなければ。榊のことは聞いたし、何かないかと話題を探して俺はさっきの皇の言葉を思い出す。

『早くお前も己の傷を癒すと良い』

傷？榊は怪我を負ったが、俺が直接傷を負うようなことは奴にはされていないはずなのだ……………。

俺は咄嗟に自分の身体を見た。

薄暗かったのと、親父達がいたせいでそちらに気が行き、自分に注意が向かなかつた。己の身体を確認するように見ると服の中に包帯が巻きつけてある。しかもそれは上半身全体にあつて、特に心臓のある胸のあたりがなにかを覆い隠すように厚く巻きつけてあつた。おかしい。痛みもなければ切り傷一つもつけられていないのに、何故治療済みの格好になっているのか。俺は素早く衣服をはだけさせ、胸元のそれを勢いに任せてひきちぎった。

「ッ……！！！」

俺は目を見張った。何だこれは。

「脩斗……………」

隣で婆様の弱弱しい声が聞こえる。婆様はこれをもう見たのだから。見ていられないというようにつらそうに目を逸らした。

俺は目を凝らす。そこには、褐色にそまつた手形のような痣が俺の身体を這うように幾重にも残されていた。くつきりと。腹から心臓に向かつて這い上がるように何本もの腕の痕が上ってきているようなそれに、暁に殺されそうになったあの時のことを思い出す。

寒くもないこの季節に、熱がどんだん奪われていくような感覚。目に見えない冷気が身体中を襲い、何かを目指すように競りあがってきて、やがて俺の中心に集まってくる感覚。どくどくと温かい血液を循環させるために動く心臓めがけて集まっていく冷気の塊。そして心臓を凍てつかせ、貫き俺の命を奪おうとした恐怖のあの感覚に。

思い出すだけで吐き気がした。

そうか。

俺は悟った。

これは呪いだ。アイツの呪いなんだ。

痣のように見えるが、これは冷気で酷く火傷した痕だ。俺は一見無に見えて、だがアイツはしっかりと俺に怒りの痕跡を残していきやがった。一生消えないような呪いとして俺の身体に醜いものを残していったんだ。

きつと背にもあるであろうその痕を想像しながら、俺は狂ったように笑い転げた。

「はっ……はははは」

「脩斗……」

「婆様。アイツ……、俺にこんな醜い火傷をのこしていきましたよ。一生消えないな……これは。俺の将来の花嫁は、夫の醜い身体を目にして恐怖しながら俺に抱かれるんでしょうね」

将来の花嫁か。自分で言って笑える。そんなもの娶る気もしない。沙羅以外の女を抱くなんて。反吐がでる。

男の俺がこんな傷を身体に残されて傷つくわけでもない。女じゃあるまいし。傷物にされて悔しいだなんて思わない。こんなものどっつてことない。どうってことないさ。

ただ、コイツをつけていった奴が気に入らないんだ。

ああ……本当にムカつく奴。新しい脩斗としてのこの身体にもアイツの手が下されたのかと思うだけで吐きそうだ。

「ふふ……。火傷を負った醜い皇子でも受け入れてくれような女を

捜さないといけませんね。この国にそんな女がいるかどうか。ふふ
ふふ」

俺は狂ったように笑う。心にも思っていない言葉を吐きながら。
太陽がのぼりはじめ、部屋の中は少しずつ光を増していく。それ
とは反対に俺の心はどんどん闇にすすんでいった。

第四十六話 消えない痕跡

すっかり夜が明けてしまった。

闇にのまれた心も、陽の光で少し心とらぐ気がするのは気のせい
か。

あんなに怒りに支配された俺の心は一晩たつて、ようやく落ち着
きを見せ初めていた。

湖面を覗き込むとそこに映る自分の顔が醜い。

鱗に変わってしまった顔は、昨夜と比べれば左半面だけに納まっ
てきていたが、それでもまだまだ時間がたたねば引いてはくれない
だろう。

それに加え、これでも少しはましになっているのだと分かるが、
変わってしまった金の瞳は自分はその気の微塵も思っていないのに
勝手にギラギラと殺気立った光を見せていて、この姿のままでは帰
ることもできないと己を落胆させた。

その醜い姿をかき消すように勢いよく両手を水の中に浸ける。バ
シヤリと音をたてて水しぶきが舞った。そのまま両手で水を掬い上
げ、顔を洗う。

これからどうするか考えなくては。

夜が明けたばかりでまだ水温のあがっていない湖水で意識がはっ
きりとするのを感じながら暁は思った。

ここは中都国と天龍国のちょうど境目。どちらにも属さない静か
な土地だ。人も龍もあまり通ることのないので、深く森林が覆い茂
りとても静かな場所だった。ただ、鬱蒼と森が広がっているだけで
はなくて、ここは巫女が輿入れをするときの通り道でもあるから、
一応は道はあるのだ。ただあまり使われないだけ。国と国とが互い

に干渉することは限りなく零に近いから。

静かに朝を迎える森の中を一度見渡してから、近くに獣の気配が無いのを確認してから曉は腰をあげ静かに湖面から離れた。自分ひとりがここにいるわけではないのだ。曉はまっすぐに一本の太い木の下までくると、そこに力なく寄りかかる少女の姿を確認する。今だ彼女の目はつぶられたまま。だが、時折もらす嗚咽に、目を覚ましたのかと目を見張るがまだ彼女は夢の中だった。そんなことをこの一晩で何度か繰り返し返した。

悪夢を見ているのか、たまに声を漏らして涙を流す。それに声をかけてみるが、聞こえていないのか苦しそうに呻くだけの彼女を自分はまだ見ているだけ。それを何度も。無理矢理起そうともしたが、できなかつた。まだ元に戻っていないこの醜い顔を見られなくなつたから。

はやく彼女の身体が朝の訪れに気がついて目を覚ましてくれないうだろうか。ただただそれだけを祈る。

曉はその場にかがみこみ、彼女を自分のほうに引き寄せた。硬い大木に身を預けたままでは痛いだろう。ならば自分の腕の中にいたほうがまだマシだろうと考えての行動だった。そして代わりに自分が大木を背にしてその場に座りこんだ。

『……………』

誰もいない。獣もいない。小鳥のさえずりだけが聞こえてくる静寂さに、まるで世界が二人きりになったような感覚に陥る。自分も腕の中の彼女もボロボロだった。いつもより少し着飾った服装はたった一日でここまで汚したかと笑ってしまうほど土埃ちりほこやら血ちやら涙やらで汚れていた。血はあの男のものだ。いつもあの皇子の傍につ

いていた神という名の男の。

あの場を去る瞬間、殺す勢いであの男に深手を負わせたのを覚えている。どうしようもなく憎くて、目についたあの男の背を裂いた。龍と違ってあっけないほど人肉はよく裂けた。あの時、人間の弱さを改めて知ったと同時に死んでしまえと内の中の闇が囁いた恐ろしい瞬間でもあった。

…あの男はどうしているか。

死んだか、それともかろうじて生きているか。

最後に見たあの男は血溜りのなかで倒れて死んでもおかしくない量の血を流していた。

.....

『.....』

どちらにせよ、あの男を痛めつけて大切な人間を失いそうになる焦燥感、消失感に充分にあの皇子も味わったことだろう。同じ思いをすればいい。鈴音だけは苦しめてはならないのだから。自分とあの皇子と沙羅かのじよの間起こった愛憎の渦の中に、鈴音だけは巻き込んでほならないのだから。そこに無理矢理巻き込もうとし、いなくなければいいと鈴音の存在を否定したあの皇子はそれ相應の報いを受けなければならぬ。俺を受け入れてくれた唯一の存在を傷つける奴だけは絶対に許さない。

……ああ、駄目だな。

怒りが。少し思い出ただけでまた身体が熱くなってくる。

抑えなくては。鈴音がいるのに。

視線を落として腕の中の彼女を見つめる。今は穏やかにねむっている。その安らかな姿に心が和らいで黒く艶のあるその髪を撫でつけた。

いまのこの瞬間が一番幸せな時なのではないかと思ってしまうほど静かで心地よい。

このまま、このまま静かに二人で過ごせたら……。

髪を撫でていた手を、頬へ、頬から顎へとその素肌を楽しむかのように滑らせていく。滑らかな肌を丹念に愛撫していき、やがてその唇に口付けようと顔を上へ向かせようとして、曉はその手を止めた。

『……………』

鈴音の少し乱れた襟元えりもとから覗くのは、彼女の華奢な鎖骨と白い肌。その真っ白な肌には似合わない小さな鬱血うっけつした痕跡が残されていた。それが何かはすぐに分かる。自分じゃない。つけたのはあの皇子だ。

涙を流して嫌がる彼女の素肌を無理矢理暴いてこれをつけた忌々しい光景が容易に想像できた。

『沙羅』と違う女の名前を呼ばれながらこれを付けられた鈴音。

どんなに苦しい思いをしたことだろう。

どんなに傷ついたことだろう。

『守ってやれなくて…遅くなって…ごめん。鈴音』

己の非力さが悔やまれる。だが、過ぎたことは何度後悔しても塗りかえることはできない。過去は誰にも変えられないのだ。変える

ことができるのは……

今

現在いまと未来をどう生きていくかということだけ。

暁は鈴音の身体を強く抱き寄せる。

そして、吸い寄せられるように鬱血したその場所に口付けた。弥太の思いを塗り替えるように、その上から強く吸い付く。

自分の唇で何度も何度も……。

『…すずね…』

甘く切なく今だ目を瞑る彼女の胸元に唇を這わせながら、何度もその名を呼び続けた。

『鈴音……、すずね…』

暁のかすれた声が次々とつむぎだされては深い森の中に掻き消えていく。

そして彼の口付けが幾度いくどとなく繰り返され、いつしか彼の口付けは情欲じやうよくを伴ともなうそれへと変化していった。

暁は弥太と沙羅の心に触れて苦しみ、疲労している鈴音にこんなこととしては駄目めだと叱責しっせきするが、止まらない。

それは、大切な存在に触れられてしまった男の強い嫉妬心と独占欲から。

結局気の済むまでひたすら口づけてしまい、自分の行為に反省しつつも少しは欲が満たされていくのを、暁あかつきは感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6336g/>

龍の花嫁

2011年6月27日09時56分発行